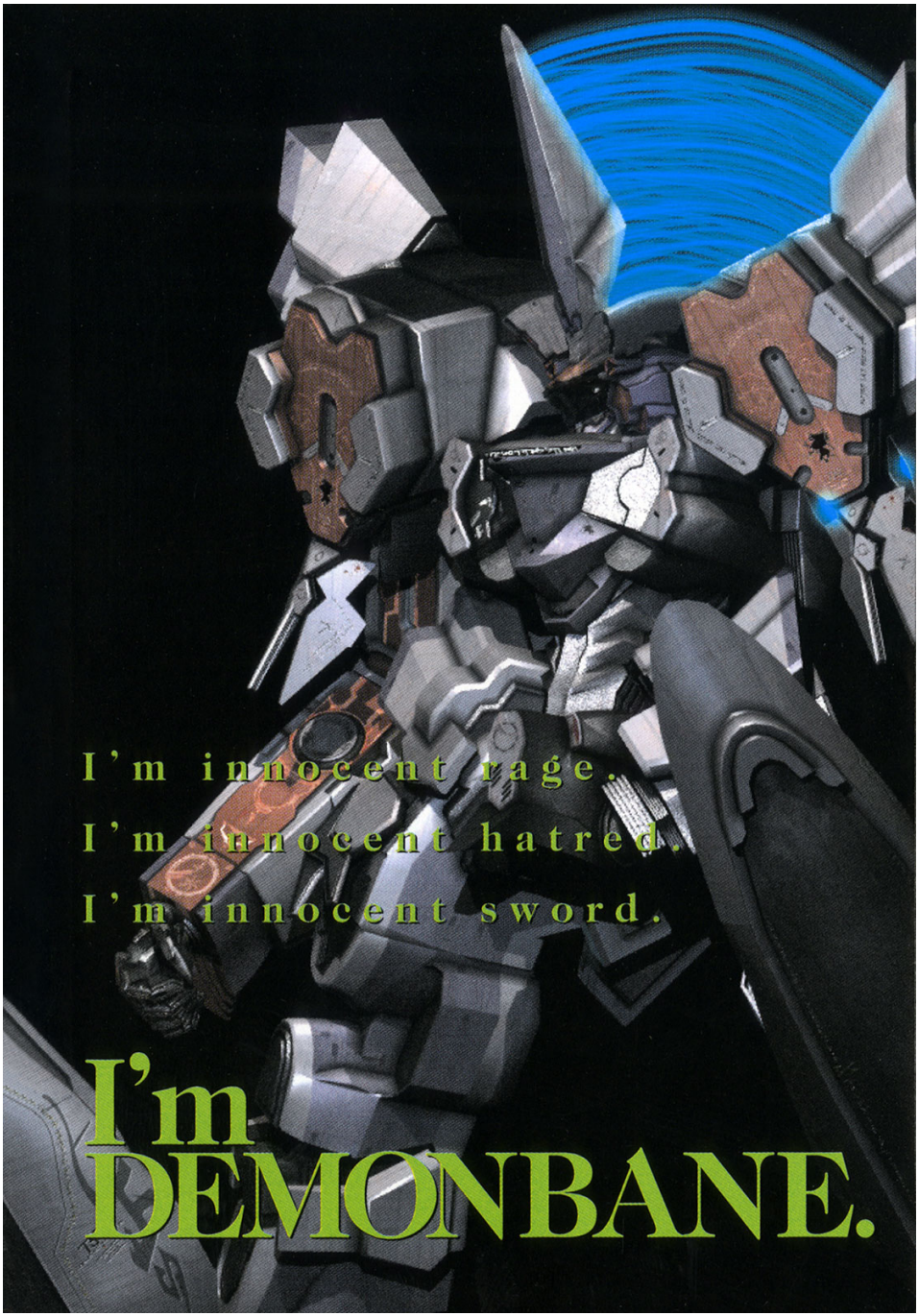
斬魔大聖
ざんまたいせい
デモンベイン
DEUS MACHINA
DEMONBANE
デモンベイン
無垢なる刃
むく
やいば
原作：鋼屋ジン（ニトロプラス）
著：涼風涼（デジターボ）
角川スニーカー文庫

汝、魔を断つ剣となれ


I'm innocent rage.
I'm innocent hatred.
I'm innocent sword.
I'm
DEMONBANE.

斬魔大聖デモンベイン

無垢なる刃

原作：鋼屋ジン（Nitroplus）

著：涼風涼（DIGITURBO）

角川スニーカー文庫

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。

本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。

また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

DEUS MACHINA DEMONBANE

CONTENTS

プロローグ　斬魔大聖――汝、魔を断つ剣となれ――007
第一章　永劫の開演――冥き空の彼方より――011
第二章　超人舞闘――激突する法則と法則――081
第三章　天才と何とかは紙一重というかむしろ完全に向こう岸――131
第四章　殺意の牙。憎悪の爪。我は漆黒の狂嵐――159
第五章　哀哭せよ。所詮、我等は神ならざる身――217
第六章　悠久たる孤独は我を蝕む――273
第七章　七頭十角――逆さ十字の咎人達――325
エピローグ　天に問う――剣は折れたのか？――369
あとがき――377

CONTENTS

プロローグ　斬魔大聖──汝、魔を断つ剣となれ

第一章　永えい劫ごうの開演──冥くらき空の彼方かなたより

第二章　超人舞闘──激突する法則と法則

第三章　天才と何とかは紙一重というかむしろ完全に向こう岸

第四章　殺意の牙。憎悪の爪。我は漆黒の狂嵐

第五章　哀あい哭こくせよ。所詮、我等は神ならざる身

第六章　悠ゆう久きゆうたる孤独は我を蝕むしばむ

第七章　七頭十角──逆さ十字の咎とが人びと達

エピローグ　天に問う──剣は折れたのか？

あとがき

DEUS MACHINA
DEMONBANE
CHARACTERS

プロローグ

斬魔大聖——汝、魔を断つ剣となれ

それは凄せい絶ぜつな最さい期ごだった。

数多あまたの時を重ね、幾いく多たの怪かい異いを葬ほうむり、絶対的な力の象しよう徴ちようたる鬼デウ械ス・神マキナ・アイオーン。

だが神を模したとされる鋼はがねの巨きよ人じんも、今は動かない。

剔えぐられた貌かお、引きちぎられた腕うで、吹ふき飛んだ脚あし……軀からだに刻みこまれた無数の傷は戦いの激しさを物語り、爆はぜては剝はがれ落ちる装そう甲こうは、儚はかなく散りゆく桜の花びらのようだ。もはや人ひと形がたと呼ぶことすらはばかられる鉄てつ塊かいと化した機械仕じ掛かけの神は、瘴しよう気きと狂きよう気きに冒おかされた不ふ浄じようの廃はい墟きよで崩くずれ落ち、無念の最期を遂とげていた。

不意に一いち陣じんの風が巻き起こる。

汚けがれた空間を切り裂さき、浄化していくその風は、上空から何百枚もの紙片を運んできた。その光景は、まるで紙かみ吹雪ふぶきである。だがそれは意思でも通っているかのような規則性を持って舞まい降りてくる。淡あわい燐りん光こうに包まれた紙片は、一枚、また一枚と重なり合い、やがて中空で一冊の書物と化した。

怪異な現象は続く。書物と化した紙片が再びほどけ、宙を舞う。ほどなくそれは収束し、今度は書物ではなく、少女の姿を形成していく。

少女はアイオーンの前に降り立つと、静かに瞼まぶたを開いた。その瞬しゆん間かん、翡ひ翠すい色をした双そう眸ぼうが絶望色に彩いろどられる。少女は唇くちびるをきつくかみしめ、握にぎりしめた拳こぶしを震ふるわせた。怒いかりや絶望など、ありとあらゆる負の感情が胸中でうずまき、抜ぬけるような白い肌はだを紅潮させていく。

少女は一歩、アイオーンへと歩み寄った。

だが次の瞬間、かろうじて原形をとどめていた巨人は爆ばく音おんとともに粉こな微み塵じんに吹き飛び、爆風が華きや奢しやな少女の体を蹂じゆう躙りんしていく。まるでなにかを責め立てるかのように……。

爆風が収まってもなお、彼女は同じ場所に立っていた。

「クッ……」

少女は言葉を詰つまらせ、静かに頭こうべを垂れた。その顔には、深く激しい自責の念が刻みこまれている。

だが後こう悔かいしていたのは、一瞬でしかない。

課せられた強い使命感が少女の思考を遮しや断だんし、行動力へと変えていた。

少女は迷いを振ふり払はらうかのように首を左右に振ると、踵きびすを返した。

彼女の目は、前方に浮うかび上がる街の姿を映し出している。

（見つけ出さねば。妾わらわを所有するに値あたいする術者を……）

その者が眼前に広ひろがる都市の中にいるとは限らない。

それ以前に、この時代に存在するかどうかも定かではなかった。

だが、一刻も早く行動に移らねばならないのは事実だ。その証しよう拠こに、彼女は早くも追っ手の気配を感じ取っていた。

少女は「チッ」と舌打ちしたあと、振り向きもせずに駆かけ出した。

その先に希望があることを信じて――。

第一章

永劫（えいごう）の開演——冥（くら）き空の彼方（かなた）より

アウグストゥス

レガシー・オブ・ゴールド

マサチューセッツ州・アーカムシティ。

合衆国東北部、太平洋岸に位置するその街は、かつてない好景気の直ただ中なかにあった。

科学の進歩と錬れん金きん術じゆつの復古により人々の生活レベルは格段に向上。それは様々な分野でビジネスチャンスを生み、数多くの成功者を生み出していた。人口は爆ばく発はつ的に増加し、だがそれ以上に経済は発展。まるで何者かが描えがいた壮そう大だいなシナリオに沿っているかのように、景気は衰おとろえる気配すらみせない。そんな自他ともに認める世界の中心、それがアーカムシティである。

とは言え、誰だれもが成功者として多くの富を得ているわけではない。

アーカムシティの中心部、ミスカトニック大学から徒歩数分の位置に建っているくたびれたマンションの一室で、その男・大だい十じゆう字じ九く郎ろうは飢うえ死に寸前の憂うき目にあっていた。

「ひもじぃ。それも、かなり」

九郎は探たん偵てい事務所と自宅を兼かねた部屋の真ん中で倒たおれていた。いや、倒れていたなどという生なま易やさしいレベルではない。昏こん倒とうしていた、というのが正しい表現だろう。彼は立派な体たい軀くを床ゆかに沈しずめ、「ひもじぃ、ひもじぃ」とさまよい歩く餓が鬼きさながらの呪じゆ詛そを吐はき出し続けていた。

ひもじいのは、ここ一週間ほど食べ物を口にしていないからだ。生命を維い持じするために水と塩は欠かさなかったが、生命線である水道も今日、止められていた。電気とガスはそれ以前に止められ、家賃は軽く数ヶ月ほど滞たい納のうしている。もはや人間としての尊厳を維持するのも困難で、埃ほこりにまみれた１ワンＲルームが棺かん桶おけと化すのも時間の問題だった。部屋の外では夜ウ

イツプ鷹アーウイルが下げ卑びた鳴き声をわめきちらし、彼の魂たましいを持ち去ろうと狙ねらいを定めている。

（おかしい。決定的になにかが間ま違ちがっている……）

　九郎は無意識のうちに窓の外へと目を向けていた。今日もアーカムシティは上天気で、燦さん々さんと照りつける日光が天を貫つらぬく勢いでそびえ立つ摩ま天てん楼ろうを嫌いや味みなほど浮かび上がらせている。

　すべての人に夢と希望を、そして時には絶望すら与あたえるアーカムシティ。繁はん栄えいの象しよう徴ちよう、世界の中心。だが今は、その栄えい華がのすべてが妬ねたましい九郎である。

（とりあえず、ライカさんのとこでメシでもたかるか）

　背に腹は代えられなかったが、食欲を満たしたあとに訪おとずれる怒ど濤とうの嫌味と説教を想像し、ためらってしまう九郎である。だが、ここで野の垂たれ死にしては元も子もない。

（そのためにも、この場をしのぐ必要がある。そう、これは緊きん急きゆう避ひ難なんってやつだ）

　正当化し、自己中心的な理論で武装した途と端たん、希望という名の活力がわいてくる。

「そうと決まれば、さっそく行動。がんばれ、俺」

　ヨロヨロとおぼつかない体を引き起こしつつ、やっとの思いで立ち上がったそのときだ。

　コンコン

　ドアをノックする乾かわいた音が響ひびいてきた。

　なぜチャイムを鳴らさないのかと九郎は首をかしげたが、電力の供給がストップしている事実に気がついて苦笑いする。

　コンコン

「はいはい。ノックは一度にすれ。俺の空くう虚きよな腹に響くから」

やや苛いら立だたしげなノックに顔をしかめながら、九郎は錠じようを外してドアを開けた。

「大十字九郎様でいらっしゃいますね？」

玄げん関かん先さきにいたのは、九郎とほぼ同じ背格好をしたスーツ姿の男性である。

折り目の入った黒いスーツを着こなし、一分の隙すきもない完かん璧ぺきな立ち居ふるまいをみせる彼の姿は、上品で優ゆう雅がだ。やや華きや奢しやな感も受けるが、ひ弱そうではない。体から発せられる研とぎ澄すまされた空気、そしてメガネの奥から覗のぞく切れ長の目は、触ふれたら切れる鋭えい利りな刃は物もののようだ。

「大十字九郎様ですね？」

「……あんたは!?」

おそるおそる問い返すが返答はない。

代わりに、彼の背後から凛りんとしたよく透る女性の声が響いてきた。

「仕事の依い頼らいです。大十字九郎さん？」

その声が聞こえるやいなや、男は静かに身を引いた。

そこには彼と同じ──いや、それ以上の気品を漂ただよわせている少女の姿があった。これからパーティにでも出席するつもりなのか、彼女は映画でしかお目にかかれない豪ごう奢しやなドレスに身を包み、毅き然ぜんとした表情で九郎を直視していた。

「貴方あなたにこそ相応ふさわしい……いえ、貴方にしかできない仕事です。大十字九郎さん」

少女はそう言うと、強い意思が感じられる黒い瞳ひとみを九郎へとぶつけてきた。

その視線を、ややへっぴり腰ごしで受け止めながら、彼は別のことに気を取られていた。

（どこかで会ったような……。気のせいか？）

　黒く艶つややかで流りゆう麗れいな黒くろ髪かみ、そして深しん淵えんを連想させる黒い瞳は、彼女が九郎と同じ東洋人であることを示している。共通点はそれだけで、眼光と存在感だけで他者を圧あつ倒とうするような人物を、九郎は知らない。胸の奥でなにかがつっかえていたが、九郎は追求しなかった。探偵業を営んでいるとはいえ、情報がゼロに等しい状じよう況きようから推理するなど不可能に等しい。

「話は中で聞かせてもらうよ。狭せまくて汚きたない犬小屋みたいなところで恐きよう縮しゆくだけど」

　すべて事実だが、自分で言っておきながら落ちこむ九郎であった。

+

　事務所と言えば聞こえはいいが、ようするに自宅である。

　事務所と自宅の明確な線引きはなく、当然、ベッドルームも兼ねていた、もっともベッドなど買える身分ではないので、ソファーがその代わりである。女性はそこに腰こしかけると、テーブルを挟はさんだ向こう側に座っている九郎を見つめながら口火を切った。

「わたくしは覇は道どう瑠る璃り。後ろに控ひかえている者は執しつ事じのウィンフィールドです」

　控え目な会え釈しやくをするウィンフィールドを尻しり目めに、九郎の頭は機能を停止していた。

（……この人、なんかとんでもないことを口にしなかったか？）

　九郎は思わず身を乗り出すと、ぶしつけなほど瑠璃を凝ぎよう視しする。

「少々お訊たずねしてみたいこととかあったりするわけですが……」

「わたくしに答えられることであれば、なんなりと」

「こんな犬小屋みたいなところにあのお方が来るわけないし、ましてや俺と同じ空気を吸ってるわけないんですが、念のために訊きいときます。覇道って、まさか……」

「大十字さんのご想像どおりかと思います」

　瑠璃は表情一つ崩くずすことなくそう告げると、さらに続ける。

「覇道財ざい閥ばつ総そう帥すい・覇道瑠璃。こう申し上げたほうがよろしかったでしょうか」

　みなまで聞く前に、九郎はすべてを理解した。

　覇道財閥を知らない者などアーカムシティには存在しない。あらゆる業界に通じ、そのすべてに強い発言力を持つ絶対的な支配者が覇道財閥である。そして覇道財閥から一番恩おん恵けいを受けたのがアーカムシティだった。地方の田舎いなか町まちが世界でも類を見ないほどの経済発展を遂とげたのも、覇道財閥の創始者である覇道鋼こう造ぞうが巨きよ額がくな投資を行ったからで、覇道財閥は街の実質的な支配者だった。

（総帥ってことはつまり、この娘むすめがアーカムシティの頂点ってわけか）

　若いと九郎は思う。瑠璃は見たところ十代後半であり、九郎とほぼ変わらなかった。

「で、仕事の依頼ってのは、やっぱアレですか。俺の事務所の十倍はあろうかという巨きよ大だいな部屋をあてがわれたネコ様が失しつ踪そうしたとか、そんな感じですかね？　ええ、お任せください。ペットのことなら任せて安心、信しん頼らいと実績のアニマル探たん偵てい・大十字九郎へ！」

「大十字さんがペット探しのプロであることは重々承知しておりますが、そうではありません」

「いや、さらりと肯こう定ていされてもヘコむんだけど……」

　実際、探偵とは名ばかりで、ペットの捜そう索さくがメインの九郎である。

「探してもらいたいのはペットではありません。ですが、この仕事に関しては貴方でなければできないのです」

「？　それって、いったい……」

「魔導書です。魔ま導どう書しよを探していただきたいのです。力ある魔導書を！」

　瑠璃は静かに、しかしハッキリとした口調で告げた。

　一方、九郎は顔を引きつらせると、囚しゆう人じんよろしく絶望感に打ちひしがれていた。本能が関かかわるなと危険信号を発している。好ましくない展開になりつつあることは疑問の余地もなく、早急に話を切り上げるべきだと九郎は考えた。

「そんな怪あやしげなもん、俺に探せるわけないだろ？　第一、俺じゃなきゃって理由にもならない」

　大おお仰ぎような仕草で九郎が天を仰あおいでみせると、瑠璃の背後で事の成り行きを見守っていたウィンフィールドがスーツの内ポケットから手帳を取り出した。

「誠まことに恐縮ではございますが、失礼を承知で少し調べさせていただきました」

　ウィンフィールドは手帳に目を落とした。

「大十字九郎──。ミスカトニック大学に入学するも二年で中退。当時の記録によると専せん攻こうは考古学となっておりますが、それは事実ではありません」

「大十字さん。貴方が学んでいたのは陰秘学。すなわち、魔術の理論についてです」

　瑠璃はウィンフィールドの話を引き継ついだ。

　九郎はソファーから腰を浮うかせ、警けい戒かい心しんを剝むき出しにして二人をにらみつける。

　ミスカトニック大学は陰秘学科の存在を公おおやけにはしていない。外部はもちろん、大学の関係者にすら存在を隠かくされている学科である。それを見つけ出すというのは並なみ大たい抵ていのこ

とではない。

「魔術を識しる者にしか魔導書を探し出せないと聞きます。わたくしたちには不可能なのです。これが貴方あなたにしかできない……」

「ちょっと待ったッ！」

　依い頼らいを受けざるを得ない状況になりつつあることを知り、九郎は慌あわてて会話をさえぎった。あんな世界は二度と御ご免めんだと、九郎は胸中で吐はき捨てる。

「俺のことを調べたんなら話は早い。見てのとおり俺は落ちこぼれで、初歩的な魔術ですら使えやしない。第一、なんで俺なんだ？陰秘学科には俺より優ゆう秀しゆうなヤツがいるだろう？」

　九郎はソファーに座り直すと、矢や継つぎ早に言葉を吐き出した。

「アーミティッジの爺じいさんにでも紹しよう介かいしてもらえばいいじゃないか」

　一気にぶちまけてスッキリしたせいか、若じやつ干かん、九郎は平静さを取り戻もどしていた。

「大十字様は、魔導書を閲えつ覧らんできる位階クラスになっていたはずですが？」

「今さら隠し事など、意味をなしません」

「あんたらいったい、どこまで俺のことを……。目的はなんだ？なぜ覇道が魔導書を探す!?」

　覇道財閥と魔導書。そこに接点があるとは思えなかった。

「後学のために教えてやる。魔導書ってのは外げ道どうの知識の集大成だ。素人しろうとが手を出す代しろ物ものじゃない」

　叱しつ責せきにも似た言葉を浴びせかけられた瑠璃は、視線を外し、顔をうつむかせた。だがそれは叱しかられたことに対してではなく、考えあぐねているような、そんな様子だった。

「デモンベイン」

　何かを吹ふっ切るかのように、瑠璃は言った。

「デモン……なんだそりゃ？」

「デモンベイン。祖父がわたくしに……いえ、このアーカムシティに遺のこした『ブラックロッジ』に対たい抗こうしうる最後の切り札」

　ブラックロッジの名を口にした途と端たん、瑠璃の顔はそれと判わかるほどハッキリと曇くもった。

「ブラックロッジについては、今さら説明するまでもありませんね？」

　アーカムシティ最大の犯罪組織の名である。ありとあらゆる犯罪に関かん与よし、泣く子も黙だまる犯罪集団である。その名を口にすれば泣く子は黙り、テロリストは尻尾しつぽを巻いて逃にげ出すほどである。

　だが、ブラックロッジが恐おそれられる真の理由は他ほかにあった。彼らが破は壊かい活動に用いる破壊ロボットである。それはまさに悪夢の権ごん化げであり、科学と錬れん金きん術じゆつが生み出した脅きよう威いだった。その破壊力は治安警察が処理できるレベルを超こえており、彼らでは追い払はらうのが限界だった。市民も自警団である『白き友愛団』を結成してブラックロッジと戦ってはいたが、焼け石に水である。

　とは言え、ブラックロッジが好き放題できたわけでもない。アーカムシティにはブラックロッジと敵対する守護メタ天使トロンがいた。メタトロンは治安警察ですら手も足も出ない破壊ロボットを、互ご角かく以上の力を以もつてねじ伏ふせていたのである。メタトロンだけではない。覇道財ざい閥ばつが治安維い持じのため費用を出資しなければ、街はとうの昔に壊かい滅めつしていただろう。

「破壊ロボット一つ採り上げても、市民の生活を根底から覆くつがえしかねない脅威です。ですが真の脅威は彼らの頂点に立つマスターテリオンと、その幹部たち。彼らは魔ま術じゆつ師しであると言われています。魔術師の恐ろしさは、大十字さんのほうが詳くわしいのではないでしょうか」

実のところ、破壊ロボットより恐ろしいのは魔術師だった。マスターテリオン、そして彼に従う魔術師たち。その存在を疑問視する声もあるが、彼らが手を下したとされる事件は、その凄せい惨さんさにおいて他の事件とは一線を画していた。とにかく惨むごいの一言につきるのだ。肉片以下のモノと化した者、体の内側と外側をひっくり返された遺体がオブジェのごとく飾かざられていた者、なぜか骨だけが抜ぬかれて軟なん体たい動物のようにされた者、中には殺された直後であるにもかかわらず腐ふ臭しゆうを漂ただよわせ、蛆うじにまみれた体で襲おそいかかってきた者さえいた。だが外道の力を行使したのであれば納なつ得とくでき、しかも戯たわむれでしかないことを九郎は知っていた。だとしても被ひ害がい者しやたちは例外なく普ふ通つうに死ぬことすら許されなかったはずである。魂たましいは砕くだけ散り、死してもなお狂きよう気きの世界に囚とらわれたまま終わりなき旅を続けているはずだ。

そんな外道の力を操あやつる者たちが、本格的に動き出したとしたらどうなるか。

アーカムシティの住人が共通して抱かかえている不安である。

「覇道としては、これ以上、ブラックロッジの暴挙を見み逃のがすわけにはいかないのです。ただ口くち惜おしいことに、魔術に対抗できるのは魔術のみと聞きます。つまり、わたくしたちでは手の打ちようがないのです……。デモンベインを除いては」

「そのデモンなんたらってやつは、魔術師と渡わたり合うだけの力があると？」

「デモンベインは覇道が持つ技術の粋すいの結けつ晶しよう。そしてわたくしの祖父・覇道鋼造が導入した魔術理論は、必ずやブラックロッジの魔術師たちを討うつことでしょう。しかし……。デモンベインを起動するには魔導書が必要なのです。魔術師が魔導書を用いて魔術を行使するように、魔術理論を組みこんだデモンベインの起動には魔導書それが不可欠なのです」

車の鍵かぎみたいなものかと九郎は納得した。納得したが、依頼を受けるかどうかは別問題である。

もちろん九郎も、市民の一人として協力したいとは思う。思うが、割り切れないでいた。

陰秘学を学び、魔導書の閲覧を許されるまでになっていた九郎だが、その内容にはついていけなかった。難解だったわけではない。魔導書そこに記された内容のおぞましさに、である。魔術の知識を恐れて逃げ出した九郎にとって、あの狂気の世界に再び足を踏ふみ入れるのは拷ごう問もんにも等しかった。

「デモンベインは祖父の形見であり、希望なのです。わたくしは、それを無む駄だにしたくはない」

黒く澄すんだ瑠璃の瞳ひとみが、九郎にすがりついてきた。

（いや、そんな捨てられた子犬のような目で見つめられてもなあ……）

まいったなとつぶやきながら、九郎は頭をかいた。

後味の悪さを感じながらも、九郎の気持ちはすでに固まっていた。

「悪いけど、俺は……」

九郎が言い終わる前に瑠璃は行動に出た。

「ウィンフィールド、例のモノを」

彼は恭うやうやしく一礼すると、ジュラルミン製のアタッシュケースをテーブルに置いた。

「いかに大変かは承知しております。ですから、報ほう酬しゆうもそれに見合った額をご用意いたしました」

ウィンフィールドは瑠璃がうなずくのを確かく認にんしてから、アタッシュケースを開く。その中に収まっていたのは、ビッシリと敷しき詰つめられた札束だった。

「依い頼らい料と必要経費です。お納めください」

ウィンフィールドはアタッシュケースを九郎の目の前へと移動させる。

「もちろん、魔導書を発見したあかつきには、成功報酬としてさらに倍額を用意いたします。引き受けてくださいますよね、大十字さ

ん？」

　邪じや気きなくニッコリと微笑ほほえむ瑠璃に対し、九郎は「もちろんです」と阿あ吽うんの呼こ吸きゆうのように応じた。

　金に目がくらんだわけではないと自分に言い聞かせながらも、目は札束から離はなれない。

　窓の外で九郎の魂を取り損そこねた夜ウイツプ鷹アーウイルが口惜しげに鳴きわめいていた。

+

　九郎は自宅から徒歩十分の距きよ離りにある繁はん華か街がいへと足を運んでいた。

　アーカムシティで一番の賑にぎわいをみせるそこは、自然と多くの人間が集まってくる。老ろう若にやく男なん女によ、人種や職業も様々な人たちが渾こん然ぜん一体となりながらも、不思議と調和がとれている場所だ。

　九郎は初夏の日差しを体いっぱいに浴びながら、奥へ奥へと進んでいく。目的地は繁華街ではなく、脇わき道みちに逸それた裏路地である。そこには怪あやしげな古書店やオカルトショップが多く、魔導書に関する情報が得られるのではないかと九郎は期待を寄せていた。

（しかし……ハメられた気がする）

　覇道財閥は九郎を調査していた。当然、極ごく貧ひん生活は調査ずみであり、そんな九郎に現げん生なまを見せれば結果は火を見るよりも明らかである。九郎は足あし下もとを見られたことに苛いら立だちと不ふ甲斐がいなさを感じながらも、なぜか笑えみが絶えなかった。とは言え、魔術の世界と関かかわりたくないのもまた事実である。

（秘密図書館にでも入れればなぁ……）

ミスカトニック大学にある秘密図書館には、世界各地から集められた魔導書が山と積まれている。だが秘密であるがゆえに閲えつ覧らんは厳しく制限され、持ち出しも禁じられている。陰秘学科で学び、閲覧が許される位階クラスに達しても制限を受けるような場所だった。忍しのびこんでちょろまかす手もあったが、そこに住まう番犬は怪かい異いすら噛かみ殺すとの噂うわさもあった。

「つまり探たん偵ていらしく、足で稼かせぐしかないわけだ」

九郎は覚かく悟ごを決めると、手近な店から足を運んだ。

+

赤く燃える太陽が街を茜あかね色へと染め上げる中、九郎は裏通りを黄昏たそがれながら歩いていた。

「鬱うつだ……」

九郎の背中からは、営業の成果が出ないサラリーマンのような哀あい愁しゆうが漂ただよっていた。

足は腫はれ上がり、鉛なまりのように重い。手がかりがないという事実が九郎を気落ちさせていた。

とにかく今日は引き上げようと、来た道を戻もどり始めたときだ。来るときには気づかなかった古書店が目に止まった。あまりにも小さな店なので視界に入らなかったのか、それとも憔しよう悴すいしきっていたので見過ごしたのか……。これが今日の最後と腹をくくり、九郎は重い体を引きずりながらも古書店へと足を向けた。

その古書店は切きり妻づま造づくりの日本風の建物で、かなり老ろう朽きゆう化かが進んでいた。風雨に晒さらされ続けたせいか木造の壁かべは黒ずんでいたが、造りはしっかりしている。

店の中は奥行きがあるせいか意外に広く、蔵書数も多い。しかも本ほん棚だなに整然と収められた書しよ籍せきは大学の図書館でしかお目にかかれない代しろ物ものばかりだった。

「探しものでも？」

　九郎が振ふり返ると、そこには店主らしい長身の美女が立っていた。歳としは九郎より若じやつ干かん、上だろうか。大人の女性が発する妖よう艶えんな気配と、胸むな元もとが盛大に開いたスーツが印象的だ。

「なかなかの品しな揃ぞろえだろう？　ただ、ちょっと無節操かもしれないね」

　女性は軽く肩かたをすくめると、九郎に向かって微笑みかけた。

　ゾクッと、九郎の背筋に寒気のようなものが走り抜ぬけていく。

「それより、こんなに多くちゃ探すのも大変だろ？　僕でよければ協力するよ」

　女性は九郎の肩を軽く叩たたくと、

「おっと失礼。挨あい拶さつがまだだったね。僕は……そうだな、ナイアって呼んでくれればいいよ」

　少し考える素そ振ぶりをしながらそう言った。

　九郎が名前を告げると、ナイアは「ふぅん」とつぶやきながらしげしげと九郎を眺ながめた。

「で、九郎君が探している本というのは？」

「ああ、それがちょっと特とく殊しゆな代物で……」

「ふぅん。たとえば、力のある魔ま導どう書しよのような？」

　ナイアは鼻先までずれたメガネを指先で押し戻すと、しれっと言った。

　さっそく九郎は警けい戒かい心しんをあらわにすると、ナイアを睨ねめつける。

「そんな目で見ないでくれよ。こんな商売をやってるせいか、なんとなく解わかるのさ。客が求めている本がね。ましてや君のように特殊な本を求めている客となれば、なおのことさ」

　ナイアは、くすりと笑う。

「それにね、僕は思うんだよ。魔導書を求める者は、実のところ魔導書に引き寄せられているんじゃないかってね。つまり人が魔導書を選ぶのではなく、魔導書が自らの主あるじを選ぶってわけさ」

　ナイアは本棚から手近なところにある一冊の本を引き抜いた。分厚く堅けん牢ろうな装そう丁ていのその本にはエノクの書と書かれている。それは紛まぎれもない魔導書であった。

「魔導書は魔術師に力を与あたえ、彼らはそれを行使して奇き跡せきを起こす。このエノクの書もそうさ。矮わい小しようたる人間が逆立ちしたところで遠く及およばない智ちの結けつ晶しよう。人じん智ちを超ちよう越えつした奇跡の産物。魂たましいが宿っていたとしても不思議ではないだろう？」

　なるほどと九郎は得心する。

　心を惑まどわし、正気を失わせるような狂きよう気きに近いなにかがエノこクのの書本にはある。実際、毒気にさらされているのか眩暈めまいと吐はき気がした。

「おやおや、大だい丈じよう夫ぶかい？　エノこクのい書つに精気でも吸われちゃったかな!?」

　おどけるような口調で訊たずねてくるナイアに、九郎は疑問を抱いだかずにはいられなかった。

（この人、なんで平然としていられるんだ？）

　だが体の不調が九郎から思考能力を奪うばい去っていた。

「それ、譲ゆずってくれないかな……」

「申し訳ないけど、それはできない」

「なんでだ？　金なら心配ない。そっちの言い値で買い取れる」

「お金の問題じゃないんだ、九郎君。残念なことに、この店には君に見合う魔導書がないんだよ」

　やや伏ふし目がちのナイアの目が、心底残念だと告げている。

「ないって、あんたが手にしてるのは魔導書だろ？」

「確かにエノクの書も魔導書には違ちがいないけど、君にはもっと相応ふさわしいモノがあるはず」

「ちょ、ちょっと待った！　俺は頼たのまれただけで……」

　ナイアは九郎の口に人差し指を添そえて話をさえぎった。

「まだ気づいてないだけさ、九郎君？　近い将来、君は必要とするはずだ。最高の力を持った魔導書を。そう、《神》をも召しよう喚かんできるような窮きゆう極きよくの魔導書をね!!」

　九郎を置き去りにしたナイアの話は、さらに続く。

「最高位の魔導書の中には《神》を召喚できるヤツがあるのさ。しかもその魔導書の所有者は、なんと《神》を自在に操あやつれるんだ!!　まあ、正確には神の模造品だけど……。とにかく、君が必要とするのは、きっとそういう魔導書なんだと思うよ」

　熱弁をふるってスッキリしたのか、ナイアの表情は爽さわやかだ。

「僕は楽しみだよ、九郎君。いったい、君が手に入れる魔導書はどんなのだろう？」

　ナイアの目は、夢でも見ているかのようにとろんとしている。

「もしかしたら、それはかの『死し霊りよう秘法』だったりするのかもしれないね？」

+

　古書店を後にした九郎は、首を傾かしげながら道を歩いていた。

　すでに日は落ち、街灯もまばらな裏通りはやけに暗い。加えて蒸むし暑く、肌はだにまとわりつく湿しめり気を帯びた粘ねん着ちやく性の高い空気が、確実に九郎の不快感を増大させていた。

古書店での出来事は現実味に欠けていた。エノクの書が脳のう髄ずいを冒おかしでもしたのか、記き憶おくが曖あい昧まいである。それにもかかわらずナイアとの会話は鮮せん明めいで、現実と夢が複雑に絡からみ合った不可思議な映像として彼の脳のう裏りに焼きついていた。

（とにかく、もう一度交こう渉しようしてみるか……）

ナイアが魔導書を手放すとも思えないが、汗あせだくになって探し回るより彼女を口説くほうが楽そうである。疲つかれた体にムチを打ちながらトボトボと歩いていたときだった。

「退のけッ！　そこから退くのだッ!!」

突とつ然ぜん、どこからともなく聞こえてきた怒ど声せいに押されて辺りを見み渡わたすが、そこに人ひと影かげはない。

九郎は耳の穴を指でほじると、やれやれとばかりに溜ため息をつく。

「これだから魔導書は……」

「このぉぉぉ、早く退かんか！　このうつけがぁぁぁぁぁ!!」

女性の怒声が九郎の耳じ朶だを打つ。それは彼の頭上から聞こえてきた。

状じよう況きようを理解できないまま振ふり仰あおいだ九郎は、白い猫ねこのようなものが接近していることを知った。

そしてそれが猫ではないと認にん識しきした途と端たん、九郎はそれと激げき突とつし、地面に押し潰つぶされてしまう。めりこむような勢いで地面に叩たたきつけられた九郎の意識は、一いつ瞬しゆん、あらぬ世界へと旅立ったが、全身を突つき抜ぬける激痛が気付け薬となり、現実へと引き戻もどされていた。

気絶したほうが楽だったと思いながら、上空から降ってきた理り不ふ尽じんなそれへと目を向ける。つっぷすように地面に倒たおれている九郎の体の上には、顔を歪ゆがめながら「イタタ……」とつぶやいている女性―いや、女の子の姿があった。抜けるような白い肌が印象的な小こ柄がらな少女である。

　やがて九郎は少女と目が合った。翡ひ翠すい色をした神秘的な瞳ひとみは、この世の者とは思えない不可思議な印象がある。年の頃ころは、まだ十代前半だろう。女性としての成熟度から言うと発展途と上じようである。ただ丸みを帯びた体には女性特有の柔やわらかさがあり、なにより年齢に見合わぬ蠱こ惑わく的な印象があった。腰こしまで届くサラサラとした銀色の髪かみからは、女の色いろ香かのようなものさえ感じられる。

「このうつけ者がッ！　なぜに逃にげなんだか！　うつけうつけうつけうつけ大うつけが!!」

「五連発かよ」

　ぶつかっておきながら、ひどい言われようである。

「っていうか、いきなり上から降ってくるってのは反則すぎやしないか？　だいたい物理法則を無視しやがるあんたは何者ですか？　けど答える前に、さっさと体をどけてくれ」

「……汝なれは今の状況を、まったく理解しておらぬ」

「あったり前だ。理解できるほうがどうかしてる」

　九郎は毒づき、少女は目をスッと細める。二人の間に一いつ触しよく即そく発はつの空気が漂ただよい始めたときだ。

　急ブレーキを踏ふんだかのような音が聞こえたかと思うと、地面を踏みならす幾いく人にんもの足音が聞こえてきた。そしてその足音は確実に近づいてくる。さっそく九郎は嫌いやな予感がしたが、予感ではなく現実だった。身構える仕草を見せた少女の様子からも、それと判わかる。

　そして間かん髪ぱつをいれず、災さい厄やくは二人の前に現れた。全身黒ずくめのスーツに身を包み、顔にピッタリとフィットした覆ふく面めんを着用した三人組である。仮装でもしているかのようなとぼけたその姿は、アーカムシティに住む者なら知らぬ者はいない。ブラックロッジの構成員である。彼らは手にしたマシンガンの銃じゆう口こうを向けた。

「汝のせいで追いつかれてしまったではないかっ！」

「ふざけんなっ！　ぶつかってきたのは、そっちだろーが！」

　だが口論している場合ではなく、明らかに状況は切せつ迫ぱくしていた。

　ブラックロッジの構成員は九郎たちに狙ねらいを定めると、躊ちゆう躇ちよなくマシンガンを掃そう射しやした。

「お、おいっ！　冗じよう談だんじゃねえぞ!!　俺がなにしたってんだ!!」

　悪態をつきつつも、九郎は少女を守るために凶きよう弾だんの前に立ちはだかった。

「ちくしょーッ!!　あまりに儚はかなき我が人生！　それは挫ざ折せつと後こう悔かいの連続でしたッ!!」

　九郎は目をきつく閉じ、来きたるべき死後の世界を夢想する。だがその瞬しゆん間かんは一向に訪おとずれず、不思議に思った九郎は、ゆっくりと瞼まぶたを開く。

　九郎は我が目を疑った。彼の前には淡あわく輝かがやく障しよう壁へきのようなものができており、マシンガンの弾だん丸がんのすべてを阻はばんでいた。そしてそれを出現させたのは、あの少女だった。少女がかざしている白くしなやかな腕うでは、障壁と同じ光に包まれている。

（こいつ……魔ま術じゆつ師しか？）

よく見ると彼女の背には羽のようなモノが浮うかんでいた。

「吹ふき飛べ、下げ郎ろうッ！」

少女は吐はき捨てると、手を横へ振る。たったそれだけの動作

だったが、構成員は体をくの字に曲げながら吹き飛んだ。まるで見えない巨きよ大だいな手で薙なぎ払はらわれたかのような感じである。

「ふんっ。妾わらわを捕とらえることなど……」

　不敵な笑えみを浮かべていた少女だが、不意に表情を曇くもらせた。

「クッ……。無む駄だに力を使いすぎたか……」

　そう言って片かた膝ひざをついた少女の額には、大おお粒つぶの汗あせが浮かび上がっていた。

「おい。大だい丈じよう夫ぶか？」

「やはり術者なくしては……」

　少女の言葉は、最後まで続かなかった。彼女の体は後ろへと傾かたむき、地面へと向かって倒たおれていく。慌あわてて九郎は彼女の体を支え、抱だきとめた。驚おどろくほど軽い。

（で、俺にどうしろと？）

　九郎の腕の中で気を失っている少女は、悪夢でも見ているのかうなされていた。その姿は年ねん齢れい相応の少女にしか見えず、ブラックロッジの構成員を軽々と捻ひねり潰つぶした魔術師とは思えなかった。

（一いつ緒しよにいると、ろくなことにならないだろうな）

　とは言え、少女を置き去りにするような後味の悪いことはできなかった。

　ドォォォォン

　少女を抱かかえながら途と方ほうに暮れていたとき、悪い予感を具現化するように、遠方から爆ばく音おんが聞こえてきた。爆音は確実に接近してくる。

　と、そこへタイヤの悲鳴と轟とどろくエンジン音、そしてトチ狂くるった笑い声と狂きよう乱らんのギターの不協和音とともに現れ

たのは、二千ccはあろうかという重量超ちよう過か気味のアメリカン・バイクに跨またがった男女である。

「ＨＥＹ！　そこのちんけな若者っ！　おとなしくその娘むすめを我わが輩はいに渡わたすのであーる！」

　運転席でふんぞり返っている白衣の男は、背中に担かついでいたエレキ・ギターを手にすると、愉ゆ悦えつの表情を浮かべながら盛大に掻かき鳴らした。目には狂きよう気きの色が宿っている。

「渡すロボ！」

　タンデムシートで座しているのは、魔ま術じゆつの儀ぎ式しきで使用されるような装しよう束ぞくに身を包んだ長ちよう髪はつの少女だ。一見、どこにでもいそうな印象を受けるが、語ご尾びは明らかにおかしい。

「……どちらさんで？」

　思わず口にしたのが失敗だった。

「ななななッ、なんと！　一億年に一度、生まれるかどうかという奇き跡せきの寵ちよう児じ、ブラックロッジにこの人ありと言わしめた天才科学者ドクター・ウェストを知らないとでも？」

「知らないロボ？」

　男は泣き出しそうな表情で激しくギターを掻き鳴らす。悲しみの表現らしい。

「なんたる無知！　無知とは罪！　無知とは悲劇！　悲しみと絶望に彩いろどられた君の人生を喩たとえるならば、この掌てのひらに舞まい降りた儚い淡あわ雪ゆきのようなもの。ああ、雪がすべてを白く埋うめつくす。そう、僕の悲しみもなにもかも。ゴゴゴゴ……。なに？　なにが起こったの？　な、雪な崩だれ!?ギャー！」

（やべえ、真性の○○○○だ）

　九郎は後ずさると、独演会を続けるウェストからそっと離はなれた。幸い、彼は自分の演説に陶とう酔すいしており、九郎のことを気にしている様子はない。九郎は少女を抱えたまま駆かけ出してい

た。

「あ。逃にげたロボ」

　九郎の背後から少女の声が追いかけてくるが、九郎の足は止まらない。

「なんと！　ドクター・ウェスト記念講演『若気の至り～その無知と罪～』は、これからが本編である。追えッ、エルザ！　捕つかまえて奇跡の二十四時間ぶっとおしライブをおみまいするのである！」

「了りよう解かいロボ。博士の偉い業ぎようのために、エルザは一ひと肌はだ脱ぬぐロボ」

　エルザと呼ばれた少女はガッツポーズを作ると、ふと思い出したように問うた。

「ところで、エルザの役はどうなってるロボ？」

「一生やってろ、○○○○どもっ！」

　九郎は吐はき捨て、遁とん走そうした。

+

　九郎はスラム街の暗く狭せまい小こ径みちを全力で疾しつ走そうしていた。

　市街地とは違ちがって区画整理されてないそこは、ほとんどゴーストタウンである。朽くちかけた家屋と瓦が礫れきの山で埋めつくされたそこは、繁はん栄えいの一いつ途とをたどるアーカムシティにおいて禁きん忌きとも言うべき区画である。危険な場所ではあるが、ウェストの相手をするよりはマシだと九郎は考えた。

　だが全力で走り続けるのも、そろそろ限界である。追っ手の気配もないことから、九郎は走るのを止やめ、その場でへたりこんだ。

（しかし、どうするよ、俺）

　依い然ぜん、腕うでの中で眠ねむり続ける少女に目を落としながら、九郎は頭を抱えた。

　ウェストを撒まくことには成功したが、その後のことは何一つ考えてはいない。最も寄よりの警察へ駆けこむのが一番だとは思ったが、彼らがどうこうできる相手でもなさそうだ。

（しかし、なんで俺は追われてんだ？）

　その原因となっているのは、腕の中で眠る少女である。あいかわらず顔色はすぐれなかったが、少女の呼吸は落ち着いていた。そのことは少なからず九郎を安あん堵どさせる。

「魔ま術じゆつ師し、か。まさか本物に出会うとはね……」

　かつては同じ道を目指していたという事実が、少しだけ少女を身近な存在に感じさせた。

　そのとき、九郎の腕の中で少女が身み動じろぎをした。彼女の瞳ひとみが、ゆっくりと開かれる。翡ひ翠すい色をした瞳に生気が宿り始めた。

「……此処ここは？」

「てきとーに逃げてきたからな。スラムってことは確かだが」

　少女は軽くうなずくと、九郎の腕から離れて身を起こした。

「汝なれが妾わらわを？」

「置き去りにはできねぇだろ？　いくらなんでも後味悪すぎる」

「そうか……。礼を言おう」

「気にすんな。逃げるついでにやっただけだ」

　九郎はさらに続ける。

「事情は知らんけど……病院にでも行っとくか？　なんかメチャクチャ調子悪そうだし」

「術者なしで無茶をしたからな……。構成を維い持じできなくなっているようだ……」

「術者？　構成？」

「ふふっ。そのうえアイオーンまで失っては、もはや無様としか言いようがない」

　少女は自じ嘲ちようした。

「とにかく、病院に連れてってやる」

「無む駄だだ……。妾なら平気だ。世話をかけたな……」

　九郎の提案を即そく座ざに却きやつ下かし、少女は立ち上がった。その体は不規則に揺ゆれている。

「ぜんぜん大だい丈じよう夫ぶそうに見えねぇぞ」

「平気だと言っておる。人間ごときが妾を……？」

　不意に少女は九郎と目線を合わせてきた。翡翠色をした魅み惑わく的な瞳が、彼を注視する。

「汝、暗い闇やみの臭においがする。魔術師か？」

　顔を寄せ、小首をかしげてくる少女に、九郎は面めん食くらっていた。

「俺は違ちがう。昔、少し囓かじってただけだ。そういうあんたこそ魔術師だろ？」

「違う」

「違うって、ブラックロッジ相手にやったアレ、魔術だろ？　だったら魔術師じゃないか……って、俺の話は耳に入ってないようで？」

　九郎の話には耳も貸さず、少女は胸の前で腕うで組ぐみをしながらブツブツとつぶやいている。

「汝、魔術師ではないと申したな？」

「見てのとおり、しがない三流探たん偵ていさ」

「つまり『書』を持たぬわけだな？　ふむ、それはよい」

　少女はチラリと九郎の姿をうかがうと、

「見たところ、潜せん在ざい的な資質はなかなかのものだ」

　ふむふむとつぶやきながら、少女は九郎そっちのけで話を進めている。

「ずいぶん都合よく巡めぐり会えたものだ。ここまでご都合主義的に事が運ぶと、何者かの手の内で踊おどらされているような気がしなくもないが……かまうまい」

「あの……俺にも解わかるように話してくれ……」

　だが少女は九郎を無視して盛り上がっていた。興奮気味なのは薄うす紅べに色に染まった頬ほおの色で判わかる。

「見つけたロボ！　お命頂ちよう戴だいするロボッ♪」

　不意に、語ご尾びに特とく徴ちようのある少女の声が聞こえてきた。

「こ、この声は……」

　九郎は周囲を確かく認にんするが、声の主は見あたらない。

「うつけ、上だ！」

　慌あわてて九郎が振ふり仰あおぐと、はるか上空から急降下してくる少女・エルザの姿が。

　彼女は上空で大きく拳こぶしを振りかざすと、勢いよく前方へと突つき出してきた。

「んなアホなッ！」

　九郎は目をむくと、翡翠色の目を持つ少女を肩かたに担かつぎ、その場から飛び退のいた、

　と同時に、九郎が座していた場所に、スーパーマンよろしく拳を

前に突き出したままのエルザがつっこんでいく。鉄てつ塊かいでも落ちてきたかのような鈍どん重じゆうな音が響ひびいたかと思うと、粉こな微み塵じんに砕くだけたアスファルトと積もった埃ほこりが火柱のごとく立ちのぼった。

「ありゃ死んだな。確実に」

　埃が視界をさえぎっていたが、潰つぶれたヒキガエルのような死体が転がっているのは間ま違ちがいなかった。

「とりあえず一難去ったわけだが―」

「いや、まだだ」

　九郎に担がれたままの姿で少女は言うと、ほどなく彼にもその理由が理解できた。ドドドドドッと、腹の底に響くようなエンジン音が聞こえてきたからだ。そして鳴り響くエレキ・ギターの音。

「やべえ……。ヤツだ。ヤツが来る」

「ＨＡＨＡＨＡ！　そこの若者、それで隠かくれたつもりかな？　無む駄だ無駄無駄ぁ！　宇宙一と誉ほまれ高い超ちよう絶ぜつ大・天・才！　ドクタァァァァァ・ウェェェェストッッッ！　の目を欺あざむくことなどできはしないのである。嗚呼ああ、非ひ凡ぼんすぎる我わが輩はいよ、生まれてきてどうもすみませんでした」

　言うだけ言うと、ウェストはペコリと頭を下げた。

「あやつ、汝なれの知り合いか？」

「よしてくれ」

　九郎は即そく答とうすると、珍ちん獣じゆうにでも遭そう遇ぐうしたような表情をしている少女を地面におろした。

「さて、そろそろ鬼おにごっこにも疲つかれたのである。ここいらで己の愚ぐ鈍どんさと無能さに涙なみだしつつ、神しん妙みようにお縄なわにつけい！　と言うわけで、エルザ！」

　ウェストが叫さけぶと、潰れたヒキガエルが永えい眠みんしているはずの場所から人ひと影かげが飛び出してきた。エルザである。彼女の衣服はところどころ破け、本人も埃にまみれてはいたが、い

たって元気だ。エルザは地面を蹴けって飛び上がると、宙で一回転してからウェストの横に立つ。

「あやつ、なかなか頑がん丈じようにできておるな」

「いや、そのレベルを超ちよう越えつしてると思う」

　九郎は惚ほうけた顔でエルザを見つめた。

「おお、エルザ。ずいぶん手ひどくやられてしまって―」

「いや、俺たちはなにもしてないんだけど……」

　即座にツッコミを入れる九郎に対し、ウェストは殺意のこもった目を向けてきた。

「おのれ若造。エルザが受けた恥ち辱じよくの数々……のし紙つけて倍返しである！」

　ウェストの目がキラリと光り、狂きよう気きが宿る。

「いや、だから……。俺の話は、あなたの耳に届いているのかと？」

「問答無用であるッ！」

　ウェストは手にしたエレキ・ギターで不協和音を奏かなでると、指をパチンと鳴らした。

「お待たせしました。ブラックロッジの構成員の皆みなさま。出番でーす♪」

「出番ロボ♪」

　どこに隠れていたのか、機き関かん銃じゆうを手にした覆ふく面めん姿の構成員一同が四方八方からゾロゾロと現れた。

（……大ピンチだ。シャレにならん）

　九郎は後ずさりするが、数歩と歩かぬうちに背に壁かべを感じた。

「時に汝、名はなんと申す？」

　少女は九郎に訊きいてきた。

「緊きん急きゆう事態発生だ！　あとにしてくれ!!」

「いいから答えよ、人間。名は大切だ」

「だから、あとにしろ！　今はそれどころじゃねぇ！」

　九郎と少女がもめている間にも、死へのカウントダウンは猛もう烈れつな勢いで進んでいく。

「本さえ回収できればいいのである。やってしまうがいい!!」

　ウェストが右手を高々と挙げた。

「おい、あんた魔ま術じゆつ師しだろッ！　さっきみたいに魔術でちょちょいのちょいってやってくれ！」

　構成員の指がマシンガンの引き金へと向かう。

「答えよ、人間ッ！」

　だが、なおも名前に固こ執しつする少女に対し、九郎はやけっぱちに答えた。

「―九郎。大十字九郎だッ！　ただのしがない三流探たん偵ていだッ！　こんな状じよう況きよう、どーにもなんねえぞ、こんちくしょう!!」

「そうか。ならば大十字九郎、妾わらわは汝と契けい約やくする」

　少女は九郎の顔へと手を伸のばして両手で頬ほおを包みこむと、自分の目の前へと引き寄せた。見つめ合う目と目。そして、触ふれ合う唇くちびると唇。その瞬しゆん間かん、九郎と少女は光の渦うずの中へと溶とけこんでいく。

「な、なんであるか!?　なにが起きているのである？」

「まぶしいロボ～」

　辺り一面を覆おおいつくす光の海の中で、ただ少女の唇の感かん触しよくだけが現実味を帯びている。

「大十字九郎。我が名をしかと心に刻みこめ。我が名はアル・アジフ。アブドゥル・アルハザードにより記された最強の魔導書なり！」

　光が九郎の体へと収まっていく。

「な、なんであるか、その姿は」

　ウェストの指し摘てきで九郎は自分の姿の異変に気がついた。体にピッタリとフィットした黒のボディースーツに身を包んでいたのである。しかも背にはマントにも似た黒い翼つばさをしょっていた。

（翼？　いや、これは……本か？）

　九郎の背に生じたそれは、本のページを束ねたような構造をしていた。ビッシリと魔術文字が書かれていることから、それが魔導書のページだと解る──解ったが、状況がまったく理解できない。

（だいたい、どこに行きやがったんだ!?）

　九郎は周囲を見み渡わたすが、少女の姿は見あたらない。そこにいるのは立ちつくしているウェストとエルザ、そして愕がく然ぜんとしているブラックロッジの構成員だけだ。

「と、とんずらしやがったのか!?」

「うつけが。此処ここだ、此処」

　九郎は再度、周囲を見渡したのだが……。声は聞こえど姿は見えない。首をかしげていると右耳が引っぱられ、九郎の顔は強制的に右の肩かたへと向けられた。そこには確かに少女の姿があった。──あったのだが、少女は九郎の肩に乗れるほど小さな姿になっていた。

「ず、ずいぶん小さくなったんだな……」

「その代わり、汝の魔力は爆ばく発はつ的に増ぞう幅ふくしたぞ」

「魔力？」

「この妾──魔導書【アル・アジフ】の所有者に選ばれた今の汝は魔

術師だ。さぁ、共に戦おうぞ！」

「なんか俺の意思を無視してねーか？　っていうか、戦うってっ!?」

　九郎は困こん惑わくするが、それに輪をかけて困惑している者がいた。

「なななッ、なんとッ!!　あのアル・アジフが、あんな若造をマスターに選んだだと!?」

　ウェストはしばし黙もくすと、「撃うてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」と、構成員に向かって吠ほえた。

　それで目が覚めたのか、愕然としながら突つっ立っていた構成員が我に返った。彼らは一いつ斉せいにマシンガンの銃じゆう口こうを九郎とアル・アジフへと向け、躊ちゆう躇ちよなく引き金を引く。

「どわぁぁぁぁぁ!!　きた、きたよ、きちゃったよ！　どーすんだよ、アル。なんとかしてくれッ！」

「落ち着かんか。あのような玩具おもちや、もはや汝なれには通用せん」

　実際、銃じゆう弾だんは九郎に届かなかった。彼の背に生えた黒き翼が、銃弾のすべてを弾はじき返していたからである。翼は左右に広がったかと思うと、羽ばたき始めた。それは猛烈な旋せん風ぷうを呼び、ブラックロッジの構成員を吹ふき飛ばしていく。

「こいつぁ、すげえ……」

　九郎が感かん嘆たんすると、アルは「えっへん」と胸を傲ごう然ぜんと反らした。

「おのれぇぇぇ！」

　ウェストは歯ぎしりすると、その場で地じ団だん駄だを踏み始めた。

「エルザ、あいつらをギタンギタンのケチョンケチョンにして産さん廃ぱい送りにするのである！」

「了りよう解かいロボ」

　エルザは敬礼すると、なにを思ったのかウェストの横よこっ面つらを殴なぐりつけた。

「ぐふぅ。な、な、なぜに？」

　ウェストは鼻血を撒まき散らしながら吹き飛んだ。

「どうやら無茶やったせいで、イロイロと壊こわれているらしいロボ。でも大だい丈じよう夫ぶ。これから博士をギタンギタンのケチョンケチョンにして精肉場送りにしてやるロボ」

「ま、待つのである！　ここは我わが輩はいに任せておとなしくしてるのである」

　ウェストは鼻血を手で拭ふくと、体をよろめかせながらどうにか立ち上がった。

「意外にしぶといな、あやつ」

「病院なら紹しよう介かいしてやるぞ。むしろ隔かく離りする勢いで」

　九郎とアルは嘲あざけると、そそくさと帰り支じ度たくを始めた。

「ちょ～っと待つのである」

　これ幸いにとばかりに逃にげ出そうとする九郎とアルを、ウェストは呼び止める。彼はなにを思ったのか、バイクに備えつけられているギターケースを抱かかえ上げると、それを肩に担かついだ。

「なんだかいろんなことが走そう馬ま燈とうのように巡めぐってくるのであるが―ともあれ若者よ、これにてさらば。貴様の死を乗り越こえて、我輩はまた少し大人になった！　さらば、少年時代！　一夏だけの淡あわい恋こい心ごころ！　アイム・ロッケンロール！」

　ウェストが叫さけぶと、ギターケースの先せん端たんに丸い穴が空いた。

「レッツ・プレイ！」

　と同時に、その穴から発射されるロケット弾だん。

「お、おい。さすがにアレはやばくないか……」

「なんのっ！　右手に魔力を集中！」

　アルは告げるが、なにをどうしたらいいのか皆かい目もく見当がつかない九郎である。

　だが、右手に力を集めるようなイメージを思い描えがいた途と端たん、そこに魔術文字がビッシリと浮うかび上がった。彼は無意識のまま右手を差し出すと、飛んでくるロケット弾を素す手でつかみ取ってしまう。

「は、はいぃぃぃぃぃぃぃっ!?」

　信じられないとでも言いたげなウェストの顔。だが、それは彼だけではなかった。

「こいつはスゴイな……」

　手の中で暴れまくるロケット弾を見つめながら、九郎は感嘆の声を上げる。

「九郎。それは持ち主に返してやるべきではないか？」

　アルは意地の悪い笑えみを浮かべた。九郎もまたニヤリとする。

　ウェストは九郎とアルの意図を悟さとったのだろう。

「ちょっ！　ちょっと待つのである。それはマズイのであるっ!!」

　ウェストは慌あわててバイクにまたがったが、時すでに遅おそし。

「ほぉら、忘れ物だっ！　受け取れぇぇぇぇ！」

　九郎は手にしたロケット弾をウェストへと向かって投げつけた。

　ロケット弾は飛んできたときの勢いそのままに、ウェストへと向かって飛んでいく。

「ノォォォォォ！　ノオオオォォォォッッ！　やーめーてー！」

　ウェストの嘆なげきをよそに、ロケット弾はバイクに着ちやく弾だん。爆ばく音おんと爆風と爆ばく炎えんを辺りに撒き散らしながらウェストとエルザ、そして構成員は夜空の彼方かなたへと消えていった。

+

　ウェストとエルザがいなくなった途端、辺りは静けさを取り戻もどしていた。

　九郎はその場でへたりこみ、ようやく取り戻した平和に安あん堵どの溜ため息をつく。

「どうにかなるもんだな」

「うむ。初めてにしてはなかなかの手て際ぎわであったぞ」

　アルは「うんうん」としきりにうなずいている。

「どうやら妾わらわと汝は、魔力の相あい性しようが良いらしい」

「相性？」

「妾とて好みがある。波長がピッタリ合う術者に巡り会ったとしても、インスマウス面づらをした人間に行使されるのはご免めん被こうむる。幸い、汝の顔は妾の許容範はん囲い内だ。安心しろ」

「そりゃどうも。でも俺は、ぜんぜん状じよう況きようを把は握あくしてないわけですが？」

「ふむ。あのような状況下では、それも無理からぬこと。互たがいの名を満足に知ることなく実戦となったわけだからな。では、もう一度名乗ることにしよう。妾は魔導書【アル・アジフ】。汝も魔術を囓かじっていたのであれば、名前くらいは聞いたことがあるのではないか？」

「アル・アジフ……」

「死し霊りよう秘法と名乗ったほうが、聞こえがよいか」

「アル・アジフって、ネクロノミコンのオリジナルじゃねーか」

「さよう。やはり知っておったか」

　魔術を学ぶ者の中でネクロノミコンを知らない者はいない。異い形ぎようの神々について記き載さいされている魔導書の中で最も有名な本である。現存しているものは写本を含ふくめて僅わずかしかなく、伝説に近い書物だ。しかもアル・アジフはネクロノミコンのオリジナルである。

　九郎は目の前に浮かぶアルの姿をしげしげと眺ながめた。

「妾の姿が気になるか？　ふふっ。妾をそこらにあるような魔導書と同等にされては困る。妾ほどの魔導書となれば魂たましいを持つのも当然と言えよう」

　アルは誇ほこらしげに胸を張った。

「しかし、縁えんは異なもんだな。まさか魔導書と出で逢あうとは……」

「妾もこのようなところで術者と巡り会うとは思わなんだ。今後ともよろしく頼たのむぞ」

　ぴくりと九郎のこめかみが反応を示す。

「今、なんと？」

「汝、耳が遠いのか？」

「今後ともって言ったのか？　って、どーいう意味だ、おい」

「ん？　そのまんまだと思うが？　妾と契けい約やくしたということは、今後も妾と共に戦うということだ。我ら魔導書は術者なくして存在するのは難しいのでな。別行動というわけにもいくまいて」

「いや、だから勝手に決めんなよっ！　俺は承知したなんて一言も言ってねーだろうが！」

「契約したではないか」

「一方的だっただろ！　同意がない、同意がッ！」

「ならば問う。妾の力もなしに、あの状況を打破できたとでも？」

「うっ」

「銃じゆう弾だんの雨あめ霰あられの中、ミンチにならずにすんだのは誰だれがいたからだ？」

「うっ」

「魔術を囓ったとは言え、汝はただの人間だ。そして妾は力を使い果たしておった。ならば、汝と妾が契約するのが双そう方ほうにとって最良の選せん択たくではないか。うむ。なんの問題もない」

「ひでぇ……」

「運命だ」

「ひ、一言で片づけやがったな？　ちくしょう、俺は認めねーぞ!!」

「往おう生じよう際ぎわの悪い人間だな。まぁよい」

「よくないッ！」

　叫さけんだところで状況が変わるわけでもなかったが、叫ばずにはいられなかった。

「そもそも、なんでブラックロッジなんかに追われてんだよ」

「彼奴きやつらは魔ま術じゆつ結社だからな。最高位の魔導書たる妾を手に入れ、良からぬことでも画策しているのだろう。それに妾も彼奴らと戦う理由がある」

「正義の味方だから、なんて言い出すつもりじゃないだろうな」

「正義を名乗るつもりはないが……。そんなところだ」

「悪わりぃけど、正義感とか使命感に燃えるタイプじゃないんだ。熱血漢を見つけて再契約してくれ」

泣き言を漏もらす九郎をよそに、アルはあらぬ方向を向いていた。

「―なにか聞こえぬか？」

「……いや、なにも」

九郎が答えた矢先だった。彼の耳は遠方から響ひびいてくる地響きをキャッチした。

ズンズンと巨きよ大だいな質量が移動するような音が近づいてくる。それに合わせて地面が激しく揺ゆれ始めた。揺れは激しさを増し、立っているのもままならぬほどになる。九郎は壁かべにもたれかかると、音の方角をにらみつけた。九郎は音に聞き覚えがあった。足音である。それが徐じよ々じよに近づくにつれ、建物が崩くずれる音、マシンガンの咆ほう哮こう、人々の悲鳴―それらが鮮せん明めいに聞こえ始めた。

そして、その狂きよう気きは姿を現した。前方に建つマンションの三階から上が粉こな微み塵じんに吹ふき飛んだかと思うと、そこからそれはひょっこりと顔を覗のぞかせたのだ。姿を見せたのは円柱である。とてつもなく巨大なドラム缶かんのようなモノだった。

「なんだ、あの鬼デウ械ス・神マキナの出で来き損そこないみたいな不細工な物体は」

アルは呑のん気きにも言い放つが、九郎は大おお慌あわてである。

アーカムシティの住人なら一度は目にする忌いむべきモノ。ブラックロッジが誇る破は壊かいロボットである。だが破壊ロボットから聞こえてきた声は、それに輪をかけて忌いまわしい存在だった。

『うわはははは、見つけたぞ☆』

破壊ロボットの拡声器から聞こえてきたのはウェストの声だった。

ずんぐりとした破壊ロボットの体から生えた不格好な四本の腕うでが、半はん壊かいしているマンションを叩たたき潰つぶした。大小様々な瓦が礫れきが九郎を襲おそうが、そのすべては翼つばさに

よって阻はばまれる。

『どうだ、恐おそれ入ったか。この超ちよう絶ぜつスーパー大天才であるドクター・ウェストの最高傑けつ作さく・スーパーウェスト無敵ロボ二十八號ごうスペシャルの雄ゆう姿しをとくと見よッ！』

　いちいち確かく認にんするまでもなく、巨大ロボットは九郎の視野の大半を占せん拠きよしていた。

『最高の魔導書とはいえ、しょせんは紙切れ。宇宙が気まぐれで生み出した大天才・ウェスト様の敵ではなかったのである！』

「過去形かい」

　とは言え、勝てるようには見えなかった。

「ドツキあって勝てる相手か？」

「無理があるな」

「だったら、どーしろと？」

「決まっておる。脇わき目めもふらずに逃にげるべし！」

　アルは一つうなずくと、しごく当然の結論を口にした。

「あぁ……やっぱそうなるのかっ！」

　破壊ロボットの巨大すぎる砲ほう身しんが、九郎へと向けられる。

「くそっ。もうメチャクチャだっ！」

　九郎が走り始めるのと同時に発射される巨大なミサイル。それは先ほど九郎がいた位置に着ちやく弾だんし、大爆ばく発はつを起こした。爆風が崩ほう壊かい寸前の建物にトドメを刺さし、九郎の体は中空へと向かって吹き飛ばされた。その勢いを保ったまま家屋の壁へと激げき突とつしていく。人間であれば即そく死ししているところだが、翼とボディースーツに守られていたおかげで、したたかに打ちつけた程度ですんでいた。

「シャレにならん……」

　苦痛に顔を歪ゆがめながら言葉を吐はき出した九郎は、目の前の光景に啞あ然ぜんとした。

　爆心地には巨大なクレーターができ、それを中心に数十メートルほど焼け野原と化していた。

「あんなのが直ちよく撃げきしたら……」

「汝なれなど、肉片も残らぬだろうな」

『ＨＡＨＡＨＡ！　貴様にデッカイ大砲をブチこんでやるのであーる！』

　大音おん響きようのギターの調べが九郎を奈な落らくの底へと誘いざなう。

「冗じよう談だんじゃねぇ。つきあってられるかっ！」

　九郎は肩かたにアルを乗せたまま、脱だつ兎とのごとく逃げ出した。

『ぬぬっ！　待てえ！　待つのである！　敵前逃とう亡ぼうは士道不ふ覚かく悟ごであぁぁぁぁぁるっっっ！』

　ミサイル、バルカン、熱光線にビーム、ありとあらゆる飛び道具が九郎に向かって発射された。彼はそのすべてを紙かみ一ひと重えでかわしながら、全力で走り続ける。

「チッ。アイオーンさえあれば、あのようなガラクタなど取るに足らんのだが……」

「そのアイオーンとやらはどうした？」

「大破した」

「なにいッ!?　最強の魔導書ってのも、案外、あてにならねーなっ！」

　毒づく九郎の目の前を、熱線が走り抜ぬけた。行く手が炎えん上じようし、彼の行く手を阻む。

　振ふり返ると、そこには破壊ロボットの姿があった。

『ふっふっふ。ふはははははっ！　とうとう捕とらえたのであるっ！』

　破壊ロボットが、その巨大な手を振り上げた。

（あんなもんで叩かれたら、平面になっちまうっ！）

　ここまでかと、半ば諦あきらめの境地に立ったときだ。

　突とつ然ぜん、九郎は強きよう烈れつな横Ｇを全身に感じた。足が地面から遊ゆう離りし、瞬またたく間まに破壊ロボットとの距きよ離りが開いていく。九郎は何者かに抱かかえられたまま宙を飛んでいた。

　その何者かは、破壊ロボットから十分に離はなれたところで九郎を降ろした。

《大だい丈じよう夫ぶか？》

　地面に降り立った九郎は、声のする方向へと目を向ける。

「あんたは……」

　九郎は目を見張った。そこにいたのは白い仮面を被かぶり、白い装そう甲こうを身にまとった白ずくめの戦士である。アーカムシティの住人なら知らぬ者はいない。白き天使・メタトロンだ。

《無事か？》

　メタトロンは板状の翼を広げ、白い長ちよう髪はつをなびかせながら空へと舞まい上がっていく。

《ここは私に任せろ》

　変声機を通しているのか、メタトロンの声はひどく機械的だ。一いつ瞬しゆん、ロボットを連想させるが、抑よく揚ようのある声は人しか持ちえない感情を表現していた。

　メタトロンは数メートルほど上空で制止すると、ウェストが操あやつる破は壊かいロボットを待ち受けた。

「彼奴きやつは何者だ？」

「この街のヒーローさ。あの人がいなかったら、アーカムシティはとっくに廃はい墟きよだ」

　九郎の言葉に嘘うそはない。メタトロンの力は治安警察の力を軽く凌りよう駕がし、破壊ロボットですらねじ伏ふせてしまうほどである。正体は誰だれも知らない。どこからともなく現れ、破壊ロボットを倒たおして去っていく。その姿は、まさにアーカムシティの守護天使である。

「逃げるぞ、九郎。この場は彼奴に任せよう」

　情けない有様だったが、それが最良の選せん択たくであることは考えるまでもなかった。

「悪いな、メタトロン。あとは任せた」

　九郎は空に浮うかぶ守護天使を振り仰あおぐと、全速力で逃げ出した。

+

　圧あつ迫ぱく感かんのある狭せまい操縦室の中は、沸ふつ点てん寸前にまで上じよう昇しようしたウェストの体温と計器類が発する熱で灼しやく熱ねつ地じ獄ごくと化していた。

「うぬぬぬぬっ。また邪じや魔まするであるか、メタトロンッ！」

　バイクの運転席にも似た操縦席にまたがっているウェストは、操そう縦じゆう桿かんを握にぎりしめながら歯ぎしりをする。破壊ロボットで出動すること数十回。それと同じ数だけ彼のロボットは叩たたき潰つぶされていた。

「今度こそ思い知らせてくれる」

　忌いま々いましそうにモニターをにらみつけるウェスト。そこには白き天使が悠ゆう然ぜんと構えていた。

　だが、分ぶが悪いのは事実である。破壊ロボットの中ちゆう枢す

うユニットでもあるエルザは、九郎との戦せん闘とうで異状をきたしていた。彼女を欠いた状じよう況きようで破壊ロボットの能力を出し切るのは難しかったが、大天才であるというプライドがウェストの辞書から「撤てつ退たい」の二文字を消し去っていた。ウェストは操縦桿を巧たくみに操り、破壊ロボットへと命を吹ふきこむ。

　だがメタトロンは迅じん速そくだった。メタトロンの右みぎ腕うでは驚異メタモ的なルフオ変化ーゼを始め、そこから溢あふれ出た光の文字が遺伝子のような螺ら旋せんを描えがきながら容かたちを編み上げていく。それはやがて砲ほう身しんとなって顕あらわれた。

　砲身がキラリと光る。次の瞬しゆん間かん、モニターは白一色へと変化し、操縦室が激しく揺ゆれた。

「うおっ！　やってくれたであるなっ!!」

　ウェストは破壊ロボットの腕を振り回すが、メタトロンはそれを軽々とかわし、お返しとばかりにビーム砲ほうを撃うち放つ。縦じゆう横おう無む尽じんに動き回るメタトロンにウェストは翻ほん弄ろうされ、やる気とは裏腹に敗戦の色が濃こくなっていく。分厚い装甲が幸いして致ち命めい傷しようには至ってないが、時間の問題だった。

「ふぬぅぅぅぅぅ。このままではッ！」

　装甲の一部が剝はがれ落ち、内部にダメージが及およぶ。計器類が悲鳴を上げ、一部は爆はぜた挙げ句に火を噴ふいた。

《―トドメだ》

　モニターがメタトロンの全身像を映し出す。

「マズイ。マズイのであるッ！」

　メタトロンの両腕から二筋の光が伸のびる。

「ス、十字・スラツシユ断罪・クロスッ」

　何体もの破壊ロボットを葬ほうむってきたメタトロンの大おお技わざである。

　メタトロンはビームセイバーを十字に交差させ、破壊ロボットへと向かって突とつ撃げきしてきた。

「ノオオオオオオオッ！　ノオオオオオオオオオオオツツ！」

　ウェストは操縦桿を手放して頭を抱える。

　だが、いつものあの瞬間は訪おとずれなかった。

　おそるおそるモニターへと目を向けると、すべての悪を浄じょう化かする白き二本のビームセイバーは、破壊ロボットの目の前で止まっていた。黒き影かげによって―。

《ずいぶんと手間取っているな》

　黒き影はメタトロンのビームセイバーを素す手でででつかんでいた。

　黒の仮面、黒の装甲、黒の翼つばさ―。その姿はメタトロンと酷こく似じしていた。

《―久しいな。メタトロン》

《おまえは……。チッ！》

　そう言うと、白と黒の天使は弾はじけ飛ぶような勢いで互たがいに距離を取った。

「貴様であるか、サンダルフォン！」

　ウェストは操縦桿を握りしめ、破壊ロボットの体勢を立て直した。

《ウェスト、おまえには少々荷が重い相手だ。ここは己オレに任せるがいい》

「なにを言うか、この小こ僧ぞうっ子がっ！　我わが輩はいの聖戦を邪魔しおってからに！」

《負け戦いくさではないか》

　サンダルフォンはウェストに背を向けたままの姿で嘲あざけった。

「これから反はん撃げきに次ぐ反撃の、怒ど濤とうの逆ぎやく襲しゆうタイムであったのであるッ！」

　ウェストは耳まで真っ赤にして吠ほえ立てるが、サンダルフォンが気にする様子はなかった。

《おまえはアル・アジフを追え。ここは己に任せろ》

　サンダルフォンは身構えると、メタトロンもそれに応じる。

「貴様、勝手に我輩の獲え物ものを……」

《おまえの任務はアル・アジフの回収だ。それとも、大グラ導ンドマ師スターの意志に逆らうつもりか？》

　大導師の名を耳にした途と端たん、カッカしていた顔から一気に血の気が退ひいていく。

　冷や汗あせとも脂あぶら汗あせとも取れる不快な液体が、ウェストの額に浮かび上がった。

　任務に失敗したらどうなるか。それを想像し──いや、想像できぬことが、ウェストを青くする。

　彼は恐きよう怖ふ心しんをごまかすためにギターを掻かき鳴らすと、

「よかろう。ここは貴様に任せたのである。せいぜい生き恥はじを晒さらさぬようにな」

　捨て台詞ぜりふのように吐はき出したウェストは、九郎たちが逃にげた方角へと向かった。

《待て！》

　即そく座ざに反応するメタトロン。だが、その動きをサンダルフォンが封ふうじる。

《──チィッ！》

《おまえの相手は、この己だ。メタトロン》

　白と黒の天使がアーカムシティ上空で火花を散らし、交こう錯さ

くした。

+

『ふはははははっ！　こらぁ、待てぇ。待てったらぁ☆』

　九郎とアルは地べたを這いずり回りながら、破は壊かいロボットに追いかけ回されていた。

　右へ左へとミサイルをかわし、頭をかがめては腕を避さけ、前方へ転がって熱光線から身を守る。一いつ瞬しゆんで判断を下し、行動に移る必要があった。

「おい、メタトロンはどーしたんだよッ！」

　やられたとは考えにくかったが、なにかあったのだと推察できた。

「魔導書ッ！」

「なんだ、我が主あるじよ」

「この背中にしょってる羽みたいなのは飾かざりか？」

「まさか」

「じゃあ、飛べたりすんのか!?」

「無論だ」

　背後から迫せまってくる巨きよ大だいなミサイルが頭上をかすめていく。前方でビルが倒とう壊かいし、そこを中心に半径百メートルほどが焦しよう土どと化した。九郎は爆ばく風ふうで宙へと投げ出されてしまうが、手足と翼でバランスを取り、地面へと着地した──はずだった。

「お？」

　ミサイルの影えい響きようでもろくなっていたのか、地面が崩くずれ、そこにポッカリと穴を空けた。

「穴!?　なんでこんなところにぃぃぃぃぃぃぃぃぃ!!」

　九郎は手足と翼をばたつかせて抵てい抗こうを試みたが、それが徒労であることをすぐに思い知った。

　彼の体は勢いよく穴の奥へと吸いこまれていく。

「死ぬぅぅぅぅ、死ぬぅぅぅぅぅッ！」

　九郎は必死にもがいて抵抗するが、浮うき上がる気配はまるでない。

　そして、いきなり落下は終わりを告げた。九郎の全身を激しい衝しよう撃げきが突つき抜ぬけていく。

「ちくしょー。飛べるって言ったじゃねーかッ！」

「駆かけ出しの身で一朝一いつ夕せきにいくなどとは、ゆめゆめ思わぬことだ」

　アルは「ふん」と鼻を鳴らした。

　九郎は大の字に寝ね転ころがり、天てん井じようをにらみつけた。軽く数百メートルは落ちたらしく、地上は点のようにしか見えなくなっていた。

「魔ま術じゆつで保護したから、たいしたケガでもあるまいて」

　九郎の胸の上に立ち、ふんぞり返っているアルは得意げに言った。

（バカヤロウ。それでも痛いもんは痛い）

　九郎は胸中で毒づくが、倒たおれていたのは数十秒でしかなかった。

　驚きよう異い的な回復力を発揮した彼は自力で立ち上がると、さっそく状じよう況きようの確かく認にんを開始する。九郎は建設途と中ちゆうのトンネルのようなところに落ちていた。地下鉄用のトンネルか、はたまた避ひ難なんシェルター用か……どちらにしても、そのようなものが造られるにしては深すぎる。

「とにかく、移動するか」

　九郎はトンネルを歩き始めた。出口へと向かっているのか、それとも奥へと進んでいるのか、今のところ判断はできない。だが歩き始めてすぐに視界が開けてきた。いや、開けてきたなどというレベルではない。とてつもなく巨大な格納庫だった。

　九郎は気がついていた。いや、気づかずにいるほうが難しいほど、それは存在感に溢あふれていたのだが──いかんせん、巨大すぎたのである。

　九郎は、ゆっくりと顔を持ち上げていく。初めは、それがなにか理解できなかった。だが全容が見えてくると、それが巨きよ人じんだと理解できた。人ひと形がたをした鋼はがねの巨人である。カタパルトに格納されているそれは、神仏にも似た神こう々ごうしい存在感を放ちながらそびえていた。

「ほう。この感じ。鬼デウ械ス・神マキナか」

　アルは九郎の肩かたにちょこんと乗ると、巨人を見上げた。

「機デ械ウ仕ス掛・けマのキ神ナ？」

「魔導書の中には、妾わらわのように鬼械神を召しよう喚かんできるものがある。妾の場合、鬼械神はアイオーンなのだが──とにかくだ。術者は魔導書を通じて鬼械神を自在に操あやつることができる」

「ってことは、魔術師と魔導書さえあれば、こいつも動かせるってわけか？」

「うむ。そのとおりだ」

　──最高位の魔導書の中には《神》を召喚できるヤツがあるのさ。

　ナイアの言葉が脳のう裏りを過よぎる。

「神の模造品ってやつか」

「いかにも。鬼械神とは魔術の力を用いて造られた神々の総そう称しようだ。ただ此こ奴やつは少々強ごう引いんな構造となっているようだ。魔術理論と科学の混血児のような……。鬼械神とは言い難がたいが、この際、かまうまい。ありがたく使わせてもらおう」

「って、勝手に決めんな！」

「なにを言うか。此奴は我らが見つけたのだから、我らのものではないか」

「んなことやってたら、世の中、窃せつ盗とう犯はんだらけだ」

「ふんっ。どちらにせよ、上で暴れておる粗そ大だいゴミを放置しておくわけにもいくまいて。ならば、此奴を使って戦うしかあるまい？」

「戦う？　誰だれが？」

「不安なのは解わかるが安心しろ。妾がついておる。それに魔術師と魔導書、そして鬼械神は三さん位み一体。騎き士しが軍馬を乗りこなせるように、汝なれも鬼械神を操ることができよう。では、参るぞ」

「ちょ、ちょーっと待った！　まさか、こいつで戦えってのか？」

「素す手でで立ち向かうわけにもいくまい？」

「ふざけんなっ！　なんで俺がそんなことをせにゃならんのだ！」

　当然の権利だとばかりに九郎が吠ほえた、そのときだ。

　なんの前まえ触ぶれもなく巨人の内部から駆く動どう音おんが響ひびき始めた。ズンと腹に響くような重低音がドーム内に木こ霊だまし、空気を震ふるわせる。巨人を見上げた九郎は、その眸ひとみに二つの光が宿るのを確かく認にんした。それだけではない。顔や装そう甲こうには幾いく筋すじもの光のラインが走り始め、複雑な紋もん様ようを描えがき始める。それはまるで血液が巡めぐっていくかのような光景だった。装甲の中で大がかりな機関が動き出していた。

「見よ。鬼械神こやつも汝を主あるじと認めているではないか」

　アルの言葉に応じるように、鬼械神は低い駆動音を発生させた。

（迷めい惑わくな話だ）

　だが、不思議と気分は悪くなかった。それどころか体は火ほ照てり、血が沸わいてくる。

「汝も此奴を気に入ったようだな」

「……馬ば鹿か言え」

「ふん。ならば汝の目で確かめるがよかろう。──接続！」

　アルが叫さけぶ。

「識を伝え、式を編む我。

　魔ま物ものの咆ほう吼こうたる我。

　死を超こゆる、あらゆる写本の子原本母たる我、『アル・アジフ』の名に於おいて問う。

　鋼鉄を鎧よろい刃は金がねを纏まとう神。人が造りし神。鬼械の神よ。汝は何者ぞ」

　アルが詠うたい上げると、鬼械神の全身を走る光の紋様が光度を増した。それは加速度的に強さを増し、視界を白の闇やみへと染め上げていく。だが、それだけではなかった。九郎の体は光の粒りゆう子しと化し、崩くずれ始めていたのだ。サラサラと、砂が風にさらわれていくかのように体が形を失っていく。

「お、おい！　消えっ、消えてっ!!」

「よし、内部なかに入るぞ！」

　アルが宣言した途と端たん、九郎の体は霧む散さんする。

　それは鬼械神が発する光と混じり合い、溶とけ合った。九郎の目に光の文字が浮うかび上がる。

　I'm innocent rage.

　I'm innocent hatred.

　I'm innocent sword.

　I'm DEMONBANE.

「ＤＥＭデモＯＮＢＡンベＮＥインだって!?」

　その言葉には聞き覚えがあった。覇道瑠璃が祖父の形見と語っていた、ブラックロッジに対たい抗こうするための切り札の名である。

「汝は、憎ぞう悪おに燃える空より産まれ落ちた涙なみだ。

　汝は、流された血を舐なめる炎ほのおに宿りし、正しき怒いかり。

　汝は、無む垢くなる刃やいば。

　汝は、魔をデモ断つンベ者イン。

　善い名だ！　気に入った！」

　気がつくと、九郎は淡あわく光り輝かがやく球体の中心に立っていた。慌あわてて体を確かく認にんするが異状は見あたらない。それで落ち着きを取り戻もどした九郎は、球体内部を眺ながめ回した。淡く輝く光の正体は魔ま術じゆつの文字の集合体で、九郎は自分が魔ま法ほう陣じんの中心に立っていることを知った。一段下はコックピットらしく用よう途と不明の計器類が設置されており、そこには本来の姿に戻ったアルが腰こし掛かけていた。

「お、おい、魔導書。ここは……デモンベインの中なのか？」

「それ以外、考えられまい？　よし、操作系にアクセスするぞっ！」

「は、はぃ？」

　九郎の不安をよそに、変化は始まった。九郎の背中に生えていた翼つばさが魔導書のページとなって解けていく。それは容かたちを変え、あるページはモニターに、またあるページはコンソールに、またあるページは計器類へと変化し、九郎の周囲に配置されていく。

「よし、いける。デモンベイン、出しゆつ撃げきするっ！」

　アルが高々と宣言すると、計器類が一いつ斉せいに目覚める。三六〇度、すべてをカバーしたモニターが映像を映し出した。九郎の胸の中で心臓が拍はく動どうする。そしてそれに合わせるかのようにデモンベインの駆動音が激しさを増していく。

「まがい物にしては上々だ。これなら跳躍とべる。一気に地上に出られるぞ。覚かく悟ごはいいな？」

「いいわけないだろっ！」

「男なら迷わず『おう』と言え。出撃！」

　その瞬しゆん間かん、九郎は落下するような感覚におちいった。

　落ちていく。どこまでも落ちていく。五感が狂くるい、視界がグニャリと歪ゆがむ。もはや自分がどのような体勢であるのかも定かではない。三半規管が壊こわれているのか平へい衡こう感かん覚かくは麻ま痺ひし、極度の酩めい酊てい状態のようだ。すべてがあやふやで、自分自身が存在しているのかさえ疑問だった。

「なんだ？　なにが起きてんだ!?」

　自分が存在していることを確かめるかのように、九郎は大声を張り上げた。

「狼狽うろたえるでない、見苦しい。ただの空間転移ではないか」

「はい？」

「なんと！　空間転移も知らぬのか？」

「知るかっ！」

「今『居る』我等を『居るかもしれなかった』空間に広ひろげたあと、指定した座標に『居た』ことにする。つまりは、そういうことだ」

「ぜんぜんワケわかんねーよ」

「汝なれの脳のう味噌みそでは考えるだけ無む駄だだ」

「ふざけんな。ちゃんと説明しやがれ」

「む。おしゃべりはここまでだ。実空間に顕けん現げんするぞ」

「だから、ちゃんと説明……うおぉぉぉっ!?」

　突とつ然ぜん、五感が正常化し、歪んだ世界が元に戻り始める。

　デモンベインが顕現したのは、アーカムシティの上空、数百メートルの位置だった。

　眼下に灯ともる街の明かり。繁はん華か街がいから少し離はなれた位置で火柱が上がっている。その中心にはドラム缶かんに手足が生えた不細工な破は壊かいロボットの姿が見えた。しかし、デモンベインが出現した位置はいささか問題だった。ガクンと機体が揺ゆれたかと思うと、デモンベインは急降下──ではなく、落下し始めた。

「おおおおお、落ちるぅぅ！」

「ええぃ、狼狽うろたえるなっ！　このままあのガラクタに飛びかかるぞ。着地の衝しよう撃げきに備えよ」

「もう、勝手にしろっ！」

　九郎が言うまでもなく、デモンベインは破壊ロボットへと向かって急降下した。

　九郎はヤケクソ気味に覚かく悟ごを決めると、破壊ロボット目がけて蹴けりを入れるイメージを浮かべる。

　気持ちだけは前向きに戦っている九郎に応こたえようとしたのか、デモンベインは脚あしを伸のばし、破壊ロボットに渾こん身しんのドロップキックを炸さく裂れつさせた。全長八十メートルほどの巨きよ大だいなドラム缶が軽々と宙へと舞まっていく。やがて落下してきたそれは、周囲のビルを巻きこみながら地面に激げき突とつした。

『ぬおぉぉぉぉぉぉぉっ！　な、なんであるか!?　なにが起きたのである？』

「ケッ。ざまぁみろ！」

　無事、地面へと着地した九郎は、今までの恨うらみをこめて吐はき捨てた。

『その声は大十字九郎。貴様であるか！　我わが輩はいを足あし蹴げにしたことを後こう悔かいさせてやるのであ──あ？　う、動かない？　なぜに？』

　デモンベインの蹴りで故障したらしく、破壊ロボットはひっくり返ったまま動かない。

「見よ、九郎。トドメを刺さすなら今だ」

「おう。じゃあ、やってくれ」

「……ふむ」

「おい、なんか歯切れが悪くないか？」

「ふんっ」

　アルはそっぽを向いた。

「あ、おまえ知らないんだな？」

「うるさい」

「勢いだけで飛び出しやがったな!?」

「黙だまれ」

「なぁにが最強の魔導書だ。こんちくしょう！」

「うるさい、うるさいっ！　今から調べようと思っていたところだ。悪かったな！」

「ああ、悪いさ。悪いとも。この責任、キッチリとつけてもらうからな」

　そのときだ、凶きよう悪あくなギターの調べがコックピット内に響ひびいてきた。九郎とアルが口論している間に破壊ロボットは立ち上がり、よたよたと歩き出していた。

『認めん、認めんのであーる。我輩の破壊ロボこそ史上最強で地上最強！　そんなわけで、粉こな微み塵じんに吹ふき飛ぶのである。喰くらえ、最終兵器！　ジェノサイド・クロスファイア！』

　鼓こ膜まくが破れるほどの激しい不協和音が、九郎とアルを襲おそう。

　そしてそれを合図に、破壊ロボットはより凶悪な姿へと変へん貌

ぼうを遂とげた。破壊ロボットのいたるところから出現する砲ほう身しん、そして重火器類。そして、そのすべてがデモンベインへと向けられていた。

「やべぇ……やばすぎる。魔導書！　なんとかしろっ！」

「言われるまでもなく、やっておるわ。だがしかし……」

「ヤバイ？　ヤバイのか？」

「機体に走る術式が独自すぎるのだ。こんなもの、いちいち解かい析せきしている暇ひまなどあるか！」

『祈いのりはすんだであるか？』

「武士の情けで三十分ほど猶ゆう予よを――」

『却きやつ下か！　では、縁えんがあったらあの空の下で会おう。アーメン』

　破壊ロボの砲ほう門もんが一いつ斉せいに火を噴ふいた。それは確実にデモンベインへとヒットしていく。

「お、おい、古本娘むすめッ！　なんとかしろっ！」

「妾わらわもそうしたいところだが、いかんせん此こ奴やつは特とく殊しゆすぎるのでな」

「なに悠ゆう長ちように構えてやがるッ！　このままじゃ……」

「やられる、とでも言いたいのか？　だとしたら、すでにやられておるわ」

「……確かに」

　爆ばく音おんと閃せん光こう、振しん動どうが踊おどり狂くるう中にあって、デモンベインは一向に揺らがない。

「まがい物とはいえ鬼械神だ。あのようなガラクタの攻こう撃げきではびくともせん。――とは言え、このままにしておくわけにもいくまい」

　場に似合わぬ冷めた口調でアルは告げると、猛もう烈れつな勢い

でコンソールを操作し始める。

　その途と端たん、聞き覚えのある声が響き渡わたった。

《貴女あなた！　デモンベインを勝手に動かすとは、どういうつもりです？》

　悲鳴にも似た女性の声は、覇道瑠璃のものだ。

《その機体は覇道財ざい閥ばつの所有物なのですよッ！》

「うむ。そうであろうな。だからこそ、こうして質問にきたのだ」

　アルは気にする様子もなく、さらに続ける。

「まがい物だけあって操作系統の索さく引いんがまるでなっておらん。特に兵装項こう目もくが未分化でな。妾が解読して編へん纂さんしても良いのだが――」

《貴女、人の話はちゃんと聞きなさい！》

「大声など出さずとも聞こえておるわ」

《でしたら、速すみやかにデモンベインから……》

「小こ娘むすめ。なんでもよい。適当な攻こう撃げき呪じゆ法ほうを一つ選んで呼こ称しようを教えろ。あとはこちらでやる」

《～～～～～ッッ！》

　瑠璃の荒あらい鼻息が聞こえてくる。不ふ遜そんな態度を取り続けるアルに対し怒いかり心頭であると想像できたが、そうこうしている間にも破は壊かいロボットの攻撃は続いていた。

『ＨＡＨＡＨＡ！　やはり大天才であるドクター・ウェスト様の敵ではなかったのであーる！』

　勝利を確信したのか、心なしかギターの音色は軽かろやかだ。

《どなたかは存じませんが、それであの破壊ロボを倒たおすことが可能なのですね？》

　瑠璃の声ではない。これはウィンフィールドの声である。

《司令。火急の事態です。この場は、この少女に託たくしてみましょう》

《許しません！　デモンベインはお爺じい様がすべてを賭として造られたロボットなのですよ！》

《だからこそです。デモンベインが、あのような鉄くずごときに敗れる道理はございません》

「口論するのは勝手だが、今もデモンベインは攻撃を受け続けておるのだぞ？」

《くっ……》

　瑠璃は言葉を詰つまらせる。

《やむを得ません。見知らぬ人、貴女にデモンベインを託します》

「ふん。初めから任せればよいものを──。九郎、と言うわけだ」

「い、いきなり話を振ふるなっ！」

それがどのような事態を招くか、知らぬ九郎ではない。

《その声は大十字さん？》

「いや、その……。イロイロとこちらにも事情というものがありまして」

「汝なれら、知り合いだったのか？」

「いや、知り合いというかなんというか」

《どういうことですか？　事と次し第だいによっては―》

「ちょっと待った！　今はその前に、目の前のコイツをなんとかしようぜ」

《……ッ！》

　瑠璃は押し黙だまった。

《該がい当とうする攻撃呪法のデータ、見つかりました。第一近接昇しよう華か呪法レムリア・インパクト》

　オペレーターとおぼしき女性の声が聞こえてくる

「キツネレムザルールのぅ。いまいち頼たよりない名前だが、そいつでいいのか？」

《司令。よろしいですね？》

《状じよう況きようが状況です……やむを得ません。では見知らぬ人、あとは任せます！》

「よし。九郎、やるぞっ！」

　全員が一気にヒートアップしていく中、九郎は一人、慌あわてていた。

「不安に思う必要などあるまいて。我らは三さん位み一体。汝が未熟な分は妾が引き受けよう」

　アルの言葉に迷いはない。そしてデモンベインもまた、唸うなり声を上げて応こたえる。

　やがて破壊ロボットからの攻撃が止やんだ。

『やはり最強なのは、このスーパーウェスト無敵ロボ二十八號ごうスペシャルなのであーる！』

　勝利を確信したウェストの声。そして勝利の雄お叫たけびにも似

たギター音が響ひびき渡わたる。

　爆ばく煙えんが風に流されていく。九郎は見た。何千発もの砲ほう撃げきを受けたにもかかわらず傷一つ負わず、雄おゝおしくそびえ立つデモンベインの姿を。それは神こうゞごうしく、機デ械ウ仕ス掛・けマのキ神ナの名に相応ふさわしい雄ゆう姿しである。

『なななななななななっ、なにぃ!?』

「すげえ……無傷かよ」

「ますます気に入ったぞ、デモンベイン！　さあ、今度はこちらの番だ！」

「おう！　で、次は!?」

「なんでもよいから言こと霊だまを吐はくのだ。あとは妾わらわが意訳する」

「言霊なんか吐いたことないぞ」

「彼奴きやつに言ってやりたいことがあるだろう。それをぶつけてやればよい」

「なるほど。それならできそうだ」

　九郎はうなずいた。

「デモンベイン。奴をぶちのめして、奥歯ガタガタ言わせてやれぇ！」

　九郎が叫さけんだ、次の瞬しゆん間かんだった。

「ぐおぉぉぉぉぉっ！」

　超高密度に圧縮された情報が、九郎の脳内を駆かけめぐる。その膨ぼう大だいな情報は、彼の意志とは関係なく脳へと刻みこまれていく。圧縮された情報が脳内で展開され、一つの情報が十、百、千の情報へと膨ぼう張ちようしていく。脳のう細さい胞ぼうに激しいパルスが走り、焼き切れるような激しい衝しよう撃げきに九郎の顔が苦痛に歪ゆがむ。

「こいつはいったい……」

「汝の頭の中を駆けめぐっているのは、レムリア・インパクトの術式だ」

「術式？　プログラムみたいなもんか？」

　右手でこめかみの辺りを押さえつけながら九郎が問うと、アルは「そのようなものだ」と答えた。

　九郎とアルの体内を駆けめぐっていた術式が、デモンベインの魔ま術じゆつ回路を疾しつ走そうしていく。

　術者と魔導書、鬼械神を駆けめぐっていた術式が三者をつないだ。その瞬間、九郎の脳で暴れまくっていた情報の洪こう水ずいがピタリと止んだ。

　視界が、世界が拡大していく。広大に、無限に、世界の果てまでも見通すような研ぎ澄すまされた超感覚が九郎を包みこむ。

　肉体から意識が遊ゆう離りし、個であったものが世界へと浸しん透とうし始める。意識が熱を帯びていた。

　熱した鉄のように熱い。そのくせ中心はひどく冷めており、冷静だった。

　九郎は人差し指と中指で剣けん指しを作り、印を結んだ。習ったわけではない。体が自然に反応していく。それと同時に、デモンベインの光り輝かがやく指先が夜よ闇やみを切り裂さき、中空に光の軌き跡せきを刻みこんでいく。それは複雑な紋もん様ようを形成し、それに応じて内部の各種機関が活性化する。動力部が無限とも思えるエネルギーを汲くみ上げ始めた。

「うぉぉぉぉぉぉぉっ！」

　九郎が吠ほえ、デモンベインは凶きよう暴ぼうな咆ほう吼こうを上げた。

　重ね合わせた両りよう腕うでを天に掲かかげると、拳こぶしから光がほとばしる。それを左右に広げながら振ふり下ろし、両脚を大地に食いこませながら踏ふん張る。九郎の体が、そしてデモンベインが光に包まれていく。その背には、後光のごとく光り輝く五ご芒

ぼう星せいの印が浮うかび上がっていた。旧エルきダー・印サイン。邪じや悪あくを祓はらう結印である。

『ぬおぉぉぉぉ！　それは、なんであるかっ!?』

　コックピット内をオーバーロードした魔ま力りよくがほとばしり、暴れ狂くるう。だが九郎とアルは集中力を途と切ぎれさせることなく、冷静にそれをさばいていく。九郎は右みぎ腕うでを天高く掲げた。

「光射さす世界に、汝ら闇あん黒こく、棲すまう場所なし！」

　デモンベインの右の掌てのひらに組みこまれた機関に、高密度の術式が駆け抜ぬけていく。必ひつ滅めつの威い力りよくを封ふうじこめた機関が覚かく醒せいした。

「渇かわかず、飢かつえず、無に還かえれ！」

　デモンベインが地を蹴けり、アーカムシティを疾しつ駆くする。掌から溢あふれ出す閃せん光こうがデモンベインを、破は壊かいロボットを、そして街を白い闇の中へと包みこんでいく。

『ぬおあああああああああああああああ――――っっっっ！』

　デモンベインは一いつ瞬しゆんにして破壊ロボットとの距きよ離りを詰つめると、右手を振りかぶった。掌が獣けものの如ごとき咆吼を上げる。それを心ここ地ちよく感じながら、九郎が叫ぶ。

「レムリア・インパクトォォォォォ――――ッ」

　掌が爆ばく発はつ的な光に包まれ、導かれるかのように破壊ロボットへと吸いこまれていく。同時に、必滅の術式がその内部へと浸透していく。

『ノォォォォォォォォォォォォォォ！』

　ウェストが断だん末まつ魔まの叫びを上げる。

「昇しよう華か！」

　アルの声が世界に響き渡る。

デモンベインの掌から発せられた光が、世界を白い闇の中に閉とざした。

+

少年は街を見下ろしていた。

地表から遠く離はなれたアーカムシティの上空―街を一望できるほどの位置で、彼は物もの憂うげな表情でたたずんでいる。彼の名はマスターテリオン。ブラックロッジを束ねる大グラ導ンドマ師スターである。

マスターテリオンは華きや奢しやな体を呪じゆ術じゆつ的な礼服で包みこみ、闇より暗い金色の瞳ひとみをアーカムシティへと向けている。輝かがやきを忘れた金色の瞳ひとみが映し出しているのは、白と黒の天使たち、そして神を模した鋼はがねの巨きよ人じんの姿である。

マスターテリオンは静かに見つめ続ける。

傲ごう慢まんな優やさしさを持つ、絶対者の瞳で。

愛いとおしむように。

憐あわれむように。

嘲あざけるように。

交こう錯さくし、火花を散らす天使たち。白と黒の天使が描えがく光の軌跡が、アーカムシティの夜空をネオンのごとく彩いろどっている。人造の天使たちは引かれ合い、惹ひかれ合い、だが重なり合うことはない。ただひたすら出会いと別れを繰くり返している。

地表では、鋼の巨人が罪人に対して神しん罰ばつを下していた。巨人の掌から発せられた聖なる業ごう火かは世界を白く染め上げ、断罪された罪人は塵ちりへと変わっていく。その力は神罰と呼ぶに相応ふさわしい圧あつ倒とう的な破壊力であり、ひれ伏ふさずにはいられないほどの存在感を誇こ示じしていた。

　マスターテリオンは靡なびく金色の髪かみを手て櫛ぐしでかき上げると、凄せい絶ぜつな笑えみを浮かべた。

「やはり、今回もこうなったか──」

　男とも女とも取れる中性的な声が、呪じゆ詛そのように紡つむぎ出される。

　不意に突とつ風ぷうが吹ふき抜け、金色の髪と呪術的な礼服が強風ではためく。だがマスターテリオンの体は揺ゆらぎもしない。

　その目は、ただひたすら巨人のみを見続けていた。

　それは希望であり、絶望でもあり──。

　彼は疲つかれていた。

　喩たとえようもないほどくたびれていた。

　心は憔しよう悴すいしており、魂たましいは永遠の安らぎを求めている。

「すべては運命のままに」

　彼は微び笑しようすると、アーカムシティを浮かび上がらせる無数の光へと目を向けた。

　それは街の灯ともし火び。

　人々が息づく証あかしである。

「さあ、踊おどろうではないか。あの忌いまわしきフルートが奏かなでる狂った輪舞曲の調べに乗って」

　マスターテリオンは囁ささやくと、街に背を向け姿を消した。

「ヒロインは貴公だ──アル・アジフ」

ベルゼビュート

第二章 超人舞闘——激突する法則と法則

ティベリウス

夢む幻げん心母はマスターテリオンが提唱する壮そう大だいな計画を実現させるために造られた巨きよ大だいな建築物であり、ブラックロッジの本ほん拠きよ地ちである。それはアーカムシティの中にありながら、マスターテリオンと彼の配下である魔ま術じゆつ師したちの力によって巧こう妙みように隠かくされ、発見されることもなく存在していた。突とつ然ぜん、降ってわいたように破は壊かいロボットが街の中に現れることができるのも、本拠地がアーカムシティにあるからなのである。

そんな夢幻心母の中心部にある玉座で、ドクター・ウェストは冷や汗あせをかいていた。滝たきのように流れる汗は、白衣にまで染しみこむほどだ。

不ふ遜そんで傲ごう慢まんで恐おそれるものなどなにもない彼だが、目の前にいる少年は別である。玉座に背を預け、気だるそうに前まえ髪がみをもてあそんでいるのは、ブラックロッジの大グラ導ンドマ師スター・マスターテリオン。彼は床ゆかにひざまずくウェストの姿が目に入らないのか、憂うれいを帯びた目でどこかを見つめていた。それは現世ではなく、どこか別の次元を見つめているかのようだ。

ウェストの額から一筋の汗が流れる。それは頬ほおを伝い、雫しずくとなって大理石の床へと落ちていく。

九郎に―デモンベインに破れたウェストは、すみやかに夢幻心母へと帰き還かんし、マスターテリオンの下もとへと足を運んでいた。任務の失敗を報告するためだ。

ウェストは事の顛てん末まつを簡潔に伝えた。声は震ふるえ、極度の緊きん張ちようからか呂ろ律れつが回らなかったが、包つつみ隠さず報告する。マスターテリオン相手に虚きよ偽ぎの申告は意味をなさない。ただ彼はウェストの話に耳をかたむけている様子はなく、ただ退たい屈くつそうに枝毛をちぎっている。

だが、ウェストの報告に不満感をあらわにする者がいた。

「つまりアル・アジフの回収に失敗した挙げ句、逃にげ帰ってきたわけですな？」

　玉座の横に立つ長身の男性・アウグストゥスは、目鼻立ちのハッキリとした精せい悍かんな顔にあからさまな冷れい笑しようを貼はりつけ、ウェストを見下ろしている。酷ひどく冷たい切れ長の目は侮ぶ蔑べつの色に染まっており、気品すら与あたえてくれる仕立ての良い黒のスーツも、その前では色あせて見えた。だがアウグストゥスの姿を印象づけているのは、浅黒い褐かつ色しよくの肌はだである。

「まったくもって情けない有様ですな。大天才の名が聞いて呆あきれますぞ」

　アウグストゥスの鋭するどく冷ややかな視線を受け、ウェストの顔は苦痛に歪ゆがむ。

「それは不意を突つかれたからであって、我わが輩はいは負けたなどとは思っていないのである」

　不意打ちを食くらったのは事実であり、万ばん全ぜんの状態であれば負けるわけがない。少なくともウェストはそう考えていたし、負けを認めるなど彼のプライドが許さなかった。だが、そんな彼の自尊心を踏ふみにじろうとでもいうのか、アウグストゥスは容よう赦しやのない嫌いや味みを浴びせかけた。

「ほう。ご自じ慢まんの破壊ロボは素す性じようも知れないロボットに歯が立たなかったと？」

　アウグストゥスはスーツを正すと、口元に皮肉な笑えみを浮うかべる。

「ドクター。あなたは人形相手に遊んでいるべきだ。それとも、学生のころに戻もどって墓でも暴あばきますかな？　もっとも、それで彼女が蘇よみがえるとも思えませんがね」

　ブチッと、ウェストの中でなにかが切れる音がした。

「貴様ァ、言わせておけば、ぬけぬけとっ！」

「事実を申し上げたまでのこと」

　不意にアウグストゥスは得心したようにポンと手を叩たたくと、

「失敬。彼女は蘇っておりましたな」

　くっくと喉のどを鳴らしながら笑った。

（おのれ……）

　ウェストの顔は、みるみる赤く染まっていく。

　ウェストは心の中でアウグストゥスの胸むなぐらをつかみ、顔面を殴なぐり飛ばしていた。行動に移らなかったのは勝てる見込みがなかったからで、冷静さを欠いた今のウェストでも、その程度の計算はできた。

「―やめろ、二人とも。気が滅め入いる」

　それまで黙もくしていたマスターテリオンが静かに告げた。

　たったそれだけのことでウェストの気勢は削そがれ、熱した体は一気に冷えてしまう。

「余は貴公を咎とがめるつもりはない。あのロボットがどのような理論で造られているのかは知らぬが、破壊ロボットとは違ちがう理論に基づいているのであろう。遅おくれをとるのも無理からぬこと」

「お言葉ではありますが……。我輩の破壊ロボットが遅れをとるなどとは……」

　おずおずと進言するが、すぐに口をつぐんだ。マスターテリオンが見み据すえていたからだ。

「大導師。あのロボット、おそらくは覇道財ざい閥ばつが極ごく秘ひ裏りに開発を進めていたロボットではないかと」

　アウグストゥスは腰こしを屈かがめ、マスターテリオンへと耳打ちする。

（あやつめ、あれが覇道のロボットだと知っていたのであるな！）

　ウェストが食ってかかろうとしたときだ。

「そのとおり。あれは覇道が造りし鬼械神・デモンベインさ」

　ウェストは目を疑った。どこから現れたのか、長身の女性が玉座の脇わきに立っていたからだ。

　胸元が開いたスーツを身にまとった彼女は、妖よう艶えんな笑えみをマスターテリオンへと投げかけている。

　驚おどろいていたのはウェストだけではない。アウグストゥスは表情を凍こおらせ、体をわななかせていた。

「き、貴様ッ！」

　アウグストゥスは声を裏返すと、戸と惑まどう表情を見せながらも素す早ばやく身構えた。次の瞬しゅん間かん、彼の指先から輝かがやく光の糸のようなものが現れる。アウグストゥスは巧たくみな指さばきでそれを編み上げていく。それはやがて金色の書物と化した。魔導書【金きん枝し篇へん】である。

「よい、アウグストゥス。古い友人だ」

　マスターテリオンは手でアウグストゥスを制し、謎なぞの女性へと目を向けた。

「久しいな。今回は、なんと名乗っている？」

　彼は指先で前髪をいじりながら女性に問うた。

「ナイアでいいよ。今回は、そう名乗ってる」

「ナイアとは、なんとも捻ひねりのない名前ではないか」

「どうもセンスがなくってね。次回があれば、君がつけてくれてもいいんだよ？」

「次回とは。心にもないことを」

　マスターテリオンは、つまらなさそうにつぶやく。

（あの女、何者であるか？　それに今回とは？）

　断片的に語られる奇き妙みような言葉に、ウェストは不安感を覚えた。

「して、何用か？」

「おっとっと。僕としたことが、肝かん心じんなことを忘れてしまうところだったよ」

　ナイアは頭をコツンと叩いて舌を出すと、マスターテリオンへと向き直った。

「アル・アジフと、デモンベインの搭とう乗じよう者しやについて、知りたくはないかい？」

「──ッ！」

　ナイアの話に反応したのはマスターテリオンではなく、ウェストとアウグストゥスである。

（訊ききたい、訊きたいのであるっ！）

　名めい誉よ挽ばん回かいのために、そしてボロ雑ぞう巾きんのようになってしまったプライドを修復するためにも、大十字九郎にリベンジする必要があった。

「大十字九郎。うだつの上がらない、三流の探たん偵ていさ」

「探偵？　ミスカトニックの魔ま術じゆつ師しではないのか？」

　マスターテリオンは、ほんの少しだけ意外そうな顔をした。

「あのアル・アジフが選んだのだから、間ま違ちがいないと思うけどね」

「ふむ」

「どうだい？　面おも白しろそうだろう？」

「……今回は、ずいぶん向こうに肩かた入いれしているではないか。──で、実際のところ、どうなのだ？」

「今までと比べたら力は劣おとるやね。だけど大導師殿どの？　そんなものは関係ないだろう？」

「ふむ」

　しばし熟考していたマスターテリオンは、玉座から緩かん慢まんな仕草で立ち上がった。

「アウグストゥス、留る守すを頼たのむ」

　突とつ然ぜんのことに、アウグストゥスは惚ほうけた表情をする。

「おやおや。大導師殿、自らご出しゆつ陣じんで？」

　とぼけたような口調のナイアに対し、マスターテリオンは薄うすく笑って応こたえる。

「挨あい拶さつせねばなるまい？　それに、余とて遊びに興じたくなる時もある」

　マスターテリオンは言い終わると同時に、その姿をかき消した。

+

　ドクター・ウェストの研究室は、大がかりな実験道具で溢あふれていた。足の踏ふみ場もないとはこのことで、実験用の機械と用よう途と不明のガラクタで部屋は埋うめつくされ、そこを大いに圧あつ迫ぱくしている。

　心身ともに疲ひ弊へいしきった状態で戻もどってきたウェストは、手術台で横になっているエルザへと目を向けた。

「博士、おかえりロボ」

「調子はどうであるか？」

「完かん璧ぺきロボ。その証しよう拠こに、今から博士をぶん殴なぐって一発で昇しよう天てんさせてみせるロボ」

「や、やめるのである」

　ウェストは溜ため息をつくと、手近なところにある椅い子すに腰をおろした。

　人造人間として高い性能を誇ほこるエルザだったが、まだまだ完璧にはほど遠い。

「博士、元気ないロボ」

「うむ、エルザよ、慰なぐさめてくれるであるか？」

「大十字九郎にケチョンケチョンにやられたせいか自分の才能に疑念を抱いだき、今までやってきたことはなんだったのかと思いながら首をつりたい気分でいっぱいロボ？」

「……黙だまるのである」

「ロボ～」

　不満そうなエルザを気にもとめず、ウェストは別のことを考えていた。

（大導師が笑ったのである）

　その姿を見たとき、ウェストは戦せん慄りつした。元々、人間離ばなれした感のあるマスターテリオンだが、あの瞬しゆん間かん、彼が発していたのは純然たる狂きよう気きである。ウェストなど遠く及およばない超ちよう狂気。

　あの姿を想像しただけで、気が触ふれてしまいそうになる。ウェストは頭かぶりを振ふると、九郎、そしてデモンベインへと意識を向けた。二度と戻れなくなりそうだったからである。

（大十字九郎。我わが輩はいが受けた恥ち辱じよくの数々、百万倍にして返してやるのである！）

　ウェストは静かなる闘とう志しを燃やすと、パソコンへと向かう。

　彼はネットワークに接続を開始すると、覇道財ざい閥ばつへのアタックを開始した。

「デモンベインの情報、いただくのである」

+

　九郎は窮きゆう地ちに立たされていた。破は壊かいロボットを倒たおし、格納庫へと戻ってきた九郎を待っていたのは、腰こしに手を添そえて仁に王おう立だちする瑠璃と、その斜ななめ後ろで静かに控ひかえるウィンフィールドである。彼女は平静を装よそおっていたが、怒いかり狂くるっているのは目の奥に潜ひそませた業ごう火かで解わかる。

（やべえ、カンカンだよ……）

　さっそく九郎は肝きもを冷やした。

「さて、大十字さん、説明していただきましょうか？」

「も、もちろん」

「納なつ得とくのいく説明がなかった場合は、解わかってますわね？」

　瑠璃は口にこそしなかったが、「社会的に抹まつ殺さつしてやる」と言ってはばからないような雰ふん囲い気きを発していた。それだけで九郎は失神寸前である。

「何から説明したらいいのやら」

　実際、いろいろなことが起こりすぎたせいか、どれから話したらいいのか九郎は迷った。

（でも、とりあえず……）

　九郎は隣となりに立つアルへと目を向けた。

「あのような小こ娘むすめにヘコヘコしおって。男ならばビシッとせんか」

　アルは瑠璃をにらみつけると、ふんと鼻を鳴らした。

　すると呼応するかのように瑠璃のこめかみに青筋が浮うかび上がる。

　九郎は尻尾しつぽを巻いて逃にげ出したい気持ちに駆かられながらも、必死でその場に踏みとどまった。

「す、すんません。上下関係をまるで把は握あくしてないガキの戯ざれ言ごとなんで、勘かん弁べんしてやってください」

　九郎はヘラヘラと軽けい薄はくそうに笑いながらヘコヘコと腰を折った。

「と言うわけで、ご依い頼らいの品です」

　彼はアルの首根っこを摑つかまえると、それを瑠璃の前へと差し出した。

「にゃ？」

　アルは奇き妙みような鳴き声を発すると、九郎と瑠璃の顔を交こう互ごに眺ながめた。

「ちょっと生意気なところはありますが、意外に使える凄すごいヤツです」

　九郎は一歩、前に進み出ると、瑠璃の目の前へとアルを突つき出した。

「にゃ、にゃにをする。妾わらわは猫ではないぞ」

　アルの苦情には耳も貸さず、九郎はジタバタしている彼女を「どうぞ」と言って差し出した。

「……困ったわ。わたくし、馬ば鹿かにされているのかしら？」

　瑠璃は目の前でジタバタしているアルを眺めながら、にこやかな笑えみを九郎へと向けた。もちろん、その笑みの裏には般はん若にやの面が隠かくされている。

「いや、あの……。実はこれ、こう見えても魔ま導どう書しよだったりするんですけど……信じます？」

　だが、そのようなことは訊たずねるまでもない。瑠璃の引きつった顔が、その答えである。

「まあ、大変。大十字さんは先の戦いで頭を打たれたみたい。ウィンフィールド、救護班を」

「いや、だからですね、これは魔導書で……」

「ウィンフィールド、救護班はまだかしら？」

「ええい、小娘、いいかげんにせんか！」

　とうとう堪かん忍にん袋ぶくろの緒おが切れたのか、アルが大爆ばく発はつを起こした。

「こちらが下手に出ておれば生意気な。人間の小娘よ、とくと見よっ！」

　アルの半身が魔導書のページとなって捲まくれていく。それは突とつ風ぷうに乗って上空へと舞まい上がった。

「妾はアル・アジフ。アブドゥル・アルハザードにより記された世界最強の魔導書なり！」

　アルは半分だけの顔で誇ほこらしく宣言した。

「汝なれのような貧ひん弱じやくな想像力しか持たぬ小娘には理解できぬだろうが、妾ほどの魔導書となれば魂たましいを持つものなのだ。汝の狭せまい常識に妾を当てはめられては不ふ愉ゆ快かいだ」

　ばらけた魔導書のページがアルの体へと戻もどっていく。

「どうだ小娘、恐おそれ入ったか？　ん？」

　アルがふんぞり返った途と端たん、瑠璃のこめかみがピクリと反応する。

「たかだか十数年しか生きておらぬ小娘に大人気ないとは思うが、やむを得ぬ。だが、これで小娘にも理解できたであろう。妾がいかに偉い大だいであり、汝がいかに矮わい小しような存在であるかを！」

　アルの暴言に、瑠璃のこめかみに青筋が浮かび上がった。

「先ほどから小娘、小娘と……。いったい、どっちが小娘ですか！」

　瑠璃は肩かたを怒らせながらアルへと詰つめ寄った。

「ふんっ。懇こん切せつ丁てい寧ねいに説明してやったにもかかわらず、まだ視覚的な情報でしか妾を見ることができぬとは。しょせん、それが限界というものか……。すまぬ、妾の高望みであったか」

　胸を傲ごう然ぜんと反らし、したり顔をするアルに対し、瑠璃の顔は真っ赤になった。

　そしてとうとう、二人の間に一いつ触しよく即そく発はつの空気が流れ始める。

　もはや誰だれにも止めることができないほどヒートアップしていくアルと瑠璃。そしてその側そばで、ただオロオロとし続ける九郎。そんな中、ウィンフィールドだけが冷静かつ建設的だった。

「デモンベインが起動したという事実は、彼女の話が事実であることを示しています。大十字様、お話をお聞かせ願えますでしょうか？」

　ウィンフィールドの提案に、九郎はうなずいた。

+

「とりあえず、順番に説明させてもらうわ」

　九郎は時間をかけ、それまでの出来事を思い起こしながら一つ一つ丁てい寧ねいに説明していった。

　瑠璃が事務所に訪おとずれたところから始まり、古書店での調査、ウェストとの対決、アルとの出会い、そしてデモンベインの発見についてである。覇道の秘密基地への侵しん入にゆうは不ふ可か抗こう力りよくであり、デモンベインを勝手に乗り回したことについては成り行き上であることを付け加えた。

「なるほど。それでは大十字様が魔導書の所有者というわけですか」

　ウィンフィールドは、ごく自然に事実を受け止めているようだ。

「九郎と妾は相あい性しようがよいようでな。魔術師としてはからっきしだが、妾は此こ奴やつを気に入っておる」

「いっとくが、俺は認めてないからな」

「汝も諦あきらめの悪い男よの」

　アルは「やれやれ」とつぶやきながら、肩をすくめた。

　九郎はムカつきながらも口には出さず、側にたたずむデモンベインを見上げた。破は壊かいロボットの猛もう攻こうを受けたにもかかわらず装そう甲こうには傷一つなく、ワックスで磨みがかれたかのように輝かがやいている。

「これがデモンベインだったんだな」

　九郎は目を細め、デモンベインの雄ゆう姿しを眩まぶしげに見つめた。

「左さ様ようです。これこそ大おお旦だん那な様が開発したブラックロッジに対たい抗こうする手段であり、覇道財ざい閥ばつの英知を結集させた最強のロボットなのです」

「最強、か……」

　まさに最強の名に相応ふさわしいと九郎も思う。だがいかんせん、強力すぎた。デモンベインが放った必ひつ滅めつの一いち撃げき―レムリア・インパクト。その破壊力は筆ひつ舌ぜつにつくしがたく、その破壊力は考えただけでも震ふるえがきてしまうほどである。デモンベインの右手から発生した無限大の熱量は、ウェストが搭とう乗じようした破壊ロボットを跡あと形かたもなく焼きつくしてしまったのである。もっとも消え失うせたのは破壊ロボットだけではない。爆ばく心しん地ちを中心に建物は吹ふき飛び、しかも地面には月面を彷ほう彿ふつとさせる巨きよ大だいなクレーターができあがっていたのである。圧あつ倒とう的な力だった。

（あれはシャレにならん。マジで……）

　瑠璃が激げき怒どしていたのは、デモンベインを無断で持ち出したことだけではない。アーカムシティの一区画を丸ごと吹き飛ばしたことに対する責任の所在である。

　しかしアルは、そのことは気にもとめてないようだった。

「鬼デウ械ス・神マキナと呼ぶには不完全すぎるが、なかなかどうしてたいしたものだ。デモンベインは妾わらわが存分に使ってやるとしよう。光栄に思うがよい」

　アルの言葉に、さっそく瑠璃の頬ほおが引きつった。

「そこの貴女あなたッ！　勝手に決めてもらっては困ります。そもそもデモンベインはお爺じい様の──覇道財閥の所有物。貴女のような魔ま女じよに渡わたしてなるものですかっ！」

　一いつ喝かつするような瑠璃の声が、格納庫内に響ひびき渡る。

　だが臆おくしたのは九郎だけで、アルは平然としていた。

「では小こ娘むすめ、此奴をどうするつもりだ？」

　アルはデモンベインの脚あしに手を添そえながら、瑠璃に問いかけた。

「鬼械神は戦うために生まれし存在。ならばデモンベインも最強の魔導書である妾とともに戦いたいと願うはず。解わかるか？　デモンベインは汝の玩具おもちやではないぞ？」

「あんな乱暴に扱あつかっておいて、よくもまあぬけぬけと。壊こわれてしまっては元も子もありませんわ」

「それは九郎が未熟なだけであって、妾の責任ではない」

　突とつ然ぜん、話を振ふられた九郎は目をむいた。

「ば、バカヤロウ！　そんなところで話を振るやつがあるかっ！」

　そして当然のように瑠璃の目は、彼へと向けられた。

　気のせいか彼女の目は血走っており、あからさまな殺意すら感じられた。

「と、とにかく。こうして無事に魔導書が見つかったわけだし、めでたしめでたしと」

「……認めません」

「は、はい？」

「認めないと言っているのです」

　瑠璃は恫どう喝かつするかのように声を荒あらげると、九郎へと一歩、詰つめ寄った。

「大十字さん！　こんな下品な魔導書ではなく、もっと品の良い魔導書を探してくださいまし」

　瑠璃の言葉に、さっそくアルは目くじらを立てた。

「九郎、小娘の我が儘ままに付き合う必要はない。デモンベインは汝なれと、そして妾のものだ」

「我が儘って、どっちがですか！」

（確かに）

「この際、汝とはきちんと話をつけておいたほうがよさそうだ」

　アルは不敵な笑えみを浮うかべると、指の骨をバキバキと鳴らした。

「のぞむところですわ。どちらが主で、どちらが従か、身に染しみるほど思い知らせてあげましょう」

　瑠璃は瑠璃で臨戦態勢である。そして、アルと瑠璃の低レベルな肉にく弾だん戦せんが開始された。

　九郎は止めようともせず、そっとウィンフィールドの下へと足を運ぶ。

「悪わりぃんだけど、俺、そろっと帰るわ」

「アル様は、よろしいので？」

「ああ、なんか立てこんでるみたいだし」

　互たがいの髪かみの毛を引っぱりながら罵ののしり合っている二人を眺ながめながら、九郎は溜ため息をついた。

「殴なぐり合って理解し合うこともあるだろうし。っていうか疲つかれたから帰って寝ねる。あの古本娘むすめは返品不要ということでよろしく」

+

　ウェストは研究室でギターを演奏しながら高笑いをしていた。

「ＨＡＨＡＨＡ！　さすがは大天才ウェスト様であぁるっ！」

　ウェストは自分の手て際ぎわの良さとギターの音色に酔よいしれていた。

「世紀の大天才であるドクタァァァァァァァ・ウェストにかかれば、覇道のセキュリティ・システムなどないも同然なのである」

　彼が操作していたパソコンのモニターには、覇道財閥の極ごく秘ひ資料の数々が映し出されていた。

「博士、なにやってるロボ？」

　とことこと歩いてきたエルザは、ウェストの横よこっ面つらを殴り飛ばした。

「ぐふぅ……。な、なにをするであるか!?」

　鼻血を散らしながらゴミの山へとつっこんでいったウェストは、さっそくエルザに抗こう議ぎした。

「博士が邪じゃ魔までモニターが見えなかったロボ」

「……」

　ウェストは早急にエルザの改良を決意すると、鼻血を拭ふきながら席に着いた。

「で、これは何ロボ？」

「うむ。デモンベインの秘密である」

　モニターにはデモンベインの機密が表示されている。

「これで破は壊かいロボもデモンベインと同等、いや、それ以上の性能となることが約束されたのである」

　ウェストは高笑いすると、ギターをかき鳴らした。

「さすが博士ロボ。敵の情報をパクった上に、あたかも自分の手て柄がらであるかのようにふるまうつもりロボね？　そしていつしか彼はパクったにもかかわらず自分の発明であると錯さつ覚かくし始め、関係者を皆みな殺ごろしにしていくサイコ野や郎ろうと化していくのであった……ロボ」

「黙だまるのである」

「ロボ～」

　ウェストは端たん末まつを操作し、デモンベインの機密事じ項こうに次のようなデータを忍しのびこませた。

『大十字九郎のばーかばーかばーか』

「博士、思っていた以上に子供ガキロボ」

+

　アーカムシティは平和だった。デモンベインと破壊ロボットの戦せん闘とうによる混乱は特になく、市民はいつもどおりの生活を営んでいる。破壊ロボットによる襲しゆう撃げきには慣れっこになっている市民である。強くなければアーカムシティでは生きていけないことを彼らはよく知っていた。

「平和だ……」

　繁はん華か街がいを練り歩きながら、九郎は幸せをかみしめていた。あれからアルは姿を見せず、瑠璃からの連れん絡らくもない。竜りゆう虎こ相あい搏うつ頂上決戦の結果がどうなったのか、想像するだけでも身み震ぶるいしてしまう九郎である。このまま平和な日々が続くことを心から祈いのらずにはいられなかった。いられなかったのだが──。背後からシャツの袖そでを引かれた九郎は、その場で立ち止まった。背筋に感じる鋭するどい視線、そして悪お寒かん……。振ふり返るには、かなりの勇気と決断力が必要であった。

「汝なれ……わ、妾わらわを置き去りにするとは、どういう了りよう見けんだ？」

　そこには精せい根こんつき果てたとでも言いたそうなアルの姿があった。

　瑠璃と激しくやり合ったらしく銀ぎん髪ぱつはボサボサで、白い肌はだには青あざがいくつかあった。

「汝と妾は一いち蓮れん托たく生しようのはず！　魔導書を置き去りにする術者の話など聞いたこともないわ！」

「残念ながら、ここにいる──っていうか、俺は認めねーって言ってるだろうが」

「だから契けい約やくしたではないかと申しておるっ！」

　九郎とアルはにらみ合う。

（冗じよう談だんじゃねー。これ以上、関かかわってたまるか！）

　心に誓ちかった彼は、アルに背を向けて猛もう然ぜんと駆かけ出した。

「これしきのことで俺が泣き寝ね入いりすると思うなよ！　ちく

しょうっ！　っていうか、俺は逃にげる。そう、自由に向かって！　そして、あの青空の下へ！」

「あっ、こら九郎！」

「俺が何したってんだ。こんちくしょう！」

　九郎は泣きながら走った。走って走って走りまくった。

　背後からアルの怒ど声せいが聞こえてきた。

+

　閑かん静せいな住宅街に、その教会はあった。

　繁華街の外れにひっそりと建っているその建物は、教会と呼ぶにはあまりにも小さく、そして寂さびれていた。神父すら存在せず、日曜の礼拝すら忘れ去られているような場所ではあったが、九郎にとって唯ゆいーいつの避ひ難なん場所であり、生命線でもあった。ここがなければ九郎など、とうの昔に田舎いなかに帰るか餓が死ししていたはずである。

　教会の外観とは異なり、礼拝堂は暖かな空気で満たされていた。数人の子供たちが無む邪じや気きに駆け回っており、それをにこやかな表情で若いシスターが見守っている。

　息を弾はずませながら礼拝堂へと入ってきた九郎は、その場でどっかりと腰こしをおろした。

「あらあら、九郎ちゃん。また、いつものあれですか？」

　昨日の今日ですっかり疲つかれ切っていた九郎に声をかけたのは、この教会を任されているシスター・ライカだった。ブロンドの髪かみと瞳ひとみが印象的な美人である。

（ついでに胸もデカイがな）

　ごく自然にそちらへと目が向いてしまうが、気づかれる前に目線

をライカへと合わせた。彼女のおっとりとした柔にゆう和わな表情は、九郎にとっての癒いやしであり、母親が見せるような慈じ愛あいに満ちている。実際、子供たちはライカの中に理想の母親像を見ているに違ちがいない。

「いつものあれというと？」

「シスター、めしー、でしょ？」

　ライカは九郎の口調を真似まねた。

「俺が毎回メシをたかると思ったら大おお間ま違ちがいだ。つーか、俺ってそんな目で見られてるわけ？」

「九郎ちゃんがここに来る理由なんて、それしか思いつかないし」

　ライカは疑ぎ惑わくの眼まな差ざしを九郎へと向けていた。

（まあ、ライカさんの反応も、しごく当然というか――）

　思い当たる節があまりにも多すぎて、彼女に同情心すら九郎は覚えていた。

「残念ながら、今の俺は昔の俺とは違う」

　白い歯を見せつけるようにして、ニカッと笑いかける九郎。

「ホントかなぁ？」

　ライカは腰に手を添そえ、いぶかしむ。

（信用ないな……）

　自じ業ごう自得だったが、後の祭りである。

「それは置いておくとしてだ。しばらく俺をここに置いてくれ」

「お断りします！」

　ライカはにべもなく言った。

「断ったね？　今、全力で断ったね？　理由を訊きこうともせずに？」

「穀ごく潰つぶしと知ってて受け入れるわけありません！」

　ぴしゃりと言ってのけるライカ。

「い、いや、悪人に追われているのでかくまってほしいだけだが」

「ほう。たとえばそれは、ブラックロッジのような？」

　ピクっと、九郎の耳が反応を示す。振り返ると、そこにそれはいた。翡ひ翠すい色の目を持った彼女は、憤ふん怒ぬの表情を浮うかべながら仁に王おう立だちしている。

「その子、九郎ちゃんの知り合い？　妹さん？」

　状じよう況きようを理解していないライカは、母親が発する包みこむような優やさしい笑え顔がおを振りまいている。

「汝、一度ならず二度までも妾を置き去りに……」

「いや、だから俺は認めないと―」

　だが九郎の主張はアルには届かなかった。

「天てん誅ちゆう！」

　アルの体が淡あわい光に包まれた次の瞬しゆん間かん、九郎は天てん井じようへと向かって吹ふき飛んでいった。

「だぁぁぁぁぁぁぁっ！　この世に神なんかいねぇ！」

　礼拝堂に断だん末まつ魔まの叫さけびが響ひびき渡わたった。

+

「ふぅん。九郎ちゃんも大変だったのねぇ」

　ライカは呑のん気きにも言い放つが、九郎は洒落しやれにならないほど甚じん大だいなダメージを被こうむっていた。軽く数時間は気を失っていたらしく、そのことは礼拝堂に射さしこむ西日で判わ

かる。体を動かすたびに節々が鈍にぶく痛んだ。それでもライカとお茶を飲む程度には回復していた九郎は、子供たちと一いつ緒しよに戯たわむれているアルを眺ながめながら息を吐はき出した。その姿を見ている限り、魔導書だとは誰だれも思わない。

　九郎はライカに、それまでの出来事を語った。デモンベインで破は壊かいロボットとドツキ合いをした挙げ句、街の一部を吹き飛ばしたことは割愛したが、それ以外は包み隠かくさず話していた。

「けど九郎ちゃん。あまり邪じや険けんにするのも可哀かわい想そうだよぉ」

「だから、ライカさん……。俺の話をちゃんと聞いていたのかと。問いたい。問いつめたい……」

「あの年とし頃ごろの女の子って、何かと微び妙みようだから、ちゃんと見ていてあげないと」

「だからあいつは年頃の女の子でもないし、人間でもねぇんだって」

「私もアルちゃんの年の頃ころには、イロイロ複雑な問題を抱かかえてたなぁ」

　ふとライカの表情に憂うれいが帯びる。

「そりゃライカさんにもイロイロあったとは思うけど、あいつは特別だ。あいつは女の子とは言わん。ババアだ、ババア。年ねん齢れいだけなら」

　やれやれとばかりに肩かたをすくめた九郎の顔面に、猛もう烈れつな勢いで光の玉がぶつかってきた。九郎は鼻血を流しながら顔面をのけ反らせた。

「……というわけだ。あいつは外見どおりの小こ娘むすめとはわけが違う」

　だが身を挺ていして訴うつたえた彼の話がライカに届いたかどうかは微妙である。先ほどから彼女は、ぼんやりとした表情でアルと子供たちを見つめていた。それはありふれた日常の光景である。

　アルという異分子はいたが、九郎が愛するいつもどおりの光景

だった。

　──その瞬間までは。

　唐とう突とつに教会の扉とびらが開き、礼拝堂に夕日が射しこんだ。世界のすべてが黄金こがね色に染まり、幻げん想そう的とも思えるほどの色しき彩さいに彩いろどられる。それは目を疑うほどの美しさだった。

　九郎の体に悪お寒かんが走る。まるで冷や水でも浴びせられたかのような寒気が体を駆かけ抜ぬけ、全身の産うぶ毛げが総毛立つ。神経を剔えぐり出して直接冷水に浸ひたされたかのような強きよう烈れつで鮮せん烈れつな感覚。そのまま凍とう死ししても不思議ではないほどの衝しよう撃げきが、九郎の体を冒おかしていく。その絶望的な感覚は致ち命めい傷しように近く、その瞬間、九郎は本当に死んでいたのかもしれない。

　カツンカツンと、やけに甲かん高だかい足音が聞こえてくる。そしてその音は、絶望を伴ともなって姿を現した。

　黄昏たそがれ色をした夕日とともに姿を現したのは、人外じみた美しさを持つ少年である。それは神の寵ちよう愛あいを受け、完かん璧ぺきな黄金比によって造形されたかのような凄せい絶ぜつさだった。彼は金色の髪かみを揺ゆらし、穏おだやかな笑みを浮かべながら、ゆっくりとした足取りで九郎の下へと歩いてくる。

　九郎は体を震ふるわせていた。体を抱だきしめ、震えを強ごう引いんにねじ伏ふせようとしたが無む駄だだった。体の芯しんから溢あふれ出てくるそれは、動物としての本能が発する警けい鐘しようである。意思ではどうにもならない。

　誰も彼もが彼を見つめていた。魅み入いられていたと言っても過言ではない。逸そらせないのである。

（ヤバイ。こいつはヤバすぎる……）

　危険などと言う生半可なものではない。目の前の少年と関かかわるくらいなら、死すら安らぎと感じるに違ちがいない。少年は人の形をした異い形ぎようだった。金の髪、金の瞳ひとみ、目を奪うばわれるほどの美び麗れいな容姿であるにもかかわらず、華はなやかさはない。ただひたすら暗き闇やみが存在するのみである。そう。

彼の瞳は光を宿してはいなかった。ただ金色の闇が──暗黒より深い深しん淵えんが広がっていた。

　逃にげなければと、九郎の本能が警告を発する。だが、体が動かない。動こうともしないのだ。

　しかし、そのような異常な状じよう況きよう下かにあって、ライカは気き丈じようにも少年の前に立ちはだかった。子供たちを守らなければという義務感が、彼女を突つき動かしたのだろう。だが無む謀ぼうでしかなかった。

「ほう。このようなところでムーンチャイルドに出で逢あうとはな」

　少年は少し意外そうな顔をするが、彼の興味は一いつ瞬しゆんで失うせていた。

「邪じや魔まだ」

　少年がつぶやくと同時に、彼の体内から魔ま力りよくがほとばしった。

　それは彼にとっては呼吸をするよりも簡単な魔力でしかなかったが、ライカの目の前で爆はぜたそれは彼女の体を吹き飛ばすだけの威い力りよくはあった。ライカは祭さい壇だんに激げき突とつし、二、三回、床ゆかの上で跳はねて動きを止めた。それっきり、ピクリともしない。すべては一瞬の出来事であり、九郎はただ黙だまって見ているより他ほかなかった。

「ライカ姉ちゃぁぁぁぁぁぁぁんっっっっ！」

　子供たちの悲鳴が礼拝堂に木こ霊だまする。

　それは凍とう結けつした九郎の心と体を瞬しゆん時じに溶とかすだけの威力を持っていた。

　九郎はライカを助けねばと思ったが、後回しにした。目前に迫せまる脅きよう威いを前に、背を向けるなど自殺行こう為いである。なけなしの勇気を振ふり絞しぼり、前へと歩を進める。彼の目は少年の闇色の目を見つめていた。あえてそうしたのだ。彼の注意のすべてを自分へと向けるために。

「九郎、其そ奴やつはまずい！」

　アルの制止の理由は百も承知していたが、今さら退ひくわけにもいかなかった。

「……うぅっ……」

　背後からライカの呻うめき声が聞こえてきた。

（よかった。生きてる。だとしたら──）

　もう、なにも考える必要はなかった。九郎は目の前の少年に全神経を集中させる。

　チリチリと肌はだに焦こげるような痛みを九郎は感じていた。少年が魔力を行使したわけではない。

　その存在自体が発する狂きよう気きに、九郎の肉体が耐たえられないのだ。額に浮うかんだ汗あせが頬ほおを伝い、脚あしが小刻みに震える。喉のどはカラカラに渇かわき、水分が失せたザラつく口内の感かん触しよくが不快だった。

「ははっ！」

　九郎の姿があまりにも滑こつ稽けいだったのか、金きん髪ぱつの少年は乾いた笑い声を発した。

　たったそれだけにもかかわらず、毒気にやられたかのように全身から力が抜け落ちていく。しかし、九郎は倒たおれなかった。胸の奥で燃え上がる業ごう火かが彼を支えていたからだ。

「てめぇ……」

　九郎は歯ぎしりをする。奥歯がミシリと音を立てた。

「九郎ッ！　まずい、まずいのだ！」

　悲鳴にも似たアルの叫さけびが耳の中で反はん響きようする。

（解わかってるさ。だけど──ここは俺がなんとかしないと）

　逃げ出したとしても助かる可能性は皆かい無むに等しい。だとしたら後味の悪い思いをするより、正々堂々と真っ向勝負を挑いどむ

べきだと九郎は考えた。

（俺がこいつをなんとかしないと……。俺しかいないんだ、俺しか）

　ライカと子供たちの命は、九郎に委ゆだねられていた。一歩たりとも退けなかったし、退くつもりもない。そんな悲ひ壮そうなる九郎の決意をよそに、少年は微笑ほほえむような、それでいて嘲あざけるような表情で彼を見み据すえる。

「はじめまして、になるかな？　大十字九郎。もっとも余は貴公のことを、おそらくは貴公以上に知っているが」

　少年とも少女とも取れる中性的な声。

　魂たましいに舌を這はわせられたようなおぞましい感覚が、紫し電でんのごとく九郎の体を通り抜ぬけていく。

「てめぇ、なんで俺の名前を!?」

　敵意むき出しの九郎の問いには応こたえず、少年は彼に手をかざした。

　少年の掌てのひらに凶きよう暴ぼうな光が浮かび上がる。そこにはビッシリと魔ま術じゆつ文字が描えがかれていた。

「ちぃっ！」

　舌打ちしたアルが駆かけ出す。

「不公平なので名乗っておこう。余はマスターテリオン。魔術の心理を求道する者なり」

　少年の掌に浮かび上がった光の球が、九郎へと向かって解き放たれる。

　九郎は顔の前で腕うでを交差させ、来きたるべき衝しよう撃げきに備えた。

　白い光の闇やみが世界を覆おおい始める。衝撃は音もなく訪おとずれた。九郎の体を突き抜ける鈍にぶい衝撃。

　巨きよ大だいな鉄球が体の中を通り抜けていくかのような重い衝撃が、彼の体と内臓を痛めつける。だが、それだけだった。死には至らない。いや、実際には死んでもおかしくはなかったが、九郎の体を包みこんだボディースーツと、黒き翼つばさが緩かん衝しよう材ざいとなって威力を緩かん和わしていたのである。

「間に合ったな」

　肩かたに目を向けると、デフォルメ化したアルが立っていた。

　九郎は改めて少年―マスターテリオンへと向き直る。

「ヤツが、あいつがマスターテリオンなのか？」

「左さ様よう。そして彼奴きやつこそが妾わらわの怨おん敵てきだ！」

　アルが吠ほえた。

「以後、お見知りおきを。マスター・オブ・ネクロノミコン」

　金色の前まえ髪がみをかき上げながら、マスターテリオンは大おお仰ぎような仕草で一礼した。

「てめぇ……。ブラックロッジの大将が俺になんの用だっ！」

「アル・アジフが今回、選んだ新たな術者を見てみたくなってね」

「だったら直接、俺のところに会いに来い。関係ないヤツを巻きこむな！」

「はて、巻きこむとは―」

　そこまで口にしたマスターテリオンは、はたと気づいたらしくうなずいた。

「あれはあの程度で死なぬだろうし、現に生きている。怒おこるほどのことでもあるまい？」

「てめぇ……」

「すまなかった、とでも言えば気がすむとでも？　では訊きこう。貴公は地を這う虫けらに気をつかいながら道を歩くわけか？」

　九郎は体の芯しんが熱くなっていくのを感じた。それは一いつ瞬しゆんにして沸ふつ点てんに達し、体を突つき動かす。

「待て、九郎っ！　其奴は汝なれがどうこうできる相手ではないっ！」

　悲鳴にも似たアルの声を耳にしながらも、九郎の体は止まらない。絶対的な怒いかりの感情に支配されている今の彼に、意思など存在してはいなかった。ただ目の前の男を叩たたきのめすだけである。

　九郎の右手に魔ま力りよくが宿る。それは純じゆん粋すいな怒りの結けつ晶しようだった。右手を振ふりかざし、マスターテリオンの顔面にそれを叩きつける。九郎の拳こぶしは彼の前に出現した障しよう壁へきを砕くだき、その先にある彼の横よこっ面つらを殴おう打だした。マスターテリオンの華きや奢しやな体が後方へと向かって弾はじけ飛び、教会の壁かべに叩きつけられる。壁は勢いを吸収しきれずに崩くずれ、彼は外へと投げ出された。

「汝に、そのような力があるわけ……」

　アルの声には耳も貸さず、九郎はマスターテリオンの後を追いかけた。

　マスターテリオンは沈しずみかけた夕日を背景に、凄せい絶ぜつな笑えみを浮かべている。

「余の防ぼう御ぎよ陣じんを打ち破るとは、なかなかどうして……。なるほど、アル・アジフが主と認めただけのことはある」

　マスターテリオンは口の端はしから伝う鮮せん血けつを手で拭ぬぐい、そしてそれを舌で嘗なめ取った。

　九郎は舌打ちすると、優ゆう雅がに微笑むマスターテリオンに向かって突とつ撃げきしていく。

「九郎っ、熱くなるな！」

　九郎の動きは止まらない。再び右手に魔力を集め、それをマスターテリオンへと向ける。

「だが、闘とう争そう本能をまるで制せい御ぎよできていない」

「その俺にぶん殴なぐられたのは、どこのどいつだ！」

　九郎の拳が再びマスターテリオンの顔面を捕とらえた……はずだった。だが拳はマスターテリオンの体をすり抜け、空を切る。

「魔術とは感情を理性で制御し、たかぶる魂を魔力と融ゆう合ごうさせ、精せい錬れん、精製するものなのだ」

「後ろだッ、九郎ッ！」

　振り向く間すら与あたえられなかった。九郎の全身に、致ち命めい的てきとも言える衝撃が走り抜ける。

「ガハッ！」

　内側から内臓を引っかき回されるようなおぞましい感覚。胃の内容物がせり上がり、血液混じりの吐と瀉しや物ぶつが口から溢あふれ出た。脳のう髄ずいが冒おかされていく。全身から力が抜け、掛かけ金がねの外れたオモチャのように両りょう膝ひざから地面へと崩れ落ちる。九郎は自らの汚お物ぶつの中へと沈んだ。

「九郎ッ！　九郎ッ！　大だい丈じょう夫ぶか!?」

　アルが小さな掌てのひらで九郎の頬ほおを叩く。

（やべえ……意識が飛びそうだ……）

　九郎は意識をつなぎ止めておくのが精せい一いつ杯ぱいだった。

　それでもなお、マスターテリオンの声は鮮せん明めいに届く。

「今の貴公では話にならぬ」

　マスターテリオンは息を吐はき出した。

「よろしい。アル・アジフ、例の新しい鬼デウ械ス・神マキナを喚よびたまえ」

「……なに!?」

「あれならば、少しは勝負にもなろう」

「て、てめぇ、ふざけやがって……」

　九郎は意思の力だけで強ごう引いんに体を引き起こすと、そう毒づいた。

「早くしたまえ。余興が台無しになってしまわぬうちに」

　マスターテリオンの体が、上空へと舞まい上がっていく。

「余は生身で十分だ」

（デモンベイン相手に、素す手でで殴り合うつもりか？）

「九郎。やるぞッ！」

「お、おい。マジかよ!?」

「このままではなぶり殺しにされるだけだ」

「けど、いくらなんでも生身のヤツとやるってのは……」

「今の汝では彼奴きやつには勝てぬ。それほどまでに絶望的な力の差なのだ」

　アルの声音には、焦あせりの色がにじみ出ていた。

「汝が殺やられれば、あの女も死ぬことになるのだぞ」

「!!」

　床ゆかに崩れ落ちるライカと、彼女の側そばで泣き叫さけぶ子供たちの姿が浮うかんでくる。

「話はまとまったかな？」

「ちくしょーッ。やってやらぁぁぁ！」

「いくぞ、九郎ッ！」

　アルの覇は気きに九郎は「おう！」と応じる。

　そして、その聖なる言葉は浮かんできた。

憎ぞう悪おの空より来きたりて

正しき怒りを胸に

我等は魔まを断つ剣けんを執とる

汝、無む垢くなる刃やいば―デモンベイン！

　九郎を中心にして、地表に巨きよ大だいな魔ま法ほう陣じんが現出する。

　空に黒く分厚い雲がたれこめ、雷らい鳴めいが轟とどろいた。空間が爆ばく破はする。

　現れたのは威い風ふう堂々とした鋼はがねの巨きよ人じん。

　機械仕じ掛かけの神。

　魔を断つ剣。デモンベインである。

　九郎の体が光を発し、崩れていく。その光の闇やみが消え去ったとき、彼は再びデモンベインのコックピットの中にいた。

「九郎、言っておくが情けは無用だ」

　前方のシートに腰こし掛かけているアルは、振ふり返りもせずに言った。

　だが肝かん心じんの九郎はデモンベインに搭とう乗じようした途と端たん、迷っていた。デモンベインの圧あつ倒とう的な破は壊かい力りよくを承知している彼である。その力を生身の人間に使うことに、九郎はためらいを感じた。

「これでようやく、愉たのしめそうだ」

　マスターテリオンはデモンベインの真正面に浮かんでいた。その表情は涼すずしげであり、そんな彼の姿に九郎は戸と惑まどっていた。デモンベインの力はマスターテリオンも知っているはずであり、彼の行動は無む謀ぼうでしかなかった。

「なぁ、アル。やっぱデモンベインでどつくってのは……」

「この、うつけ者がっ！　まだ、そのようなことを！」

　アルは激げつ昂こうするが、それでもなお九郎はためらった。

「では、余からまいるぞ」

　言うが早いか、マスターテリオンは空間を蹴けってデモンベインとの距きよ離りを一気に詰つめてくる。そしてデモンベインの顎あごを目がけて下から拳こぶしを振り上げた。アッパーカットである。

「なっ！」

　九郎は目の前で起きた出来事が理解できなかった。

　デモンベインの巨きよ体たいはアーカムシティが一望できる高度まで吹ふき飛ばされていたのである。

「な、なんなんだ、あいつはっ！」

「だから言ったのだ。情けは無用だと！」

　九郎はデモンベインの姿勢を制せい御ぎよする。

　意識を地上へと向けると、光り輝かがやく無数の球体が迫せまっていることが判わかった。それは次々とデモンベインに直ちよく撃げきしていく。コックピット内に走る衝しよう撃げきに、九郎は呻うめき声を上げた。周囲の計器類が次々と火を噴ふき、モニターはエラーで埋うめつくされる。

「魔導書ッ！　なんとかなんねーのかっ！」

　九郎が叫ぶと同時に、デモンベインの巨体が落下を始める。

「探しておるっ！　それより衝撃に備えよ！」

　猛もう烈れつな勢いで地上が迫っていた。

　幸い、教会から少し離はなれた位置に落ちそうだが、それでもかなりの建物が潰つぶれるのは確実である。

（覇道の姫ひめさんに、また大目玉を食くらいそうだ）

だが多くを考える前にデモンベインは地上に着地する。

「魔導書ッ、武器を！」

「すぐに使用可能なのは、これしかない」

アルが検けん索さくして見つけ出したと思われる情報が、九郎の情報と共有される。

さっそく九郎は、デモンベインの頭部に備えられたバルカン砲ほうを掃射する。

「余を相手に玩具おもちやを使うか……」

「うるせー。くたばりやがれっ！」

九郎はありったけの砲ほう弾だんをマスターテリオンへと撃うちこんでいく。何百発もの弾たまが一いつ瞬しゆんにして消費され、爆ばく煙えんで彼の姿がかき消される。あっという間に弾たま切ぎれとなった。しかし風で爆煙が流されていくと、そこには同じ姿勢で浮かぶマスターテリオンの姿があった。

「バケモノか……」

「そのとおり。彼奴は人ではない。人外の獣けものなのだ」

「貴公には期待していたのだが、どうやら見込み違ちがいのようだ……。興きよう醒ざめさせてくれたな」

マスターテリオンは冷ややかな目でデモンベインを見み据すえていた。

彼は手をかざし、そこに強大すぎる魔ま力りよくが集まり始める。

九郎は速すみやかに回かい避ひ行動に移った──はずだった。だが先ほど受けた攻こう撃げきの影えい響きようか、デモンベインの各機関は悲鳴を上げており、意図したように動かない。

「今回は、ここまでか──期待はずれもいいところだ」

面おも白しろくもなさそうに言ったマスターテリオンだが、ふと

得心したような顔をした。

　彼はデモンベインへと向けていた手を、真横へと持っていく。

「彼奴きやつ、いったいなんのつもりだ？」

　九郎は首をかしげつつ、マスターテリオンがかざした腕うでの先にあるものへと目を向けた。

「なっ!!」

　九郎は思わず身を乗り出した。心臓の鼓こ動どうが早はや鐘がねのごとく鳴り響ひびく。あまりの速さに、機能を停止してしまいそうだ。九郎は息苦しさを感じていた。息苦しいのではない。呼吸すら忘れるほどの衝撃が、目の前で起きていた。マスターテリオンがかざした腕の先には、教会があったのである。

「て、てめえっ!!」

「ふふふっ……はははははははははっ、あはははははは
はっっっ！」

　マスターテリオンは笑っていた。

　腹を抱かかえ、くの字に体を曲げながら、よく透る澄すんだ声で笑い続けていた。

「あはっ、あはははははっ！　あはははははははは！」

　彼は狂くるったように笑い続ける。それはいつまでも終わりを告げることはない。

「どうした、大十字九郎？　ははっ、驚おどろいたか？　あははははははは！　さぁ、どうする？　死ぬぞ？　死んでしまうぞ？　貴公が身を挺ていし、守ろうとした虫けらどもが死んでしまうぞ？」

「やめろっ！」

　九郎の心の奥底で、怒いかりの導火線に火がついていた。

「てめぇは……てめぇは、俺がぶっとばすっ！」

　その言葉を発した瞬しゆん間かん、九郎の中でなにかが弾はじけ飛んだ。

　意識が急速に拡大し、それは全方向へ向けて拡散していく。先日、体感した感覚が再び蘇よみがえってくる。言葉にするならば、それは『魔ま術じゆつ師しとしての覚かく醒せい』になるだろうか。体は燃えるほど熱い。だが心の中は澄み渡わたり、冴さえ渡っていた。

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっっっ！」

　九郎は雄お叫たけびを上げると、デモンベインを疾しつ駆くさせる。枷かせを外された獣けもののような勢いで、マスターテリオンへと接近していく。もはや迷いはなかった。

「消えてなくなれ、この外げ道どうがっ！」

　デモンベインの豪ごう腕わんが、マスターテリオンを捕とらえる。

「やったか？」

「いや、まだだ」

　デモンベインの拳は、マスターテリオンの目前で止まっていた。

　いや、受け止められていた。

（腕？）

　なにもない空間から突とつ如じよ、出現したその腕が、デモンベインの拳を受け止めていたのである。それは巨きよ大だいな鋼鉄の腕である。紅あかい装そう甲こうに覆おおわれたそれは、デモンベインと同程度の大きさがあった。

「なんなんだよ、あれは……」

「鬼械神だ。彼奴の鬼械神・リベル・レギス」

「マスターテリオンの鬼械神……!?」

「妾わらわ本来の鬼械神・アイオーンが大破したことは、前に話し

たと思うが……」

「まさか！」

「そのまさかだ。あれがアイオーンを葬ほうむったのだ」

　九郎の体から血の気が引いていく。

「あんなヤツを相手に……」

　彼の言葉は、それ以上、続かなかった。

「貴公を期待はずれと言ったが、訂てい正せいする。よくぞ余に魔導書を使わせた！」

　マスターテリオンは静かに告げる。

「紹しよう介かいしよう。我が魔導書『ナコト写本』だ」

　彼の側そばには、黒く暗い瞳ひとみを持つ一人の少女が従っていた。

　その少女は深い闇やみ色をした豪ごう奢しやなドレスと、墨すみを流したかのような艶つややかな長ちよう髪はつが印象的である。肌はだは透すき通るように白く、しなやかで可か憐れんだ。ただ感情が欠落しているのか顔には表情がなく、まるでよく作られた人形のようにも見える。彼女はデモンベインへと向かって右手を突つき出していたが、肘ひじから先は別の空間にでもあるかのように消え失うせていた。リベル・レギスとリンクしているのだろう。

（あいつ、どっかで見たような……）

　見覚えがあると感じた九郎は、すぐさまその理由に行き着いた。

（アルそっくりだ）

　姉し妹まいではないかと思うほど、アルと黒の少女の姿は酷こく似じしていた。

「ちっ。出てきおったか」

　アルは忌いまいましそうにつぶやいた。

「あいつ、おまえと同じなのか？」

「妾をナコト写本などと一いつ緒しよにするでない！」

「いや、そうじゃなくて……。あいつも意思を持った魔導書なのか？」

　だが、アルの答えを待つまでもなかった。

「エセルドレーダ、返礼してやれ」

「イエス。マイ・マスター。──ＡＢＲアブＡＨＡラハＤＡＢダブＲＡラ」

　エセルドレーダが告げた途と端たん、リベル・レギスの掌てのひらに光が集まってくる。それは収束し、昂たかぶり、やがて自由を求めるかのように解放されていく。

　デモンベインは白い闇の中に閉とざされ──九郎の意識もまた、その中へと沈しずんでいった。

+

　気を失っていたのは一いつ瞬しゆんだった。コックピット内で仰あお向むけに倒たおれていた九郎は、モニターに映し出されたアーカムシティの夜空を呆ぼう然ぜんと見上げていた。夜空が赤黒く燃えている。仰向けに倒れたデモンベインを中心に周囲の建物が炎えん上じようしていた。マスターテリオンの姿は、すでになかった。

　教会こそ無事だったが、どうにもならないくらいの絶望感が、九郎の心と体を支配していた。全身、いたるところが悲鳴を上げているが、そのようなことは些さ細さいな問題としか感じられなくなっている。

　九郎はマスターテリオンに歯が立たなかった。いや、歯が立つとか立たないとか、そのようなレベルの話ではない。同じ土俵にすら立っていなかった。戯たわむれで九郎の前に現れ、圧あつ倒とう的な力の差を見せつけて去っただけである。深い絶望感だけを残し

て……。

「ちくしょう、ちくしょう……」

「これが今の我らの限界なのだ」

　シートから投げ出され、九郎の隣となりでひっくり返っているアルがつぶやく。

　九郎は苦痛に顔を歪ゆがめた。

　最強の魔導書とデモンベイン。それをもってしてもマスターテリオンに一いち撃げきすら加えられず、魔導書を使わせたにとどまったという現実は、九郎を底知れぬ恐きよう怖ふにおとしいれていた。

　マスターテリオンの笑えみが、九郎の目に焼きついて離はなれない。心に罅ひびを入れ、脳のう髄ずいを冒おかしていくような嬌きよう笑しようが耳について離れない。刻印でも押されたかのように、それらは深く刻みこまれていた。

　九郎は震ふるえていた、どうしようもないくらい、震えていた。

　目を閉じることができない。閉じればそこに、マスターテリオンの姿が映し出されるからだ。

「なんで俺なんだよ……。もっと優ゆう秀しゆうなヤツを選べばいいじゃないか……」

「妾と波長が合う人間は、そうはいない。それに、他を探している時間的な余よ裕ゆうもない」

「だからって、こんなザマの俺に何ができるっていうんだ」

「彼奴きやつを野放しにしておけば、今日のようなことがどこかで起こる。いや、今もどこかで泣いている者もおろう」

「……」

「邪じや悪あくを知り、それと戦う力を得、それでも汝なれは見て見ぬふりをするのか？　その瞳を閉とざしたままでいられるのか？」

　アルの言葉が九郎の胸に染しみこんでくる。

（そう。俺は見てしまった）

　あれを目もく撃げきした以上、もはや見て見ぬふりなどできはしなかった。ブラックロッジから──マスターテリオンから目を背そむけ、なおかつ安あん穏のんと生きていくことなど九郎にはできはしない。

　許せなかった。自分のすべてを賭としてマスターテリオンを全否定し、倒さなければならなかった。

　そうしなければならなかったし、そうする必要があった。

　このままでは部屋の隅すみにできた小さな物もの陰かげにまで彼の姿を見つけ、脅おびえることになる。

「……くそっ！　くそくそくそくそくそくそーっ!!」

　九郎は拳こぶしを握にぎりしめると、声の限りに叫さけんでいた。

　そうすることで、なけなしの勇気を振ふり絞しぼることができるような気がしたのだ。

「強くなることだ、大十字九郎」

　九郎が少し落ち着いたのを見計らって、アルが声をかけた。

（そうだ、強くなれ、大十字九郎！　誰だれよりも強く。マスターテリオンより強く!!）

　九郎は覚かく悟ごを決めた。

（許さない、絶対に。あんなのは存在しちゃいけない。マスターテリオン、そしてブラックロッジ……。二度と笑えないようにしてやる！）

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！」

　宣言する代わりに、九郎は吠ほえた。

+

　幸い、ライカは軽い打だ撲ぼくだけですんでいた。どちらかと言えば壊こわれた教会の壁かべのほうが問題だったが、これも幸いなことに致ち命めい的なダメージには至ってない。気になる修しゆう繕ぜん費ひも九郎が先に得ていた依い頼らい料りようを充あてることでなんとかなりそうだった。

「さて、大十字さん。申し開きはありますか？」

　ライカの件を片づけたあとで九郎を待っていたのは瑠璃とウィンフィールドである。

　彼女は言葉こそ丁てい寧ねいだったが、その目は怒いかりのあまりに血走っている。

　九郎は一言、「ない」とだけ答えた。

「デモンベインを勝手に持ち出した上に、街をこのようにしたことを認めるわけですね？」

「ああ」

「九郎。謝ることはない。あれは汝と妾わらわの鬼デウ械ス・神マキナだ」

「貴女あなたに訊きいているのではありません」

　瑠璃はピシャリと言ってのけると、九郎へと目を向ける。

「デモンベインを無断で持ち出した件は不問にするとして、結果がアレでは話になりません」

「ああ、そうだな」

「そうだなって、弁解すらしないのですか？」

「過程がどうであれ、結果はコレだ。デモンベインを使って負けた事実は変わらない」

　覇道財ざい閥ばつの最終兵器。その存在理由を考えれば、瑠璃の

怒りはもっともだった。

　不意に九郎は、頬ほおに裂さけるような鋭するどい痛みを感じた。ひっぱたかれたのだと気づくのに、時間はかからなかった。

「馬ば鹿かな！　我等は当然のことをしたまで。なにゆえ、そのような辱はずかしめを受けねばならぬ」

　アルが吠える。

「―アル、よせっ！」

　九郎は今にも飛びかかろうとしていたアルを腕うでで制した。

「戦う術すべとして鬼械神を喚よんでなにが悪い？　相手はマスターテリオンだったのだぞ？　この程度の被ひ害がいですんだことを喜ぶべきであって、責められる道理などないではないか！」

「アルっ！」

　九郎は猛もう然ぜんと瑠璃へとつっかかっていくアルの体を抑おさえこんだ。

「放さんかっ！　世間知らずの小こ娘むすめに思いしらせてやるのだ。自分の過あやまちと愚おろかさについてな！」

　九郎の腕の中で、アルはジタバタともがいている。

　再び取っ組み合いの争いが起きるのではないかと危き惧ぐした九郎だが、そうはならなかった。

　瑠璃とウィンフィールドは表情を凍こおらせ、その場で固まっていた。

「大十字様。対していたのは、あのマスターテリオンだったのですか!?」

　信じられないとでも言いたげな表情のウィンフィールドに、九郎はうなずいてみせる。

「私は架か空くうの人物だとばかり。間ま違ちがいないのですか？」

「あんな人間、他ほかにいないだろうよ」

「金の髪かみ、金の目……」

　瑠璃がつぶやく。

「ああ、そうだ。暗い目をした、すかした野や郎ろうだった」

「お爺じい様が話していたとおりです。マスターテリオン。やはり実在したのですね」

「左様。いかに汝なれの頭がポンコツでも、これで我等が鬼械神を動かした理由も理解できよう」

「ええ、理解できましたとも」

　瑠璃はうなずくと、冷めた目でアルを見み据すえる。

「ネクロノミコンではブラックロッジには対たい抗こうできない。つまりは、そういうことです。別の魔導書の探たん索さくを依頼したわたくしの判断に誤りはなかった」

「な、なんだと！　妾以上の魔導書が、この世にあると思うてか！」

「だとしても結果は惨ざん敗ぱいです。ブラックロッジを倒たおせない魔導書に用はない」

「おのれ小娘、言わせておけば好き放題……」

　さらに暴れるアルを、九郎は必死に抑えこむ。

「事情は解わかりました。デモンベインの件は不問にします。そして、貴方あなたへの依頼も取り下げます」

　九郎は言い返すこともできず、黙もくしているより他に方法はなかった。

「先に渡わたした前金は、どうぞお収めください。あれは貴方の仕事に対する正当な報ほう酬しゆうですから」

「それって、つまり……」

「貴方がブラックロッジのことで気に病やむ必要はなくなったということです。これから先は覇道の問題。すべてを忘れて、普ふ段だんどおりの生活にお戻もどりください。お世話になりました」

　瑠璃は畳たたみかけるように話すと、ウィンフィールドに目配せをして背を向けた。

「勝手なことをぬかしおって！　術者と魔導書を欠いた汝に、何ができるというのだ？　魔道の魔の字も知らぬ小娘が偉えらそうに」

　一いつ瞬しゆん、瑠璃の肩かたが震ふるえるが、彼女が怒り出すことはなかった。

「大十字さん、解わかっているとは思いますが、今後、デモンベインに触ふれることは許しません。ではウィンフィールド、戻ります」

　瑠璃は有う無むを言わさぬ強い口調で言い放つと、足早にその場から姿を消した。ウィンフィールドはなにか言いたげな表情をしていたが口にはせず、軽く会え釈しやくをしてから主あるじのあとを追いかけていく。

「なあ、これからどうしたらいい？」

　ブラックロッジ、そしてマスターテリオンと戦う決意をした矢先である。デモンベインを失っては、勝ち負け以前の問題だった。

「小娘の話に耳を貸す必要はない」

　アルは断言するが、そんなわけにはいかなかった。瑠璃の発言はアーカムシティに住む者には絶対だ。もちろん、そのようなことは口にはしない。言えばアルが目くじらを立てるのは明らかだ。

「小娘がいかに頑がん張ばろうと無意味なことだ」

「汝と妾わらわの物だって主張するわけか？」

「もちろん、それもある。だが望もうが望むまいが、我等は再びデモンベインと出で逢あうだろう」

「運命だとでも？」

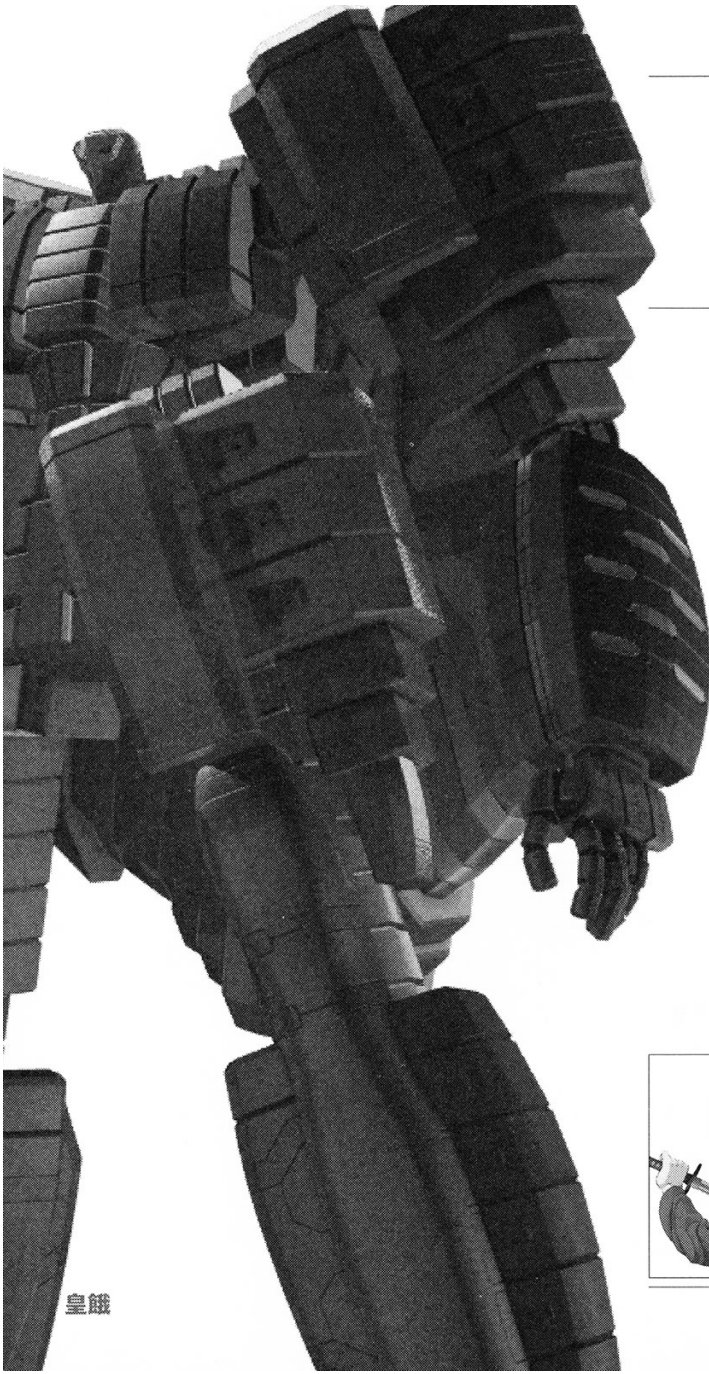
「そうとも言うな。だがそれ以前に、戦いが見み逃のがしはせぬだろう。そして、そのとき小娘も気づくはずだ。ブラックロッジを相手に戦うという、真の意味を」

　アルの説明は突とつ拍ぴよう子しもなかったが、なぜか九郎はしっくりきていた。

　デモンベインを駆かり、ブラックロッジと対たい峙じする日がくる。

　そんな確信めいたものを感じていたのである。

第二章
天才と何とかは紙一重というかむしろ完全に向こう岸



皇餓

ティトゥス

ドクター・ウェストの朝は無意味に早い。一いち番ばん鶏どりが朝を告げる前に目を覚まし、覚かく醒せいしきってない頭のままで研究室に明かりをつける。もっとも様々な計器類が発する華か美びなランプ類のおかげで室内はそれなりに明るいが、ようするに気持ちの問題である。

ウェストは椅い子すに腰こしを下ろすと、つけっぱなしになっているモニターへと目を向けた。

九郎とデモンベインに手痛い敗北をきっした彼は、覇道からかっぱらった資料を元に研究に研究を重ね、新たな破は壊かいロボットの製作に全精力を傾かたむけていた。寝ねる間も惜おしんで作業に当たっていたせいか頬ほおはこけ、目の下には浅黒いクマができている。今にも倒たおれそうなほど憔しよう悴すいしきっているウェストだが、やる気は一向に衰おとろえない。充じゆう血けつしきった目は爛らん々らんと輝かがやき、生命力に満ちていた。

「さすが大天才・ドクタァァァァァァァァァァァァッ、ウェストなのであーる。嗚呼ああ、耳を澄ますませばそこに、我わが輩はいの偉い業ぎようを讃たたえる人々の声、そして鳴りやむことをしらない拍はく手しゆ、さらには──」

「朝っぱらから喧やかましいロボ。しまいにはブッ殺して『焼野』に埋うめるロボよ？」

エルザの話に肝きもを冷やしたウェストは、それっきり黙だまった。

+

椅子に深々と腰かけ、エルザの様子をうかがっていたウェスト

は、自分エの最ル高傑作ザに疑問を抱いだいていた。性能には何一つ問題はなかったが、性格にはかなりの問題を抱かかえていそうである。

「そんなに見つめられると照れるロボ。博士、エルザに気があるロボ？」

「なっ!!　なにを言い出すのである！」

「その粘ねん着ちやく性の強いストーカーもビックリな薄うす汚ぎたない視線がすべてを物語っているロボ」

「やはり設計にミスがあったと考えるべきであるな……」

　ウェストは肩を落とすと、いつもの日課であるボストン・グローブの朝刊へと目を向けた。

「おぉうッ!?」

　新聞の一面に目を向けたウェストは、素すっ頓とん狂きような声を発した。一面を飾かざっていたのは、巨きよ大だいロボットが仰あお向むけに倒れている姿だった。見出しには『謎なぞの巨大ロボット出現』と書かれていたが、それがデモンベインなのは一いち目もく瞭りよう然ぜんである。瓦が礫れきと化した街の中で沈しずむデモンベインの巨きよ軀くからは薄うす煙けむり、そして火花が上がっており、装そう甲こうに入った無数の罅ひびが見るも無む惨ざんな有様だった。

「デモンベインが、やられたのであるか!?　いったい、誰だれに……」

　口にするまでもなく、ウェストは気がついた。

（大グラ導ンドマ師スターの仕し業わざであるな。大導師がデモンベインを！）

　ウェストは慌あわてて紙面に目を通すが、搭とう乗じよう者しやについては一言も触ふれてはいなかった。

（大十字九郎……。我輩の許可なく勝手に死んでもらっては困るのである！）

　九郎とデモンベインについては、マスターテリオンにすら譲ゆずるつもりはないウェストである。

　新聞を持つ手が震ふるえていた。両りよう腕うでに力が入り、ついに新聞は中央から二つに裂さけてしまう。

「博士、ただでさえ狭せまくて汚きたねェ部屋をゴミで散らかさないでほしいロボ」

　ぼやきながらウェストの下へと歩いてきたエルザは、床ゆかに落ちた新聞紙を拾い上げた。

「それは必要な計器が絶ぜつ妙みような間かん隔かくで配置されているからであって、狭いわけではないのである」

「結果が出せない博士には、この程度のスペースで十分ロボ」

「エルザよ、いつから人の心を土足で踏ふみにじるようなハイブローなツッコミをするように？」

　ウェストは涙なみだ目めで訴うつたえると、最大級の悲しみを表現するためにギターを掻かき鳴らした。

　そんな彼を気にもとめず、エルザは新聞に目を落としながら「フムフム」とつぶやいている。

「エルザも大十字九郎の生死が気になるのであるか？」

「ぜんぜん気にならないロボ。大十字九郎なら魔導書と一いつ緒しよにここに写ってるロボよ？」

　ウェストは新聞を覗のぞきこみ、エルザが指さしたところへと目を向けるが、そこには薄うすぼんやりとした影かげしか見えなかった。目を擦こすって凝ぎよう視しするが、言われてみれば、というレベルである。

「博士のちんけな目では無理ロボ」

「ち、ちんけ……この大天才がちんけ扱あつかい……。しかも自分が作ったロボットに言われてる？」

「細かいことに囚とらわれてるからダメなんだロボ。だから、うだ

つが上がらないって言われるロボよ？」

　エルザでなければ破壊しているところだが、そんなことはできそうになかった。

　そのときだ。デモンベインの記事に気を取られて気づかなかった一つの記事がウェストの目にとまった。それはあまりにも小さな記事だったが、彼の目を釘くぎ付づけにするには十分すぎた。

　そこにはデモンベインが暴れたおかげで被ひ害がいを被こうむった病院のことが掲けい載さいされていたのだが、彼が注目していたのはそれではない。病院から脱だつ走そうした患かん者じやの名前に注目していたのである。記事にはこう書かれていた。『エルザ』。

+

　ウェストがエルザに出で逢あったのは、彼がまだミスカトニック大学の医学部に在ざい籍せきしていたときだった。学生のころから変わり者として有名だったウェストだが、そんな彼の悪名が広く構内に知れ渡わたる研究レポートがあった。『死者の蘇そ生せい』についてである。ウェストは死を克こく服ふくするための研究をしており、相当数の犬や猫ねこ、天竺モルモ鼠ツトなどを研究の名の下もとに殺害していたのである。もっとも理論だけで肝かん心じんの蘇生液は完成せず、研究自体も医学部の部長であるアラン・ホールシィ博士に止められてしまったのだが……。その程度の制約などウェストのやる気に火を注ぐだけであり、実際、彼は密ひそかに実験を続けていたのである。そして、そのときの相棒だったのがウェストと同期のエルザだった。医学部一の才女である彼女と、ある意味、医学部の超ちよう有名人であるウェストのコンビは、他者からはまるで理解されない不可解なものだったが、不思議と二人の相あい性しようは良かった。

　二人が惹ひかれ合ったのには、もちろん理由がある。ウェストとエルザは『孤こ独どく』という点で共通していたのだ。ウェストはその性格と研究のため、エルザは天才であるがゆえに―。そんな彼らは出逢うべくして出逢い、いつしか共同で研究を行うまでになっ

ていたのである。

　二人が研究していたのは、ウェストの蘇生液についてだった。卓たく上じようの理論は完かん璧ぺきに近く、それさえ立証できれば大学内でのウェストの評価は格段に上がる。もっとも彼自身は研究の成功がすべてであり、評判など気にもしなかったのだが……。気にしていたのはエルザだった。

「それで、新しん鮮せんな死体は手に入りそうなの？」

　薄汚い廃はい屋おくの一室で、白衣を着たエルザは試薬が入った試験管を眺ながめていた。

「死体だけならいくらでも手に入るのであるが、実験に適した死体となると難しいのである」

　エルザと同じ白衣を身につけ、別の試験管に薬やく剤ざいを加えながらウェストがつぶやく。

　ミスカトニック大学では研究ができなかったため、二人はアーカムシティ西部にある丘メドウ陵地・ヒルにその場を求めていた。幸い、その奥にあるチャップマン牧場には使われなくなった廃屋があり、そこを実験室として改築したのである。実験の内容が内容だったので、誰にも知られないようにしなければならなかったのだが、ある意味、立地条件は最高だった。と言うのも丘陵地には名状しがたい化け物が出るとの噂うわさが絶えない場所だったからである。実際、作家のランドルフ・カーターがそれを著書で発表したこともあり、アーカムシティの住人が近づくのは稀まれだった。

「なんにせよ、死体が手に入らないんじゃ先に進まないね」

　エルザの手の中で踊おどる試験管から、鼻を突つく激しい刺し激げき臭しゆうが発生する。

「ここは隠かくれ蓑みのにはちょうど良いのであるが、死体を運ぶ手間とリスクは問題であるな」

「確かにね。ちょっと危険かもしれないけど、墓地の近くにでも家を借りたほうが早いのかも」

「うむ、我わが輩はいもそう思う。すぐに見つかるとも思えんが、実験が滞とどこおるよりはマシなのである」

ウェストとエルザはうなずき合うと、それぞれの実験に没ぼつ頭とうした。

+

二人が新しい死体の噂を聞きつけたのは数日後のことだった。

それは若い作業員のもので、外的損傷が極きわめて少ないという良質な死体だった。喧けん嘩かで軽く頭を打っただけだったが打ち所が悪かったらしく、帰らぬ人となってしまったのである。

その情報を入手したウェストとエルザは、さっそくスコップと台車を持ち出して墓地へと繰くり出し、墓掘アンダーり人テイカーよろしくせっせと墓を掘ほり起こしていた。

「ほとんど食屍鬼グールね」

額に汗あせしながら土を掘り起こすエルザは、そう言って苦く笑しようする。

「未来ある若者を我輩たちの手で救うのであって、食屍鬼と一いつ緒しよにされては困るのである！」

「はいはい。解わかったから、口より先に手を動かす！」

「……ところで、なんで我輩は命令されているのであるか？」

ウェストは疑問に思いながらも黙もく々もくと土を掘り返すのであった。

+

作業員の遺体を手術台に載のせたとき、時刻は午前二時を少し回っていた。

二人はアセチレン・ランプで手術台を照らし、死体のチェックを始める。防ぼう腐ふ剤ざいが使われているのではないかと危き惧ぐしていたウェストだが、金銭的な都合からか、死体には特になにも処理は施ほどこされてはいなかった。防腐剤が使われていると蘇そ生せい液えきがうまく働かないのは、これまでの実験で確かく認にんずみであった。

「それでは、始めるのである」

ウェストの宣言に、エルザは神しん妙みようにうなずき返す。それを確認した彼は、手にした注射器へと目を向ける。注射器の中には透とう明めいな液体が入っており、それこそがウェストとエルザの研究の成果である蘇生液だった。ウェストは作業員の右みぎ腕うでに注射器の針を刺さし、蘇生液をゆっくりと注ぎこむ。

反応は、ほどなく訪おとずれた。びくんと、作業員の体が手術台の上で波打つかのように跳はねる。それは二度、三度と立て続けに起こり、やがては静まったが、胸の奥では心臓が暴れており、異様な拍はく動どうを繰り返していた。

『ギッ、ギャァァァァァァッッ!!』

いきなり作業員は目を見開くと、この世のものとは思えぬ激しい叫さけび声を上げた。

ウェストとエルザは思わず後ずさるが、それでも作業員の姿から目を離はなそうとはしない。

『……よせっ……俺を……俺を呼び戻もどすなァァァァァ!!』

作業員は激しく身をよじりながら、なにかに耐たえるかのように顔を歪ゆがめる。

「成功……なの？」

「一応、向こうの世界からは戻ってきたようであるが」

これを成功のうちに入れるかどうかは、かなり疑問が残るウェストである。

『シャアァァァァァァッッッ!!』

　作業員は蛇へびのような叫び声を上げると、体を海え老びのように反らせてから事切れた。

「……うまくはいかないものであるな」

「原因はなにかしら？　鮮せん度どがイマイチだったから？」

　エルザは作業員の遺体を確認しながら深い溜ため息をついた。

「死体の鮮度も大切であるが、他ほかの可能性についても調べてみるのである」

　だが、それをするにはいささか疲つかれていた。

（もっと簡単に死体が手に入ればいいのであるが……）

　アーカムシティにある無む縁えん墓地の周辺で物件を探してはいたが、実験室として使える物件となると話は別である。だが、このまま無む駄だに時間を費ついやすわけにもいかなかった。

「なんにせよ、我輩は疲れたので寝ねるのである」

　言うが早いか、ウェストは床ゆかに寝転がった。

「ベッドで眠ねむれば？」

「寝てしまえば場所なんか関係ないのである」

「あっそ。じゃ、私はもうちょっと調べてから寝るから」

「好きにするのである」

　興味も抱いだかぬまま眠りに就ついたウェストだが、それが永遠に続く彼の後こう悔かいの始まりとなる。

+

「博士、なんだか顔色が悪いロボ」

　新聞の切れ端はしを凝ぎよう視ししながら物思いにふけっていたウェストは、エルザの声で我に返った。

「夢見る乙おと女めみたいな顔をしてるロボ」

　そう言って顔を覗のぞきこんでくるエルザの姿に動どう揺ようしながら、ウェストは椅い子すから腰こしを上げる。

「エルザ、出かけるのである」

「どこに行くロボ？　大十字九郎をボコるロボ!?」

「それは後回しなのである。それよりも重要であるからして、十分に装備を調えるのである」

　首をかしげ、解らないとでも言いたげな顔をするエルザに、ウェストは告げた。

「過去の清算である」

+

　九郎とアルの前には戦場さながらの焼け野原が広がっていた。

　マスターテリオンと戦った結果がこれである。

「時化しけた面つらをしておるな」

「そりゃそうだ。こんなの見たら誰だれだってそうなるさ」

　デモンベインを使ったことに間ま違ちがいはなかったと信じていたが、現場を前に気持ちは揺ゆらぐ。たとえ正しいことでも結果がこれでは誰も納なつ得とくはしない。自責の念が無限のループを繰り返していた。

（覇道の姫ひめさんが怒おこるのも無理ないな……）

　出し抜ぬけに頬ほおが痛んだ──ような気がした。

　九郎は頬に手を添そえると、瓦が礫れきの撤てつ去きよ作業を続ける覇道財ざい閥ばつの作業員へと目を向ける。

「ふん。汝なれ、まだ小こ娘むすめのことを気にしておるのか？」

「気にしないでいられるほど図太い神経じゃなくてね」

「そんなことでは、この先が思いやられるぞ」

「俺は現状でいっぱいいっぱいなんだよ」

　九郎は吐はき捨てると、アルを置き去りにして歩き始めた。

「だから汝は、なぜ妾わらわを置き去りにする？　言っておくが、遊んでいる暇ひまなどないぞ。汝には死より恐おそろしい地じ獄ごくの特訓が待っているのだからな」

「勝手にしろ」

　つっけんどんな彼の言葉にもアルはめげず、黙もく々もくと歩いていく彼の周りを衛星のように巡めぐりながら魔ま術じゆつの理論について話し続けた。そのどれもが外げ道どうの知識であり、食欲を萎なえさせ、陰いん鬱うつな気持ちにさせるだけの力を秘ひめていた。

　九郎が向かった先は教会である。街が焦しよう土どと化す中、奇き跡せき的に破は壊かいを免まぬがれた教会は九郎が壊こわした壁かべの修復作業中だった。陣じん頭とう指揮にあたっていたのはライカで、怪け我がをものともせず精力的に働いている。骨が二、三本は折れてもおかしくはない状じよう況きようだったが、彼女は不思議と元気だった。シスターらしく、神の加護があったのかもしれない。

「あ、九郎ちゃん！」

　九郎の姿を見つけたらしく、ライカは彼に向かって手を振ふってきた。

「元気そうでよかった」

「私はいつでも元気だよぉ。九郎ちゃんは元気ないみたいだけど？」

　ライカは小首をかしげる。

　アルは「ふんっ」と鼻を鳴らし、露ろ骨こつに不快感をあらわにした。

「アルちゃんとケンカでもした、とか？」

「違ちがうけど、ちょっとワケありでね……」

　アルは頬を盛大に膨ふくらませると、足あし下もとに転がる石を蹴けり飛ばして教会の中へと入っていった。

　九郎とライカは顔を見合わせ、そして肩かたをすくめた。

「あらあら、ご機き嫌げん斜ななめ」

「ずっとあんな感じだけどな」

「う～ん、でも別のことでイライラしてるみたいだけどぉ？」

（意外に鋭するどい？）

　九郎は思わずたじろいだ。そしてその反応を、ライカは見み逃のがさなかった。

「で、九郎ちゃんは、なにを悩なやんでいるのかな？」

「いや、俺は特に……」

「ダメダメ。お姉さんはお見通しですよ。それに九郎ちゃんだって、そのつもりで来たんでしょ？」

　九郎は二の句が継つげなかった。図星だったからである。

　九郎は瑠璃の件を切り出した。

「悔くい改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある」

「キリストさんの殺し文句か」

「反省する気持ちが大切ってことです」

人差し指を立て、諭さとすような口ぶりでライカは話す。

「というわけで、悪いことをしたと思うなら謝っちゃえば？」

「簡単に言ってくれるじゃないか……」

「落ちこんじゃうくらい気にしてるくせに。謝っちゃえばスッキリするよ？」

ライカの言うとおりだと九郎も思う。だが事は、そう簡単ではなかった。

九郎は瑠璃がどのような想おもいでいるのか考えたこともなかった。自分のことで精せい一いつ杯ぱいだったというのは言い訳かもしれないが、状況をのみこめないまま強大な相手と対たい峙じするハメになり、その対処だけで手一杯だったというのは事実だ。だから瑠璃がデモンベインに託たくした想いなど考える余よ裕ゆうもなかった。デモンベインは彼女の祖父・覇道鋼造の形見であり、希望だった。それはまた瑠璃の希望だとも言える。そのデモンベインが倒たおされたとなれば彼女が怒るのは当然だった。しかも搭とう乗じよう者しやは、どこの馬の骨とも知れない三流探たん偵ていと、やたらと口の悪い魔導書である。瑠璃が怒いかり狂くるうのは当然だった。

「けどさ、これだけのことをやらかして許してくれるもんかな？」

九郎は焼け野原に目を向け、息を吐き出した。

「九郎ちゃん。当たって砕くだけろ！」

「い、いや、砕けちゃマズイんだけど」

だが、九郎の決意は固まっていた。ようするに背中を押してもらいたかっただけなのだ。

九郎が行動に移ろうとした、そのときだ。遠方から聞き覚えのある排エグゾ気ースト音ノートが聞こえてきたのは。

（嫌いやな予感がする）

だが、その予感は現実だった。爆ばく弾だんが炸さく裂れつし続けるかのようなエンジン音は徐じよ々じよに大きくなり、それに加

えて狂きよう乱らんのギター音が聞こえてきた。

「やべえ……。ヤツだ、ヤツがくる」

　などと口にしている間にも、ウェストとエルザを乗せたバイクは猛もう烈れつな勢いで接近してくる。

　だが、それを上回る勢いで近づいてくる者がいた。

　それは人だった。だが九郎は、すぐにその考えを否定する。バイクより速く走る人間などいるわけがない。よく見ると、それは人の形をした怪かい異いだった。だが人の姿に限りなく近く、かつて人だったと言うべきかもしれない。体には紫し斑はんのようなものが浮うかび、まったくと言っていいほど血の気がない。それにもかかわらず目は血走り、血液の流れさえ確かく認にんできそうなほどである。だらしなく開け放たれた口から流れ出す粘ねん着ちやく性のある唾だ液えきが、人間性のなさを物語っていた。

『シャアァァァァァァァッッッ!!』

　その化け物は獣けもののごとく駆かけてくると、九郎から十メートルほど離はなれた位置で腰こしを落とし、一気に跳ちよう躍やくする。それは九郎の頭上を軽く飛び越こえ、猛烈な勢いで走り去っていった。

「何事だ、騒そう々ぞうしい」

　舎弟にでもしたのか、子供たちを率ひきいて現れたアルは眉まゆをひそめた。

「魔ま物ものの気配がするようだが？」

　アルはクンクンと犬のように鼻をひくつかせている。

「説明している暇ひまはなさそうだ」

　九郎が言い終わるやいなや、遠方からミサイルが飛んでくるのが見えた。もちろん、発射したのはウェストであり、彼は爆ばく走そうするバイクの上でギターケースを担かつぎながら高笑いしていた。後部座席ではエルザが歓かん声せいを上げている。

「て、てめえ！　なんてことしやがるっ！」

　弾だん道どうを計算するまでもなく、ミサイルは一直線に教会へと向かっていた。

「アルっ！」

　叫さけぶと同時に九郎は魔術師マギウスへと変わると、猛もう然ぜんと駆け出していた。

　幸い、ミサイルは直進しかしないので対処がたやすい。彼はミサイルを鷲わしづかみにすると、それをウェストへと投げ返した。前方で盛大なキノコ雲が上がった。

「死んだか？」

「勝手に殺すなであるっ！」

　舞まい上がった土つち煙けむりの中から一台のバイクが飛び出してくる。それは真っ直すぐ九郎たちの下へとやってくると、後輪を滑すべらせながら横付けした。

「ニグラス亭ていのジンギスカン定食なみにこんがり焼けるところだったのである……」

　やれやれとばかりに、ウェストは額の汗あせを手で拭ぬぐう素そ振ぶりをした。

「いや、俺的には逝いってよしだったんだが……っていうか、先に撃うってきたのはおまえだろうが！」

「博士、こんなところで油を売ってても平気ロボ？」

「し、しまったのである」

　ウェストは下した唇くちびるを噛かみしめながら恨うらめしげな目で九郎をにらんだ。

「貴様のせいで倒し損そこなった挙げ句に見失ったのである！　大十字九郎、米こめ粒つぶほどでも罪の意識を感じるならば、一いつ緒しよに追いかけるのである。それが貴様の責任であり義務でもある」

「見失ったって、あの化け物のことか？」

「そうである。貴様も正義の味方を名乗るのであれば、倒さずにはいられまい？　さぁ、我わが輩はいと一緒に死出の旅へ。というわけで、エルザッ。大十字九郎を捕ほ獲かくせよ」

「ラジャーロボ！」

　エルザは敬礼すると、九郎の首根っこをつかんだ。

「では、いくのであるっ！　よい旅をっ！」

　ウェストはアクセルを全開にすると、周囲の迷めい惑わくを顧かえりみずにバイクを走らせ始めた。

「は、はいぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！」

「にゃ、にゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

　九郎とアルは、長く尾おを引く悲鳴を上げながら連れ去られていく。

「あらあら。ケガをしないようにね～」

　ライカの声は、二人には届かなかった。

+

　ウェストが操あやつるバイクは、アーカムシティの市街地を疾しつ走そうしていた。

　信号無視は当たり前。交通法規もなんのその。走る狂きよう気きと化したバイクは、何十台ものパトカーを従えて道路を疾しつ駆くしていた。

「く、九郎……妾わらわはもう駄だ目めかもしれぬ……短い付き合いであったにゃ～」

　翡ひ翠すい色の瞳ひとみをグルグルと回転させているアルが、九郎の肩かたから転がり落ちていく。九郎は彼女が吹ふき飛ばされる寸前で体を受け止め、ボディースーツの中に押しこんだ。

（俺もヤバイんだけど……）

　エルザに首根っこを摑つかまれたままなので、設計が不十分なジェットコースターにでも乗っているような感じだった。何度となく繰くり返し天地がひっくり返るせいか、自分がどちらを向いているのかさえ判わからない有様である。九郎は迫せり上がる胃の内容物を抑おさえこむのに必死だった。

「見つけたであるっ！　エルザ、スタンバイっ！」

「了りよう解かいロボ」

　敬礼するエルザ。だがその際、九郎をつかんでいた手は放されてしまう。

「てめえ、覚えてろーっ！」

　放ほうり出された九郎は翼つばさを広げて体勢を整えると、なんとかその場で静止する。すでにバイクの姿は消えており、エンジン音とギターの旋せん律りつ、そしてウェストの高笑いが遠ざかっていくのが解わかった。

「しばく。いや、むしろコロス……っていうか俺、浮かんでる？」

　九郎の体は、地面から三十センチほど離れたところで静止していた。

「どうやら汝なれは、逆境に立たされると予想外の力を発現するようだな」

　ボディースーツの中からアルが這はい出てくる。

「ふむ。汝、ミスカトニック大学の時計塔とうから落ちてみぬか？　意外に早く魔術師として一人前になるやもしれん。ふむ。それがよい。手っとり早く育てるには、それが一番であろう」

「命がいくつあっても足りんわ！」

　九郎が反論したときだ。けたたましいブレーキ音が背後から響ひびいてきた。

　振ふり向くと、そこには十数台のパトカーと、九郎に向かって拳

けん銃じゆうを構える警察官たちの姿が。

「最悪だ……」

　九郎は泣きそうな顔をすると、銃じゆう弾だんの雨あめ霰あられの中、羽ばたきを覚えた雛ひな鳥どりのように翼をばたつかせながら上空へと昇のぼっていった。

「なんか俺、ものすごくかっこ悪くないか？」

+

　九郎が警官たちに追われているころ、ウェストとエルザは怪かい異いを射程圏けん内ないに捉とらえていた。

　バイクの数メートルほど先を獣けもののように四つ足で走っているその怪異は、顔だけをくるりと一八〇度回転させる。血走った眼めが、ウェストの目を捉えた。

（……エルザよ、今、楽にしてやるのである）

　様々な感情が去来し、ウェストの魂たましいを激しく揺ゆさぶるが、それを振り払はらうかのように宣言する。

「エルザ。やるのである！」

「了解ロボ。『我、Ｄｉｇ　埋葬Ｍｅ　にあＮｏ　Ｇたわずｒａｖｅ』射出！」

　エルザの声に反応し、上空から飛来する黒い影かげ。彼女の下へと飛来し、バイクと併へい走そうし始めたそれは棺ひつぎだった。エルザは躊ちゆう躇ちよなくそれを開くと、そこにしまわれていた大たい砲ほうを手にする。彼女は自分の体より巨きよ大だいな大砲を片手で持ち上げると、肩に担かついで砲ほう身しんを怪異へと向けた。

「術式魔ま砲ほう『我、埋葬にあたわず』──ファイア！」

砲身から光が溢あふれ出す。それは凝ぎよう縮しゆくし、野太いレーザーとして怪異へと向かって伸のびていく。

首だけ後ろに向けたまま走り続ける怪異は、慣性の法則を無視して横っ飛びをした。レーザーは空を切り、前方のビルに巨大な風穴を空けた。

「ちっ。はずしたロボ」

「もういっちょいくのである」

「了解ロボ。たーまやー」

術式魔砲は火を噴ふくのと同時に、四散し、散さん弾だんのように散っていく。だが怪異は驚きよう異い的な脚きやく力りよくで飛び上がると、上空で胎たい児じのように体を抱かかえながらウェスト目がけて降ってきた。

「のわぁぁぁぁぁぁぁぁっっ！　ぶつかってしまうのである！」

ウェストは運転を放ほう棄きし、両手を放して頭を抱える。その途と端たん、バイクは制せい御ぎよ不能におちいった。

「ロ、ロボ～～～～っ！」

エルザはエルザで体勢を崩くずし、大砲を投げ出している。

衝しよう撃げきは、ほどなく起きた。天と地が激しく入れ替かわり、自分が宙を舞まっているのだと認にん識しきした直後、ウェストは地面に叩たたきつけられた。全身の骨が砕くだけるかのような激しい衝撃に意識が遠とお退のく。

「ぐふぅ……」

ウェストは呻うめくが、すぐに目を見開いた。馬乗りになってきた怪異が手刀を振り上げていたからである。怪異の爪つめは鋭するどく尖とがっており、振り下ろされでもしたら致ち命めい傷しようは確実だった。その瞬しゆん間かん、ウェストは死を覚かく悟ごしたが、それでもいいのかもしれないと、彼は思う。

（我わが輩はいがエルザに与あたえた苦しみに比べれば……）

　ウェストは、静かに目を閉じる。

「博士、逃にげるロボ！」

（しかし、我輩が死んだところでエルザは……）

　ウェストは、自分が楽な方向に逃げようとしている事実に気がついた。

（そもそも我輩は、エルザを救うために出てきたのである）

　彼は目を開き叫さけんだ。

「エルザ、やめるのである！」

　怪異の手刀がピタリと静止する。

　ウェストの目が怪異を捉えた。その顔はひどく醜みにくい。頬ほお骨ぼねの位置が左右で異なるせいか、顔は奇き妙みようなほど左右非ひ対たい称しようだ。それは壁かべに頭を打ち据すえた結果である。病院に隔かく離りされたエルザが病室で行ったのは自傷だった。何度も何度も頭で壁を打ち、その結果、今のような顔になったのである。病院のネットワークに侵しん入にゆうし、密ひそかに病院のカルテを覗のぞいていたウェストは、そのことを知っていた。

「我、埋葬にあたわず！」

　エルザが叫ぶと同時に、術式魔砲の砲口が光り輝かがやいた。怪異を滅めつするべく解き放たれたその凶きよう暴ぼうな光は、一筋の帯と化して突つき進んでくる。強きよう烈れつな光がウェストの視界を白く染め上げ、怪異の姿がかき消されていく。

　そのときウェストは、ふと怪異と目が合った。怪異の頬ほおが緩ゆるんだ―ように見えた。

（……笑った？　笑ったのであるか、エルザ？）

　確認する間もなく、ウェストの視界は白一色に染まる。暴風と爆ばく音おん、そして怪異の絶ぜつ叫きようを耳にしながら、彼の意識は暗転した。

+

　なんとか警察を撒まき、それなりに飛べるようにもなっていた九郎は、大砲を担かついでトボトボと歩いているエルザを発見した。大砲を担いでいるせいか、人々は自然と彼女を避さけて通っている。

「なにやってんだ、あいつ？」

　上空をフラフラと飛んでいた九郎は、エルザの下に降り立った。

「あの○○○○はどうした？」

「博士なら傷心センチメンタ旅行ルジヤーニー中ロボ」

「あやつに色いろ恋こい沙ざ汰たは似合わぬが」

　九郎の前で浮うかぶアルは、自分の発言に深くうなずいていた。九郎も特に反論はない。

「エルザは捨てられるかもしれないロボ┈」

　エルザはつぶやくと、担いだ大砲を何発もぶっ放した。その被ひ害がいにあったのは近くにあるビルで、何なん棟むねかが倒とう壊かいし始めている。通行人は悲鳴を上げながら、蜘蛛くもの子を散らすように逃げていった。

「ところで、エルザになにか用ロボ？」

「人を巻きこんでおいて、その言い草はなにかと」

「なるほど、解わかったロボ！」

　突とつ然ぜん、エルザは警けい戒かいし、九郎をにらんだ。

「傷心のヒロインに声をかけ、心の隙すきに付け入るつもりロボね。そして見事に騙だまされたエルザは身も心も大十字九郎に捧ささげてしまい、気がつけば九郎なしには生きられない体に？」

「なぜそうなる？　っていうか、誰だれがヒロインだ!?」

さっそく九郎は途と方ほうに暮れた。

「そして逆らえないのをいいことに、筆ひつ舌ぜつにつくしがたい辱はずかしめを受けるエルザ。極度の人間不信におちいりながらも、それでもなお大十字九郎のことを想おもい続けるロボ」

「……いい感じで向こうの世界へとトリップしているようだ」

「九郎、あの手のおなごは厄やつ介かいだぞ」

言われるまでもない。九郎は自分の世界へと迷いこんでいるエルザを放置して逃とう走そうを開始した。

「ロボ？　ダーリン、どこ行くロボ!?」

背後から非難するような声と術式魔ま砲ほうが吠ほえる音が聞こえてきた。

+

研究室へと戻もどってきたウェストは、物思いにふけっていた。

「エルザ……笑っていたである」

それはただの願望かもしれなかったが、あの瞬間、エルザは理性を取り戻したように見えた。

あのときの笑えみをウェストは忘れない。それはかつてエルザが見せた笑みと同じだったからである。

ウェストがエルザと作業員の死体を使って実験を行ったあの日、事件は起きた。一度は動かなくなった作業員が活動を再開し、調査に当たっていたエルザの首を絞しめたのである。人外の力を発揮した作業員によりエルザの首の骨は折られ、ウェストが助けに入ったときには虫の息だった。

ウェストは絶望したが、そんな彼にエルザは言ったのだ。「新しん鮮せんな死体が手に入ったね」と。

彼女に対して蘇そ生せい液えきを使用することなどウェストにはできなかったが、それしかないことも知っていた。ウェストは、まだ温かい彼女の体に蘇生液を注入し──そして、彼女は蘇よみがえった。心をなくした怪かい異いとなって。その後の記き憶おくは綺き麗れいさっぱり抜ぬけ落ちていた。ただ後日、エルザと思われる人間が捕つかまり、病院に隔離されたことを彼は知った。

エルザの事件以降、ウェストは実験を止やめ、そして大学を去った。

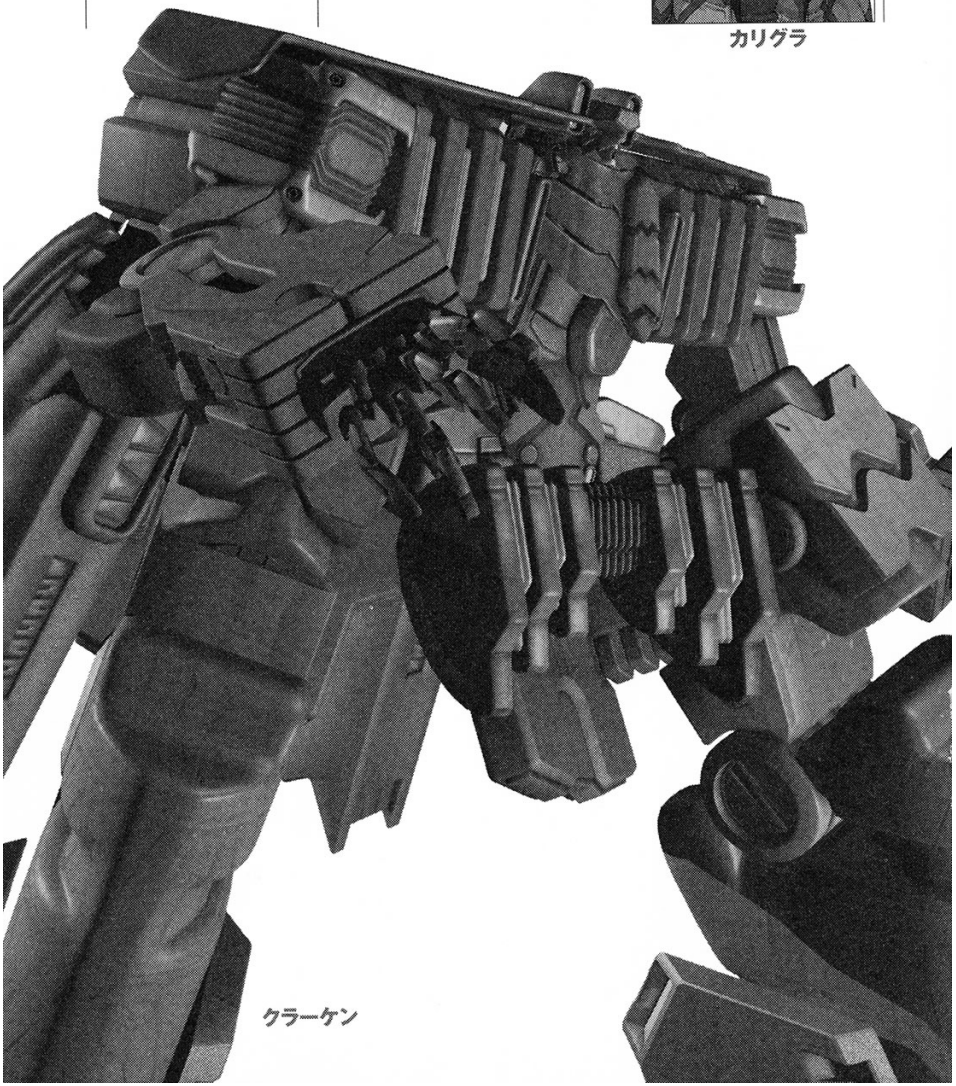
だが、彼は再び研究を開始することになる。人造人間の開発を──。

「エルザよ、安らかに眠ねむるのである」

ウェストはギターの弦げんを指先で弾ひいた。

第四章 殺意の牙。憎悪の爪。我は漆黒の狂嵐

カリグラ



クラーケン

　マスターテリオンは玉座に腰こし掛かけ、気だるそうな表情で遠くを見つめていた。

　彼の瞳ひとみは目の前にある空間を見てはおらず、時間と空間を超ちよう越えつした別の次元を眺ながめているかのようだ。

　辺りは静かで、いつも付き従っているアウグストゥスの姿もない。時折、松たい明まつの炎ほのおが怪あやしく揺ゆらめき、それが作り出す影かげの中で怪かい異いが蠢うごめいているだけである。玉座には限りのない静せい寂じやくと、無限とも思えるほどの時が横たわっているかのようだ。

　マスターテリオンの足あし下もとには、忠犬のように従う少女・エセルドレーダの姿があった。彼女はマスターテリオンの膝ひざに顔を預け、恍こう惚こつの表情を浮うかべながら微睡まどろんでいる。人前では見せることのない狂きよう気きと紙かみ一ひと重えの微び笑しようを浮うかべながら、エセルドレーダは頬ほおをすり寄せていく。

「マスター。大十字九郎とアル・アジフ、今回も順調のようですね」

「それは、そうであろうな。そうでなくてはつまらぬ」

　マスターテリオンは嫣えん然ぜんとした笑えみを浮かべると、エセルドレーダの頭をなでた。

「そろそろ彼らを動かしてもよいころかもしれぬ。大十字九郎。彼を目覚めさせるには、生死の狭はざ間まに立たせるのが一番だ」

「マスター、愉たのしそう」

「そうさな。余は愉しいぞ。あやつの存在だけは、この無限の退たい廃はいの中にあって、唯ゆい一いつ、余を愉しませてくれる」

マスターテリオンは体を駆かけめぐる熱き血潮を感じ、愉ゆ悦えつの表情を浮かべた。

+

九郎は巨きよ大だいな門を前に、途と方ほうに暮れていた。そこはアーカムシティの中心部から少し離はなれた市街地の一角で、九郎の背せ丈たけの三倍は高いであろう巨きよ大だいな門は、覇道邸ていの正門である。

（しかし、デカイな……）

ポカンと口を真ん丸に開けながら、九郎は惚ほうけていた。

覇道邸の巨大さは普ふ通つうではない。そこを取り囲むかのようにそびえ立つ塀へいは数キロにも及および、ジョギングコースに使われるほどである。だがそれは覇道財ざい閥ばつの凄すごさの一いつ端たんでしかない。名を名乗り、中に入ることを許された九郎を待ち受けていたのは、ゴルフコースがいくつか入りそうなほど広大な敷しき地ちである。肝かん心じんの覇道の邸宅は彼の視界には入ってこなかった。

「ふむ。これだけ広いと逆に不便ではないか？　これなら妾わらわの部屋のほうが機能的ではある」

「アルよ、それは貧びん乏ぼう人にんのひがみというものだ」

「なにを言う。妾が貧乏なのではなく、妾の主あるじが貧乏だっただけのこと」

「一いち蓮れん托たく生しようなら、おまえにも貧乏属性が追加されたわけだ。ざまあみろ」

などと二人が言い争っているうちに、目の前にリムジンが横付けされた。

（車に乗らなきゃいかんほど距きよ離りがあるってわけか）

貧ひん富ぷの差にげんなりした九郎だが、それでも気を取り直してリムジンに乗った。

+

ドライブは五分ほどで終しゆう了りようした。覇道邸の前には黒いスーツを着た見覚えのある青年が立っており、九郎とアルが座る後部座席のドアを開けて彼らを出で迎むかえた。ウィンフィールドである。

「突とつ然ぜん、すんません」

九郎はウィンフィールドの前に立つなり、そう言って謝罪した。

「どうか、お気になさらずに。私ならいつでも―とまでは言いませんが、歓かん迎げいいたしますよ」

「つまり覇道の姫ひめさんは、現在進行形でご機き嫌げん斜ななめだと？」

「それもありますが、なにぶんにも忙いそがしい身ですので……。立ち話もなんです。続きは中で、ということにいたしましょう」

彼の提案に九郎とアルはうなずくと、覇道邸の中へと案内された。邸内も驚おどろくほど広い。なにからなにまで規模が大きく、廊ろう下かなど突つき当たりが確かく認にんできないほどである。床ゆかには刺し繍しゆうが施ほどこされた絨じゆう毯たんが敷しき詰つめられており、その場で大の字になってくつろぎたくなるほどだ。等とう間かん隔かくで置かれた調度品の数々も、それ一つで何人かを一生養えるだけの価値がある物かもしれない。

九郎は劣れつ等とう感かんを感じながら、永遠とも思える長さの廊下を黙もく々もくと歩いていた。

ウィンフィールドが案内したのは応接間だった。とは言え、そこが応接間かどうかの判断は難しい。豪ごう奢しやすぎて応接間とは思えなかったからだ。ソファーやテーブルなどの応接セットはおさえてあるが、そのどれもが光り輝かがやいており、一片の陰かげり

もない。

　九郎とアルはフカフカすぎて居い心ごこ地ちの悪いソファーに体を沈しずめた。

「それで、ご用というのは例の件でしょうか？」

　ウィンフィールドは九郎とアルの前にコーヒーカップとソーサーを差し出した。コーヒーの香こうばしい匂においが九郎の鼻び孔こうをつく。

「うん、まぁ、その、なんだ。やっぱ後味悪わりぃしさ、それで姫さんが許してくれるとは思えないけど……なんていうか、自己満足みたいなものかな？」

　しどろもどろで話す九郎に、アルは冷ややかな目を向けた。

「言っておくが、我らに非はない。当然のことをしたまでであって、謝るのは小こ娘むすめの……」

　アルが暴言を吐はき終わる前に、九郎は彼女にヘッドロックをかけながら手で口をふさいだ。

「今のは聞かなかったことにしてもらってですね、ぜひ姫さんとの対面を実現できたらなぁと」

　九郎の話に、ウィンフィールドはにこやかな笑えみを浮かべながらうなずき返した。

「少々お待ちいただけますか？」

　ウィンフィールドは軽く会え釈しやくをすると、応接間から出て行く。

　九郎は溜ため息をつくと、腕うでの中でグッタリしているアルの体を解放した。

「お、おのれ……。なぜ妾が犠ぎ牲せいに……」

　アルの非難には耳も貸さず、九郎は一人、緊きん張ちようしていた。ライカに励はげまされて覇道邸まで乗りこんできた彼だが、そのプレッシャーたるやかなりのものだ。

（やっぱ勢いだけじゃ、無理があったか……）

　などと後こう悔かいしても後の祭りだった。

+

　瑠璃は静かに溜め息をついた。

　二十畳じようほどの広さがある私室で、彼女はキングサイズのベッドの端はしに腰こしを下ろしている。瑠璃の手にはフォトフレームが握にぎられており、彼女の目はその中で微笑ほほえむ人たちへと向けられていた。瑠璃が四、五歳のころの写真である。そこでは瑠璃を中心に、彼女の両親、そして敬愛する祖父・覇道鋼造が幼い彼女へと微笑みかけている。

　まだ理り不ふ尽じんのなんたるか知らぬ少女の無む垢くな笑顔。そして彼女へと向けられた優やさしい眼まな差ざし。

（わたくしは知らなかった）

　このときすでに、いや、瑠璃が産まれるずっと以前から彼らは理不尽と戦っていたのである。人知れず、ずっと──。

（わたくしは戦い続けることができるだろうか？　お爺じい様たちのような強さがあるだろうか？　理不尽に屈くつせず正義を貫つらぬき続けることができるだろうか？）

　答えが出ぬまま瑠璃はフォトフレームをサイドテーブルへと戻もどし、立ち上がった。いつの間にか部屋は茜あかね色いろに染まっている。かなりの時間、物思いにふけっていたらしい。

　瑠璃は重い腰を上げると、窓まど際ぎわへと歩を進めた。赤い、燃えるような夕日がそこにはあった。

（いつからだろう、黄昏たそがれ時どきが嫌きらいになったのは……）

　考え始めた瑠璃だが、すぐにそれは中断されてしまう。

「お嬢じよう様さま、よろしいですか？」

　寝しん室しつの扉とびらをノックする音とともに、ウィンフィールドの声が聞こえてくる。

「大十字様とアル・アジフ様が面会を求めておられますが、いかがいたしましょう？」

「大十字さんが？　この件には関かかわらないようにと念を押したはずですが」

「私には判わかりかねますが……。大十字様の話を聴きいてさしあげてはいかがかと」

「わたくしが？　なぜです？」

　ウィンフィールドがなにを言わんとしているか理解できない瑠璃ではない。だが、素す直なおになれそうもなかった。少なくとも、今は。

「わたくしは疲つかれています。今日はお引き取り願って」

「かしこまりました。そのように伝えます」

　ウィンフィールドは忠実で優ゆう秀しゆうだ。相手の気分を害すことなく、任務を遂すい行こうするだろう。

　瑠璃は窓から目を逸そらすと、静かに目を閉じた。

+

　九郎の胸きよう郭かくで心臓が暴れ回っていた。鼓こ動どうは速く、止まりかねない勢いで拍はく動どうし続けている。座っているにもかかわらず九郎の息は荒あらく、鼻息はまるで馬のそれだった。

「少しは落ち着かんか」

　アルはコーヒーをすすると、九郎に冷ややかな目を向けてくる。

　だが今の彼にとって、そのようなことは些さ末まつな問題でしかなかった。

（執しつ事じさんが姫ひめさんを呼びに言ってから、はや数分。そろっとご対面か？）

　瑠璃の顔を思い浮うかべただけで、九郎の顔は自然に引きつってしまう。いまだに彼は頬ほおに受けた鮮せん烈れつな痛みを覚えていた。そしてそれは、しばらく消えそうにない。

　コンコンと、扉をノックする音が聞こえてきた。その途と端たん、彼の緊張はピークへと達する。

「汝なれも哀あわれよの」

　アルは肩かたをすくめている。

「失礼します」

　そう言って応接間に入ってきたのは、ウィンフィールドだけだった。

「申し訳ありません。お嬢様はお休みになられるとのことで、日を改めさせていただければと」

　ウィンフィールドは頭を下げた。その途端、九郎は大きく息をつき、ソファーからずり落ちた。全身から力が根こそぎ抜ぬけ落ちていく。

（けど、なんかあからさまに避さけられてるよな……。当然だけど）

　それ以前に、覇道財ざい閥ばつの総そう帥すいにアポイントメントもなく会おうとすること自体、無理無茶無む謀ぼうの三さん拍びよう子しである。印象が悪くなっただけのような気がして、九郎は大いに後悔した。

「今日は突とつ然ぜんすんませんでした。日を改めますんで、姫さんによろしく伝えてください」

「大十字様、どうかお気に病やまないでください」

　頭を下げ、立ち上がろうとする九郎の機先を制して、ウィンフィールドは告げた。

「大おお旦だん那な様のことになると神経質になるきらいがございまして。私は大十字様をそれなりに評価しております」

「それなりに、ねぇ」

「アーカムシティを見守ってきた覇道といたしましては、デモンベインによって街が破は壊かいされてしまうというのはいささか都合が悪いのでございます」

「ああ、解わかるよ」

「あれはやむを得ないことだったと理解しております。幸い、被ひ害がいも最小限ですみましたし、その点について……」

「従者よ。なにが言いたいのだ？」

「いえ、たいしたことではございません。せっかくいらっしゃったことですし、私の無む駄だ話ばなしに付き合っていただければと。もちろん、お時間があれば、ですが」

　ウィンフィールドの意図することが理解できず、九郎は首をかしげるが、断る理由などなかった。

「こちとら時間だけは山ほどある三流探たん偵ていなんで。
なぁ？」

　九郎は茶ちや請うけを口いっぱいに頬ばっているアルに声をかける。彼女は「フゴフゴ」と人外の言葉を発しながら首を縦に振ふっていた。了りよう解かいした、ということらしい。

　ウィンフィールドは九郎とアルのためにコーヒーを煎れ直し、そして自分用のコーヒーを用意してから椅い子すに腰こしかけた。そして、おもむろに口火を切った。

「お嬢様にとって、大旦那様は特別な存在でした」

「だろうね。でも執事さん、あんたにとっても特別な存在だったんだろう？」

　九郎の話が意外だったのだろう。ウィンフィールドは少し驚おどろいた表情で彼を見返していた。

「さすがは探偵、と申し上げておきましょう」

「あのような小こ娘むすめに従っているのも、先々代の主あるじに恩があるゆえ。どうだ？　妾わらわの推理は」

　アルはウィンフィールドには目もくれず、ひたすら茶請けを頬ばりながらつぶやいた。

「―しかしこの菓か子し、うまいのぉ」

　千年も生きているとは思えないほどの子供っぽさを披ひ露ろうするアルの姿を、ウィンフィールドは包みこむような慈じ愛あいに満ちた目で見つめている。

（へぇ。そんな顔もできるんだ）

　執事としての責務を完かん璧ぺきにこなすということは、必然的に感情を表には出さなくなる。あくまでも主役は主であり、それをさしおくことは従者としては許されぬからだ。

（つまり、今は業務外ってことか）

「大旦那様に恩義を感じているのは確かですが、その延長線上でお嬢じよう様さまにお仕えしているわけではございません」

「なんにせよ、執事さんの仕事っぷりは見事だと思うぜ」

「恐きよう縮しゆくです」

　まんざらでもなさそうな表情のウィンフィールド。

「私の話は後回しにさせていただくとして―。お嬢様が大旦那様に対して特別な想おもいを抱いだかれるのは無理からぬことなのです」

「偉い大だいな祖父を持つと、その孫も大変よの。小娘のひねくれた性格からも、劣れつ等とう感かんにさいなまれ続けてきたことがよく解わかるというもの」

「おまえ、なんかいちいち攻こう撃げき的だな」

「千年も生きておると、物事を斜ななめから見るようになるものだ」

「ひねくれてるだけだろ？」

　九郎は呆あきれるが、アルは鼻を鳴らすだけで弁解しようともしなかった。

「お嬢様が大旦那様に近づくべく努力しているのは事実です。かなわないという劣等感にさいなまれているのも、また事実。ですが大旦那様は特別なのです。あの方は人間という枠わくでくくれない存在でしたから。陳ちん腐ぷな表現ではありますが、まさに超ちよう人じんと呼ぶに相応ふさわしいお方でした」

　それについては九郎もうなずけた。

　一代で覇道財閥を世界屈くつ指しの企き業ぎようへと築き上げたことからも、覇道鋼造の希け有うな力の一いつ端たんを知ることができる。一時期、覇道鋼造の魔ま術じゆつ師し説がまことしやかに流れたことがあったが、それほど彼の先見の明は確かなものだった。それは予知の域にまで達しており、実際、経済恐きよう慌こうを幾いく度どとなく乗り切り、愚ぐ行こうとも思える投資もすべて成功を収めていたのである。

「うむ？　やはり妾の推理どおり『小娘劣等感説』の方向ではないか」

「お嬢様が大旦那様を特別視されているのには、もう一つ大きな理由があるのです。お嬢様が、なぜあの若さにして覇道の総帥の座に就ついているのか。大十字様ならピンとくるのではと」

　名指しで指名された九郎は慌あわてるが、その理由についてはすぐに思い至った。

「どうやら知らぬのは妾だけのようだな」

「案外、世間知らずだな」

「黙だまれ、ぼんくら探偵。妾は怪かい異いやら魔術師やらとの戦いで忙いそがしかったのだ。いちいち人間の生活なんぞに干かん渉

しようしていられるか」

「その魔術師に、先代と奥様は殺されたのです」

　それが瑠璃が若くして覇道の総帥になった理由であり、ブラックロッジの悪名を全世界に轟とどろかせた大事件でもあった。

「つまり初代の総帥が唯ゆいーいつの肉親だったわけだ」

「そのとおりでございます」

　さすがのアルも毒づかず、居心地の悪そうな顔をしている。

「ですから、お嬢様がムキになられるのも無理はないのです。大十字様、アル・アジフ様、どうか許してはいただけないでしょうか？　そして可能であれば助けていただきたいのです」

　頭を下げるウィンフィールドに対し、九郎とアルは顔を見合わせた。

「謝りに来た俺たちが言うのもなんだけど、やれるだけのことはやるよ」

「感謝いたします」

「妾は謝るつもりなど毛ほどもなかったがな」

　アルはそっぽを向いて鼻を鳴らした。

+

　あのときと同じだと瑠璃は思った。

　燃えさかる炎ほのおを連想させる赤い夕日。血を想起させる赤い空。眼下に海を臨める見晴らしの良い高台。広大な土地に整然と並べられた墓石。喪も服ふくに身を包み、すすり泣く人々。強く拳こぶしを握にぎりしめ、沈ちん痛つうな面おも持もちで打ち震ふるえている祖父。両親の墓を前に、立ちつくす自分。

瑠璃の心に深く刻まれた理り不ふ尽じんな光景である。

それは何一つ疑問を抱くことなく、ただひたすら幸せだった日々に、前まえ触ぶれもなくやってきた理不尽だった。両親の死。今もそのときの光景が瑠璃の瞼まぶたに焼きついている。

（そうだ。あの日以来、夕日が好きではなくなった）

夕日は父母の死を想起させる。だから彼女は意識的に失念するように努めてきたのだった。

「調子が狂くるってしまいますわね」

大十字九郎、そしてアル・アジフ。

彼らと関かかわり合いになってから、瑠璃は著いちじるしくペースを乱されていた。九郎たちを前にすると、なぜか覇道財ざい閥ばつ総帥としての威い厳げんが保てなくなり、感情がストレートに出てしまう。そのようなことがあってはならなかったのだが、どうにも抑おさえきれなくなってしまうのである。

（なぜだろう？）

デモンベインをぞんざいに扱あつかった九郎に対して純じゆん粋すいな怒いかりを覚えた瑠璃だが、それ以上に、もっと違ちがったなにかを感じていた。そう。初めて九郎と対面したあの瞬しゆん間かんから、因いん縁ねんめいたものを彼女は感じていたのである。そしてアルだ。小こ姑じゆうとのような粘ねん着ちやく性の強い嫌いや味みを吐はきまくる彼女に対して苛いらつく自分に、瑠璃は戸と惑まどっていた。嫌味に反応しているわけではない。もっと別な感情が働いているような気がするのだ。

（お爺じい様、彼らはデモンベインを扱うに相応しい者たちなのでしょうか？）

+

ウィンフィールドの話は自分自身の過去へと変わりつつあった。

「ほう。それでは小こ娘むすめが子供のころから世話をしておったと？」

「乳母うば係とまではいきませんが、お嬢じよう様さまの成長を見守ってきたつもりではおります」

「ふむ。汝なれも苦労の連続であったことだろう。同情するぞ」

　あいかわらず口の中に許容量以上の菓か子しを押しこみつつ、アルはつぶやいた。

「しかし、なんでまた覇道の執しつ事じに？」

「一言で説明するなら、街でスカウトされた、ということになるのでしょうか？」

「覇道財閥って街にスカウトマンでも放っているのか？」

「いえ、私は大おお旦だん那な様に見み出いだされたのでございます」

　ウィンフィールドは誇ほこらしげに胸を張ると、「十年ほど前のことです」と付け加えた。

「十年も小娘の面めん倒どうを見続けるとは、汝もなかなかのものよの」

「けど総そう帥すい直々ってことは、執事さん、有名だったんだろうな」

「あ、いえ……。有名と言えば、その筋の方々の間では有名だったのかもしれませんね」

　ウィンフィールドにしては珍めずらしく歯切れが悪かった。

　だからこそ余計に目立ち、九郎とアルの関心を引くこととなる。

「それはぜひ聴ききたいところだな。のう、九郎？」

「そうだな」

　二人の好こう奇きな眼まな差ざしにさらされたウィンフィールドは、「まいりましたね」と言いながらも、まんざらでもなさそう

だ。

「では僭せん越えつながら、私めの武勇伝について少々──」

　と、ウィンフィールドが身を乗り出し、目を輝かがやかせたときだ。爆ばく音おんとともに邸てい内ないが激しく揺ゆれた。地じ震しんとは明らかに違ちがう、爆ばく弾だんでも撃うちこまれたかのような激しい振しん動どうである。テーブルに載のせられたコーヒーカップが床ゆかに落ちて砕くだけ散り、調度品の数々が追従していく。

　揺れはすぐに止やみ、代わりに銃じゆう声せいが聞こえてきた。九郎の背筋に悪お寒かんが走る。嫌いやな予感がした。それを確信へと変えさせたのは、アルの目が戦士のそれへと変わっていたからである。

　アルの動きは早かったが、ウィンフィールドの動きは彼女を上回っていた。

「どうしました？　なんの騒さわぎです！」

　ウィンフィールドは備えつけられている電話機の前に立つと、受話器を手にして叫さけんでいた。

　彼は何度かうなずくと、受話器を置いて九郎へと向き直った。その表情は、かなり険しい。

「信じられないことではありますが、この屋や敷しきは襲しゆう撃げきを受けているようです」

「そうらしいな。しかも、かなりヤバイ連中だ」

「闇やみの臭においがしおる。魔ま術じゆつ師しが来ているやもしれぬな」

　マスターテリオンが発する絶望的な気配とは異なるが、同じ種類の気配を九郎は感じ取っていた。

　九郎は舌打ちすると、アルに目配せをして魔術師マギウスの形態を取る。

「最悪なことに、お嬢様と連れん絡らくが取れない状じよう況きよ

うです」

「となると、考えられることは一つしかあるまい？」

　アルは九郎の肩かたの上に立った。

「執事さん、姫ひめさんのところへ案内してくれっ！」

　九郎は扉とびらを蹴け破やぶると、廊ろう下かへと飛び出した。

+

　瑠璃は困こん惑わくしながらも状況の把は握あくに追われていた。

　屋敷の中は騒そう然ぜんとなっており、ただならぬ事件が起きているのは疑いようもない。銃声が聞こえることからも、それと判わかる。内線は不通で、頼たよりのウィンフィールドは姿を現さない。いかに彼に頼り切っていたかが解わかったが、そのようなことを冷静に考えている場合ではなかった。

　だが行動しようにも体が動かない。得体の知れない恐きよう怖ふを感じているのか、体が言うことを聞かないのである。どのような状況でも毅き然ぜんと対応できると確信していた瑠璃だが、それは単なる思いこみでしかなかった。それでも護身用の拳けん銃じゆうを手にすると、油断なく身構えた。

　銃声と爆音が近づいてくる。警備員の悲鳴、呻うめき、断だん末まつ魔まの叫びが瑠璃の恐怖心を際限なく煽あおっていく。その音は確実に部屋へと迫せまり、その前でピタリと止やんだ。

　部屋の扉が音もなく開かれた。その途と端たん、むせ返るほどの血の臭においが押し寄せてくる。吐き気けをもよおすほどの臭しゆう気きは瑠璃の気を遠くさせるが、失神には至らない。

　ぴちゃんぴちゃんと、水たまりの上を歩くかのような音が聞こえてくる。

　カタカタと瑠璃の体は壊こわれそうなほど震ふるえ、それが最高潮に達したとき、それは姿を現した。

「うふふっ。おこんばんは～、瑠璃お嬢じようちゃま～ん♪」

　入り口に立っていたのは道化師だった。だが、その姿を見ても瑠璃は笑えない。その道化師が滴したたるほどの返り血を浴びていたからである。道化師の顔は仮面で覆おおわれてはいたが、その奥に潜ひそむ狂きよう気きにも似た表情を瑠璃は想像することができた。彼は丸く肥えた巨きよ体たいをゆっさゆっさと揺らしながら、彼女の下へと近づいていく。

「な、何者ですっ！」

　泣きたくなるのを堪こらえながら、それでも瑠璃は覇道の総帥としてあり続けようとしていた。

「イイわねぇ、イイわぁぁぁ。瑠璃ちゃんたら、ホント健けな気げなんだからぁ☆」

　道化師が口を開くたびに、汚お物ぶつのような臭気が吐はき出される。それは糞ふん尿にようにも似た強きよう烈れつな臭気であり、瑠璃は即そく座ざに吐き気をもよおした。

「はじめまして♪　アタシはティベリウス。ブラックロッジのアンチクロス・ティベリウスちゃんよん。ヨロシクね☆」

「アンチクロス！」

「今日は大導師のご命令で瑠璃ちゃんの命をもらいにきたんだけどぉ……こんな可愛かわいい子を殺すだなんてもったいないじゃない？　だからね、大導師にお願いしたのよん」

　じゅるっと、ティベリウスがツバを啜すすり上げる。

「ねっ、聞いて聞いて！　そしたらね、なぁんと、お許しが出たの。瑠璃ちゃんをアタシの玩具おもちやにしてもいいって！　嬉うれしいわぁ。こぉんなに可愛い娘むすめを好きにしちゃってもいいなんて！」

　瑠璃はティベリウスが向けてきた嘗なめるような視線に身を固くする。慰なぐさみ者にしようとしているのは明らかで、瑠璃の無む

垢くな心はティベリウスの視線で嬲なぶられ、犯おかされていた。

　瑠璃は未知の感覚に呻うめき声を上げながらも、護身用の銃をティベリウスへと向けた。

「立派に育ったわねぇ。体つきも女らしくなっちゃって、ゾクゾクしちゃう！　でも女としては、まだまだね」

　ティベリウスは人差し指を左右に振ふりながら、「チッチッチ」と口を鳴らす。

「アタシがオトコを教えてア・ゲ・ル☆」

　瑠璃は身を固くすると、銃口をティベリウスの顔面へと向ける。

　震える体を意思の力でなんとかねじ伏ふせると、右手の人差し指を強ごう引いんに引き金へともっていく。覚かく悟ごを決め、引き金を引こうとしたときだった。

「アナタのママの体も、けっこう良かったわヨ？」

「……い、今、なんと？」

「ちょっと歳としは食ってたけどネ。食べ物が良かったのかしら、お肌はだもピチピチで、食べ頃ごろだったわぁ。もっとも、舌を噛かみ切っちゃったから犯やるころには昇しよう天てんしてたけどネ？　アタシのモノで昇天させてあげたかったんだけどぉ、屍し姦かんになっちゃった。てへ☆」

　ティベリウスの話は瑠璃の意識を遠ざけるのに十分すぎた。それでも気を失わなかったのは、彼への猛もう烈れつな憎にくしみが胸中を支配していたからである。

「あ、そうそう。その様子はネ、瑠璃ちゃんのパパにも見てもらったのヨ。下半身が吹ふき飛んでたから、一いつ緒しよに愉たのしめなかったけどぉ♪」

「お、おのれ……」

「あらぁ？　その様子だと、アタシがママを犯しまくった事実は聞かされてなかったみたいネ。情操教育上、よくなかったのかしら？　でも、最近の子って進んでるって言うし、どっちみちアタシ

が教えてあげるわけだから問題ないわよネ!?」

　ティベリウスが一歩、近づく。

「おやぁ？　手が震えてるわよぉん？」

「だ、黙だまりなさい！　これ以上、近づくと……撃うちますわよ」

　そう言いながらも、瑠璃は一歩、後退する。

「イイ！　イイわぁん！　撃って！　アタシを撃ってぇ！」

　ティベリウスは両手を左右に広げると「撃ってぇ撃ってぇ」と笑いながら叫さけぶ。

「ば、馬ば鹿かにして……」

　瑠璃は引き金に指を添そえる。だが、人を殺あやめることへのためらいが瑠璃にはあった。

「どうしたのぉ？　撃たないの？　撃たないと、アタシに犯されちゃうわよ？」

「あ……あああああ……」

　瑠璃は目を閉じ、指先に神経を集中させる。

　だが銃が火を噴ふく前に、それは叩たたき落とされてしまった。

「目をつむってどうするのよ。殺せるときに殺さないなんて、甘ちゃんなんだからぁ☆」

　瞼まぶたを開けると、目の前にはティベリウスがいた。

「まぁいいわ。これから時間をかけて、たっぷりといろんなことを教えてあげる♪」

　ティベリウスは瑠璃の胸ぐらに手をかけ、それを引きちぎった。下着と白い肌があらわになる。

「いやぁぁぁぁぁぁぁ！」

絹を裂さくような悲鳴を上げながらしゃがみこむ瑠璃に対し、ティベリウスはその体を彼女へと覆い被かぶせていく。彼女は死にものぐるいで暴れるが、その体を押しのけることができない。それどころか両手を押さえつけられ、抵てい抗こうすらできなくなっていた。

ティベリウスの顔が近づいてくる。ポタポタと、小さな何かが瑠璃の頬ほおに落ちてきた。それは蠢うごめき、のたうち、そして頬から転がり落ちていく。よく見ると、仮面には何なん匹びきもの蛆うじが付着し、はいずっていた。もはや正気ではいられない。瑠璃が死にものぐるいで作り上げてきた覇道財ざい閥ばつ総そう帥すいという虚きよ像ぞうは粉こな微み塵じんに砕くだけ散り、あとに残されたのは抵抗すらできぬ乙おと女めである。

瑠璃は大おお粒つぶの涙なみだをボロボロとこぼしながら、なけなしの力を振り絞しぼって悲鳴を上げていた。

+

九郎とアル、そしてウィンフィールドの三人は、廊ろう下かを猛もう然ぜんと疾しつ走そうしていた。

周囲には警備員の屍しかばねが累るい々るいと横たわっている。しかもその死体のすべてが鋭えい利りな刃は物もので斬きられたかのように両断されていた。まっぷたつになっていたのは、それだけではない。床ゆかに散らばっている銃じゆう弾だんまでもが縦に分断されていた。

「こいつは、ただごとじゃねえぞ」

「急ぎましょう！」

魔術師マギウスとなった九郎はともかく、全速力で駆かけているにもかかわらずウィンフィールドの息はまったく乱れてはいない。そのことから、かなり体を鍛きたえていることが判わかった。

九郎の中で、不快な感覚が急激に強まっている。五感、そして第六感までもが鋭えい敏びんとなり、様々な情報を彼へと伝えてき

た。そのどれもが緊きん急きゆう事態であることを告げている。

「九郎、来るぞっ！」

　アルが叫ぶのと同時に、その男は姿を現した。

　九郎とウィンフィールドは前足をつっぱらせて急制動をかけると、油断なく身構える。

　二人の前に立ちふさがったのは、黒装束に身を包んだ浪ろう人にんふうの男だった。腰こしに差した二本の刀は、彼が武人であることを示している。肌、髪かみ、体型などから九郎と同じアジアの血を引くものであり、そのことから彼が武士であると推察できた。

　彼が発する気配は人間のそれでない。全身から発せられている気は鋭利な刃やいばを彷ほう彿ふつとさせ、氷のように冷たい瞳ひとみには狂気という名の炎が満ちている。だがその炎は赤く燃えさかる業ごう火かではない。極限にまで高められた炎は青白く、波は紋もん一つできない湖面のごとき静けさである。

　プレッシャーも尋じん常じようではなかった。少しでも隙すきを見せようものなら、刀で一刀両断にされてしまうだろう。存在感においてはマスターテリオンには及およばないが、闘とう争そう本能はそれに匹ひつ敵てきする。

「お主だな？　『死し霊りよう秘法』に選ばれた妖よう術じゆつ師しは」

「そういうてめぇは、ブラックロッジのクソ野や郎ろうか」

「クソ野郎とはご挨あい拶さつだが―。拙せつ者しやはティトゥス。『黒きブラツク聖域ロツジ』の信徒にして『逆アン十チク字ロス』の末席に名を連ねる者なり」

　ティトゥスの話にウィンフィールドの表情が険しくなる。

　アンチクロスの名めい称しようは九郎も知っていた。ブラックロッジの幹部にして最悪の魔術師。マスターテリオンに従う『七つの頭』の総そう称しようである。

「大幹部様が出ばってくるとはご苦労なこった。で、他の連中はどこに行った!?」

「手勢などおらぬ。我等は単独での作戦遂すい行こうが可能ゆえ」

「つまり、貴方あなた一人で彼らを皆みな殺ごろしにしたと？」

　ウィンフィールドの口調は静かだが、その実、怒いかりに打ち震ふるえていた。

　そんな馬鹿なとは思った九郎だが、魔術師の力とはそういうものだとも理解していた。なまじ魔ま術じゆつなど扱あつかえるようになったせいか、彼にはそのことがよく解わかる。

「連れが一人いるが、今ごろは覇道瑠璃を押さえているところだろう」

「クッ……」

　ウィンフィールドの顔が悲痛なまでに歪ゆがむ。

（だとしたら、こんなところで油を売ってる場合じゃねぇ）

「このような児じ戯ぎに等しい任務など、拙者が出ばるまでもなかったが―」

　ティトゥスは腰を落とすと、刀の柄つかに手を添そえた。間合いに入れば、いつでも抜ばつ刀とうできる体勢―すなわち居合いである。

「さぁ、相手をしてもらうぞ。死霊秘法の主よ。我が身を蝕むしばむ渇かつ望ぼうを満たし、究極の決けつ闘とうの先にある至高の輝かがやきを見せてみろ」

　ティトゥスの目が、猛もう禽きん類るいのそれに変わっていく。

「チッ！　やるしかねぇのか」

　九郎が身構え、覚かく悟ごを決めたときだ。ウィンフィールドが一歩前に進み出た。

「時間がございません。この場は私に任せて、大十字様はお嬢じょう様さまの下へ」

「馬ば鹿かなこと言ってんじゃねえ！　悪わりぃけど、あんたがどうこうできる相手じゃない」

「左様。弱者の血で決闘を穢けがしたくはない。無用な殺せつ生しようは好まぬ。去いぬがよい」

　ティトゥスは常人ならば身動きできなくなるほどの殺気を放つが、ウィンフィールドは動じることなくネクタイを弛ゆるめている。しかもその顔には不敵なまでの笑えみさえ浮うかべていた。

「……執しつ事じさん？」

「大十字様。お嬢様にＳＰがついてない理由をお考えになったことはありますか？」

「えっ？」

「超ちよう人じんに至る道は、魔術師だけではないということです」

　そう言うと、ウィンフィールドは九郎に目配せをする。

「芸術の域にまで鍛え上げた戦せん闘とう技術──この自うぬ惚ぼれ屋に教授してみせましょう」

「しかし……」

　ためらう九郎の耳を、アルが引っぱった。

「九郎、時間がない。ここは従者に任せるとしよう。それにこの男、意外にやるかもしれぬ」

「またそんな無責任なことを」

　九郎は呆あきれるが、ウィンフィールドは満足げにうなずいていた。

「お嬢様の部屋は、この先をまっすぐ行ったところでございます」

「解った。死ぬなよ、執事さん！」

　迷いがないわけではない。だが九郎は決断した。

　ウィンフィールドの決意を無む駄だにはできなかったのである。

　九郎は猛もう然ぜんと駆かけ出した。

　身構えるティトゥスの脇わきを一いつ瞬しゆんにして通り抜ぬけ、疾しつ駆くする。

　ワンテンポ遅おくれてティトゥスの制止する声が聞こえてくるが、九郎が振ふり向くことはない。

（──待ってろ、姫ひめさん！）

+

　目だけで九郎を見送ったウィンフィールドは、息を静かに吐はき出した。

　呼吸は少しも乱れていない。迷いもない。心は澄すみ渡わたり、限りなく透とう明めいへと近づいていく。

　眼前の敵の一挙手一投足──いや、筋肉のわずかな動きですらも感じられるまでに集中力は高まっている。ウィンフィールドはティトゥスの力を侮あなどっているわけではなかった。むしろ畏い怖ふにも似た感情すら抱いだいている。

（しかし―。大おお旦だん那な様ほどではない）

　覇道に仕える以前のウィンフィールドは血気盛さかんで、アーカムシティでも有名な荒あらくれだった。ボクシングで鍛きたえた体から繰くり出される神速の拳こぶしは銃じゆうより凶きよう悪あくであり、一晩で街の猛も者さを百名のした話は伝説になったほどである。そんな彼の辞書に『敗北』の二文字は書かれてなかったのだが……。どこからともなくやってきた老人に、その二文字を刻みこまれてしまったのである。彼の拳は老人にかすりもせず、気がついたときにはベッドの上だった。そのときの老人こそ後の主人となる覇道鋼造であり、ウィンフィールドの師ともなる人物である。

　ティトゥスは舌打ちすると、ウィンフィールドに背を向けた。

「お待ちなさい。貴方あなたの相手は、この私だと申し上げたはず」

　ウィンフィールドの動きは、ティトゥスのさらに上を行っていた。

　彼は神かみ業わざとしか思えぬほどの素す早ばやさで先回りし、ティトゥスの前に立ちはだかる。

「―ふん」

　ティトゥスは一いつ喝かつと同時に抜刀し、刃やいばが光の軌き跡せきを描えがいていく。だがそれは空を切った。ウィンフィールドは必要最小限の動きでそれをかわすと、口元に笑みを浮かべる。

「それが抜刀術というものですか。確かに恐おそるべき速度です。ですが、見切れぬほどでもない」

「お主……」

　ティトゥスは後ろへ飛び退のき、刀を鞘さやへと収める。

「久々に熱くなれそうですね」

　ウィンフィールドは上着を脱ぬぎ捨てた。

+

九郎は猛もう烈れつな勢いで飛んでいた。

血の臭においが濃こくなっていく。肌はだにまとわりつくような高密度の臭いが、九郎の感覚を麻ま痺ひさせていた。それは吐き気すら失うせてしまうほどである。血の臭いはいよいよ濃くなり、やがてそれに酷ひどい汚お物ぶつの臭いが加わった。不快指数は極限にまで高まっている。

廊ろう下かは血の海だった。絨じゆう毯たんは赤黒く染まり、吸収しきれなかった血液が血だまりとなって点在している。壁かべと天てん井じようはペンキで塗ぬったかのように赤一色で彩いろどられ、しかもあちらこちらにミンチ状の肉片が飛び散っていた。まるで巨きよ大だいなミキサーで人間を粉ふん砕さいしたかのような凄せい惨さんな状じよう況きようである。窓から射しこんでくる夕日が、その血肉をより生々しく見せていた。

距きよ離りにして百メートルほど飛んだとき、九郎の聴ちよう覚かくが女性の悲鳴を捉とらえた。それはようやく見えてきた廊下の突つき当たりから聞こえてくる。そこが瑠璃の部屋に違ちがいなかった。

九郎はさらに速度を上げ、突き当たりにある開け放たれた扉とびらを潜くぐり抜けていく。

そこには瑠璃がいた。彼女はピエロのような衣い装しようをまとった道化師に組み敷しかれ、泣き叫さけんでいる。豪ごう奢しやなドレスは袖そでを残してはがされており、ほぼ全ぜん裸らに近い状態だった。

九郎は入ってきた勢いそのままに、その道化師に蹴けりを入れる。それは軽々と吹ふき飛び、反対側にある壁へと向かって突とつ撃げきしていく。道化師は壁に激げき突とつし、めりこんでいた。

九郎は涙なみだで顔をクシャクシャにした瑠璃の体を引き起こした。

「ギリギリセーフ、ってとこか」

　九郎は瑠璃の目線に合わせるように片かた膝ひざをついた。

「大だい丈じよう夫ぶか、姫さん？」

　いまだ茫ぼう然ぜん自失でいる瑠璃の肩かたを揺ゆさぶり、声をかける九郎。二、三回、体を揺すり、軽く掌てのひらで頬ほおを叩たたくと、ようやく彼女の目に生気が戻もどり始めた。瑠璃の目が、九郎へと向けられる。

「これから、あいつをぶっ潰つぶす。危ないから、姫さんは後ろに下がってな」

　九郎は瑠璃にうなずいてみせると、その頭をなでた。

「あっ……」

　ぴくんと、瑠璃の体が反応を示す。

　九郎は今一度、瑠璃の頭をなで、後ろに下がるように命じて立ち上がった。

「あ～ら、誰だれかと思えば九郎ちゃんじゃない☆」

　道化師は壁にめりこんだ体を引きはがす。

「てめぇもアンチクロスか」

「あらぁ？　アタシのこと知ってるのねん？　ってことは、ティトゥスに会ったのかしらぁ？」

　道化師は五体の機能を確かめるかのように、首と腕うでをグルグルと回し、屈くつ伸しん運動を始める。

　まるで緊きん張ちようを感じさせない行動だったが、九郎は油断することなく身構えていた。

「まったく、敵を取り逃にがすなんて厳げん罰ばつものよぉ！　大導師にチクらないといけないわね」

　道化師は腰こしに手を添そえ、「ぷんぷん」とつぶやいている。

「そうよぉ。アタシはアンチクロスの一人・ティベリウス。よろしくね、九郎ちゃん☆」

　ティベリウスは親しげに話しかけてくるが、そこに親愛の情など欠片かけらもない。悪意と狂きよう気きに満ちた強きよう烈れつな殺意を九郎へと放っていた。

「瑠璃ちゃんを女にしてあげるところだったのに、とんだオジャマ虫さんねっ！」

　ティベリウスの両手に、かぎ爪づめが出現する。それが体に触ふれたらどうなるのか、想像するのは難しくはない。廊下に散らばっていた肉片が、そのことを雄ゆう弁べんに物語っていた。

「九郎、くるぞっ！」

「ああ、わかってる」

　だが、具体的にどう対処するべきかまでは考えてはいなかった。

「九郎、これを使え」

　問うまでもなく、それは九郎の手の中に現れた。

　それは一ひと振ふりの大刀だった。弓を張ったような月形の刃で、一メートルはあろうかという大きさにもかかわらず、重さはほとんど感じない。

「これは……!?」

「バルザイの偃えん月げつ刀とうだ。賢けん人じん・バルザイがハテグ＝クラ山頂にて鍛きたえ上げたとされる刀だ。今の汝なれであれば、使いこなせるだろう」

「よくわかんねーけど、やってやらーっ！」

　九郎はバルザイの偃月刀の感かん触しよくを確かめるかのように、それを数回、振ふるった。バルザイの偃月刀は空気抵てい抗こうをものともせず、むしろそれすらも切り裂さくほどの切れ味である。

　ティベリウスは長く伸のびた鋭するどいかぎ爪を見せつけると、体を回転させ始める。それは刃は物ものがついた巨大な独楽こまのようなもので、不規則な軌き道どうを取りながらも確実に九郎との距離を詰つめてくる。だがそれは捉えどころがなく、九郎の目を幻

げん惑わくさせた。

　不意にティベリウスとの距離が縮まる。九郎は即そく座ざに翼つばさで守ったが、ティベリウスのかぎ爪によってその一部は引き裂かれてしまう。魔導書のページが宙へと舞まい、体勢を崩くずされた九郎は尻しり餅もちをつく。しまったと思ったときには、ティベリウスは彼の目の前にいた。

「さよなら、九郎ちゃん☆」

　かぎ爪が九郎の心臓へと向けられ、そして突き出される。それは寸分違たがわぬ正確さで心臓を剔えぐりにくるが、九郎は冷静に翼を復元させ、側面からティベリウスの顔面を打ちすえた。

「ぎっ、ギャアぁぁぁっ！　顔がぁ、アタシの美しぃ顔がぁぁ!!」

　ティベリウスはひび割れた仮面を両手で押さえつけながら悲鳴を上げる。

　九郎は手にしたバルザイの偃月刀を横に一いつ閃せんした。それは一いつ瞬しゆんの出来事である。九郎の意を汲くみ、刃やいばが煌きらめいたときには事は終わっていた。

「なっ？　なんですってっ!?」

　ティベリウスの体は横にスライドし、上下に分かれた。

「意外にあっけなかったけど……どうにかなったな」

　床ゆかに沈しずむティベリウスの亡なき骸がらを眺ながめながら、九郎はホッと息をつく。

「うむ。汝もなかなかやるようになったではないか。この調子なら、何十年後かにはマスターテリオンにも勝てるやもしれぬな。うむうむ」

　アルはしきりに感心していたが、こんな調子で何十年後まで生きていられるか疑問を感じずにはいられなかった。九郎は溜ため息をつきながらティベリウスに背を向けると、部屋の隅すみで呆ぼう然ぜんとしている瑠璃の下へと歩み寄った。

「大丈夫か、姫ひめさん？」

などと口にしてみた九郎だが、ひどい有様だった。

目は泣き腫はらして赤くなり、手入れされた髪かみは血と埃ほこりとよく判わからない液体で汚よごされている。露ろ出しゆつした白い肌はだには、いくつか青アザも見受けられた。今の瑠璃には覇道財ざい閥ばつ総そう帥すいとしての威い厳げんはまるでない。それらはドレスと一いつ緒しよに引きはがされてしまったかのようだ。

「怖こわい思いをさせちまったけど、終わったぜ」

九郎が努めて明るい口調で勝利宣言をした、そのときだ。瑠璃の表情が崩れた。ヤバイと思ったときには手て遅おくれで、瑠璃は信じられないくらい大おお粒つぶの涙をボロボロとこぼし始めた。

九郎はティベリウスを相手にしたときより慌あわて、助けを求めてアルへと目を向ける。

「こっちを見るな。妾わらわの知ったことか」

アルは無責任にもそっぽを向いた。

「まいったな」

九郎は大いに困こん惑わくし、それでもなんとかしようと瑠璃の頭に手をのせた。そして子供でもあやすかのように、頭を何度も何度もなでつける。それが功を奏したのか、瑠璃は少しずつ落ち着き始めた。九郎は溜め息をつき、安あん堵どする。

不意に九郎は瑠璃と目が合った。純じゆん粋すいで、まっすぐな瞳ひとみで見み据すえられた彼は、くすぐったいような気まずいような不可思議な気持ちになって視線を外したのだが……。そこには、もっと気まずい光景が展開されていた。意識せずにいたのが不思議なくらいなのだが、瑠璃は裸はだか同然だったのである。九郎は激しく動どう揺ようし、手足をバタバタさせながら目を逸そらしたが、それがいけなかった。瑠璃はハッとした表情をすると、自分の姿を眺め見た。その途と端たん、彼女の顔は熟した果実のように真っ赤になった。

「のんびりしている場合か。敵は一人ではないぞ。従者のことを忘れるな」

「そうだ、執しつ事じさんを助けに行かないと」

　九郎が和なごんでいる間にも、ウィンフィールドはティトゥスと戦っているのだ。一刻も早く彼の下へと駆かけつける必要があった。再び九郎の思考は臨戦モードへと切り替かわっていく。

　偃月刀の柄つかを握にぎり、気を引き締しめたときだった。

「……だ、大十字さん！」

　瑠璃の目が驚きよう愕がくの色に染まる。頬ほおは引きつり、声と体は無む惨ざんなほど震ふるえていた。

　九郎の全身に悪お寒かんが走り抜ぬける。それと同時に、突つき刺ささるような殺気と狂きよう気きに満ちたどす黒い気配が辺りに垂れこめた。ハッキリと判わかる死の気配。その理由を悟さとり、振り向こうとした九郎だが、すでに手遅れだった。

「ガハッ！」

　背中を貫つらぬく焼けるような感覚。なにかが突き刺さったのは理解できたが、不思議と痛みは感じない。ただそこは焼きごてでも当てられたかのように熱かった。胃の中に溜まった鮮せん血けつが、食道を伝って九郎の口から吐はき出される。それは瑠璃の体に降りそそぎ、彼女の体を汚した。

「九郎ちゃん、やってくれたじゃな～い？」

　振り向くと、ティベリウスは分断された下半身に上半身を載のせている最さ中なかだった。まるでマジックでも観ているような感じだったが、そこにはタネも仕し掛かけもない。体からはみ出した無数の腸管は触しよく手しゆのようにのたうちまわり、やがてそれは上半身と下半身を絡からめて融ゆう合ごう、全身を固定していく。

「おっとっと、それ、返してちょうだいね。それがないと、体が引き締まらなくてね」

　ティベリウスが指をパチンと鳴らすと、九郎の背に突き刺さっていた白く細長い棒が体から引き抜かれ、ティベリウスの手へと戻もどっていく。それは肋ろつ骨こつだった。

　九郎の口から大量の血液が吐き出される。確かく認にんするまで

もなく出血量は普ふ通つうではない。体からは力が抜け落ち、意識が遠のいていく。目には白い霞かすみがかかり、死ぬとはこういうことかと変に納なつ得とくしてしまうほどだ。九郎の体が前へと傾かたむいていく。足で踏ふん張ろうとするのだが力が入らず、彼は自分が流した血の海に沈んだ。

「く、九郎っ！」

　アルが頬を叩たたくのが判る。

　九郎は床に手をついて力をこめるが、血で手が滑ぬめり、したたかに顔面をぶつけてしまう。

「大十字さん！　大十字さんっ、しっかりしてくださいましっ！」

　瑠璃は血まみれになるのもいとわずに、九郎の側そばにしゃがみこむと、彼の体を揺ゆさぶった。

「あらやだ、無様ねぇ。そんなんじゃ、女の子にモテないわヨ☆」

　ティベリウスは手にした肋骨を体の中に戻した。

「そうか、汝なれ、死んでおったのだな」

　アルは口くち惜おしげにティベリウスをにらみつける。

　ティベリウスの仮面の奥に隠かくされていた素す顔がお。それは人間のそれではなかった。腐ふ敗はいし、半ば白骨化したそこには、何十匹ぴきもの蛆うじが残された肉を求めて蠢うごめいている。くぼんだ眼がん窩かは、奴やつらの格好の棲すみ処かとなっていた。

「そのとーリヨ。アタシはね、不死を手に入れたの。【妖デ・ウ蛆エルミのス・ミ秘ステリ密イス】の力でね」

　ティベリウスは体の中に手をつっこむと、そこに隠していた一冊の本を誇ほこらしげに掲かかげた。鉄の表装がついた黒い大冊は蛆でまみれていたが、それが魔導書であるのは一目瞭りよう然ぜんである。

「おしゃべりはおしまいネ。そろそろ、さっきの続きでも始めましょっか☆」

　ティベリウスは体の中から触手にも似た腸管を伸のばすと、瑠璃の体を絡からめ取って引き寄せた。

「いやぁぁぁぁぁぁっ！」

　瑠璃は絶望的な悲鳴を上げながら、ティベリウスの魔の手から逃のがれようと懸けん命めいに暴れまくる。だが彼にとってはそれも楽しみの一つなのか、ケタケタと半ば削そげ落ちた頬の肉を緩ゆるめながら耳みみ障ざわりな笑い声を発した。

　ティベリウスは腸で瑠璃の両手首を縛しばり上げると、彼女の首筋に長く伸びた舌を這はわせる。

「いやぁ！　気持ち悪い！」

　ティベリウスの舌は瑠璃の首筋から胸へと移動していく。

（クソッ！　こんなところで眠ねむってる場合じゃねぇ……）

　九郎の意識は途と切ぎれてはいなかった。かすむ目で瑠璃が嬲なぶられている姿を見つめていた九郎は、悔くやしさで頭がどうにかなってしまいそうだった。

「おのれ、下げ衆すめが！」

　アルは小さな肩かたを怒いからせると、ティベリウスへと突とつ撃げきしていく。

「おやおや、アルちゃんもアタシに犯やられたいのかしらぁ？
ちょっと待っててね。アタシってば、すぐ終わっちゃうから、お待たせしないと思うわよ☆」

　ティベリウスは特とつ攻こうしてくるアルの体を指先で弾はじいた。たったそれだけのことだが、今のアルには十分である。彼女は空中でクルクルと回転しながら九郎の体に落ちてきた。

（ちくしょう……ちくしょうっ！　動きやがれっ！　動けっっ!!）

　九郎は全身に力をこめていく。だが彼の意に反して、力は思うように筋肉へと伝わらない。だが意識が薄うすれゆく中で精神だけは鋭えい敏びん化かし、意志の力は増大していく。

（執しつ事じさんは……俺を信じた。応こたえなくちゃならねぇ、その想おもいに！　その俺が、こんなところで──こんなところで、のんびり眠ってるわけには……いかねぇんだよっ！）

　九郎は歯を食いしばり、バルザイの偃えん月げつ刀とうを杖つえの代わりにして立ち上がった。その姿は、さながら幽ゆう鬼きである。満身創そう痍いの彼の体からは血の気が失うせ、漂ただよう気配は死の臭においばかり。棺かん桶おけに片足を入れているような状じよう況きようである。だが、その目は死んではいない。今にも途切れそうになる意識を必死につなぎ止めながらも、その瞳ひとみだけは強きよう烈れつな光を放っている。

「いいかげんに……いいかげんにしやがれ、この腐ふ乱らん死体野や郎ろうっ！」

　九郎は叫さけぶと同時にバルザイの偃月刀をティベリウスへと投げつけた。それはブーメランのように激しく回転しながらティベリウスへと向かって飛んでいく。

「アンタもしつこいわねぇ。しつこいオトコはモテないわヨ？」

　ティベリウスはバルザイの偃月刀を避よけたが、瑠璃の体を捕とらえていた腸の回収までには至らなかった。最初からそれに的を絞しぼっていたかのように偃月刀は腸を切断し、再び九郎の下へと戻ってくる。寸断された腸が、ちぎれたトカゲのシッポのように床ゆかで跳はねた。

「小こ娘むすめ、走れっ！」

　アルの叫びに瑠璃は「はい」と応こたえ、恥はじも外聞もかなぐり捨てて走り出した。

「あぁん、瑠璃ちゃん、待ってぇ～♪」

　ティベリウスの胴どう体たいから消化器官が排はい出しゆつされ、瑠璃を捕とらえようと伸びてくる。だがそれが瑠璃へと届く直前、九郎は偃月刀で消化器官を斬きり捨て、瑠璃を自分の背後へと隠した。

「だ、大十字さん、大だい丈じよう夫ぶですか!?」

「自分でも立っているのが不思議なくらいだけど……あんなクソ野

郎、ほっとけるかよっ！」

　九郎は偃月刀の切っ先をティベリウスへと突つきつける。

「姫ひめさん、すまなかったな。怖こわい思いをさせちまって」

「大十字さん？　今は、それどころじゃ……」

「俺さ、自分のことだけで精せいいっぱいでさ――。姫さんの想おもいにまで頭が回らなかった。デモンベイン、あんなにしちまって悪かったな。許してくれだなんて図ずう々ずうしくて言えやしねえが……。とにかく俺もケジメだけはつけさせてもらうぜ。このクソ野郎をブッ殺す！」

　バルザイの偃月刀を握にぎる手に力がこもる。

「ずいぶんと威い勢せいがイイじゃない？　死にかけの分際で」

「黙だまれ！　肥こえ溜だめの汚お物ぶつ野や郎ろう！」

　九郎はバルザイの偃月刀を片手にティベリウスとの間合いを一気に詰つめる。

「おバカさん♪　そんな体でアタシを殺やれると思って？」

　ティベリウスは両手のかぎ爪づめで九郎の体を引き裂さいた――はずだった。だが九郎の動きは、それよりも速い。ティベリウスが裂いたのは彼が残した虚きよ像ぞうだった。九郎はティベリウスの体を斬った。何度も何度も。ティベリウスの体が分断される前に次の一ひと太た刀ちを、そしてさらに次の一太刀を加えていく。何十回、何百回と繰くり返し、やがてティベリウスの体は意味のないモノへと変わっていく。そう。腐くさったミンチのように。

「が、がああああああああああっっっ！　嘗ナメルナァァァァァァァ餓ガ鬼キィィィィィィィ！」

　断だん末まつ魔まとも取れるティベリウスの叫びが響ひびいたかと思った途と端たん、巨きよ大だいな質量を持ったなにかが部屋の一部を押し潰つぶした。それが鋼鉄の腕うでであると気づくのに、そう時間はかからなかった。

「鬼械神・ベルゼビュート！　暴食せよ！」

+

　ウィンフィールドとティトゥスの戦いは激化の一いつ途とをたどっていた。

　二人に無む駄だな動きはまるでなく、あまりにも完かん璧ぺきすぎるがゆえに、その光景は完成度の高い殺陣たてのようでもある。互たがいに必殺の一いち撃げきを繰り出し続け、それを紙かみ一ひと重えで見切ってかわしていく。命の駆かけ引きをしているにもかかわらず、それはまるで芸術作品のようだ。

　ウィンフィールドは小刻みなフットワークを駆く使ししてティトゥスを翻ほん弄ろうしつつ、様々な角度から拳こぶしを繰り出していく。対するティトゥスは二刀流でそれに応じる。互いに一歩も退ひかず、命という名の火花を散らしながらぶつかり合う。ウィンフィールドのアッパーカットを避けたティトゥスは、初めて後ろへと飛び跳ねて間合いを取った。

「お主、ウィンフィールドと申したな」

「それが、なにか？」

「認めよう。そして、謝罪しよう。お主を侮あなどっていたとを……。まさか、これほどの猛も者さと巡めぐり逢あえるとはな。これならば拙せつ者しやは闘たたかいに身を灼やくことができる。感謝する、戦士よ」

「礼には及およびません。私は私の職務を忠実に果たすのみ。この拳のすべてはお嬢じよう様さまのために」

「その精神、我が故郷では『忠』と呼ぶ。なるほど、信念が支える肉体のなんと強きよう靭じんなことか……」

　会話はそこで途と切ぎれたが、二人に言葉は必要ない。拳と刀があれば会話は成立する。

　再び二人が相まみえようとした、その瞬しゆん間かん。邸てい内ないが激しく揺ゆれ、二人の動きが止まった。

「これは……いったい!?」

　窓から垣かい間ま見みえたその光景に、ウィンフィールドは戦せん慄りつした。

　そこに巨大なロボットの姿を見たからである。しかもそのフォルムはブラックロッジの破は壊かいロボットのものではない。人ひと形がたの巨きよ人じんである。だがデモンベインが発するような神こう々ごうしさはまるでなく、埴はに輪わを連想させるようなずんぐりとしたその体型は、一見、滑こつ稽けいにも見えた。だが全身から発せられる邪よこしまな気配は、思わず目を背そむけたくなってしまうような醜しゆう悪あくさである。

「ティベリウスめ、鬼械神を召しよう喚かんしおったか。存外に苦戦しているではないか」

　ティトゥスは鼻で笑う。

　だがウィンフィールドは笑ってなどいられない。鬼械神は最高位の魔導書が召喚する造られし神である。破壊ロボットとは格が違ちがいすぎた。しかも最悪なことに、鬼械神が降り立った場所は瑠璃の部屋である。ティトゥスの相手をしている場合ではなかった。

「お嬢様！」

　ウィンフィールドは駆け出そうとするが、ティトゥスがそれを許さない。

「拙者を相手に背を向ける愚ぐを、理解できぬお主でもあるまい？」

「……貴様！」

「他ほかがどうなろうと知ったことではない。あるのはただ、お主と向かい合うという事実のみ」

　そこにいたのは、修しゆ羅ら道どうに足を踏ふみ入れた者の姿である。

「あの美しい戦場を前にして、それ以外のなにを求めるというのか。お主も戦士なら戦いの価値を正しく理解せよ」

「話し合いというわけには、いかないようですね」

　ウィンフィールドが覚かく悟ごを決めて身構えた、そのときだ。彼の背後から、ロボットにも似た機械的な声が聞こえてきた。

《誰だれもがおまえと同じ価値観を持っているとは思わぬことだ。大罪人よ》

　ウィンフィールドは振ふり返るまでもなく理解した。背後に感じる力強い存在感は、アーカムシティの守護天使・メタトロンである。

「拙者を大罪人と呼ぶのであれば、お主もよほどの大罪人よ。それが天使王とは片腹痛い」

　不意の珍ちん客きやくに対しても、ティトゥスの表情に変化はない。油断なく身構えたその姿には、隙すきなどなかった。

《現世に蠢うごめく悪あつ鬼き亡もう者じやを狩かりたてるのは天使の役目。天使の名は、自らに課した誓ちかいだ》

　メタトロンの腕から白いビームセイバーが現出する。

《それよりも、どうする？　戦いを続けるのであれば、私も相手をするが？》

「同時に相手するほど自うぬ惚ぼれてはおらぬ」

　ティトゥスは二本の刀を鞘さやに収めると、ウィンフィールドとメタトロンに背を向け、悠ゆう然ぜんと歩き始めた。だが数歩と進まぬうちに足を止め、振り向いた。

「戦士・ウィンフィールド。決着は次の機会に」

　ティトゥスはそれだけを言い残し、姿を消した。

「メタトロン様、助かりました」

　ウィンフィールドはメタトロンへと向き直り、頭を下げる。

「きちんとしたお礼は、また後ほど」

《ああ。急げ》

　ウィンフィールドはメタトロンがうなずくのを確かく認にんするやいなや、駆け出していた。

+

　瑠璃は九郎の背に隠かくれ、ただひたすら縮こまっていた。

　現実離ばなれした出来事の連続に、頭は麻ま痺ひするかのように痺しびれている。今も目の前では非現実的なことが起こり続けており、瑠璃を恐きよう怖ふと狂きよう気きの世界へ引きずりこもうとしていた。

　バルザイの偃えん月げつ刀とうで肉につ塊かいと化していたティベリウスは早くも修復し始め、様々な触しよく手しゆが複雑に絡からみ合いながら元の姿を形作り始めている。不死を手に入れたというティベリウスの話に、嘘うそはなかったのだ。それだけでも正気を保てなくなるほどの由ゆゆしき事実だったが、それに加えて鬼械神まで現れていた。いっそのこと絶望し、心が砕くだけ散ったほうが楽なほどである。

　足がすくんでいた。先ほどから体の震ふるえが止まらず、意識を集中しないと全身がバラバラに崩くずれてしまいそうだった。そんな状じよう況きよう下かにもかかわらず、九郎は立っていた。死んでもおかしくないほどの怪け我がを負いながらも、ティベリウスに立ち向かおうとしていた。最強の魔導書を得て魔ま術じゆつ師しになったとはいえ、つい先日までただの三流探たん偵ていでしかない彼が、である。

　瑠璃は思い知った。自分がいかに安全なところで吠ほえていたかを。九郎が体験したであろう狂気の数々を。そして、デモンベインなくして立ち向かうことなどできない事実を──。今ならアルの話も理解できる。デモンベインは戦うために生まれてきた存在であり、戦うからには傷つきもするし壊こわれもする。ブラックロッジの魔術師を相手にするとなれば、なおさらである。

「痛かったワ。痛かったわよ、大十字九郎！　アナタにはおしおきが必要ね！」

　ティベリウスは腐ふ敗はいした顔に憤ふん怒ぬの表情を浮うかべると、鬼械神・ベルゼビュートへと吸いこまれていく。ベルゼビュートの巨きよ大だいな手が、振り上げられた。

「チッ……。もう、メチャクチャだっ」

　九郎は叫さけぶと、瑠璃を抱だきかかえて空へと舞まい上がる。ベルゼビュートが部屋に大穴を空けたおかげで、逃にげ出すのは容易だった。

　腕うでで支えられているので落ちる心配はなかったが、空など飛んだことがない瑠璃は反射的に九郎の体にしがみつく。そのとき、瑠璃は妙みように懐なつかしい気持ちになっていた。生死に関かかわる緊きん急きゆう時じの中にあって、包まれるような安心感……。だが、それも一いつ瞬しゆんのことだった。

　九郎が呻うめいたかと思うと、急激に高度が落ちていく。翼つばさが何度も羽ばたいていたが、その速度は緩ゆるまることなく、地面が急速に近づいていた。翼の羽ばたきは激しさを増し、生み出された突とつ風ぷうで落下速度は落ちていくが、それでも激げき突とつは免まぬがれそうもなく、瑠璃は九郎に抱きかかえられたまま地面へと落ちていた。激しい衝しよう撃げきが彼女の体に襲おそいかかってはきたが、九郎がクッションの代わりになってくれたせいか外傷はなかった。

「悪わりぃな。ちょっとしくじった」

　九郎は真っ青な顔に自じ嘲ちようの笑えみを浮かべると、瑠璃と一いつ緒しよに自分の体を引き起こした。

　瑠璃が九郎の体に回していた手を外したときだ。彼女はぬめるような感覚と、自分の手が真っ赤に染まっていることに気がついた。

「傷口が開きおったか！　だから無茶はできんと言うたのに！」

「ああ、さすがに意識が遠のいたぜ。もう少しで姫ひめさんと一緒にあの世行きだったな」

「呑のん気きなことを！　これ以上の出血は、いかに魔術師とて死に至る」

「そうは言っても、向こうは許しちゃくれねえだろ？」

　ベルゼビュートへと目を向けながら、九郎は吐はき捨てる。

「ま、まだ戦おうとしているのですか？　大十字さん！」

「すまねぇな……。またデモンベインを貸してもらう」

「そ、そんなことを言ってる場合ではありません！　この場は逃げるのですっ！」

　瑠璃が訴うつたえるが、九郎は首を縦に振ふろうとはしなかった。

「このままじゃ、俺の気がすまねぇ」

「そんなくだらん理由で無茶をするな。小こ娘むすめの言うとおり、ここは退ひくのだ」

「冗じよう談だんじゃねえ。あんなイカれた野や郎ろうを放置しておけるかっ！」

　そう言うと、九郎は瑠璃の頭に手をのせた。

「それに、ここで逃げ出したら後味悪ぃじゃねーか。もう、後こう悔かいするのは嫌いやなんだ」

「そ、そんな。駄だ目めです！　だって、血がっ！　こんなに血が出ているのですよっ！」

「死なねぇよ」

　九郎は瑠璃の頭をなでると、バルザイの偃月刀を杖つえの代わりにして立ち上がった。

　そのとき瑠璃は、なぜ自分が懐かしい気持ちになったのかを正しく理解した。九郎の手は、祖父・鋼造の手の温ぬくもりと似ているのだ。喜び、怒いかり、悲かなしみ……そのすべてを受け止めるような、そんな温もりに満ちた手をしていた。

　両親の葬そう儀ぎの日。すべてが終わったあとで、瑠璃は祖父に訊たずねていた。

『なんで……こんな酷ひどいことが許されるのですか!?　神様は、

この世にいないのですか!?』

　それは無力だった瑠璃がありったけの力でぶつけた、無む垢くで、痛切で、ちっぽけな憎ぞう悪おの言葉。鋼造は、その憎悪も受け止めていた。そして黙だまって瑠璃の頭をなでたのだ。節くれだった、だけれども大きく、暖かな掌てのひらで。九郎の掌の温もりは、そんな祖父と似ているのだ。

　あのとき鋼造が言った言葉を、今も瑠璃は鮮せん明めいに思い出せる。

『瑠璃……確かに世界は邪じゃ悪あくに犯されているのかもしれない。けれど、その邪悪を憎にくむ正義もまた、確実に存在するのだよ』

　だがそれは、人の心の奥で眠ねむる、小さく、無力な正義に過ぎないことも彼は知っていた。

　しかしその正義が目覚める日が、誰だれかがその手に穢けがれなき剣けんを執とり、邪悪を討うち滅ほろぼす日がやってくるに違ちがいないとも信じていたのだ。だからこそその願いをこめ、鋼造は鋼はがねの巨きよ人じんにあの名をつけたのである。『デモンベイン』と。

『大十字九郎。アンタだけは許さないわよ。もう、ケチョンケチョンにしてやるんだから☆』

　ベルゼビュートが巨きよ体たいを揺ゆらしながら近づいてくる。

「アル！　やるしかねぇ」

　だが決意に反して肉体がついていかないらしく、九郎は片かた膝ひざをつき、忌いま々いましげにベルゼビュートの姿を見上げていた。

『そこでジッとしてなさいよ。今、ペチャンコにしてあげるワ♪』

　ベルゼビュートの両りよう腕うでが高々と振り上げられる。

「九郎。まずい、逃げろっ！」

「く、くそ……」

「だ、大十字さんっ！　早くっ！」

　瑠璃は悲鳴に近い叫びを上げるが、なぜかベルゼビュートの腕が振り下ろされる気配はない。

　九郎とアルも、その異変に気がついた。戦ってもいないのに、なぜかベルゼビュートはもがき苦しむような動きを見せていたのである。

『大導師様!?　ふざけないでよ！　ここまでされて黙って引き下がれと……！　この餓が鬼きはアタシがこの手で……』

　怒ど気きをはらんだティベリウスの声。だが、それも長くは続かない。

『ははははははハイィィィィィ！　も、申し訳ございませんっ！　お許しを！　お許しをっ！』

　ティベリウスの声は懇こん願がんへと変わり、それに呼応するかのようにベルゼビュートの影かげが円形に拡大していく。機体は速すみやかに影にのみこまれ、その姿を消し去った。あっという間の出来事で、この場にいる全員、まるで状じよう況きようを理解できない。

「なにがどうなっておる!?」

　アルは困こん惑わくしていた。それは瑠璃と九郎とて同じである。

「大導師がどうのこうのと言ってましたが、それと関係あるのでしょうか？」

「よくわかんねーけど、とりあえずの脅きよう威いは去ったわけだ……」

　九郎がホッとした顔をしたときだ。彼の体はゆっくりと前に傾かたむき、地面へと沈しずんだ。

「大十字さん！　しっかりしてくださいまし！」

　瑠璃の悲痛な叫さけびが周囲に木こ霊だました。

+

九郎は深い深い深しん淵えんのごとき夢の淵ふちにいた。

体は質量をなくしたかのように軽く、夢見心ごこ地ちという言葉がしっくりくるような居心地の良さである。心身ともに傷が深く、あまりにも疲つかれていたせいか、よけいにそう感じるのかもしれない。死んでいるのかもしれないと思うほど、あらゆるしがらみから彼は解放されていた。そんな中で九郎は夢を見ていた。久しく見ることがなかった夢である。

アーカムシティに隣りん接せつする片かた田舎いなかに住んでいた九郎にその手紙が届いたのは、彼が十八歳の時だった。両親を失い、頼たよれる親類もなく、天てん涯がい孤こ独どくの身となった彼が途と方ほうに暮れていた時のことである。手紙の差出人はミスカトニック大学の学長で、大学が提示する条件を受け入れるなら奨学生として迎え入れようという内容だった。さらには奨しよう学がく金きんとして学費の免めん除じよはもちろん、最低限の生活費も支給するとも書かれていた。絶望しかけていた彼にとっては破格の好条件であり、断る理由などどこにも見当たらなかったが、疑問が残ったのも事実である。

なぜ天下のミスカトニック大学が片田舎に住む自分を好こう待たい遇ぐうで迎むかえ入れるのか、九郎はまるで理解できずにいた。両親がミスカトニック大学と縁えんがあったわけではなく、しいて言うなら大学が提示した条件だけである。それは『学科は陰秘学科であること。ただし登録上の専せん攻こうは考古学とし、陰秘学科に関するあらゆることは他言無用』というものだった。

九郎はオカルトかぶれの父親の影えい響きようで、幼い頃ころから神話や黒くろ魔ま術じゆつに関する本に慣れ親しんでいたのである。とは言え、それは趣しゆ味みの域を出ず、母親が呆あきれる類たぐいのものでしかなかったのだが―。

多少なりともオカルトに通じていることをミスカトニックの関係者が聞きつけたのかどうかは定かではなかったが、九郎に断る理由は何一つなかった。あとで知った話だが、この一件はミスカトニッ

ク大学の関係者によるものではなく、ある人物の支し援えんによるものだった。だがその『あしながおじさん』の正体については、誰も教えてはくれなかった。九郎は九郎で挫ざ折せつし、たった二年で『あしながおじさん』の期待に背そむいていたのだが……。

（俺、うぬぼれてたからなぁ）

夢の中にありながら、九郎は苦く笑しようを禁じ得なかった。

陰秘学科で教えるのは魔ま術じゆつである。世界の真理に到とう達たつするための、世界を手中に収めるための、森しん羅ら万ばん象しようの法則を暴あばき、神の領域に立つための理論である。

あのとき九郎は神にでもなった気分でいた。ミスカトニック大学に入学してからの九郎は、順じゆん風ぷう満まん帆ぱんだった。オカルトの知識があったせいか講義は意外にすんなりと理解でき、実際、筋も良かったのである。あらゆる外げ道どうの知識を吸収し続けた彼の位階クラスは順調に上がり、秘密図書館の利用も間近に迫せまっていた。秘密図書館。世界中の、ありとあらゆる魔導書が収められた禁断の間。図書館の利用が認められれば『書』に触ふれることができる。そして、いずれは自らの『書』を手に入れ、九郎は本物の魔ま術じゆつ師しとなるはずだった。本人も、そして彼の恩師・アーミティッジもそれを願い、そしてそれを疑うこともしなかった。だが九郎が抱いだいたなんの根こん拠きよもないエリート意識は、決定的な悲劇を生み出してしまう。

初めて秘密図書館で魔導書の閲えつ覧らんを許された日。九郎は出会ってしまったのだ。あの怪かい異いに。

それは秘密図書館に忍しのびこんでいたウィルバー・ウェイトリイであり、後に『ダンウィッチの怪』として世間を震しん撼かんさせる事件の一部である。ウィルバー・ウェイトリイはアーカムシティの北部にある閉とざされた村・ダンウィッチに住むウェイトリイ家の人間であり、魔ネク導ロノ書ミコンの閲覧を求めてアーミティッジの下を何度となく訪おとずれていた。彼が魔導書でなにを行おうとしていたのかまでは判わからなかったが、アーミティッジの断固とした拒きよ否ひの姿勢から、良からぬことが行われるのだろうという予想はできた。だがまさか、ウィルバーが怪異となって自分の目の前に現れるとは想像もしなかった九郎である。

あの瞬しゆん間かん、九郎の心は砕くだけ散った。無む邪じや気

きに憧あこがれていた神の領域。その正体を知った九郎は、自分がいかに自うぬ惚ぼれていたかを思い知らされたのだ。その後、自分がどうなったのか記き憶おくには残ってないが、ただ一つだけ強く心に刻みこまれたことがある。ウィルバーに襲おそわれたあのとき、九郎は別の怪異にも遭そう遇ぐうしていた。気を失う間ま際ぎわにあって、彼は確かに目に、そして耳にしていた。竜たつ巻まきのように魔導書の紙片が舞まう中、その声は間ま違ちがいなく聞こえてきたのである。

『……まだ早い。まだ出で逢あうには早い。時が来れば、我等は必ず巡り逢う。

　だが、今はまだだ！　まだなのだ！

　今はまだ外道の知識を操あやつる術が、理り不ふ尽じんどもと戦う力が、来きたるべき運命に抗あらがう意志がない！　ないのだ、九郎！』

　九郎が病院で目を覚ましたとき、すべては終わっていた。彼が大学を辞やめる決意をしたのは、それからすぐの話である。当然、アーミティッジは思い止とどまるように説得したが、彼の決意は変わらなかった。あのような理不尽な世界では生きていけなかったし、知識を身につける気にもならなかったのである。九郎の訴うったえをアーミティッジは神しん妙みような面おも持もちで受け入れた。

　だが大学を去る彼に、アーミティッジはこう言ったのである。

『おまえのような人間は、いつか必ずこういうものに立ち向かう時が来ると思うのだ。自分でも気づいていないかもしれんがね』

　今にして思えば、それは予言だったのかもしれない。

『おまえは見てしまったものを見て見ぬふりをしてやり過ごせるほど器用な人間ではないよ』

　九郎は思わず苦笑してしまう。

（不ふ吉きつなことを言ってくれるじゃないか……。もう、あんな世界はご免めんだったんだけどなぁ）

　だが九郎は戻もどってきた。予言どおり、見て見ぬふりができな

かったからだ。マスターテリオン、そしてブラックロッジの暴挙は止めなければならない。そう、九郎は見てしまった。マスターテリオンの、あの笑えみを。魂たましいに焼きついてしまったのだ。あの狂くるった嘲ちよう笑しようが。

それにこれ以上、後味の悪い思いをするのも嫌いやだった。すべてを放ほう棄きして大学から逃にげ出した弱い自分と決別するために、そして、心に住み着いた忌いまわしき過去と決別するために──。

（だから、こんなところで眠ねむっている場合じゃない）

九郎の意識は、緩ゆるやかに回復していった。

+

九郎は見知らぬ部屋で寝ねかされていた。

白い壁かべ、白い天てん井じよう、白いシーツと、白一色で埋うめ尽つくされたその部屋が病室であると気づくまで、そう長くはかからなかった。

「気がついたか？」

ふと横を見ると、そこにはアルの姿があった。いつも小生意気な態度で挑いどんでくる彼女にしては珍めずらしく、不安げな表情である。

「いたのか……」

「魔導書が術者と離はなれるわけにはいくまいて。魔導書を置き去りにする術者はいるがな」

アルは苦笑し、つられるように九郎も苦笑いをする。

九郎は上半身を起こした。体の節々が鈍にぶく痛む。まるで油が切れてしまったかのように、関節が軋きしむような音を立てていた。かなり長い間、同じ体勢を維い持じしていたのだろう。

　そのとき九郎は気がついた。彼のベッドにつっぷして眠っている瑠璃の姿に。

　九郎が目でアルに問うと、彼女は肩かたをすくめた。

「どういうつもりかは知らぬがな。ずっと汝なれの看病をしていたぞ」

「どれくらい寝てた？」

「丸二日ほどか。一時は本当に危険だったのだぞ？　簡単には死なせてもらえぬというわけだ」

「不吉なことを言うなよ」

　九郎とアルの会話で目を覚ましたのか、瑠璃が身み動じろぎをする。彼女は緩かん慢まんな仕草で上体を起こすと、赤く腫はれぼったい目を手の甲こうでこすりながら九郎へと目を向けた。しばらく瑠璃は彼の姿をボーっと見つめていたのだが、不意に目を瞬しばたたかせた。

「だ、大十字さん。気がついたのですか？　体は？　体は大だい丈じよう夫ぶですか!?」

　矢や継つぎ早ばやに質問をぶつけてくる瑠璃に対し、九郎は苦く笑しようしながら「大丈夫だ」と応こたえた。放ほうっておくと、つかみかかってくる勢いだったからだ。

「あの……ありがとうございました。貴方あなたに助けていただかなければ、今ごろわたくしは―」

　ティベリウスに襲おそわれたときのことを思い出したのだろう。瑠璃は自分の体を抱だきしめながら身み震ぶるいをした。九郎も助けることができて良かったと思う。彼女がティベリウスに嬲なぶられたかもしれないと思うだけで、ひどい不快感を覚えるし、怒いかりは沸ふつ点てんに達する。

「わたくし、あれからいろいろと考えました。大十字さんのこと、ブラックロッジのこと、デモンベインのこと……。そして、一つの結論に至ったのです」

　神妙な顔で見つめられた九郎は、思わず気を引き締しめてしま

う。

「大十字さん。デモンベインは、まだしばらく貴方に預けておきたいなと」

　九郎は思わず「えっ!?」とつぶやいた。

「貴方のような人を、お爺じい様は求めていたのかもしれない。小さな、だけど確かにある正義を信じて魔まを断つ剣けんを振ふるう者―それが貴方なのかもしれないと」

「そりゃちょっと買いかぶりすぎのような気も」

　だが瑠璃は確信しているのか、首を横に振った。

「大十字さん、デモンベインをよろしくお願いいたします」

　困こん惑わくした九郎はアルへと目を向けるが、アルはアルで珍しいモノでも見つめるかのような目をしていた。だが、せっかくの申し出である。九郎の返事は決まっていた。

「不ふ肖しよう、大十字九郎！　全力をつくさせてもらいますッ！」

「ふん。最初から謙けん虚きよな態度でいれば良かったのだ。目先しか見えない、人間の小こ娘むすめが」

　アルの挑ちよう発はつに、さっそく瑠璃のこめかみに青筋が浮うかび上がる。

「貴女あなたは本当に不ふ愉ゆ快かいな女ですわね！」

「汝ほどではないがな」

　彼女たちは視殺戦に入り、互たがいに指の骨を鳴らしている。この場で白黒つける気でいるのか、二人はやる気満々だった。だが彼女たちは失念していた。ここが病室であることを……。

　その後、低レベルな肉にく弾だん戦せんが始まり、結局は両者ノックアウトで決着はつかなかったのだが、それによって九郎の退院日が一日ずれたのは語られることのない歴史の一つである。

+

　アウグストゥスは玉座に座るマスターテリオンに詰つめ寄っていた。

　彼は気だるい表情で前まえ髪がみをもてあそびながら、どこかを見つめている。足あし下もとには彼の魔導書・ナコト写本の精であるエセルドレーダがかしずき、足に頬ほおを擦すり寄せている。一見、か弱い少女のようにしか見えないエセルドレーダだが、魔導書としての力はアル・アジフと同程度である。

「大導師。私の話、聞いておられますか？」

「ん？　なにがだ？」

　アウグストゥスに目も向けず、退たい屈くつげに彼は口を開いた。

「ティベリウスの件です！　何故、引き上げさせたのです？　大十字九郎と覇道瑠璃を抹まつ殺さつし、アル・アジフを手に入れる絶好の好機だったはず。何故です!?」

「大きな声を出さずとも聞こえている」

「では、今一度お訊きします。何故、ティベリウスを引き上げさせたのですか？」

「あれは言うなれば遊びだ。目くじらを立てるほどのことでもない」

「あ、遊び、ですか？」

　アウグストゥスは目を見開いた。そのような答えが返ってくるとは思わなかったからである。

「……大導師」

「アウグストゥス、そう怖こわい顔をするな」

「大十字九郎とアル・アジフの件ですが、今からでも遅おそくはありません。一気に叩たたくべきです」

「それでは簡単に片がついてしまうではないか。余の興を削そいでくれるな、アウグストゥス」

　アウグストゥスは二の句が継つげないでいた。

　マスターテリオンの思おも惑わくは、アウグストゥスには計り知れない。合理主義者である彼にとっては、なおさらである。アルの回収にウェストを起用したことにも疑問があるし、マスターテリオンが直々に出向いたときもそうだ。覇道邸てい襲しゆう撃げきに関しても納なつ得とくしてはいない。アウグストゥスにとって、九郎と瑠璃の抹殺など造作もないことなのだ。アルの回収も同様である。なぜそれをしないのか理解不能であり、マスターテリオンへの不信感へとつながりつつあった。

「余の頭たちには、やってもらうことがある」

「……と、おっしゃいますと？」

「Ｃ計画」

　その言葉を耳にした瞬しゆん間かん、アウグストゥスは驚きよう愕がくする。

「確かに星の位置は迫せまってはおりますが……。遂ついに動き出すのですか？」

「貴公等も忙いそがしくなってくるぞ。ウェスパシアヌスに仕事を急がせろ。例のもう一冊はアル・アジフ以上に重要やも知れぬ。他の者も自己の鍛たん錬れんを絶やさぬようにな」

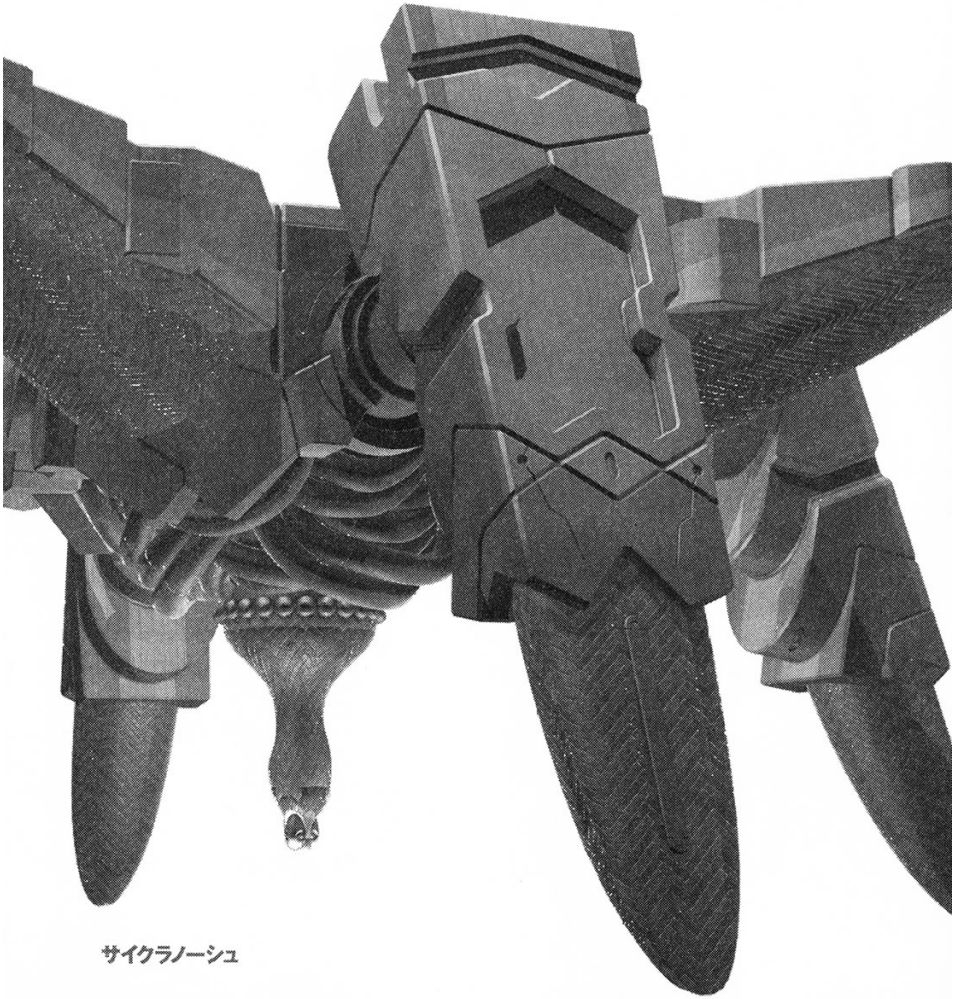
「御ぎよ意い！」

　アウグストゥスは高ぶる感情を抑おさえつけながら、マスターテリオンへと一礼した。

第五章

哀哭（あいこく）せよ。
所詮、
我等は
神ならざる身

ウェスパシアヌス



サイクラノーシュ

祭さい壇だんの間は生なま臭ぐさい魚の臭においと潮しおの臭いで満ちていた。

暗く、湿しめり気を帯びたその空間の中心部には祭壇があり、それを見下ろすように巨きよ大だいな船虫にも似た奇き妙みような彫ちよう像ぞうが鎮ちん座ざしている。そして、それを崇すう拝はいする者たちの姿もまた奇き怪かいだ。祭壇の前で蠢うごめく彼らの姿は半魚人と呼ぶに相応ふさわしく、目は丸く膨ふくらみ、瞬まばたきをしないところなどまさに魚眼である。彼らは数人の女を嬲なぶりながら、呪じゆ文もんにも似た奇妙な言葉を吐はき出している。

そんなおぞましい光景を、にこやかな表情で眺ながめている男がいた。上品な白のスーツに身を包み、その上に外がい套とうをまとった中年の紳しん士しである。か細いステッキが、より紳士らしさを強調しているが、およそこの場に似つかわしくない人物ではある。彼は調えられた顎あご髭ひげを愛めでるようになでながら、穏おだやかな笑えみを浮うかべていた。彼の名はウェスパシアヌス。ブラックロッジが誇ほこるアンチクロスの一人である。

「オマエノ言ウコト　信ジテモ　イイノダナ？」

ウェスパシアヌスの隣となりには、かつては人間だったと思われる半魚人の長老が立っている。声帯が退化しているのか、それとも別の発声器官を使っているのか、彼の声はやけに聞き取りにくい。

ウェスパシアヌスは長老に向かってニッコリと笑みを浮かべる。

「もちろん。もちろんだとも。我々の研究は完全だとも。大船に乗ったつもりでいたまえ……と言いたいところだが、船がなくとも溺おぼれもしないか。貴方あなた方は」

「シカシ　ナゼ陸ノ人間ガ　ワレワレニ加担スル？　何ノツモリダ？」

「それは、とてもとても単純な理由だよ。我々が信じる神もまた、貴方あなた方が信じる神と同じなのだ。そうだ。そうだとも。我々は姿こそ違ちがえど、同どう胞ほうなのだよ。解るかな？」

「……」

「仮にだ。仮に我々がなにかを企たくらんでいたとして、なにか不都合なことでも？　あなた方は自らの領地を取り戻もどし、我々は魔ま術じゆつ師しとしての位階クラスを上げることができる。お互たがいのためなのだよ、同志」

　ウェスパシアヌスは諭さとすような口調で長老に語りかけ、肩かたに手をのせる。それは無二の親友に語りかけるような口調であり、一見、そこに嘘うそ偽いつわりはないように見えた。だが、長老は見み抜ぬくことができなかった。ウェスパシアヌスの瞳ひとみの奥に隠かくれている冷れい酷こくなまでの嘲ちよう笑しようを。

「解ッタ　オマエタチヲ　信ジヨウ」

　ウェスパシアヌスは喜色満面の笑みを浮かべると、「それは良かった」と何度も繰くり返した。

「いや、喜ばしい。実に喜ばしい。大だい丈じよう夫ぶ、大丈夫だとも。期待は裏切らんよ。我々に任せたまえ」

　ウェスパシアヌスは手を差しのばすと、半ば強ごう引いんに長老の手を取って握あく手しゆを交かわした。

（しょせんは魚か。しかし、自らが崇あがめる神の犠ぎ牲せいとなるのだから、不満はあるまい？）

+

　アーカムシティの上空には、信じられないくらいの青空が広がっていた。

　空には雲一つなく、ギラギラと輝かがやく真夏の陽光は、むき出しの肌はだに痛いほど突つき刺ささってくる。まだ午前十時だとい

うのに気温は四十度を超こえ、アスファルトの上では陽炎かげろうすら立ち上るほどだ。

　そんな炎えん天てん下かの中、九郎とアルはバス停の前で並んで突っ立っていた。

「暑い……。っていうか、マジで死ぬ」

　九郎は滝たきのような汗あせを流しながら、呆ぼう然ぜんとつぶやいた。一方のアルは、九郎とは正反対である。彼女は汗一つかかず、涼すずしげな表情を崩くずしもしない。おそらくは魔ま術じゆつで涼りようを得ているのだろう。

「ここで間ま違ちがいないのだろうな？」

「ハモンド薬局アーカム支店前って、ここだろ？」

　バス停の側そばには、全米でチェーン展開している薬局があった。安さだけが売りの小売店である。

「時刻表にも『インスマウス経由ニューベリーポート行き』ってあるし、間違いない」

「ふむ。小こ娘むすめにたばかられたわけでもなさそうだな」

　そんなことを話している間に、やたらと老ろう朽きゆう化かしたバスが接近してくるのが見えた。

「まさかとは思うが、あれではあるまいな？」

　そのまさかである。走る奇き跡せきとも言うべきバスはバス停の前に停とまると、ドアを開けた。

「ちっ。小娘め、せこい真似まねをしおる」

「おまえさえいなけりゃエアコン完備の豪ごう華かなバスだっただろうに……」

「む？　それはどういう意味だ？」

　九郎はアルの問いには答えないままバスに乗りこむと、運転手に二人分の運賃を手て渡わたして後部座席に腰こしを下ろした。車内

には九郎とアル以外の客はいなかった。当然、エアコンは完備されておらず、車内は蒸むし風呂ぶろ状態である。加えて魚の生臭い臭いが充じゆう満まんしていた。魚でも積んでいるのではないかと疑ってしまうほどだが、発生源は運転手のジョー・サージェントにあった。乗車賃を手渡すときに漂ただよってきた臭しゆう気きは、鼻が曲がりそうなほど強きよう烈れつなものだったのである。行き先であるインスマウスが港町であることを考えれば合が点てんがいくような気もしたが、だとしても強烈すぎた。

　そもそも九郎がバスに乗って出かけることになったのには理由がある。先日、覇道邸ていで起きた一件で瀕ひん死しの重傷を負った彼の苦労を労ねぎらうために、瑠璃が提案した企き画かくがこれだった。覇道が経営するリゾートホテルがインスマウスにあり、温泉にでもつかりながら疲つかれを癒いやしてみてはという彼女の配はい慮りよだ。とは言え、送そう迎げいバスの悲ひ惨さんさはどうだろうと首をかしげずにはいられない九郎であった。

+

　バスはひどくゆっくりと発車した。

　舗ほ装そうされた道路を進んでいるにもかかわらず上下左右に激しく揺ゆれ、ホテルで癒される前に車くるま酔よいでノックアウトされてしまいそうだったが、とりあえずは順調にインスマウスへと向かっていた。熱気と魚の臭においはあいかわらずだったが、窓から入ってくる風はそれなりに心ここ地ちよく、リゾート地へと向かっているのだという実感がわいてくる。しかも今回は接待だった。言うことなしである。

　都心部を離はなれてすぐ、海が見えてきた。陽光を受けて宝石のような煌きらめきを見せるマリンブルーの海を眺ながめているだけで九郎の心は弾はずむ。それはアルも同じらしく、不気味なほどにやけている。

　ただ気になるのは、沖おき合あいで見え隠れしている岩がん礁しようの存在である。それは巨きよ大だいな岩の塊かたまりで、『悪あく魔まの暗あん礁しよう』と呼ばれていることを九郎は知ってい

た。彼はそこから漠ばく然ぜんとした不安を感じてはいたが、悪魔の暗礁に関かかわる奇き妙みような噂うわさのせいだと考えて気にしないことにした。

+

　覇道財ざい閥ばつが経営しているリゾートホテル『ギルマン・ハウス』は、インスマウスで最大級の大きさと部屋数を誇ほこる巨大なホテルである。リーズナブルな部屋から目玉が飛び出るほど高額なスウィートルームまで、客のニーズに幅はば広ひろく対応したそのホテルは、旅行客の大半が利用する名所である。レストランやバー、アミューズメント関係の施し設せつも充実しているせいか、宿しゆく泊はく目的の客も多い。

　バスを降りた九郎とアルは羽を伸のばしきっていた。抑よく圧あつされ、緊きん張ちようしきっていた日常から解放されたせいか、体は空に舞まい上がりそうなほどである。

　だが意気揚よう々ようとエントランスへと向かった九郎とアルは、その場に相応ふさわしくない騒そう動どうに出くわしていた。プラカードを持った地元住民とホテルのガードマンが押し問答をしていたのである。プラカードには『新規リゾート計画断固反対！』やら『自然を破は壊かいする覇道財閥の横暴を許すな！』やら『覇道はインスマウスから出て行け！』など、リゾート地にありがちな対立が行われていた。それだけなら九郎も特に気にもしなかったのだが、彼らが放っている空気は、かなり異様である。

（あの姿のせいか？）

　丸く大きな目に張り出したエラ、極きよく端たんに小さな耳、肌はつぎはぎしたかのような斑まだら模様をしており、鮫さめ肌はだである。人間と魚をかけ合わせたような容姿はインスマウス面づらと呼ばれ、インスマウスの住民のみに現れる特とく徴ちようだった。しかも、そろいもそろって猫ねこ背ぜである。不思議なことに、特徴であるインスマウス面は大人のみに現れ、子供のころはごく普ふ通つうの顔をしているのだ。歳としを重ねることで徐じよ々じよに容姿に変化が現れ、やがてインスマウス面になっていくので

ある。インスマウスの住民は近きん親しん婚こんが多く、みな似たような姿になるのだと九郎は聞いたことがあった。よく考えてみるとジョー・サージェントも彼らと同じ姿をしており、陰いん鬱うつで暗い気配を漂わせていた。そう。彼らからは向こう側の臭いが感じられた。

「いかんいかん。今日の俺はリゾートライフを満まん喫きつするのだ！」

　九郎は邪じゃ念ねんを振ふり払はらうかのように首を左右に振ると、駆かけ足あしでロビーへと向かった。

+

　その日、九郎は極ごく楽らく浄じよう土どという世界を知った。

　日中は思う存分、海水浴を楽しみ、夜は夜で瑠璃がセッティングした宴えん会かい場じようで飲めや歌えやの大おお騒さわぎである。宴会に参加したのは九郎とアル、瑠璃を中心とした覇道財閥の面々だ。この日ばかりは無礼講で、まさにどんちゃん騒さわぎである。

「ささ、大十字さん、グイッといってくださいな」

　瑠璃は九郎が手にしているグラスにビールを注ついだ。

「おっ、こりゃどーも」

　九郎は一気にビールを飲み干すが、そこへ間かん髪ぱつをいれず酒が注ぎこまれていく。

「小こ娘むすめ。妾わらわにも酌しやくをせぬか」

「なぜわたくしが酌をしなければいけないのかしら？　そもそも、貴女を呼んだ覚えなどないのですが!?」

　瑠璃の目が挑ちよう発はつ的な色しき彩さいを帯びるが、それは一いつ瞬しゅんのことだ。すぐに彼女はにこやかな表情をすると、

ビール瓶びんを手に九郎へと寄り添そった。

「大十字さんは、どんどん飲んでくださいな」

　言われるまでもなく、九郎は浴びるほど酒を飲んで──いや、飲まされていた。

「おのれ小娘、下手に出ておれば生意気な……」

　アルはウィンフィールドに注がせた酒を飲みながらぼやくが、酒と料理には満足しているらしく、暴れ出すことはなかった。

　やがて九郎はいい感じで酔よっぱらい、あいかわらずアルと瑠璃はいがみ合っていたが、酒が回ると肩かたを組みながら協調姿勢をみせていた。唯ゆい一いつ、ウィンフィールドだけは平静で、皆みなの様子を眺めながら満足げに微笑ほほえんでいる。

　それから数時間が経過し、宴会場が混こん沌とんとしてきたころ、九郎は一人会場を抜ぬけ出していた。

「疲つかれた……。激しく疲れた」

　血液がアルコールに変わるほど酒をあおっていたせいもあるが、アルにけなされ、瑠璃にもてあそばれ、心身ともに疲ひ弊へいしていたのが直接の原因である。

（あいつらとは二度と飲まん）

　そう心に誓ちかった九郎は、酔いを覚ますべく露ろ天てん風呂ぶろへと足を運んでいた。疲れを癒いやすには湯船につかるのが一番であり、彼が今回の旅行で楽しみにしていたものの一つがこれである。

　露天風呂は、とてつもなく広かった。すでに風呂というレベルではなく、プールのような広さである。霧きりのように立ち上った湯気と鼻び孔こうをくすぐる硫い黄おう臭しゆうが温泉であることを物語っていた。

　深夜に近いせいか、見たところ客は一人もいない。貸し切り状態である。

「贅ぜい沢たくすぎる……」

　九郎はボソリとつぶやくと、湯船につかった。少し熱すぎる感じではあったが、それが今の彼には心ここ地ちよい。体内を駆けめぐっているアルコールが、一気に蒸発していくかのようだった。

「日常を忘れるって、こういうことだよな……」

　露天風呂に降り注ぐ朧おぼろげな月光と溢あふれんばかりの星々の姿は、アーカムシティにいては拝めない自然の豊かさを感じさせる。打ち寄せる波の音も耳に優やさしかった。

　アーカムシティでの出来事は夢物語ではないかと感じ始めたころ、海側から吹ふいてきた潮風で曇くもっていた視界が開けた。

「おや、まあ」

　湯ゆ煙けむりで気づかなかったが、露天風呂には先客がいた。熱あつ燗かんをかたむけながら夜空を眺ながめていたその女性は、意外そうな表情で九郎を見つめてきた。

「おやおや、これは奇き遇ぐう。九郎君も休きゆう暇かかなにかかい？」

　親しげに話しかけてくるその女性に、九郎は見覚えがあった。古書店の店主・ナイアである。

　彼女の肌はだは湯と酒の影えい響きようかほんのりと赤く、やけに色っぽく見えた。途と端たんに九郎の心臓は早はや鐘がねのごとく鳴り始め、顔は熱くなる。

　ナイアはバスタオルで隠かくすことなく立ち上がると、平然とした表情で九郎の下へと近づいてくる。

「な、ナイアさん。裸はだか、裸っ！　見えてるって！　しかもバッチリ！　タオルくらい巻けよっ！」

　素すっ裸ぱだかで近づいてくるナイアの姿に、九郎の酔いは綺き麗れいさっぱり吹き飛んでいた。

「風呂場で裸なのは当たり前じゃないか。それに君と僕との仲だろう？」

　さも当然のようにナイアは言うと、九郎を背中から抱だきしめ

た。

「お、おいっ！　当たってる！　当たってるってっ！　背中に柔やわらかいものが二つもっ！　っていうか、なんでナイアさんがここにいるんだ!?　男湯だろ、ここ？」

　九郎の動どう揺ようは激しく、口調はしどろもどろだ。

「やだな。露天風呂ここは入り口は別だけど、混浴じゃないか」

　言われてみるとそうだったような気もするが、この状じよう況きようは明らかにまずかった。混浴ということはアルや瑠璃が来る可能性もあるわけで、こんなシーンを目もく撃げきされたら市中引き回しの上、打ち首獄ごく門もんである。社会的に抹まつ殺さつされる自分の姿を想像した九郎は、湯船の中で真っ青になっていた。

「ところで九郎君。どうやら相応ふさわしい魔ま導どう書しよと巡めぐり逢あったようじゃないか」

　九郎は目をむくと、ナイアから体を引きはがして彼女へと向き直った。

「正直な話、僕は驚おどろいているんだよ。大ミスカト学ニツクを中退した君が、こんなにも順調なんてね」

「ナイアさん、あんたいったい……」

「おっと、警けい戒かいしないでほしいな。僕は君が気になって仕方がないんだよ。そう、とてもね」

　ナイアは艶つややかな瞳ひとみで九郎を見つめた。強く引きこまれてしまいそうな目に九郎は戦せん慄りつする。

「そう、今回はとてもよい。久々にヒトを欲しいと思ったほどにね」

　九郎は思わず身み震ぶるいをした。異質で異様な気配に鳥とり肌はだが立ち、本能的な恐きよう怖ふが呼び覚まされる。

「九郎君、僕のモノにならないか？　もちろんタダでとは言わないよ。君も僕の体を貪むさぼるがよいさ」

　ナイアの言葉は果実のごとく甘く淫いん靡びで、九郎の思考をとろけさせるほど魅み惑わく的な響ひびきを持っていた。実際、彼は幻げん惑わくされ、彼女の豊かな胸むな元もとへと吸い寄せられていく。だがそこに顔を埋うずめ、溺おぼれるのはあまりにも危険すぎた。火遊びですまなくなるのは確実で、二度と自分でいられなくなるような、そんな恐怖すら感じる。九郎は頬ほおを手で叩たいて正気を取り戻もどすと、身を引いた。

「冗じよう談だんだよ、冗談。……いや、それとも違ちがうかな？　君を気に入っているのは事実だから。でも今は、君をどうこうするつもりはないよ」

　ナイアは苦く笑しようしながら立ち上がると、湯船から上がった。

「邪じゃ魔まも入りそうだし、先に上がらせてもらうとするよ。君との仲を嫉しつ妬とされたら面めん倒どうだろう？」

　ナイアは手を振ふると、湯煙の中へと姿を消していく。

「なんなんだ、いったい……」

　喩たとえようもない不安感から解放された九郎は、安あん堵どの溜ため息をついた。

+

　九郎は呆ぼう然ぜんと湯船につかり続けていた。

　ナイアに精気でも吸われたのか、気力が根こそぎ奪うばわれている。活力を取り戻すためにも、なにも考えずにジッとしているべきだと九郎は判断していた。

　再び湯船の向こう側から人が歩いてくるのが見えた。九郎は警戒するが、すぐに肩かたの力を抜ぬく。

「どうした、九郎？　いつにも増して呆ぼけた顔をしておるが？」

　現れたのはアルだった。ナイアと違ちがってバスタオルを体に巻きつけてはいるが、結わえた髪かみからは妙みような色っぽさが漂ただよってくる。九郎は思わず見とれてしまうが、変な気を起こす前に視線を外した。

「なにやら闇やみの臭においがするが……。物の怪けと戯たわむれておったのか？」

「まさか。けど、そう言えなくもないか」

「ふむ。汝なれもーいつ端ぱしの魔ま術じゆつ師しだ。気を抜くと良からぬモノが近寄ってくる。気をつけるがよい」

　アルは湯に体をつけると、九郎の側そばまで寄ってきた。

「しかし、こうして静かに湯につかるのも、たまにはよいものだな」

「そうだな」

　九郎とアルは、しばし黙もくしたまま夜空を見つめ続けた。先に口を開いたのはアルである。

「しかし、妙だとは思わぬか？　術者と魔導書が並んで湯につかっておるのだぞ。どこの世界に、そんな術者と魔導書がいようか」

「ここにいる……っていうか妙なのはおまえだけで、俺までーいつ緒しよにすんな」

「妾わらわは魔導書であり、術者は書として扱あつかう。それが当然なのだ。それがどうだ。妾を置き去りにすること数知れず、挙げ句に風ふ呂ろとは。多くの術者とともに戦ってきたが、汝のような者は初めてだ」

「前の連中がどうであれ、付き合い方を限定する必要なんかないだろ？」

「不思議なものだ。術者と魔導書は互たがいに利用するだけの関係にすぎぬのに。これではまるで―」

「まるで戦友みたいなもんか？　いや、悪友？　それとも腐くされ縁えん？」

九郎の言葉にアルの表情が華はなやいだ。それは彼女が見せた表情の中で、一番、晴れやかだった。

九郎はアルの姿をまじまじと見つめた。「悪くない」とつぶやきながら嬉き々きとしている彼女の姿が、やけにいじらしく思える。気のせいか胸がざわめき、鼓こ動どうが速まった。

　そんな九郎の視線に気づいたアルは胸元を押さえ、いぶかしむような目で彼を見つめ返した。

「よもや妾に欲情したわけではあるまいな？」

　その言葉で九郎は現実へと引き戻されたが、彼女に対して得体の知れない複雑な感情を抱いだいている事実にも気がついた。九郎がそれについて詮せん索さくを開始したときだ。露ろ天てん風呂の入り口から、やたらとハイテンションな女性の声が聞こえてきたのは。

「む？　怪かい異いより質たちの悪い奴やつが来たようだ」

　さっそくアルは警戒した。

「気をつけろ、九郎。彼奴きやつにからまれると事だぞ」

「この状じよう況きようで俺にどうしろと？」

　そんなことを話している間に、怪異より恐おそろしい脅きよう威いは姿を現した。瑠璃である。バスタオルで一応、肌はだを隠かくしてはいたが、歩く度たびに普ふ通つうに見えていた。どうやら酔よいで彼女の羞しゆう恥ち心しんは綺き麗れいに消し飛んでいるようだ。つまり今の彼女に怖こわいものなど何一つないことになる。

「と言うわけで九郎、妾は先に上がらせてもらう」

　身の危険を察知したアルは、そそくさと湯船から上がり始める。

「てめえ、自分だけ逃にげようとは、どういう了りよう見けんだ？」

　アルが湯船から這はい出るよりも早く、九郎の右手は彼女のバスタオルを握にぎりしめていた。

「む？　九郎、汝……」

「術者を置いていく魔導書がどこにいる！」

　九郎はニヤリとすると、問答無用でバスタオルを引っぱった。あっという間にそれは九郎の手に渡わたり、そこには産まれたままの姿になったアルだけが取り残された。

「に、にゃー！」

　アルは湯船に逆ぎやく戻もどりし、左ひだり腕うでで胸を隠しながら右手で九郎の顔面に小さな拳こぶしを叩たたきこんだ。

「ぐ、ぐふぅ。あんた、いいパンチだぜ……」

　九郎とアルが漫まん才ざいを繰くり広げている間に、瑠璃が湯に入ってきた。

「大十字さん。こんなところで魔導書と乳くりあってるとは……。破は廉れん恥ちすぎます！」

　先ほどの宴えん会かいの酒がかなり残っているらしく、瑠璃の目は明らかに据すわっていた。

「わたくし、大十字さんに見せたいモノがありましたのに」

「別に乳くりあってたわけではなく……」

　だが九郎の弁解など、端はなから瑠璃の耳には届いてはいないようだ。

「大十字さん、えいっ！」

　突とつ然ぜん、瑠璃は手にしたなにかを九郎の頭にかぶせた。

「まあ、大十字さん、似合っていますわ」

　瑠璃は目を輝かがやかすと、うっとりした表情で九郎の姿を見つめた。

「汝、珍ちん妙みようなモノをかぶらされておるな」

　九郎は頭に載のせられたモノを目の前へともってきた。それは金のような材質でできた冠かんむりだった。冠は楕だ円えん形けいであり、表面には幾何きか学がく模様や海を表現した模様などが浮うき彫ぼりにされている。中にはグロテスクな化け物の姿も彫られているが、卓たく越えつした技術と美的センスによって作られたそれは、思わず見み惚ほれてしまうほどの魅み力りよくと、なにかしら不安にさせるような不気味さを秘ひめていた。

「お爺じい様がインスマウスのリゾート化計画に乗り出したとき、見つけたものらしいですわ」

　瑠璃は誇ほこらしげに胸を張ってみせた。

「それはインスマウスにある教団『ダゴン秘密教団』が祭事に使うモノだ。彼奴らが目くじらを立てるのも無理はない」

　アルは九郎から奪うばい返したバスタオルを体に巻きつけながら、神しん妙みような面おも持もちでつぶやいた。

「良からぬことでも企くわだててなければよいのだが……」

　だが、アルの心配は現実のものとなる。

+

　瑠璃が九郎とアルにあてがった部屋は、明らかに不ふ相そう応おうなスウィートルームだった。

　一いつ泊ぱくの宿しゆく泊はく費ひが九郎の生活費の数ヶ月分に相当するであろうその部屋は、一日程度の宿泊では機能の大半を使いこなせないまま終わってしまうのは確実である。リビングルームだけでも、ちょっとした小しよう宴えん会かいが行えるほどの広さがあるのだ。ホテルは寝ねるだけの場だと確信していた九郎にとって、それはイメージを根底から覆くつがえす大事件だった。もっともリビングルームが活用されることはなく、九郎とアルはベッドルームへと直行したのだが。

　キングサイズのベッドの端はしっこで縮こまり、泥どろのような眠ねむりに就ついていたときだ。九郎の嗅きゆう覚かくが強きよう烈れつな臭しゆう気きを感じ取り、聴ちよう覚かくが地の底から湧わき出してくるかのような声を聞き取った。蓄ちく積せきされた疲ひ労ろうで深い眠りの淵ふちにいた彼だが、全身を突つき抜ぬけていく強烈な悪寒で一気に覚かく醒せいしてしまう。

　九郎とアルは同時に跳はね起きた。

すでに明け方が迫せまっているようで、カーテンの隙すき間まから見える空は白みがかっている。おかげで、すぐさま室内を確かく認にんすることができた。九郎は慎しん重ちように辺りを見み渡わたす。だがベッドルームに異常は見当たらず、邪よこしまな気配も感じなかった。

「何事だ!?」

アルは目をこすりながら、不ふ機き嫌げんそうにつぶやいた。

異変は、この部屋で起きているわけではないようだ。ホテル全体で発生しているような印象があった。どこかから聞こえてくる呻うめくような耳みみ障ざわりな声と客の叫きよう声せいがそれを裏付け、魚が腐くさったような腐ふ臭しゆうが犯人を特定させる。辺りは異様な喧けん噪そうに包まれ、それは少しずつ拡大していった。

「インスマウスの連中か！」

「ふむ。やはり良からぬことを画策していたようだな」

九郎とアルはうなずき合うと、浴衣ゆかた姿すがたのまま部屋を飛び出した。

+

廊ろう下かに出た途と端たん、押し寄せてくるような強烈な臭気に九郎の顔は歪ゆがんだ。

喧噪はいよいよ激しさを増し、言い知れぬ不安感が九郎の胸中を支配していく。早急に状じよう況きようを確認する必要があった。

そのときだ。別の部屋から血相を変えたウィンフィールドが飛び出してきた。

「大十字様、お嬢じよう様さまが……」

いつになく慌あわてた様子のウィンフィールドが、九郎の下へと駆かけてくる。

「お嬢様が……さらわれました」

　ウィンフィールドは苦く渋じゆうの表情で伝えた。

「さらわれたって、インスマウスの連中にか!?」

　九郎が問うと、ウィンフィールドは神妙な顔でうなずいた。

　どうやら彼は、すでに各所と連れん絡らくを取り合っていたようだ。スーツを着用していることからも、それと判わかる。

「連中の行動に心当たりは？」

「いろいろとありすぎて、どれがそれに該がい当とうするのか見当もつきませんが……。大おお旦だん那な様がインスマウスの開発に乗り出した当初から、彼らは計画に反対し続けているのです。『此処ここは神のおわす土地だ。よそ者は出て行け』と、この一点張りでして。彼らが覇道に少なからぬ恨うらみを抱いだいているのは事実なのです」

「姫ひめさんを人ひと質じちにして、開発を断念させるつもりとか？」

「いや、そのような単純なことではあるまい。その神とやらが関係していると考えるべきだろう」

　アルは胸の前で腕うでを組むと、さらに続ける。

「ところで従者よ。小こ娘むすめの他ほかにも、女おな子ごがさらわれたのではないか？」

「ええ。宿泊客の何名かが連れ去られているとか」

「ふむ、やはりな」

「アル！　もったいぶってねえで、結論を言ってくれ」

「神への供く物もつであるのは察しがつくであろうが、それ以前に、奴やつらの子を孕はらまされるであろうな」

　その話に、九郎とウィンフィールドの顔が青ざめる。

「私がついていながら、お嬢様を……。なんたる失態！」

　ウィンフィールドは両手に握にぎり拳こぶしをつくると、体をわななかせる。

「執しつ事じさん、今は悔くやんでる場合じゃねえって。アル！」

　九郎は魔術師マギウスとなると、次の瞬しゆん間かんには廊下を疾しつ走そうしていた。

+

　九郎とアルがホテルのロビーに着いたとき、インスマウスの住人は奇き怪かいな雄お叫たけびを上げながらエントランスから出て行くところだった。概がい算さんで約百人ほどだろうか。一見、仮装行列のようにも見えるが、正気ではいられなくなるようなおぞましい光景である。実際、九郎は吐はき気を覚えていた。

　九郎は臨戦態勢のまま彼らへと目を向けるが、そこに瑠璃の姿はない。

「遅おそかったか……」

　だとしても諦あきらめるわけにはいかなかった。早急に追いかける必要がある。

「九郎、あれを見よ」

　アルが指差した方角へと目をやると、ジョー・サージェントが冠かんむりを掲かかげながら叫さけび声を上げている姿が確認できた。その姿には知性の欠片かけらも感じられない。

「つまり、あれが必要になったわけだ」

「おそらくな」

「あいつらが崇あがめるくらいだから、まっとーな神さんじゃないわけだよな？」

「無論、邪じや神しんだ」

「ってことは、つまり……」

「インスマウスはおろか、アーカムシティも焦しよう土どと化すであろうな」

　九郎は卒そつ倒とうしかけるが、すぐに立ち直ってジョー・サージェントへと突とつ進しんしていく。彼を絞しぼり上げて瑠璃の行方ゆくえを聞き出そうと考えたのだ。だが、いち早く九郎の行動に気づいたインスマウスの住人が捨て身の突とつ撃げきを敢かん行こうしてきた。九郎は飛びついてきた数十人の人間にもみくちゃにされて身動きが取れなくなる。九郎が彼らを蹴け散ちらしたころにはジョー・サージェントは消えており、全身から生なま臭ぐさい臭においを発する九郎とアルだけが残された。

「あの魚ども、必ずや全員まとめて三枚におろしてくれる……」

　アルは呪のろいの言葉を吐き出した。

+

　九郎とアル、ウィンフィールドの三人は、クルーザーに乗って沖おき合あいにある無人島へと向かっていた。動きやすさを考こう慮りよして水着を着てはいたが、クルージングではない。インスマウスの住人に連れ去られた瑠璃を保護し、なにかを企くわだてているのであれば、それを叩たたき潰つぶすためである。

　無人島へと向かうことになったのは、ギルマン・ハウスをあとにしたインスマウスの住人が、次々と海に飛びこんだという情報が入ったからだ。彼らが無人島へと向かったのは泳いでいった方向から判断でき、そこに彼らが祭事に使う神しん殿でんがあるという事実が決め手となった。

　海は時化しけていた。波は高く、空は分厚い雲に覆おおわれ、今にも泣き出しそうな嫌いやな雰ふん囲い気きである。島に近づくにつれて天候はいよいよ不安定になり、否応なく全員の不安感をあおっていく。

「あの島で間ま違ちがいない。忌いま々いましいまでの魚の臭しゆ

う気き、そして闇やみの気配。もはや疑いようもない」

　アルは船首で腕を組み、前方に見える無人島をにらみつけている。直径数キロメートルの小さな無人島から漂ただよってくる臭気は濃のう密みつで、母なる海さえも汚お水すいへと変えてしまうほどだ。

（姫ひめさん……無事でいてくれよ）

　九郎は逸はやる気持ちを強ごう引いんにねじ伏ふせると、荒あら波なみの向こう側に見え隠かくれする無人島へと目をやった。

　そこは一見、なんの変へん哲てつもない島である。だがそこから発せられる陰いん鬱うつな気配は、人を拒きよ絶ぜつするものがあった。覇道財ざい閥ばつがリゾート地として開発しなかったのも、そのような理由からだろう。

　そのとき、前まえ触ぶれもなく船体が激しく揺ゆれた。船体が軋きしむ嫌な音が聞こえてくる。波による揺れではなく、岩がん礁しようにでも乗り上げたかのような衝しよう撃げきだった。突とつ然ぜんの出来事に船首のアルはひっくり返り、九郎は尻しり餅もちをつく。唯ゆい一いつ、転てん倒とうを免まぬがれたウィンフィールドは舵かじを取るのに必死だった。彼のおかげで転てん覆ぷくせずにすんだが、クルーザーは信じられないほど傾かたむいている。

「くっ、何事だ!?」

　体勢を立て直したアルが吠ほえている間にも、奇き妙みような揺れは続いている。

「判わかりません！　なにかに乗り上げたような……」

　再び起きた激しい揺れに、ウィンフィールドの話が途と切ぎれる。それと同時に、海に何本もの水柱が上がった。海中から勢いよく飛び出してきたそれは、雄叫びのような奇き声せいを発しながら甲かん板ぱんへと着地する。途と端たんに辺りは強い臭気で満たされた。

　甲板に降り立ったそれは、インスマウス面の人間である。Ｔシャツにジーンズ姿の者もいれば、漁師のような衣服を身に着けている者もいる。だがそろいもそろって魚に似た顔をしており、瞬まばたき一つしない丸く濁にごった目が、明らかな敵意と殺意を宿してい

た。

「さっそく、おいでなすったか」

　海面へと目を向けると、何十ものインスマウス面が見て取れた。それはエサに群がる鯉こいのようなもので、海面は顔で埋うめつくされている。

　異変はすぐに起きた。巨きよ大だい化かしつつあるのか、甲板に立つ住人たちの体が異様なほど盛り上がり始めたのである。着衣が破れるほどに巨大化した彼らの体は、さらに劇的な変容を遂とげる。鮫さめ肌はだだった皮ひ膚ふは鱗うろこで覆われ、張っていたエラは本物のエラと化した。指の間には水かきができ、まさに半魚人という風体になったのである。

「此こ奴やつらは深きデイーものプ・ワどもンズの血を引いておる」

　それは半人半魚の化け物の総そう称しようである。異種配合を好み、人間と交わって子を遺すことで知られていた。深きものどもと人間の間に生まれた子は、子供のころは人間と同じように過ごし、やがて魚を想起させる風ふう貌ぼうへと変化していくのだ。そう。インスマウスの住人のように。そして最終的には深きものどもと等しい存在となり、深海に住まう同族の下へと帰るのである。

「話し合いは必要なさそうだ。アルっ！」

　九郎は魔術師マギウスになって身構えた。

「問答無用だ。全員まとめて三枚におろしてしまえ！」

「了りよう解かい！　おまえら全員、明日の朝食決定だっ！」

　九郎はバルザイの偃えん月げつ刀とうを顕けん現げんさせると、それを右手で握にぎりしめた。

「しゃあああああああっ！」

　深きものどもが一いつ斉せいに押し寄せてくる。九郎がバルザイの偃月刀を振ふり上げた、そのときだ。激しく船体が揺れた。海中にいる深きものどもが船体を揺らしたのだ。クルーザーは転覆するほど傾き、さらに追い打ちをかけるように高波が押し寄せてくる。

しまったと思ったときにはクルーザーは波にのみこまれ、九郎たちは荒あれ狂くるう海の中に投げ出されていた。

+

暗くら闇やみの中に閉とざされていた九郎の意識は急速に回復していた。何者かが耳元でしきりに話しかけており、加えて頬ほおに走る鋭するどい痛みが刺し激げきとなって眠ねむり続けることを許してくれなかったのである。

「九郎、しっかりせんか」

瞼まぶたを開くとアルの顔があった。彼女は表情を曇くもらせながら遠えん慮りよなく九郎の頬をひっぱたいている。

「おまえは少し手加減しろ」

九郎はぼやくと、体を引き起こした。

「ここは……どこだ？」

砂すな浜はまにいることは解わかったが見知らぬ土地である。ギルマン・ハウスもなければ民家もなく、文明の片へん鱗りんすらない場所だった。あるのは海と砂浜、そして背後にそびえる巨大な森林だけである。

「幸か不幸か、目的地に流れ着いたらしい」

アルは九郎の体に付着した砂を手で払はらい落としながら告げた。

「執しつ事じさんは？」

「はぐれたようだ」

アルの返事に九郎は声を失った。

「なに、心配することはない。魔術師と渡わたり合うような猛も者さが、深きものどもに敗れるとも思えぬ」

「そりゃそうかもしれねえけど……」

　あの荒波の中、しかも海をテリトリーとする相手に陸の者が太た刀ち打うちできるのかと考えると、暗い気持ちになってくる。だがそれを振り払うかのように九郎は勢いよく立ち上がると、鬱うつ蒼そうと生い茂しげる森林へと目を向けた。そこには臭しゆう気きと邪じや気きが澱よどんだ汚お泥でいのように鎮ちん座ざし、大地と木々を汚染している。よく見ると大地は緑ろく青しよう色に染まっており、草木の葉は見たこともないような不可思議な形をしていた。遺伝情報に明らかな狂いが生じているとしか思えないような奇き怪かいな形状である。

「ここでジッとしていても始まらん」

「だな。行くとするか！」

　九郎は再び魔術師となると、翼つばさを大きく広げて宙へと浮うかび上がった。そして羽ばたきとともに一いち陣じんの風となる。彼は不規則に生い茂る木々の間かん隙げきを縫ぬいながら、臆おくすることなく奥へ奥へと突つき進んでいく。中は暗く、ひどい熱気と湿しつ気けが不快だった。そこには自然の豊かさなど存在せず、ただひたすら薄うす気き味み悪いだけだ。だが怪かい異いにとっては楽園のようで、木々が作り出した暗闇の中で、それらは怪あやしく蠢うごめいている。

　さらに奥へと進んでいくと、不意に森が開けた。野球のコートで数面ほどだろうか。円形に開けた広大な土地が広がっている。そしてその中心に巨大な石造りの神しん殿でんは建っていた。想像もつかないほどの歳月を経てきた建造物らしく、風雨にさらされ続けて腐ふ食しよくした壁へき面めんは苔こけと蔦つたで覆おおわれている。だが神殿が持つ荘そう厳ごんさはいささかも衰おとろえず、それどころか自然と一体化することで存在感を増してさえいるようだ。

「あれが半魚人の本ほん拠きよ地ちってわけだ」

「用心して進めよ」

　九郎はうなずきを返すと、神殿へと足を踏ふみ入れた。

+

神殿の中は薄うす暗ぐらく、邪気に満ちていた。空気は生ぬるく、そして生なま臭ぐさい。それに加えて甘ったるい匂においも混じっていた。香こうでも焚たいているのだろう。強きよう烈れつな臭気を緩かん和わさせるためか、それとも儀ぎ式しき的な意味合いがあるのか、九郎は理解できない。

石いし畳だたみの上を一歩一歩、足あし下もとを確かめながら奥へと進んでいくと、空気を振しん動どうさせるような低く響ひびく呻うめき声が聞こえてきた。どうやら呪じゆ文もんの類たぐいであるらしい。ここで儀式が行われているのは、もはや疑いようもなかった。

暗い回かい廊ろうを進むうちに、徐じよ々じよに九郎の目は暗闇に慣れてくる。深い闇やみと漂ただよう香の薄うす煙けむりで奥までは見通せないが、周囲の状じよう況きようを確かく認にんできるまでには慣れてきた。

（こりゃ確かに、まっとうな神さんを祀まつってねぇな）

九郎は足を止め、壁かべへと目を向けた。そこには壁画が描えがかれているのだが、描かれているにもかかわらず彫ほられているようにも見え、平面でありながら立体でもあるような不可思議な絵である。海や波を象しよう徴ちようしている図形や環かん状じよう列石、巨きよ大だいな扉とびら、古代の都市のようなものが現代美術の域を超ちよう越えつする繊せん細さいさと大だい胆たんさ、そして神かみ懸がかり的な筆力で描かれているのだが、中でも印象的なのは無数の触しよく手しゆを生やした蛸たこにも似た生命体である。それがなにを意味しているのかは理解できず、また理解しようとも思わない九郎だが、人じん智ちの及およばないものであるのは間ま違ちがいなく、見つめているだけで魂たましいが抜ぬかれていくかのような気味の悪さを感じた。

「魅み入いられるなよ。気が触ふれるぞ」

九郎の肩かたに腰こしかけているアルが耳たぶを引っぱった。

「ああ、解ってる」

九郎はうなずくと、奥へと向かって歩き始めた。

（しかし、たまんねーな、こりゃ）

奥へ行くほど香の匂いは強烈になっていく。息苦しくはあったが、九郎は変に興奮していた。

（麻ま薬やくだったらヤバイよな……）

不ふ吉きつな予感はしたが、深くは考えずにバルザイの偃えん月げつ刀とうを構えた。と言うのも、前方からゆっくりと近づいてくる怪異の気配を感じ取っていたからだ。気配は二つ。相手が動く前に、九郎は打って出た。前ぜん傾けい姿勢で一気に距きょ離りを詰つめる。怪異は深きものどもではなかった。似てはいたが魚ではなく、人間と蛸をかけ合わせたような奇怪な生命体である。九郎にしてみれば魚が蛸に変わっただけであり、やることは変わらない。蛸人間との間合いを一気に詰めた九郎は、下から上へと偃月刀を振ふり上げる。その切れ味は凄すさまじく、斬きった感かん触しよくが手に伝わってこない。まるで空気でも斬ったかのようだったが、それによって蛸人間は真っ二つになっていた。

「魚やら蛸やら、海の幸満まん載さいってか？」

九郎は吐はき捨てると、返す刀で残りの一体へと斬りかかる。

「蛸のお刺さし身み、いっちょあがり！」

だが宣言どおりにはならなかった。偃月刀は空を切り、その隙すきに数本の触手が襲おそいかかってくる。

「こなくそっ！」

九郎は偃月刀を横に薙ないで触手を刎はねるが、蛸人間は痛みを感じないらしく、残った触手を躊ちゆう躇ちよなく振るってくる。それはムチのようなしなやかさで九郎へと迫せまり、対処する間もなく彼の顔面を打ちすえた。九郎の頭は一いつ瞬しゅん、真っ白になるが、すぐに現実へと戻もどって蛸人間を袈け裟さ斬ぎりにする。

片づいたと思った矢先だった。九郎が息をついたとき、わずかな隙ができた。蛸人間は口から霧きり状じようのなにかを吐き出し、それを九郎はまともに浴びてしまう。むせ返るような甘い匂いがす

る霧きりは、神殿内に満ちた香の匂いを何十倍も濃のう密みつにしたもののようだ。九郎は慌あわてて息を止めたが、すでに相当量を吸いこんでいた。それでも偃月刀で蛸人間にトドメを刺さすと、その場で尻しり餅もちをついた。

「大だい丈じよう夫ぶか、九郎？」

「ああ、これくらい、なんてことは……」

　立ち上がろうとした九郎だが、足あし腰こしに力が入らずひっくり返ってしまう。だが変調はそれだけではない。酔よってもいないのに激しく目が回っている。体を起こしていることすら困難になった九郎は、その場で体を横たえた。

「毒を吸いこみすぎたようだな。どれ、診みせてみよ」

　アルは元の姿へと戻ると、やはり元の姿へと戻った九郎へと顔を寄せる。香の匂いとは違ちがった甘ったるい女性の匂いが九郎を包みこんでいく。アルは小さな額を九郎の額へとくっつけた。

「ふむ。熱が出ているようだが―。安心しろ、致ち死し性のある毒ではなさそうだ」

　アルの話を九郎はぼんやりと聞いていた。体は熱病にでも冒おかされたかのように熱く火ほ照てっており、脂あぶら汗あせが滲にじみ出ている。呼吸が荒あらい。思考能力は極きよく端たんに低下し、深く考えることを拒きよ絶ぜつしていた。そんな中にあっても、不思議とアルの声だけはよく聞こえてきた。触れ合っている部分が熱い。

「ほうっておいても直に治まるとは思うが、苦しいところはあるか？」

　薄うす紅べにをひいたような唇くちびる、赤く濡ぬれた舌先、耳を打つ透とう明めいな声音、女の体たい臭しゆう……。九郎の五感のすべてが、アルの存在を意識している。頭の芯しんが痺しびれていくのが解わかった。

「此こ奴やつらは深きものどもとは違ちがうようだ。落とし子かとも思ったが、人じん為い的に作られた者らしい」

　アルの声が麻薬のようにさえ感じられる。耳元にかかる彼女の吐

と息いきは、九郎に官能的なまでの悦よろこびをもたらしていた。理性という名の糸がプツリと切れる音がした。

「む？　どうした、九郎？」

　九郎の異変を察知したのか、アルは体を離はなそうとする。だが、九郎はそれを許さない。アルの腰に手を回すと、その華きや奢しやな体を力任せに引き寄せた。

「なんのつもりだ!?　放さんか！」

　九郎は腕うでの中で暴れるアルを力で押さえこむと、体を入れ替かえて彼女に覆おおいかぶさる。

「九郎、汝なれ……」

　よほど怖こわい顔をしているらしく、アルの表情が引きつっている。だが今の九郎には、そのようなことは気にもならない。それどころか嗜し虐ぎやく的な行こう為いが強い征せい服ふく欲よくへと変わっていく。九郎はアルの両手を押さえこんで動きを封ふうじると、半ば強ごう引いんに彼女の唇を奪うばった。

「むぐっ……。こ、この、うつけがっ！　毒ごときで簡単に理性を失いおって！」

　アルは九郎をにらみつけるが、それは九郎の快楽を高める効果しかなかった。九郎の手がアルの体をまさぐり始める。身み動じろぎし、抵てい抗こうするアル。だが小こ柄がらな彼女が男の力にかなうわけもなかった。

「よせっ、九郎。こんなことはよくない！」

　泣きそうな顔でアルは懇こん願がんするが、九郎の劣れつ情じようは治まらない。彼の手はアルの胸へと伸のびていく。女としての成長を始めたばかりの小ぶりな胸を、九郎は情欲のまま鷲わしづかみにしていた。アルの顔は苦痛に歪ゆがみ、今度こそ本当に涙なみだを流す。

「九郎、よせっ！」

　アルの体内に魔ま力りよくが宿るが、彼女が術を行使する前に、九郎はそれに介かい入にゆうした。二人は契けい約やくで結ばれて

いた。契約上では九郎が主であり魔導書を使う立場にある。アルから魔力を奪うことなど難しくはない。アルの体から力が抜ぬける。九郎は彼女の水着に手をかけ、それをずり下ろしていく。

「やめろ！　そんなのは汝らしくないだろう!?」

　アルは涙ながらに訴うつたえる。

「汝は絶望的なまでの大おお馬ば鹿か者ものだが、このようなことをする男ではない！　汝は……汝は、もっと格好良くて、気持ちの良い男のはずだ！」

　悲鳴にも似たアルの叫さけびが、九郎の脳内に響ひびき渡わたる。

「妾わらわが選んだ主は……大十字九郎とは、そういう奴やつだっ！」

　九郎の手がピタリと止まった。朦もう朧ろうとしていた意識は急激に覚かく醒せいし、熱くなっていた体は冷や水でも浴びせられたかのように冷めていた。

（……なにやってんだ、俺は！）

　九郎は頭をかきむしると、アルの体を解放した。

（これじゃあ、ブラックロッジの連中となにも変わらねぇ！）

「……九郎？」

　アルは体を起こすと、呆ぼう然ぜんとした表情で九郎を見返している。九郎は「すまねぇ」と言うと、その場で土下座をした。額を石いし畳だたみに押しつけ──いや、むしろ叩たたきつけるような勢いで頭を下げた。

「俺、とんでもないことしちまった！」

「……正気に戻もどったのか？」

「ああ、おまえのおかげだ」

「そ、そうか。まったく、世話を焼かす……」

　アルは目元に浮うかんだ涙を拭ぬぐうと、半ば脱ぬげかけていた水着を元の位置に戻しながら安あん堵どした。

「……で、体の調子はどうなのだ？」

　アルは少しためらう素そ振ぶりを見せたが、再び九郎へと顔を寄せてきた。額と額が触ふれ合う。

「ふむ。毒素の中和には今しばらく時間がかかりそうだな」

　実際、九郎は正気に戻っただけで体調は今一つだった。とは言え、毒が抜けるまで悠ゆう長ちように待ってなどいられない。一刻も早く瑠璃の下もとへとたどり着く必要があった。

「放っておいても直すぐに治るのだが、そうも言ってはおれんだろう」

　アルは九郎から体を離すと、彼に向かって手をかざした。その途と端たん、九郎の体は淡あわく優やさしい光に包みこまれていく。まるで母親の胎たい内ないにでもいるかのような心ここ地ちよさと安あん堵ど感かんにくるまれながら、九郎は体を冒し続ける毒素が抜けていくのを感じていた。時間にして十数秒だったが、体は嘘うそのように軽くなる。

　不意に九郎とアルの視線が絡からみ合った。その途端、二人の間に漂ただよう奇き妙みような空気。どちらからともなく目線を外し、それぞれうつむくと、無言のまま立ち上がった。

（な、なんか……気まずいような？）

　顔の火照りが気になったが、いつまでも和なごんではいられない。

　九郎は魔ま術じゆつ師しの姿へと戻ると、「す、進むぞ」などとつぶやきながら歩き始めた。

+

回かい廊ろうを奥へと進むうちに声は鮮せん明めいに聞こえてくるようになった。邪じや気きは増し、胸焼けがするほどの不快感が押し寄せてくる。九郎は足音を殺しながら先へと急ぎ、やがて神しん殿でんの中心部へとたどり着いた。

そこは祭さい壇だんの間だった。広い空間の中心部には祭壇があり、それを見下ろすような感じで二、三十メートルほどの巨きよ大だいな石像が鎮ちん座ざしている。海辺の岩場で蠢うごめく船虫を巨大化させたかのような化け物であり、石像でありながら今にも動き出しそうな生々しさと、圧あつ倒とうされるほどの存在感を全身から放出していた。それは人の手によって造り出されたとは思えぬ代しろ物もので、別次元、あるいは別の宇宙から持ちこまれた物にしか見えない。

その石像に祈いのりを捧ささげているのは、インスマウスの住人たちである。彼らは恍こう惚こつとした表情で石像を仰あおぎながら、一心不乱に呪じゆ文もんを唱えている。その周囲では深きデイーものプ・ワどもンズが、泣き叫ぶ何人もの人間の女性と交わっていた。子を産ませるつもりなのか、それとも儀ぎ式しきなのか、目を背そむけたくなるような行為である。床ゆかに落ちた浴衣ゆかたなどから、彼女らがギルマン・ハウスから連れ去られた宿しゆく泊はく客だと判わかった。

（姫ひめさんは……？）

慌あわてて周囲を見み渡わたした九郎は、石像の真正面に据すえてある台座の上で仰あお向むけになり、深きものどもに四し肢しを押さえこまれている瑠璃の姿を発見した。幸い、まだなにもされてはいなかったが、かなり激しく抵てい抗こうしているせいか浴衣の胸むな元もとははだけ、柔やわ肌はだがあらわになっている。

（覇道の総そう帥すいだったのが幸いしたってところか）

だとしても瑠璃が窮きゆう地ちに陥っていることに変わりはなく、ほどなく彼女に悲劇が訪おとずれるのは明らかだ。

ふんぐるい　むぐるうなふ　くするふ　るるいえ　うがふなぐる　ふたぐん

何度となく繰くり返される呪文。それに瑠璃の悲鳴と女性の喘あえぎ声が重なっていく。

「よっしゃ、行くぜっ！」

九郎に迷いはなかった。バルザイの偃えん月げつ刀とうを大きく振ふり上げると、渾こん身しんの力でそれを投げ放つ。偃月刀は空気を斬きるような鋭するどい音を鳴らしながら激しく回転し、大きな弧こを描えがきながら台座へと向かって飛んでいく。それは寸分たがわぬ正確さで瑠璃の手足を押さえつけている深きものどもの首を刈かり、再び九郎の手へと戻ってきた。

「姫さん、走れっ！」

九郎は事態を把は握あくできずに惚ほうけている瑠璃へと向かって叫んだ。たったそれだけの行こう為いで彼女はすべてを理解し、走り始める。それと同時に九郎はバルザイの偃月刀を投げると、彼女のために血路を開いた。突とつ然ぜんの珍ちん客きやくに驚おどろいたのか、それとも思考力が魚並みなのか、どちらにせよ狂きよう信しん者しやたちは瑠璃が九郎に保護されるまで動かなかった。

「大十字さん！」

瑠璃は大おお粒つぶの涙なみだをボロボロとこぼしながら九郎の体にしがみついた。

「悪わりぃな。少し遅おくれちまった」

九郎は瑠璃の頭をなでると、彼女を自分の背後へと隠かくして偃月刀を構えた。

深きものどもが行動を開始する。女性と交わっていた彼らは生せい殖しよく器きを女性の体内から引き抜ぬくと、九郎へと向かって襲おそいかかってくる。行為を邪じゃ魔まされたことに腹を立てているらしく、深きものどもの怒いかりは激しい。だが彼ら以上に九郎は怒っていた。

問題は人数である。二、三体なら楽勝だが、その十数倍は敵がいるのだ。束になられたらたまらない。しかし、それは杞き憂ゆうに終わった。彼らは愚おろかにも数体で攻せめてきたのである。九郎

はニヤリとすると、偃月刀を自在に操あやつって深きものどもを斬り倒たおしていく。何体も何体も。十体目以降、九郎は数えるのをやめた。

「汝なれも、なかなかやるようになってきたではないか」

　九郎の肩かたでアルが誇ほこらしげに言う。彼は彼で満足げな笑えみを浮かべると、踊おどるような優ゆう雅がさで偃月刀を振るっていく。この調子で殲せん滅めつだと思ったのも束つかの間、突然、敵の数が増えた。さすがに歯が立たないことに気づいたらしく、一気に押し寄せてきたのである。慌てた九郎に隙すきがうまれた。深きものどもの拳こぶしが迫せまる。九郎は舌打ちしながら応戦するが、間に合わない。一発もらうのを覚かく悟ごしたときだ。襲いかかってきた深きものどもが奇き声せいを上げながら横に吹ふき飛んでいく。

「ふむ。フォルテッシモに決まりましたな」

　声のするほうへと目を向けると、涼すずしげな表情でファイティング・ポーズを取っているウィンフィールドの姿があった。

「執しつ事じさん、無事だったか！」

「もちろんでございます。お嬢じよう様さまも、無事でよかった……」

　ウィンフィールドは心底、安あん堵どしたような表情を浮うかべた。

「汝ら、おしゃべりの前に、やることがあろう？」

「では、さっさと片づけることにいたしましょう」

　九郎はうなずくと偃月刀を構え、ウィンフィールドも臨戦態勢に入る。そんな二人の姿に、深きものどもの間に動どう揺ようが走り抜けた。インスマウスの住人たちも祈るのをやめている。

　九郎とウィンフィールドが目で合図を送りあったときだ。祭壇の間に乾かわいた拍はく手しゆの音が響ひびき渡わたった。その方向へと目を向けると、祭壇の奥から歩いてくる二人の男の姿が目に入る。一人はインスマウス面づらの祭服を着た男で、もう一人はスーツの上に外がい套とうをまとった中年の紳しん士しだ。

「大十字さん、あれ……」

　瑠璃がインスマウスの男を指さすが、彼女に言われるまでもなく九郎は気づいていた。彼は金より明るく輝かがやく物質で作られた冠かんむりを頭に載せていたのである。

「素す晴ばらしい！　大十字九郎君、それにアル・アジフ！　さすが。さすがブラックロッジに刃は向むかうだけのことはある」

　紳士は手を叩たたきながら、「素晴らしい」を連呼する。

（インスマウス面はともかく、あの男……。普ふ通つうじゃねえぞ）

　紳士のように見えるが、彼が発するプレッシャーは深きものどもの比ではない。狂きよう気きを手なずけ、それを支配下に置いているかのような異常な気配。九郎は似たような気配を持つ連中を知っている。

「ああ、すまない。自己紹しよう介かいがまだだった。私はウェスパシアヌス。ブラックロッジの導師でありアンチクロスの一人だ。よろしくお願いするよ」

　ウェスパシアヌスは優雅に一礼すると、にこりと笑った。

「アンチクロスっ！」

　瑠璃とウィンフィールドの声が重なる。

「アンチクロスともあろう者が、何故、深きものどもと戯たわむれておる？　目的はなんだ!?」

　アルがスッと目を細めた。

「ちょっとした実験、と言ったところかな？　ああ見えてね、彼らもなかなか役立ってくれるのだよ」

「ナンダト？」

　ウェスパシアヌスの話に、隣となりに立つインスマウス面の男が怪け訝げんそうな表情をする。

「長老。いよいよ君たちの悲願達成の時ではないか。さぁ、始めるとしよう。神の召しよう喚かんを！」

　ウェスパシアヌスは高らかに宣言する。

「神だと!?　汝ら、なにを企たくらんでおるっ!!」

「見ていれば解わかるよ。ほら、あそこを見たまえ」

　ウェスパシアヌスは意味ありげな笑みを浮かべると、石像を指さした。全員の目が、そちらへと向けられる。その頭頂部には一人の少女が立っていた。長く緩ゆるやかな装しよう束ぞくに身を包み、夢と現うつつの狭はざ間まにいるような危あやうい表情の少女である。彼女の姿を深く印象づけているのは、左右で違ちがう瞳ひとみの色だ。金と紫むらさきの瞳は別次元でも見つめているかのような遠い目をしていた。少女の姿に深きものどもとインスマウスの住人が歓かん声せいを上げると、再び異形の言葉を唱え始めた。

　ふんぐるい　むぐるうなふ　くするふ　るるいえ　うがふなぐる　ふたぐん

　祭さい壇だんの間に響き渡る呪じゆ文もん。そして、それを受けた少女は、両手を左右に広げて歌い出す。

「くぅ～りとぁ～りとぁおふ～うがふなぐるうふたぐん……」

　少女の体から神気と瘴しよう気きを孕はらんだ異界の風が吹きすさんだ。心を押し潰つぶすような凶きよう悪あくなプレッシャーが襲いかかってくる中、九郎は少女の体がページとなって捲まくれるのを確かく認にんしていた。

「彼奴きやつ、魔導書かっ！　しかも、このただならぬ水すい妖ようの神気は……ルルイエ異本!?」

「さすが！　さすがはアル・アジフ！　そうだ、そうとも。彼女も魔導書だ。魔導書なのだよ！」

　ウェスパシアヌスは手を叩きながら大喜びすると、さらに続け

る。

「ルルイエ異本、そして我々の理論があれば、神など簡単に召喚できるだろうさ。こんなふうに！」

「るうううぅぅ・りぃぃえええええええええ！　いあ！　いあ！　か、みさま……っ！　かみ……だ、ごん！　だご、ん！　だごん！」

　ルルイエ異本の言こと霊だまが、さらなる神気と瘴気を呼びこんでいく。その二つの力は混じり合い、溶とけ合い、一つとなって少女の体を、そして石像を包む。石像の内部で脈打つような胎たい動どうが始まった。

「くっ……はあああああっ！」

　瑠璃が顔を真っ青にしてしゃがみこむ。すぐさまウィンフィールドは彼女の体を支えるが、彼とて無事ではない。険しい表情で、目に見えぬプレッシャーに抗あらがっていた。

　石像の変化は続く。ただの石だった表面に生物的な色しき彩さいを帯び始めている。ピシッと、胴どう体たい部分に縦の亀き裂れつが入った。それをキッカケにして連れん鎖さ的に罅ひびが入り、その隙すき間まから緑色の光こう彩さいが溢あふれ出してくる。ただの石像は、いまや生命を宿していた。

「オオオオオ　オオ　オオオオ！　ツイニ　ツイニ！」

　インスマウスの長老が感激で声を震ふるわせている。その一方で九郎たちは全身を駆かけめぐる悪お寒かんに震え上がっていた。体毛が残らず総毛立ち、皮ひ膚ふの内側で虫が這はいずるようなおぞましい感覚が正気を奪うばい取ろうとしている。

　いよいよ石像の罅は大きくなっていた。外皮でも剝はがれるかのように石像の表面は崩くずれ始め、それは石という名の外がい殻かくを脱ぬぎ捨てていく。

「チッ！　ダゴンか！　厄やつ介かいなのが出てきおったぞ！」

　九郎の耳元でアルが舌打ちをする。

「ダゴン？　なんですか、それは？」

「小こ娘むすめ。汝なれ、そんなことも知らずに……まあよい。ダゴンは深きものどもの頭領にして海神の眷けん属ぞくだ。古代ペルシテ人には、半人半魚の神として信しん仰こうされていたようだが」

「神って！　神があんな姿であってたまるものですか！　あれは怪かい獣じゆうではないですか！」

　九郎も瑠璃の意見に賛成だった。

「ヲヲヲヲヲ！　我ガ神ダゴン！　コレデ　マタ我々ノ海ヲ取リ戻モドセルゾ！　くすふ……るいえ！　いあ！　イア！　サア　我ガ神ヨ　コノ地ニ巣クウ陸ノ人間ドモニ　ドウカ裁キヲ！」

　インスマウスの長老は歓かん喜きの涙なみだを流しながら打ち震えている。

　全容をあらわにした異形の神ダゴンは、ルルイエ異本、そして僕しもべたちの声に応じて吼ほえた。空気を振しん動どうさせるほどのそれは、心を打ち砕くだきかねないほどの狂気を秘ひめている。

「冗じよう談だんじゃねーぞ。あんなのが蘇よみがえったら……」

　その光景を想像するよりも早く、九郎は偃えん月げつ刀とうを片手に走り出していた。狙ねらうはウェスパシアヌスの首。他ほかの連中には目もくれず、ウェスパシアヌスへと斬きりかかっていく。

「せっかく神が顕けん現げんするのだぞ？　黙だまってショーを楽しみたまえ。詠うたえ、オトー」

　ウェスパシアヌスが左手をかざすと、掌てのひらが蠢うごめいた。その表面は変容し、顔の形を形成する。

「人面疽そ!?」

「いくい・どろしゅ・おどふくろんく」

　人面疽がつぶやくと同時に、九郎は元いた場所まで吹ふき飛ばされてしまう。

　九郎は体勢を立て直し、ウェスパシアヌスをにらみつける。顔色一つ変えず、気負いすら見せずにたたずむ彼の姿に、九郎は苛いら

立だちを隠かくせない。だがその余よ裕ゆうは本物で、ウェスパシアヌスには一分の隙すきも見当たらなかった。格の違いを痛感するも、九郎はさらなる闘とう志しを燃え上がらせていく。

「九郎。様子が変だ」

　耳元でアルがささやく。

　意識の大半をウェスパシアヌスへと向けていたため気づかなかったが、インスマウスの住人、そして深きものどもが次々と倒たおれ始めたのである。彼らは干ひ物もののように干からびていた。

「食くらっておるのだ。彼奴らの生命力を」

「下僕を食うってか？　とんでもねえ神様だ」

　ダゴンは飢うえているらしく、次から次へと僕たちの命を奪っていく。

「……たりない。いのち、たりない……ほし、たりない……とき、たりない……ふぐるひ、むぐなふっ！　まだ……かみ、さま……うみの、そこ……まだ……ちから、たりない……おなか、すいた……だごん、おこってる……ら！　ら！」

　ダゴンの頭頂部に立つルルイエ異本は、感情の片へん鱗りんすら見せずに冷ややかに告げた。

「ソ、ソンナ……」

　インスマウスの長老が呆ぼう然ぜんとする一方で、ウェスパシアヌスは高笑いする。

「ははははは。そうか。やはり、そうなったか。長老、どうやら君の神の顕現化は完全ではなかったようだ。足りない力を補うために、君たちの生命力を吸っているらしいよ」

「キサマ！　謀ハカッタナ!?」

「考えてもみたまえ、自ら神のための犠ぎ牲せいとなるのだぞ？　なんとも、ああ、なんとも美しく麗うるわしい殉じゆん教きようではないか。君たちの魂たましいは、きっとルルイエに届くであろうさ」

「オ、オノレェェェェェェ！」

　長老は激げつ昂こうし、ウェスパシアヌスへとつかみかかった。だが、それを素す直なおに許す彼ではない。ウェスパシアヌスは右手をかざすと「ガルバ」と叫さけび掌に人面疽を浮うかび上がらせる。そして次の瞬しゆん間かん、人面疽は一瞬にして長老の上半身を食らった。

「さて、大十字九郎君？　実験もすんだことだし、私は失礼させてもらうよ」

「てめえ、ふざけんな。あの化け物、片づけていきやがれっ！」

　九郎は偃月刀を投げつけるが、そのときすでにウェスパシアヌスの姿は消え失うせていた。ルルイエ異本の姿も、いつの間にか見えなくなっている。

「では、またお目にかかろう！　大十字九郎君！」

　祭さい壇だんの間には、ウェスパシアヌスの哄こう笑しようだけが残された。

「で、どうするよ、あいつ……」

　全身の殻からをすべて脱ぎ捨てたダゴンは、その体を徐じよ々じよに巨きよ大だい化かさせていた。それは止とどまることを知らず、ついには祭壇の間の天てん井じようをも突つき破やぶっていく。それを機に外がい壁へきや床ゆかに亀き裂れつが生じ、神しん殿でん内の崩ほう壊かいが始まった。

「やべえ……。逃にげるぞ！」

　九郎たちは来た道を引き返して神殿から飛び出した。それと同時に幾いく千せん年の時を経てきた神殿はいとも簡単に崩れ去り、そこから異形が姿を現す。見上げるほどに巨大化したダゴンは、デモンベインと同程度の大きさはあるだろう。まさに神に相応ふさわしい神気を発してそびえ立っている。ただそれだけにもかかわらず、心は押おし潰つぶされ、鋼はがねの意志に亀裂が生じる。

「姫ひめさんたちは逃げてくれ。できるだけ遠くに！」

　九郎は自らを奮い立たせるため、偃月刀を構え、神へと牙きばを

むいた。

「大十字さんは、どうするのです？」

「あいつを放置しておくわけにはいかねえ。デモンベインでぶっ殺す！」

　神を相手に吐はくセリフではなかったが、気にしてなどいられない。今ここで確実に始末しなければ、ブラックロッジが手を下すまでもなくアーカムシティは壊かい滅めつする。

「執しつ事じさん！」

　九郎がウィンフィールドに目配せをすると、彼は一つうなずいて瑠璃の体を抱かかえ上げた。

「ご武運を！」

　言うが早いか、ウィンフィールドは疾しつ風ぷうのごとき勢いで駆かけていった。

「これでよし。アル、いくぜ！」

「おう！」

　アルの力強い声にうながされ、九郎はデモンベインを召しよう喚かんする。

憎ぞう悪おの空より来たりて

正しき怒いかりを胸に

我等は魔まを断つ剣けんを執とる

汝なんじ、無む垢くなる刃やいば―デモンベイン！

　突とつ然ぜん、目の前の空間が爆ばく砕さいし、雨雲が雷らい雲うんを呼ぶ。頭上に雷光が走り抜ぬけ、雷鳴が轟とどろいた瞬間、それは地上に顕現した。鋼の巨きょ人じん。人が造り出した機械仕

じ掛かけの神・デモンベインである。九郎とアルは速すみやかにデモンベインへと搭とう乗じようし、ダゴンと対たい峙じした。

（しかし、こいつ……。ただもんじゃねえ……）

　相対しているだけで、その凄すさまじさを全身で感じ取ることができる。皮ひ膚ふの表面に電気が走るかのような痺しびれを感じ、潜せん在ざい的な恐きよう怖ふ心しんが呼び覚まされるのか、寒気が鳥とり肌はだとなって現れた。

「神気にのみこまれるなよ。あのような形だが、神として崇あがめられた存在だ。気を抜けばひとたまりもない」

　アルの話はもっともだが、気を抜く余よ裕ゆうなど最初からない。つまり、ダゴンの出方などをうかがう必要もなく、今、この瞬間から全身全ぜん霊れいで必ひつ滅めつの一いち撃げきをくわえるつもりで九郎は臨んだ。

「うおぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！」

　九郎はダゴンの神気を打ち破るかのように吠ほえると、デモンベインを疾しつ駆くさせる。と同時に頭部のバルカン砲ほうをダゴンへと浴びせかけた。数百発の砲ほう弾だんがダゴンの全身を剔えぐり、そこからドロリとした緑色の体液が流れ落ちる。呻うめき声を上げ、膝ひざから崩くずれるダゴン。そこへデモンベインは飛び蹴げりを加え、ダゴンを地面へと這はいつくばらせた。

「よっしゃ！　トドメだ！」

　九郎は精神を集中させていく。右手に秘ひめた必滅の機関が目を覚ます。

「光射す世界に、汝ら闇黒、棲すまう場所なし！」

　九郎は叫ぶと同時に右手を振ふり上げると、それをダゴンへと向かって突き出した。

「レムリア・インパクト！」

　突き出された右の掌てのひらから途と方ほうもない熱量が放出され、ダゴンを、そして島全体を焼きつくしていく。世界は白い世界の中へと閉じていった。

+

　数千年の時を重ねてきた神殿は崩れ去り、祀まつられていた神は塵ちりと化していた。無人島の中心部には巨大なクレーターができ、森林は聖なる業ごう火かで灰かい燼じんと化している。そしてその中心部では、鋼の巨人が堂々たる勝ち名乗りを上げていた。

　その様子を上空で見守る影かげがある。ナイアだ。彼女は降りしきる風雨の中にあって、まったく濡ぬれていない。雨あま粒つぶが彼女を避さけているかのようだ。

「不完全な状態だったとはいえ、ダゴンを一撃でしとめてしまうとはね。さすがの僕も、今回は予想しきれないよ」

　ナイアは少し誇ほこらしげな目でデモンベインを見つめた。

「本当に……本当に、もしかするかもしれないなあ」

　地上に向かってにこりと笑えみを浮うかべるナイア。そんな彼女の体に、一筋の光が降り注いだ。

　上空を振り仰あおぐと、たれこめていた灰色の雲の隙すき間まから、幾いく筋すじもの光の帯が伸のびてくるところだった。そんな荘そう厳ごんな光を全身に浴びながら、再びナイアは地上へと目を向ける。

「頑がん張ばってくれよ、九郎君」

+

「結局、疲つかれを癒いやすどころか散々な目に遭あっただけのような気が……」

　瑠璃が用意したバスの後部座席に陣じん取どっていた九郎は、そ

う愚ぐ痴ちをこぼした。九郎の隣となりでは、アルが「うんうん」とうなずいている。

「ちょっと、貴方あなた方！　独り言なら聞こえないように言ってくださいまし！」

　さっそく瑠璃は当然の権利だとばかりに目くじらを立てた。

「ふん。聞こえるように言っておるのだから、聞こえて当然だ」

　アルと瑠璃は視殺戦を始め、その様子をウィンフィールドが見守っている。何事もなかったかのような日常の光景。

　だが、自分たちを取り巻く事態は深刻さを増していると九郎は考えていた。ブラックロッジの魔ま術じゆつ師したちが姿を現し始めたことからも、それは明らかだ。ダゴンを使った実験もそうである。犯罪集団という枠わくから大きく逸いつ脱だつし、より最悪な集団へと変へん貌ぼうを遂とげつつあった。

（厄やつ介かいだな……。やれるのか、俺に？）

　だが、もっと厄介なこともあった。九郎は瑠璃と低レベルな言い争いをしているアルへと目を向けた。神しん殿でん内でのあの出来事があってから、九郎とアルは変に互たがいを意識するようになっていた。

（まあ、意識しないでいるほうが難しいか）

　毒で我を失っていたとは言え、アルに襲おそいかかったのは事実である。今でもアルの肌はだは彼の目に焼きついていたし、手には彼女の柔やわ肌はだの感かん触しよくが残っていた。

　九郎の視線に気がついたのか、アルは瑠璃との言い争いを切り上げて目を向けてきた。

「なんだ？」

「いや」

　九郎とアルは見つめ合ったまま押し黙だまった。

（これだもんなぁ……。こんな調子で、この先、大だい丈じよう夫

ぶなんだろうか）

　一いち抹まつの不安を覚える九郎の目を、アルの翡ひ翠すい色の目が捉とらえる。

「案ずることはない」

　九郎の心を見み透すかしたのか、アルは静かに告げた。

「妾わらわと汝なれは端はなから奇き妙みような関係ではないか。それがさらに奇妙になったところで、たいした問題ではあるまい？　それに汝といるのは、これでなかなか心ここ地ちよい。それが少しばかりこそばゆくなっただけのこと。ならば不必要に意識する必要もあるまいて」

　照れくさかったのか、アルは少しはにかむようにして笑った。九郎の胸が高鳴る。

　九郎が自分の気持ちを持て余している間にも、バスはアーカムシティへ向かって走っていく。

　ふとアルが九郎へと耳打ちした。

「汝が真性のロリコンであったことは黙っておいてやろう。なに、気に病やむことはない。妾ほどの美少女が側そばにいるのだ。むしろ当然の反応といえるだろうさ。だが警告しておく。妾は汝に体を許したわけではない。血迷って寝ねこみを襲うような真似まねをしてみよ。そのときは容よう赦しやはせんぞ！」

　やはり一時の気の迷いだったのだと九郎は結論づけると、拳こぶしを震ふるわせた。

+

　マスターテリオンへの報告を終えたウェスパシアヌスは、夢む幻げん心母の中に用意された自室へと戻もどってきた。部屋は西洋風の家具でまとめられ、一見、貴族が住まう住居のようにも見える。だがそれらから目を外せば、そこが異常だと解わかるだろう。蜥蜴

とかげ、蠍さそり、毒虫、人間の内臓、人間以外の内臓、奇妙な肉片などが瓶びん詰づめにされたりホルマリン漬づけにされたりしている。中には蛸たこ人間やインスマウス面づらの人間の標本もあった。本ほん棚だなには魔ま導どう書しよが並び、床ゆかには巨きよ大だいな魔ま法ほう陣じんが描えがかれている。まったく不ふ釣つり合いな物が渾こん然ぜん一体となりながらも、奇妙な調和をみせるという、なんとも奇妙な部屋だった。

「いやあ、めでたい。めでたいねえ」

　ウェスパシアヌスは顎あご髭ひげをなでつけながら、満足そうにうなずいた。彼が中心となって動いていたインスマウスでの実験は成功を収め、ルルイエ異本の回収にも成功。言うことなしである。ただ大十字九郎の出現は予定外であり、蛸人間があっさりと敗北をきっしてしまったのは意外だった。

（Ｃ計画の発動の日も近い。近いぞ）

　その日を想像すると、震えが止まらなくなるウェスパシアヌスである。

　だが、少しばかり気になることもあった。ブラックロッジの大導師、そして彼の主あるじでもあるマスターテリオンのことである。Ｃ計画の発動に不可欠な魔導書、すなわちルルイエ異本を手に入れ、Ｃの巫み女こ、そして中ちゆう枢すうユニットもそろっている。アル・アジフの知識さえそろえばＣ計画は完かん璧ぺきなものになるわけだが、それに対するマスターテリオンの反応には疑問を持たざるを得ない。まるで初めから計画に入ってないような、そんなぞんざいな対応しかみせなかったからである。

（あれではアウグストゥスが不満に思うのも無理はないが、さてさて、どうなることやら）

　ウェスパシアヌスはアウグストゥスの中に潜ひそむ野心を、とうの昔に見み抜ぬいていた。もっとも、それを言うなら彼も似たようなものであり、実際、アンチクロスに仲間入りできたのも己の野心がなせた業わざではあったのだが――それだけで満足できるウェスパシアヌスでもなかった。

（まあ、『ムーンチャイルド計画』は成功しすぎた感はあるが）

　ウェスパシアヌスは苦く笑しようする。彼がムーンチャイルド計画によって生み出した最高傑けつ作さくは、想像をはるかに超こえるものだった。『暴君』ネロ。アンチクロスの一人にして、マスターテリオンと肩かたを並べる最強の魔術師である。そんなウェスパシアヌスの最高傑作も、今は夢幻心母の最下層にある牢ろう獄ごくで監かん禁きんされていた。ブラックロッジに敵対する大罪人として。

（しかし、ネロの力は尋じん常じようではない。作られた存在だとしても、異常すぎはしないだろうか？）

　だとしたら、ネロ以上の力を有するマスターテリオンは何者なのだという疑問が出てくる。何度となく抱いだいた疑問ではあるが、結論はいまだに出てはいない。それ以前に、彼の素す性じようは一いつ切さい不明だった。マスターテリオンとて人の子である以上、母の胎たい内ないから生まれ落ち、何者かの手によって育てられたはずである。身元を調べようと思えばできるのであろうが、ウェスパシアヌスも、そして他のアンチクロスもそれをしようとはしなかった。そのようなことをすれば確実に『死』が待ち受けていることを、本能的に察知していたからである。

　ウェスパシアヌスは思考を切り替かえると、蛸人間の標本の脇わきにあるワインセラーへと足を向ける。そこには何十本ものワインが収納されており、そのどれもが年代物の高級品である。彼はその中からお気に入りの一本を取り出すと、その栓せんを引き抜ぬいた。甘く芳ほう醇じゆんな香かおりが鼻び孔こうをくすぐる。

「これは罪が赦ゆるされるよう、多くの人のために流す私の血、契けい約やくの血である。──どうだね、サンダルフォン。君も一いつ杯ぱい」

　ウェスパシアヌスはワイングラスを手にすると、それを部屋の隅すみにある暗くら闇やみへと差し出した。

《おまえが聖書の一節を読み上げるか……》

　暗闇の中からウェスパシアヌスの声に応じる機械仕じ掛かけの声。

　そしてそれは闇やみの中からゆっくりと現れた。黒の天使・サンダルフォンである。

《己オレに酒など意味のないものだ。知っているだろう？》

「酒を楽しむことができんとは……。人生において、それに勝まさる悲劇などあろうか？　ああ、ああ、可哀かわい想そうなサンダルフォン。ん？　元はと言えば私のせいだったかね？」

　妙みように芝しば居いがかった口調で言うと、ウェスパシアヌスはワインをグラスへと注いだ。

「もっとも、君にとっての極ごく上じようの酒は、憎ぞう悪お、ということになるのかな？　そうとも。そうに違ちがいない。私がこれを止められないのと同じように、君の憎悪は蜜みつのように甘美なのだろうね」

　ウェスパシアヌスは殺意にも似た視線を気にもせず、グラスに注がれたワインをあおった。

《己を酒の肴さかなにするために呼びつけたわけではあるまい？》

「いや、正直、そのつもりだったのだが……」

　グラスにワインを注ぎながらウェスパシアヌスは続ける。

「メタトロンを仕留めたとして、そのあとはどうする？」

《おまえには関係のないことだ》

　サンダルフォンがウェスパシアヌスに背を向けたときである。室内が激しく揺ゆれ、ウェスパシアヌスが手にしたグラスから液体がこぼれた。途と端たんに周辺が慌あわただしくなる。

「これはいったい……」

　口にはしたが、実のところ彼は気がついていた。五感、そして第六感までもが異常なまでの危機感を感じ取っている。そして夢幻心母にこのようなことが起きたのは、これが初めてではなかった。

　部屋の扉とびらが乱暴に開かれ、ブラックロッジの信徒が数名、転がりこんでくる。

「どうした。なにがあった!?」

　聞くまでもないことをウェスパシアヌスは口にする。

「ほ、報告します！　罪人が……『暴君』が脱だつ獄ごくしましたっ！」

「すでにカリグラ様とクラウディウス様が暴君を追っておりますが――」

　信徒たちの動どう揺ようは激しく、要領を得ないが、おおよそのことは理解できた。

「サンダルフォン？　暴君の件は、君もあながち無関係ではあるまい？」

《だからと言って己が尻しりぬぐいをする必要はない》

「メタトロンを殺してしまうかもしれないよ？」

《己の道に立ちふさがるというのであれば排はい除じよするだけだ》

　サンダルフォンは鋼鉄の仮面に鋼鉄の意志を貼はりつけ、その姿を闇の中へと消した。

「さてさて。カリグラとクラウディウスごときに、あの暴君がどうにかできるものかな？」

　ウェスパシアヌスは下げ卑びた笑えみを浮うかべると、グラスにワインを注いだ。

第六章 悠久（ゆうきゅう）たる孤独は我を蝕（むしば）む

クラウディウス

ロードビヤーキー

外灯すら灯ともらぬ寂さびれた暗い路地裏を、土ど砂しや降ぶりの雨が打ちすえている。

忘れ去られたかのようなその路地は、実際、アーカムシティの住人からは忘れ去られ、使われなくなった道の一つである。そんな道を疾しつ走そうする影かげがあった。小こ柄がらな少女の姿をしたその影は、ブラックロッジからも恐おそれられる反逆のアンチクロス・暴君である。

彼女の姿は異様だった。手首には引きちぎられた拘こう束そく具ぐがぶら下がり、足には枷かせがつけられている。顔には視覚を奪うばうための仮面がはめられ、口には轡ギヤグを銜くわえさせられていた。常人では歩くことすらままならぬ有様だが、暴君の動きは素す早ばやく、そして軽快だった。

不意に暴君の足が止まる。振ふり返ると、そこにはブラックロッジの信徒が十数人、マシンガンを片手に狙ねらいを定めていた。すでに数十人の信徒を血祭りに上げていた暴君だが、追っ手の数は減りもしない。それどころか増える一方である。だが、今度こそ打ち止めのようだ。信徒の背後に立つ二人の男が出てきたことからも、それと判わかる。その男たちは暴君の拿だ捕ほを命ぜられたアンチクロスのカリグラとクラウディウスである。だが二人のアンチクロスを前にしても暴君は怯ひるまず、それどころか轡ギヤグでふさがれた口元には笑えみすら浮かんでいた。

そんな彼女に腹を立てたのはクラウディウスである。歳としは十代半ばだろうか。大人への成長が始まったばかりのような少年であり、柄がら物もののＴシャツに短パン、そしてスニーカーというストリートファッションは、街でよく見かける少年たちと大差はない。ひどい癇かん癪しやく持もちらしく、クラウディウスは目くじらを立てて信徒へと命ずる。

「グズグズしてねぇで、さっさと殺やらねえか、このクズども！」

クラウディウスの号令で、信徒たちはマシンガンを一いつ斉せい

に掃そう射しやした。その弾たまは呪じゆ術じゆつ的に加工され、暴君専用にカスタマイズされた特別な弾だん丸がんである。通常の弾丸より殺傷力が高いのはもちろん、呪術で障しよう壁へきを現出させたとしても、それを中和し、破は砕さいする力を秘ひめていた。

　弾は降りしきる雨あま粒つぶよりも多く、激しかった。暴君の体から肉が弾はじけ飛んでいく。肩かたの肉が剔えぐれ、骨はむき出しとなり、右手が吹ふき飛び、指が、足がちぎれる。内臓が汚お物ぶつのように流れ出し、そこに血液と脳のう漿しようがスープのように混じり合った。暴君は静かに汚お泥でいの中へと身を沈しずめていく。

「終わったカ!?」

　一部始終を無言で見守っていたカリグラが、たどたどしい口調で言った。

　彼の体は驚おどろくほど大きい。熊くまを連想するほどの巨きよ軀くであり、異様に発達した筋肉はヘラクレスのようである。派手な色しき彩さいのスーツの上にガウンをはおり、髑どく髏ろを模した覆ふく面めんを被かぶったその姿は、かなり異様である。

「ケッ！　こんなヤツが最強のアンチクロスだっての？　なんかの間ま違ちがいじゃねーの!?」

　クラウディウスが吐はき捨てた、そのときである。物言わぬ骸むくろと化していた暴君の上半身がむくりと起き上がった。彼女は半分ほど吹き飛んだ頭を信者たちへと向け、潰つぶれた眼球で彼らをねめつけた。それだけでも信徒を震ふるえ上がらせ、恐きよう慌こう状態へとおとしいれるには十分だったが、彼女のちぎれかかった腕うでには紅色をした大口径の拳けん銃じゆうが握にぎられていた。暴君は銃じゆう口こうを彼らへと向けると、それを立て続けに撃うち放った。瞬またたく間まに十数名の信徒が血祭りとなるが、彼らも黙だまってはいない。暴君をさらなる肉片へと変えるべくマシンガンを撃ち放つ。だが暴君専用に作られた銃じゆう弾だんは、彼女には届かなかった。そのことごとくが暴君に触ふれる前に威い力りよくをなくし、足あし下もとへと転がっていく。

「おいおいマジかよっ！　もう順応しやがった！」

　クラウディウスが悪態をついている間にも、マシンガンの掃射は続く。だが数百発にも及およぶ弾丸は暴君の目の前に出現した防ぼう御ぎよ陣じんに受け止められ、空中で制止していた。信徒が怯む中、暴君は大半を失ったその顔で言葉を紡つむぎ始める。

「術種選せん択たく：因果カウン応報ター・陣スペル」

　暴君が宣言するのと同時に、銃弾は撃った本人へと向かって返っていく。まさに因果応報の名に相応ふさわしい弾丸の雨あめ霰あられは、一いつ瞬しゆんにして信徒たちの命を奪った。

　暴君の体は再生を始めていた。まるでビデオを逆に再生しているかのように、肉片や腕、骨などが彼女の体へと戻もどっていく。そしてその左ひだり腕うでには、いつの間にか銀の拳銃が握られていた。

　暴君が二挺ちようの拳銃を十字に交差させる。暗くら闇やみの中に獣けものにも似た銃の咆ほう哮こうと、幾いく筋すじもの閃せん光こうが走り抜ぬけた。

+

　九郎はアルをつれて夜道を駆かけていた。

　いきなり降り始めた大雨で下着までびしょ濡ぬれで、気持ち悪さを通り越こして清すがすがしささえ感じるほどだ。もっとも、そう考えているのは九郎だけらしく、アルは恨うらめしそうに彼をにらんでいた。

「妾わらわは『本』だからな。濡れるのは好かんのだ」

「だからって、姫ひめさんの呼び出しを無視して事務所でくつろぐわけにもいかんだろーがよ」

　九郎とアルは路地裏を奥へ奥へと進んでいく。ヘタに表通りを使うより、多少、治安が悪くても裏道を抜けたほうが早いのだ。もっともブラックロッジと対たい峙じしている彼である。今さら治安もなにもないのだが。

　街の喧けん噪そうが遠くに感じられるようになったときだ。九郎は微び弱じやくな魔ま力りよくを感じ取った。

　九郎とアルは足を止め、顔を見合わせた。彼らの前方には淡あわく光る炎ほのおのような靄もやが浮うかんでおり、揺ゆらめいたかと思うと、まるで二人を導くかのように小道へと姿を消していく。

「なんだ、ありゃ？」

「微かすかではあるが魔力の気配がある。用心せよ」

　二人はウィル・オー・ウィスプに魅み入いられた旅人のように、その光の下へと足を運んでいく。

「九郎、あそこになにかおるぞ」

　もちろん、九郎も気がついていた。横よこ殴なぐりの雨が降りしきる中、襤褸ぼろを着た少女が呆ぼう然ぜんと立ちつくしている。崩くずれ落ちそうなほど体を震わせている彼女の顔色は悪く、唇くちびるは血の気を失って青ざめている。立っているのがやっとのようにさえ見える彼女は、まるで捨てられた子こ猫ねこのようである。

「……まいったな、こりゃ」

　九郎は頭をかきながら、今後のことを思案し始めた。

+

「まったく、汝なれはお節せつ介かいすぎる」

　事務所へと戻るやいなや、アルは非難の声を上げた。

「だからって放置したら後味悪わりィじゃねえかよ」

「その後味悪ィで災難に見み舞まわれているようだが？」

「ああ、そのとおりですよ。おかげでクソ生意気な小こ娘むすめと出で逢あうハメになっちまったからな！」

九郎はバスルームでバスタオルを三枚ほど引ったくると、それをアルと少女へ放ほうり投げた。アルはそれをキャッチするが、少女は動こうともしない。バスタオルは彼女の頭へと舞まい降りた。

嘆たん息そくする九郎の目を、アルがジッと見つめてくる。気まずくなった彼は視線を外したのだが、余計に気まずさは増してしまう。アルの体に貼はりついたドレスが目に入ったからだ。体のラインが浮き上がり、うっすらと肌はだが透すけて見えるせいか、変に裸はだかを見せられるよりも艶なまめかしい。

「……変態」

ボソリとつぶやくアルを尻しり目めに、九郎は少女の下へと足を運ぶと、頭に被かぶさったままのバスタオルを使って体を拭ふいてやった。だが、それでも少女は反応しない。心でも失っているかのようだ。

「風か邪ぜひいちまうな……。アル、悪わりぃけど、この嬢じょうちゃんの着き替がえと風ふ呂ろを手伝ってくれ」

「なぜ妾が？」

「俺がやるわけにもいかないだろうがよ。頼たのむよ」

「後先考えずに行動するから、このようなことになる」

アルは明らかにご機き嫌げん斜ななめだったが、彼女の手を借りるしかなかった。九郎は少女の手を引いてアルの下へとつれていく。アルは腰こしに手を当てると、わざとらしい溜ため息をついた。

「主あるじの失態は妾の責任でもある。どれ、娘。こちらへくるがよい」

アルは少女の襤褸に手をかけ、それを脱ぬがせ始めた。それでもなお、少女は抵てい抗こうすらしない。

（このお嬢ちゃん、何者だ？）

背格好、そして歳としもアルと同じくらいだろうか。もっともアルの歳は千歳程度だが、外見だけなら十代前半なので、おそらく少女もそれくらいだろう。他ほかに気になることもあったのだが、そ

れ以上、少女を観察することはできなかった。アルが頬ほおを引きつらせながらにらんでいたからである。

「あっちを向いておれ。性犯罪者として捕つかまりたくなければな」

　九郎が慌あわてて背を向けると、二人はバスルームへと入っていった。

「まいったな、こりゃ」

　九郎は額に手を当てながら唸うなり声を上げた。

+

　シャワーを浴びて出てきた二人の少女は、それぞれ男物のシャツだけはおっていた。

　さっそく九郎は目のやり場に困ってしまうが、変に目を泳がせてアルに変態扱あつかいされるのも癪しやくである。九郎は半ばヤケクソになると、挑いどむような目で二人を凝ぎよう視しした。

「……ロリコンめ」

　アルのつぶやきを聞き流しながら、九郎は少女の下へと歩み寄った。血の気すら失うせていた少女の肌はほんのりと上気し、生気が感じられるまでに回復している。襤褸ぼろの代わりにシャツを着ているせいか、年とし頃ごろの女の子に見えた。放心状態はあいかわらずだが、出逢ったときよりはマシである。とりあえず一安心した九郎だが、だからこそ余計に気になることもあった。

「汝も気づいておるようだが……」

　アルが小声で耳打ちしてきた。どうやら彼女も同じことを考えていたらしい。少女の手足に刻まれた、新旧、様々な傷きず跡あとのことである。特に手首と足首の傷痕はひどく、虐ぎやく待たいを容易に想像できた。

「全身、あんな感じだ。厄やつ介かいなことにならねばいいのだが」

（なんか、嫌いやな感じだよな……）

　アーカムシティの繁はん栄えいぶりは目を見張るばかりだが、光あるところには影かげもできる。その観点から言えば、少女の身に起きた災さい厄やくも珍めずらしいことではなく、ブラックロッジの凶きよう行こうに比べれば些さ末まつな問題かもしれない。とは言え、このような事実を見せつけられては放ほうってはおけない九郎である。

　九郎は腰を曲げて少女の目線に合わせた。

「俺は大十字九郎。こっちはアルだ。嬢ちゃんの名前は？」

「……」

「まいったな、こりゃ」

　九郎がアルへと目を向けると、彼女は「妾わらわを見るな」と言ってそっぽを向いてしまった。

「主の失態をフォローするんじゃなかったのかよ」

「尻しりぬぐいをするとまでは言っておらぬ」

　言い争いが取っ組み合いの肉にく弾だん戦せんへと変わり始めたときだ。九郎は少女の視線に気がついた。

「大十字、九郎？」

　少女は消え入りそうな小さな声で、そうつぶやいた。

「おおっ！　そうだ、そうそう。大十字九郎だ。嬢ちゃん、自分の名前は言えるかい？」

　九郎の問いに少女は少し思案顔をしたが、すぐに彼女はこう言った。

「エンネア」

+

いつになく穏おだやかな朝だった。

九郎は当然のように惰だ眠みんを貪むさぼっていたのだが、至福の時間は長くは続かない。突とつ然ぜん、鳩尾みぞおちを激しく圧あつ迫ぱくされた九郎は、「ぐえっ」と潰つぶれた蛙かえるのような悲劇的な声を発して目を見開いた。何事かと確かく認にんするまでもない。少女が九郎の腹部に載っていたのである。癖くせのある赤毛のショートヘア、そしてよく動く大きな眼が印象的な少女である。一いつ瞬しゆん、誰だれかと思った九郎だが、あの襤褸ぼろを着た少女であることに気がついた。

「……えっと、確かエンネアだっけ？」

九郎の言葉に、エンネアの表情がパッと華はなやいだ。その感情の豊かさに、彼は少し困こん惑わくしていた。

「ず、ずいぶん元気そうじゃないか」

「だって、今日はこ～んなにいい天気なんだよ。お部屋でジッとしているのがもったいなくて」

「確かに今日は天気も良さそうですが……。っていうか、この状じよう況きようは明らかにマズイような気が？」

エンネアはＴシャツしか着てないのである。このような光景を口うるさい同居人にでも目もく撃げきされた日には、一生、白い目で見られかねなかった。だが、悲劇は起きた。

「朝っぱらから騒そう々ぞうしい！　何事だ!?」

ソファーで眠ねむっていたアルが、怒ど声せいとともに飛び起きた。その途と端たん、部屋に漂ただよう重い空気。エンネアはそそくさと九郎の体から離はなれると、素知らぬ顔で台所へと歩いていく。

「どうやら警告は無む駄だだったようだな。しょせん、汝なれは生きつ粋すいの性犯罪者よ」

「……弁解くらいさせれ」

　九郎は体を起こすと、鼻歌まじりでフライパンを操あやつっているエンネアへと目を向ける。

（なにやら、うまそうな匂においが……）

　鼻をひくつかせながら匂いをたどっていくと、テーブルに豪ごう勢せいな料理の数々が並んでいた。

「冷蔵庫の食材、勝手に使っちゃったけど、別にいいよね？　すっからかんになったけど」

「はいぃ？」

　慌てて冷蔵庫の中を確認すると、一週間分の食料が綺き麗れいに消え失せていた。

「わ、我が家の食料が……。一回の朝食で……」

　九郎は涙なみださえ浮うかべながらぼやくが、エンネアの耳には届いてはいないようだ。彼女は黙もく々もくと調理を続け、着々と料理を仕上げていく。そして九郎の苦く悩のうをよそに、彼の腹の虫は鳴き始めていた。

「はいっ！　できたよ～♪」

　エンネアは炒いため物を山ほど載せた皿を手に振ふり返ると、それをテーブルに置いた。

「冷めないうちに食べてね」

　彼女はソファーにいるアルを蹴けり落として席を確保すると、満面の笑えみを浮かべた。

「にゃ、にゃにをするかっ」

　床ゆかの上に投げ出されたアルは非難の声を上げるが、エンネアは気にもしない。

（なんだか朝っぱらから一いつ触しよく即そく発はつなんですが、俺はどうしたらいいのでしょうか？）

　途と方ほうに暮れる九郎だが、とりあえずは食欲を満たすべく席に着いた。テーブルには焼き魚、野菜と肉の炒め物、サラダに味噌みそ汁しると、九郎が好んで食べる日本食がずらりと並んでいる。さっそく箸はしをつけた彼は驚おどろいた。プロ顔負けの繊せん細さいな味付けだったからである。

「うん、うまいよ、これ！」

　絶賛する九郎に対し、エンネアは胸を張った。一方、足あし蹴げにされたアルは不満たらたらである。

「小こ娘むすめ、妾の食事はどうなっておる？」

　エンネアは魚の尾おを指先でつまむと、それをアルの目前へと持っていった。

「にゃ？」

「猫ねこには魚で十分かと？」

「こここここ、小娘っ。妾わらわを猫扱あつかいするか」

　アルの目に憎ぞう悪おの炎ほのおが燃え上がっていたが、変に口を挟はさむと命に関かかわることを、九郎は経験上、よく知っていた。彼は朝アーカム・アド刊ヴアタイザーを広げて視界をさえぎると、記事へと目を向けた。

「やっぱ男ってのは、料理ができてカワイイ女の子のほうが好きだよねぇ？」

「なななっ、汝は妾を能なしだとでも申すのかっ!?」

　言い争いにうんざりしながら新聞の一面へと目を向けた九郎は、その内容に驚きよう愕がくした。

（ブラックロッジの構成員が惨ざん殺さつ？　しかも数十名!?）

　事件は昨日の未明に路地裏で発生していた。新聞では『裏社会の抗こう争そうが激化』とあったが、ブラックロッジに対たい抗こう勢力など存在しないと考えるべきである。とは言え、数十人も殺害するとなると、それなりに大きな組織が介かい在ざいしたと考えたほうが自然ではあった。

（昨日の未明、しかも路地裏か）

　九郎は新聞を少し下げ、二人の様子をうかがった。ただの取っ組み合いを通り越こし、アルは魔ま力りよくまで行使してエンネアに襲おそいかかっている。彼女はアルの攻こう撃げきを軽くあしらっていたが、そのおかげで部屋のあちらこちらで小爆ばく発はつが起こり、ただでさえ汚きたない部屋はゴミの山と化していた。

（……まさかねぇ？）

　九郎は一つの仮説を立てたが、すぐに愚ぐにもつかないことだと気づいて考えを改める。

「おっと、あぶないあぶない」

　エンネアは宙で一回転しながら九郎の背後に回った。

「おのれ小娘、ちょこまかと！　妾の力、思い知るがよい！」

　アルは目を怪あやしく輝かがやかせると、両手に集めた魔力をエンネアへと向けた。

「お、おい、アル、ちょっと待てっ！」

　泡あわを食った九郎が慌あわてて止めに入るが、遅おそかった。アルの掌てのひらが光を帯びたかと思うと、それは九郎目がけて飛んでくる。次の瞬しゅん間かん、彼は全身を貫つらぬく激しい衝しよう撃げきとともに宙を舞まっていた。

「ぐはぁー、なんで俺が被ひ害がい者しやにぃぃぃぃ」

　九郎の意識は暗転し、再び目覚めたのは一時間後のことだった。

+

　九郎とアル、そしてエンネアの三人は、アーカムシティの繁はん華か街がいへと足を運んでいた。エンネアの服を調達するためである。本当はアルと二人で来る予定だったのだが、エンネアが駄だ々

だをこねた結果がこれだった。九郎は彼女のために自分の服を貸していたのだが、袖そでをまくりまくったジャケットと、裾すそを上げまくったスラックス姿というのは、かなり滑こつ稽けいである。

　エンネアは九郎の腕うでにぶら下がりながら、生まれて初めての外出だと言わんばかりに大はしゃぎしていた。反対側ではアルが不ふ機き嫌げんを絵に描かいたような顔をしながら、九郎の袖をつかんでいる。

「ところでエンネア、君に訊ききたいことがある」

　九郎は神しん妙みような顔でエンネアに問うた。

「人間、誰だれしも一つや二つ、秘密を持っているものだが、答えたくなければそれでもいいから」

　エンネアはきょとんとしたあと、「あ～ダメダメ」と言いながら首を横に振った。

「話せないようなことばかりなのか？」

「そーじゃなくて、なぁんにも覚えてないんだ」

　エンネアは舌を出してみせた。さして重要でもないような素そ振ぶりだが、九郎には大事である。

「記き憶おく喪そう失しつってやつ？　名前以外、覚えてないんだよね。追われてたような気はするんだけど」

「こいつは確かに厄やつ介かいだな」

「だから言うたであろうに。どうするつもりだ？」

「どうするって、うーん……とりあえず姫ひめさんの力でも借りるか」

「また小娘に頼たよるつもりか？　汝なれも探たん偵ていを名乗るなら、自分の足を使えばよかろう？」

　アルの指し摘てきはもっともだったが、無駄に歩き回るより覇道財ざい閥ばつの力を借りたほうが早い。それはエンネアのためにもなると九郎は信じていた。もっとも、プライドはボロボロになるだ

ろうが。

　今後のことを思案していたときだ。突とつ然ぜん、エンネアは九郎の腕から手を放すと、近くにあるブティックへと向かって突とつ撃げきしていった。あっという間の出来事に、取り残された二人は呆ぼう然ぜんとなる。

「小こ娘むすめめ、ずいぶん立派な店へと入っていきおったわ」

　エンネアが入っていった店は、ブランド物しか置いてないような店だった。

「金、足りるかな……」

　服は量りよう販はん店てんという九郎の固定概がい念ねんを見事に打ち砕くだく大だい胆たんな行動に、彼は失神寸前である。

　店に近づいておそるおそる中を覗のぞきこむと、エンネアは店内を所ところ狭せましと駆かけ回り、高価そうな服を何着も手にしては試着を繰くり返している。九郎の不安は増大していくが、彼女は悪びれる様子もなく試着し続けていた。そしてとうとう、彼女は一着の服を身にまとって九郎の下へと駆けてきた。

「ねえねえ、どう？　可愛かわいい？」

　エンネアはフリルがたくさんついた朱しゆ色のドレスのような服を身に着けていた。ほとんどアイドルのような姿だったが、年ねん齢れい相応であるせいか不思議と違い和わ感かんはない。女は化けると言うが、その姿は贔屓ひいき目めで見ても愛らしく、服一つでここまで変わるものかと唖あ然ぜんとなるほどだ。

「汝……鼻の下が一メートルくらい伸のびておるぞ」

　アルは怒いかりを通り越こして殺意に近い目で九郎を凝ぎよう視しする。

「そんなお古は、ほっとけほっとけ。で、どう？　似合う？」

　エンネアはアルを蹴けり飛ばして九郎の視界から排はい除じよすると、再度、訊たずねてきた。

「服のことはわかんねえけどさ。それ、似合ってると思うぜ？」

エンネアは大きな眼をキラキラと輝かせると、九郎に抱だきついてきた。九郎はさっそく動どう揺ようし、頬ほおを引きつらせた。密着した部分から未熟ながらも女性らしい柔やわらかさが伝わってきたからだ。だが、一いつ瞬しゆんにして九郎の頭は冷めてしまう。アルの視線が怖こわすぎたからである。彼女は体をわななかせながら、九郎とエンネアをにらみつけていた。

「な、汝等、なにを引っついておるか！」

　激げつ昂こうするアルに対し、エンネアはさらに体をすり寄せてくる。

「もしかして、嫉しつ妬とってやつですか？　見苦しいねえ？」

　エンネアが鼻を鳴らすと、アルの顔は怒りで赤く染まっていく。

「自分が九郎に一番近いからって、油断してたのかな？　甘い、甘いねえ？」

「なっ、なっ！　なっ!!」

「ふふん。女って、日々、己の美び貌ぼうを研けん鑽さんしないと、簡単に男に捨てられてしまうものなんだよね」

　エンネアの挑ちよう発はつに、アルの顔は赤さを通り越して赤しやく銅どう色へと変わっていく。体からは魔ま力りよくが湯ゆ気げのように立ち上り始めていた。

「あ。でもそんな貧ひん弱じやくな体つきじゃ、最初から相手にもされてないかぁ!?」

「こ、こ、この、小娘がぁぁぁぁ！」

　とうとうアルはブチ切れた。彼女の全身からほとばしった魔力は急速に膨ふくらみ、そして弾はじけた。九郎の全身を駆け抜ぬける激しい衝しよう撃げき。気がつくと九郎は空高く舞まい上がっていた。

+

　九郎とアル、そしてエンネアの奇き妙みような共同生活が始まっていた。

　もっとも共同生活とは名ばかりで、九郎にとっては毎日が戦いである。エンネアがアルを挑発し、そのとばっちりを九郎が受ける。

その繰り返しだった。おかげで生傷が絶えず、死線をさまようことさえあった。ブラックロッジが沈ちん黙もくを守っているのが不幸中の幸いだったが、九郎は確実に身の危険を感じ取っていた。

　エンネアの件は覇道の力を借りて調査中だったが一向に進展せず、また彼女の記き憶おくが戻もどる気配もない。九郎は途と方ほうに暮れたが、エンネアはこれ幸いにと彼にまとわりついていた。すっかり押しかけ女によう房ぼう気取りの彼女だが、卓たく越えつした家事の能力は九郎に人間らしい生活を約束してくれた。

「あの娘むすめは、なぜここに居座っておるのだ？　不ふ愉ゆ快かいだ」

　アルは部屋の掃そう除じに精を出しているエンネアを眺ながめながら不満をあらわにした。

「過か剰じように反応しすぎなんじゃねぇの？」

「ふん。あの娘が気に食わんのは事実だが、それだけではない。あの娘には不ふ吉きつな気配がある。災いを運んでくるやもしれぬ。正直な話、関かかわりたくはない」

　アルが真顔で話すものだから、九郎の顔も自然に険しくなる。

「確かに、やりすぎだとは思うけどさ。悪い奴やつじゃないし。それに、もし本当にエンネアが災さい厄やくを運んできたとしてもだ。こちとら天下無敵のマスター・オブ・ネクロノミコンだぜ？　どんな災難だってぶっ飛ばせるさ！」

　九郎がアルの肩かたを叩たたきながら答えると、彼女は顔を赤らめながらそっぽを向いた。

「汝なれは甘い。女に対しては特に甘い。不愉快だ……実に不愉快だ！」

「甘っちょろいことを貫つらぬき通せる奴を正義の味方って言うんだよ」

「……断っておくが、妾わらわが気に入らんのは、その楽観的なところだ。ただそれだけだ。他ほかに含ふくみはない。くれぐれも、くれぐれもだ！」

「はぁ？」

「わ、妾が、あ、あんな小こ娘むすめに、し、嫉妬しているなどと、か、勘かん違ちがいしないことだ！」

　アルは手足をバタバタしながら、しどろもどろで言った。

「さて、お掃そう除じ完かん了りようっと。あとは、この粗そ大だいゴミを外に放ほうり出せばＯＫだね」

　エンネアはつかつかと歩み寄ってくると、アルの首根っこをつかまえて持ち上げた。

「にゃ？」

「まあ、でっかい粗大ゴミ」

「こ、小娘ぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

　アルの大爆ばく発はつとともに、九郎の体は軽々と宙を舞った。

「ま、また俺が犠ぎ牲せいにぃぃぃっ！」

+

　九郎は狭せまい浴室で熱いシャワーを浴びながら、深い溜ため息をついた。

「しかし、身が持たんぞ、こりゃ」

　熱い湯が一日の疲つかれを落としてはくれたが、アルとエンネアの抗こう争そうに巻きこまれるのはご免めん被こうむりたい九郎である。こうしてシャワーを浴びていても二人の口論は絶え間なく聞こえてくるし、ドタバタと騒さわがしい振しん動どうも伝わってくる。魔ま力りよくの気配も感じられた。

（このマンション、近い将来、倒とう壊かいするかもしれない……）

それ以前に殺されてしまう可能性もあった。九郎は嘆たん息そくすると、スポンジにボディーソープの液を染みこませて泡あわ立だて始める。彼が体を洗い始めた、そのときだった。おもむろに背後のドアが開いたかと思うと、エンネアが浴室に乱入してきた。

「どわーっ！　な、なんだ？　なんの用だ!?」

「もちろん、旦だん那な様の背中を流すために決まってますわ」

「いや、ちょっと待て。それはイロイロとヤバイからっ！」

九郎は前を隠かくし、言葉による抵てい抗こうを試みるが、それを無視してエンネアは奉ほう仕し活動を開始した。彼女はスポンジを手にすると、九郎の背中、腕うで、足へとそれを滑らせていく。

「お、おい、前はよせっ！　前は~、前だけは~っ!!」

あられもない九郎の悲鳴が浴室内に響ひびき渡わたった途と端たん、ドアの向こう側で雷かみなりが落ちた。

「な、汝ら……。なにを破は廉れん恥ちなことをしておるか！」

アルはドアを蹴け破やぶり、その勢いを利用して跳とび蹴げりを敢かん行こうする。エンネアは身を屈かがめてそれを避さけるが、一糸まとわぬ無防備な状態の九郎は反応が遅おくれた。アルの爪つま先さきは九郎の顔面へと突つき刺ささる。

「ま、また俺ですか……」

九郎は鼻血を流しながら浴室内でひっくり返った。

+

九郎はソファーで仰あお向むけに寝ねかしつけられていた。部屋は暗く、辺りは深夜のような静けさだ。

「九郎、大だい丈じよう夫ぶ？」

気がつくと、エンネアが九郎の顔を覗のぞきこんでいた。

「ゴメンね。ちょっと調子に乗りすぎたみたい」

　エンネアは舌を出すと、ぺこりと頭を下げた。

「今、何時？」

「二時くらいかな？　アルはふてくされて寝ちゃったけど」

　顔を横に向けると、九郎に背を向けて眠ねむっているアルの姿が見えた。眠っている間もご機き嫌げん斜ななめのようだ。九郎は、やれやれとばかりに溜め息をつく。

「ねえ、九郎……。九郎は戦う人でしょ？」

「なんでそのことを!?」

「お風ふ呂ろのときに気づいたよ。九郎の体、傷だらけだった」

「そうか。そういうことか……」

「なんで九郎は戦っているの？」

　エンネアは、いつになく真面まじ目めな目で見つめてきた。

「なんでって、そうだなぁ。そんなこと考えたこともなかったけど――」

「なにもなくちゃ戦えないと思うけど」

「そりゃそうだ。たとえば、そうだなあ……。後味悪わりィからかな？」

「後味悪い？　よくわかんないよ」

　エンネアは小首を傾かしげる。

「実のところ、俺も解わかってないのかも。たださ、悪党が好き勝手やってるのを見ちゃったら黙だまってられないだろ？　見て見ぬフリができるほど器用じゃないし、それになにもせずに後こう悔かいするのも嫌いやなんだ。もちろん、世界を救おうとか、そんな大それたことは考えちゃいないけど」

「それだけ？　それだけの理由で戦えちゃうものなの!?　あんなに

傷だらけなのに……」

　九郎は返事に窮きゆうした。戦う理由について深く考える前に、それに巻きこまれていたからだ。もちろん、マスターテリオンの存在が許せないというのはある。だが、それだけではなかった。アーカムシティを守りたいのも事実だし、瑠璃や覇道鋼造の想おもいに応こたえたいとも思う。結局のところ、様々な要因が複雑に絡からまって『戦う』という一つの衝しよう動どうになっているような気がした。

「もし、全部無む駄だだとしたら？」

　エンネアは、ひどく冷めた口調でつぶやいた。

「未来を知ることができたとして……。どんなに必死に戦っても誰だれも救えないし、救われない。そんなことが解っていたらどうする？　それでも九郎は戦える!?」

「じゃあ、すべて無駄だったとして、なにもしないでいられるかな？」

　九郎の問いに、エンネアは答えられない。

「俺には無理っぽいな。無駄だと解っていても、最後まで足あ掻がくんじゃないかな。なにもしないなんて、それこそ後味悪ィし。だいたいさ、戦ってるときは必死だから考えている余よ裕ゆうなんかないよ」

　エンネアは解ったような解ってないような、そんな複雑な表情をしていた。

「さ。もう遅おそいから寝ようぜ。どうせ明日も戦争なんだし」

　目を閉じた途端、九郎は睡すい魔まに襲おそわれてしまう。あっという間に彼の意識は霧む散さんした。

+

　アルは狸たぬき寝ね入いりを決めこんで成り行きを見守っていた。

（小こ娘むすめめ、なにを考えておる!?）

　出で逢あった瞬しゆん間かんから感じ続けている不安感は、アルの心の中から消えてはいない。それが結果的にどのような災さい厄やくをもたらすのかは想像できないが、漠ばく然ぜんとしたなにかがつきまとっていた。

（九郎に仇あだをなすというのであれば、いっそ今のうちに……）

　アルは握にぎり拳こぶしを作り、さらに様子をうかがう。

「盗ぬすみ聞きはどうかと思うなぁ。アル？」

「……気づいておったか」

　アルは起き上がると、エンネアへと体を向けた。

「鈍どん感かんな九郎とは違ちがうからね」

「汝なれ、いったいなんの目的で九郎に近づいた!?」

「別に……」

「とぼけるなっ!!」

　アルはベッドから飛び降りると、エンネアの前に立った。その顔には憤ふん怒ぬの表情が浮うかんでいる。アルはやる気満々だったが、エンネアは静かに首を横に振ふるだけだ。

「汝からはよくない気配がする。正体までは探さぐれぬが、九郎に害なすのであれば、今ここで……」

「エンネアは九郎に逢いたかっただけ。本当に、ただ、それだけ」

　彼女は虚うつろな表情でつぶやいた。

「逢いたかっただけ？　まさか小娘。汝、最初から九郎に逢う目的で……」

　それが意味することは一つである。だが、それを問い質ただす前

にエンネアはシーツを頭から被かぶった。

「さて、おしゃべりはおしまい！　夜よ更ふかしはお肌はだの敵だよ！　んじゃ、おやすみー！」

「ま、待たぬかっ！」

　だがアルが制止するころには、エンネアはすでに寝息を立てていた。

「なんなのだ、いったい？　解らん、理解不能だ」

　アルは肩かたを落とした。

+

　共同生活を始めて一週間目の朝のことだった。

　朝食をすませ、コーヒーを啜すすりながらまったりしていた九郎に、突とつ然ぜん、エンネアが提案してきた。「遊びに行こう」と。さっそく九郎は難色を示したがエンネアは頑がんとして譲ゆずらず、結局、彼が折れる形でそれは実現することになった。

　エンネアは力ちから一いつ杯ぱい、遊びに興じていた。ウィンドウショッピングに始まり、映画、遊園地、ゲームセンターなど、視界に入るすべての施し設せつに興味を抱いだき、まるでそれが最後だと言わんばかりに、精一杯、力の限り、すべてを貪むさぼり尽つくすような勢いで熱中し、没ぼつ入にゆうしていく。エンネアは店から店へと渡わたり歩あるき、必要以上にはしゃいだ。その姿は大切なものを瞼まぶたへと焼きつけ、かけがえのないなにかを見つけ出そうとしているようにも見えた。九郎は黙だまって彼女に付き合った。アルはアルで思うところがあるらしく、ブスッとしながらも文句一つ言わずについてくる。唯ゆい一いつの問題は、エンネアの体力に九郎とアルがついていけないことだけだった。

　全力で遊び倒たおしていたせいか、気がつけば日は西に大きく傾かたむいていた。それでもなおエンネアは元気いっぱいだ。これにはさすがの九郎とアルも閉口し、白旗を掲かかげた。

「二人とも体力ないなー。ちょっとだけ休もっか？」

　エンネアの提案に、九郎とアルは一も二もなく賛同し、近くにある茶さ店てんへと避ひ難なんした。

「やっぱ、遊ぶときはてってーてきに遊ばなきゃだよね！」

「いや、エンネアの場合は徹てつ底ていしすぎだ。ハッキリ言って、俺はへトへトだ」

「小娘、なんのつもりかは知らぬが、この程度で妾わらわに勝ったなどとは思わぬことだ」

「九郎ってば爺じじくさいなあ……。アルはアルでババアだし」

「わ、妾をババア扱あつかいするか！」

　アルは目をむくが、疲つかれのせいかいつもの勢いはなかった。

「ま、とにかく甘い物でも食べて血糖値を上げようよ。喧けん嘩かなら、いつでも受けて立つからさ」

　エンネアは目の前に並ぶパフェやパイ、ケーキを指さしながらニッコリと笑った。

（……気のせいか？）

　九郎はエンネアの表情の中に、一いつ瞬しゆんだけ浮かんだ影かげのようなものを見ていた。もっとも瞬まばたきした次の瞬間には消えていたので、窓から射しこむ西日が作り出した幻げん想そうだろうと彼は結論づけた。

　それから先は戦争だった。九郎とアルは一つのケーキを奪うばい合って取っ組み合いになっていた。二人に同じケーキを注文するという頭はない。目の前にあるそれが大切だった。そんな彼らの姿を、エンネアはニコニコしながら見守っている。

「九郎ってさ、ぜんぜん戦う人っぽくないよね」

「四六時中、殺気立ってたら体がもたねーって」

　九郎はアルの顔を押しのけながら、ケーキにフォークを突つき立

てた。

「九郎って大変なことがあっても、きっとそんな軽いノリで切り抜ぬけちゃうんだろうなあ……」

「そうか？」

　ケーキを口に運ぶ前に九郎は答えるが、その隙すきをついてアルがそれを奪い取った。

「ふんっ。此こ奴やつの場合、単なるお気楽莫ば迦かなだけだ」

　口をモグモグと動かしながらアルが答える。

「アル、おまえうっさい。っていうか、人のケーキに手を出すのはやめれ」

「なにを言うか。これは元々、妾が目をつけておったのだ」

　九郎とアルはにらみ合い、互たがいの頬ほおをむんずとつかんだ。そんな二人のやり取りを眺ながめていたエンネアは大笑いし、手を叩たたきながら喜んだ。

「けどさ、すごい光景だよねぇ。夫婦めおと漫まん才ざいする魔ま術じゆつ師しと魔導書なんて……」

　そこまで口にして、エンネアはハッとした。九郎とアルも争うのを止め、彼女を見つめる。

「なんで知ってんだ？」

　九郎の問いに、エンネアは指先で頭をかきながら「まいったなぁ」とつぶやいた。

「もしかして、記き憶おく喪そう失しつってのは嘘うそか？」

　エンネアは呻うなり声をあげるが、やがて決心したかのように九郎の目を見つめた。

「……ゴメンね」

「どういう……つもりなんだ？」

九郎はどんな顔をしていいのか判わからず、複雑な表情を浮うかべた。ひどく混乱している。

(すべてが嘘だってんなら、彼女は何者なんだ？　なんの目的で俺に近づいてきた!?)

次々と浮かんでは消えていく疑問。そんな九郎の脳のう裏りに、雨の中、襤褸ぼろをまとってたたずんでいたエンネアの姿が浮かび上がってきた。捨てられた子こ猫ねこのような儚はかない表情をしていた彼女。それすらも演技だったのだとすると──。九郎の胸中に、やり切れなさが漂ただよう。

「そうだね。なにから話せばいいのかな」

エンネアは落ち着き払はらっていた。それどころか安あん堵どしているようにさえ見える。早く嘘を見み抜ぬいてほしかったのではないかと思えるほどだ。エンネアは思案顔をしていた。九郎は彼女が話し始めるのを根気よく待った。

エンネアの口が開かれる。だが言葉は紡つむぎ出されない。彼女の目は九郎ではなく別のところへと向いていた。つられるように視線の先を追いかけると、店内に入ってくる凸でこ凹ぼこコンビの姿に気がついた。一人は思わず見上げてしまうほどの巨きよ漢かんで、もう一人はストリートファッションに身を包んだ少年である。彼らは品のない笑えみを浮かべながら、全身をなめ回すかのような視線を投げつけてきた。それはあまりにも露ろ骨こつであり、不快になるには十分すぎた。

少年が凄せい惨さんな笑みを浮かべる。九郎の背筋に悪寒が走り抜けた。体が痙けい攣れんするかのように激しく震ふるえ、全身が総毛立つ。九郎は考えるよりも先に行動に出ていた。魔術師となった九郎はエンネアを抱かかえると、翼つばさを盾たてにして窓を突き破る。と同時に店内は大爆ばく発はつを起こし、そこは木こっ端ぱ微み塵じんに吹ふき飛んだ。客の命は絶望的だった。その証しよう拠こに、地面のあちらこちらに肉片が転がっていた。

「なんなんだよ、これ……」

突とつ然ぜんの出来事に、九郎の思考はついていけなかった。だが彼が状じよう況きようを把は握あくするよりも早く、彼らはその姿を現した。粉微塵に吹き飛んだ喫きつ茶さ店てんの中心部、ちょ

うど爆ばく心しん地ちにあたる場所に立つ凸凹コンビは、何事もなかったかのような顔をしていた。

「彼奴きやつら、ただ者ではないぞ」

「ああ。あんなことをやらかす輩やからが、まともな神経なわけねえ」

　そして、そのようなことを平然とやってのける連中を九郎は知っていた。

「てめぇらも、ブラックロッジのクソ野や郎ろうどもかっ！」

「オー、イエーッ！　ボクはクラウディウス。ブラックロッジでアンチクロスやってまーっす！」

　少年は片手を挙げながら軽い口調で応こたえる。

「オレはアンチクロスのカリグラだ」

　巨漢の男は体型どおりの野太い声で言った。

「九郎、魔術師を二人同時に相手などできぬぞ」

　もちろん、そのようなことは百も承知している九郎だが、それ以前の問題があった。エンネアである。彼女を庇かばったまま相手にできるような連中ではなかった。九郎は歯ぎしりをする。

「まさかアル・アジフと大十字九郎のオマケつきだなんて、ボクたちラッキー!?　ついでだからアル・アジフも回収しちまおーぜ」

　クラウディウスは腹を抱えながら笑うと、隣となりに立つカリグラへと顔を向けた。

「まて。オレたちの相手は大十字九郎ではナイ」

「ケッ！　今さら怖おじ気づいてんじゃねーよ。ビビってんなら、帰ってクソして寝ねてやがれ」

「油断するナと言っておる。敵はマスター・オブ・ネクロノミコンに加えて、あの──」

「るせぇよ。インスタント魔術師バラして、女をとっつかまえれば

終しゆう了りようじゃねーの。余よ裕ゆう余裕」

　九郎たちのことは気にもとめず、カリグラとクラウディウスは言い争いを始めた。

（……女をとっつかまえる？　エンネアのことか!?）

　状況から考えても、そうとしか考えられなかったが、だとすると「なぜ？」という疑問が浮かんでくる。そのとき九郎の脳裏に、過去に否定した一つの可能性が浮かび上がってきた。頭の中でバラけていたパズルのピースが次々と組み合わさっていく。

（こいつらの目的がエンネアだとして、理由はなんだ？　アンチクロスが出ばるほどのことか!?）

　理由はなんにせよ、彼らにエンネアを引き渡わたすわけにはいかなかった。

（エンネアだけでも、なんとか──）

　九郎がアルに目配せをすると、彼女は少し困ったような顔をしながらもうなずきを返した。九郎は腕うでの中のエンネアを解放すると、彼女へと目を合わせた。

「エンネアは逃にげろ」

「……九郎は？」

「あのクソ野郎どもの相手をしなきゃならねえ。エンネアは近くのシェルターに逃げこめ」

　言うが早いか、九郎はエンネアの肩かたを押して強ごう引いんに走らせると、自分はバルザイの偃えん月げつ刀とうを片手にアンチクロスたちへと向かって突とつ撃げきしていく。

「テメー。女ぁ逃がしてんじゃねーよっ！」

　クラウディウスが手を横に薙ないだ。九郎は立ち止まると本能的にしゃがみこむ。その途と端たん、頭上に透とう明めいななにかが走り抜ぬけた。振ふり返ると、それは通行人たちの中へと消えていき、次の瞬しゆん間かん、血の雨が降り注いだ。まるでかまいたちでも通り抜けたかのように全身が分断されていた。かろうじて生き

残った人々は絶ぜつ叫きようし、無事だった人たちは我先にと逃げ出していく。地じ獄ごく絵え図ずのような光景だった。九郎の体は怒いかりで打ち震えていた。彼らに罪はない。ただ、そこに居合わせただけなのだ。

「あれはハスターの力かっ！」

　アルは目を大きく見開いている。

「ハスター？　なんだそりゃ」

「風を司つかさどりし旧支配者。『名状しがたいもの』『星間宇宙を歩むもの』とも呼ばれるが……」

「あんなガキに、そんな力が？」

「外見で判断するな！　油断につながる」

　九郎はうなずき返すと、偃月刀を構える。

「おらおらーっ。テメーから仕し掛かけておいて、ビビってんじゃねーよ！」

　嘲ちよう笑しようするクラウディウス。

　一方、カリグラは九郎に背を向けるほど大きく拳こぶしを振りかざすと、一いつ喝かつとともに拳を前へと突つき出した。その途端、視界が白一色に染まり上がる。ついで爆ばく音おんと衝しよう撃げきが九郎の全身を突き抜けていく。彼の体は木の葉が舞まうかのような軽々しさで吹ふき飛び、建物の外がい壁へきへと突撃していく。咄とつ嗟さに翼つばさで体を守ったからよかったものの、反応が少しでも遅おくれていたら全身の骨がバラバラになっていても不思議ではなかった。のんびりしている暇ひまはない。壁かべにめりこんだ体を引きはがしている間に、クラウディウスは目の前へと迫せまっていた。一いつ瞬しゆんで目の前に現れたような錯さつ覚かくすら覚えるほど、彼の動きは速い。九郎は偃月刀で応戦するが、すでに彼の姿は視界の中から消え失うせている。

「九郎、上だっ」

　見上げたときには九郎の脇わき腹ばらはザックリと裂さけ、地面に血だまりができる。傷口は深かったが、アルが処置したのか血は

すぐに止まった。

「九郎ちゃんよぉ、とろすぎて欠伸あくびが出ちゃうぜー」

　実際、クラウディウスは欠伸をしていた。その姿が癪しやくに障さわって偃月刀を振るうのだが、かすりもしない。クラウディウスの相手をしている間に、今度はカリグラの拳が迫ってくる。クラウディウスに比べて鈍どん重じゆうな彼の攻こう撃げきを避けるのは造作もない──はずだった。カリグラは九郎ではなく偃月刀へと拳を叩たたきこんでそれを砕くだくと、その先にある彼の体へと拳を叩きこんできたのである。突き上げるようにして放たれたその拳は九郎の体を上空へと舞い上がらせ、その衝撃で再び脇腹からの出血が始まる。九郎は翼を広げて上空で制止すると、苦く悶もんの表情を浮うかべながら傷口を手で押さえつけた。指の隙すき間まから血が溢あふれ出し、地表へ血の雨を降らせる。

「九郎、退ひこう！」

　アルの提案はもっともだったが、九郎はそれを拒きよ否ひした。カリグラとクラウディウスを残して遁とん走そうするなど九郎にはできなかったし、それを見み逃のがす彼らでもない。それに九郎は彼らを許してはおけなかった。眼下に広がる血染めの瓦が礫れきの山は、たまたま繁はん華か街がいに来ていた通行人によって作られたものである。彼らの無念を思うと、ここで退くわけにはいかなかった。

「ケッ！　テメーだけが飛べると思うなっつーの！」

　クラウディウスは吐はき捨てると、空間を蹴け り飛ばすようにして一気に九郎の下まで駆かけ上がってきた。彼はニヤッと笑うと腕を交差させ、今度はそれを勢いよく振り払はらう。放たれた風の刃やいばは九郎が背負っている翼を紙片へと変え、浮ふ力りよくを失った彼は地上へと急降下していく。

　九郎は地表への激げき突とつの衝撃に備えたが、そこではカリグラが待ち受けていた。彼は九郎へ向かって豪ごう腕わんを突き上げる。彼の拳から放出された爆ばく風ふうと衝撃が九郎の体を包みこんだ。九郎は再び宙に舞い上がると、今度こそ瓦礫の中へと落ちていった。全身が悲鳴を上げ、背中の焼けるような熱さに九郎は呻うめく。

「九郎っ！　無事か!?」

「んなわけねぇだろ……」

　かろうじて上半身は起こせたが、体にはまるで力が入らない。血が足りないのだ。

　カリグラとクラウディウスは攻撃の手を緩ゆるめない。カリグラは拳を振り上げ、クラウディウスは手をかざす。

　九郎は死さえも覚かく悟ごした。そのときだ。どこからともなく現れた魔導書のページが九郎の体を覆おおい、彼らの攻撃を撥はね返した。カリグラとクラウディウスが驚きよう愕がくする中、魔導書のページは九郎の体から離はなれると、重なり合って人の形──少女の形を形成する。それは異様な姿だった。手足の拘こう束そく具ぐ、視界を覆う仮面、銜くわえさせられた轡ギヤグ……。だが彼女に縛しばられている様子はない。

「なんだよっ！　どういうことだよ、おいっ！　なんで暴君がっ！」

　クラウディウスは明らかに怯ひるんでいた。それはカリグラも同じである。

（暴君？　あの娘このことか？）

　だが、助けられたという安あん堵ど感かんはない。むしろ際限のない不安感が膨ふくらんでいた。それは暴君と呼ばれる少女が発する心臓を締しめつけるような激しい威い圧あつ感かんに起因しており、そのプレッシャーたるやマスターテリオンに匹ひつ敵てきするほどである。暴君は轡ギヤグを塡はめたままの口でニタリと笑ったかと思うと、再び魔導書のページとなってバラけていく。それは一いち陣じんの風を喚よび、吹き荒あれ始めた。

　それと時を同じくして、九郎は両手の甲こうに激しい痛みを覚えてうずくまった。右手の甲は焼きごてでも当てられたかのような熱さが、左手の甲は凍とう傷しようにでもかかったかのような痛みが走り抜けていく。見ると、そこには規則性を持って描えがかれた紋もん様ようが印されていた。

「汝なれ、それは……!?」

アルが問うが、九郎は答えられない。だが右手の紋様が『炎ほのお』を、左手の紋様が『風』を表すことくらいは九郎にも解わかった。風に乗って舞う魔導書のページが、九郎の両りよう腕うでへと引き寄せられていく。それは紋様を囲むかのように回り始めた。回転は勢いを増し、それに耐たえられなくなった紙片が崩くずれ、記述された魔ま術じゆつ文字だけがそこに残される。それはやがて光を放ち、世界を浸しん食しよくしていく。

視力を奪うばわれた世界の中で九郎は視みた。圧あつ倒とう的な魔ま力りよくを放ちながら宙に浮うく二つの存在を。九郎は無意識のうちに両手を差し出し、それをつかみ取った。それは二挺ちようの拳けん銃じゆうである。右手には黒と紅を基調にした自動式オートマ拳銃チツク、左手には銀一色の回転式リボル拳銃バー。その圧倒的な存在感と凶きよう暴ぼう性は獣けものそのものであり、九郎に強大な力を与あたえた。

　両手にかかる心強い重量感。手にフィットするグリップ。九郎は左右の人差し指をトリガーにかけた。右手をカリグラの気配へ、左手をクラウディウスの気配へと向ける。九郎は同時にトリガーを引いた。痺しびれるほどの激しい反動を腕の力で強ごう引いんにねじ伏ふせる。

「な、なんで暴君の魔ま銃じゆうがテメーにッ！」

　叫さけぶクラウディウスの眼前には、一発の銃じゆう弾だんが停止している。銃弾は彼が発現させた防ぼう御ぎよ陣じんに阻はばまれてはいたが、今もなお高速で回転しながら獲え物ものを仕留めようとせめぎ合っている。一方のカリグラは左腕を吹ふき飛ばされ、もがき苦しんでいた。

「オ、オデの腕！　オデの腕ェ！　痛いてェ！　痛え痛え痛えェェ！　コロ殺コロ殺ブチ殺スッ！」

　痛みがカリグラの理性を奪ったのか、彼は残った右腕を見境なく振ふり回し始める。そのたびにあちらこちらで爆ばく発はつが発生し、建物が倒とう壊かいしていく。カリグラは暴走し続けていたが、そんな状じよう況きようにありながらも複雑な術式を編み上げていた。九郎は失神しそうなほどのプレッシャーに顔を歪ゆがめる。

　九郎は編へん纂さんし直した翼つばさを広げて宙に舞まい上がる。直後、ひび割れた地面から水柱が噴き上がった。そしてその中から現れたのは無骨で剛ごう健けんなフォルムを持った鋼鉄の巨きよ人じん・鬼デウ械ス・神マキナである。

「クラーケン！　壊こわせ壊せ壊せ壊せェコワセコワセコワセコワセコワセェェェェェェ！」

「チィッ！　キレるとすぐこれだ……」

　クラウディウスは悪態をつくと、自分でも術式を編み始める。それは瘴しよう気きを孕はらんだ風を喚び、やがて巨きよ大だいな竜たつ巻まきと化した。

「ロードビヤーキーッ！」

　クラウディウスの声に応じるかのように、竜巻の中に雷らい光こうが発生する。それは巨大なシルエットを浮かび上がらせた。鳥のようでもあり人のようでもあるスラリとした影かげは、竜巻を切り裂さくようにして姿を現した。圧倒的な存在感と凶きよう悪あくなまでの重圧を発するそれは鬼械神である。

「九郎、さすがに鬼械神を二体も相手にはできん。退ひくぞ！」

「いや、デモンベインを喚ぶ」

「九郎!?」

「無む謀ぼうなのは解わかってる」

「戦力差は歴然なのだぞ」

「こんなところで奴やつらを放ほうっておいたら……この街は終わりだ」

　もちろん、理由はそれだけではない。カリグラとクラウディウスによって殺された者たちの無念を考えると、気持ちを抑おさえきれなくなってしまうのだ。だが、そんな九郎の気持ちを察したのか、それとも観念して諦あきらめの境地に至ったのか、アルは肩かたをすくめてみせた。

「汝なれは甘い。甘すぎる。激甘だ……。そんなことでは、いつ命を落としてもおかしくはない。だが、そんな甘いことを言ってのける阿あ呆ほうを主人に選んでしまったのは妾わらわだ」

「そういうこった。諦めろ」

「ふんっ。だが、その甘いところ──嫌きらいではない」

　アルはボソリとつぶやくと、二体の鬼械神をにらみつけた。

「連中をまとめて地じ獄ごくに叩たたき落としてやろうぞ！」

「おうよ！」

　九郎は応こたえると、朗ろう々ろうと祝詞のりとを詠よみ上げる。

憎ぞう悪おの空より来たりて

正しき怒いかりを胸に

我等は魔まを断つ剣けんを執とる

汝、無む垢くなる刃やいば──デモンベイン！

デモンベインに乗りこんだ九郎だが、すぐに片かた膝ひざをついて呻うめいた。体にきざまれた傷、特に脇わき腹ばらの傷がひどい。血が足りていないのは明らかで、足あし腰こしに力が入らず、意識も遠かった。

（鬼械神を二体も相手にするってのは、確かに正気の沙さ汰たじゃねえな）

九郎は気合いで立ち上がった。一いつ瞬しゆんでも隙すきを見せたら、その瞬間に勝負は決する。

先に動いたのはクラウディウスが操あやつるロードビヤーキーだ。それは音速を超こえる速度で空を翔かけると、手中に顕けん現げんさせたライフルの銃じゆう口こうをデモンベインへと向ける。そして間かん髪はつをいれずに火を噴ふいた。一、二発などという生易しいものではない。魔力がこめられた何発もの弾だん丸がんが立て続けに降り注がれる。

「避よけろ！　まともに食くらったら、ただではすまぬぞ」

言われるまでもなく回かい避ひ行動へと移った九郎は、デモンベインを右に左に操って弾丸をかわす。だが上空からの掃そう射しやは一方的であり、狙ねらい撃うちに近い。デモンベインはいいように踊おどらされていた。だが問題はそれだけではない。ロードビヤーキーだけでも持て余す九郎だが、クラーケンの相手をする必要もあった。カリグラに似て無骨で屈くつ強きような姿をしたクラーケンは、鋼鉄の爪つめを持つ巨大な腕を振り上げると、それを突つき出してくる。その腕は伸しん長ちようし、デモンベインへと迫せまる。まさにクラーケンと呼ぶに相応ふさわしい触しよく手しゆのような腕は、かわしてもかわしても追いかけてくる追つい尾び弾だんのようだ。

「チィッ！　このままじゃ……」

一方を避けても、もう一方が攻せめてくる状況は、ただの嬲なぶり殺しである。九郎は反はん撃げきのチャンスをうかがうことすらできなかった。九郎はギリギリのところで避け続けるが、それも長くは続かない。ロードビヤーキーのライフルで地面は剔えぐられ、それに足を取られたデモンベインは体勢を崩くずした。そこへ絶ぜつ妙みようのタイミングでクラーケンの爪が迫る。さすがにかわしきれなかったが、胴どう体たいをかすめる程度ですんでいた。もっ

とも、それだけでも装そう甲こうには亀き裂れつが生じ、デモンベインを吹ふき飛ばすだけの力はあった。

「くっ……なんて馬ば鹿か力ぢからだ」

　うつぶせに倒たおれこんだデモンベインを、四つん這ばいにしながら九郎は驚きよう愕がくする。休んでいる暇ひまはなかった。ロードビヤーキーのライフルが火を噴き、何発もの弾丸がデモンベインに直ちよく撃げきする。その都度、モニターには様々なエラーメッセージが表示され、デモンベインの運動性能が落ちていくのが判わかった。一向に状じよう況きようが好転しないことに九郎が苛いら立だちを隠かくしきれなくなったときだ。

「お、おい。九郎、あれを！」

　悲鳴にも似たアルの声がコックピットに響ひびき渡わたる。目線を前へと向けた九郎は、一瞬、心臓が止まりそうになった。四つん這いになっているデモンベインの眼前に、一人の少女が立っていたからだ。ドレスにも似た服を身に着けたその少女のことを、九郎はよく知っていた。

「エンネア!?」

「あのうつけ、なにをやっておる！」

「エンネア、さっさと逃にげるんだ！」

　デモンベインの拡声器を使い、九郎は叫さけぶ。だがエンネアは無表情のまま、デモンベインを静かに見上げているだけだ。九郎は何度も何度も叫び続けるが、彼女はピクリともしない。

　ロードビヤーキーのライフルの銃口がデモンベインへと向けられる。無む慈じ悲ひにも弾丸は発射され、デモンベインは無む抵てい抗こうのままそれを食らい続けた。モニターに無数のエラーが表示され、装甲、そしてコックピット内のあちらこちらで小爆ばく発はつが起こる。だが、耐たえるより他ほかなかった。エンネアがいる限り、攻こう撃げきはおろか移動すらできない。

　そのときだ。一発の銃じゆう弾だんが近くのビルに直撃し、瓦が解かいした。大小様々な瓦が礫れきが地表へと落ちていく。そしてその真下にはエンネアがいた。アルが声にならない悲鳴を上げる。九郎はデモンベインで庇かばおうとするが、モニターに無数のエ

ラーが返ってくるだけだった。

「エンネアァァァァァァッ！」

　九郎が絶ぜつ叫きようする中、エンネアは瓦礫の中へと消えていく。その瞬間にあっても、彼女はデモンベインを、九郎を見つめ続けていた。ほんの少しだけ、柔やわらかい微笑ほほえみを浮うかべて。

　九郎の心の中はカラッポになった。思考が停止する。

（守るべき時に守れない力なんて……なんの意味がある！）

　九郎は両りよう膝ひざを折ると、拳こぶしを床ゆかに叩きつけた。

「九郎っ！　諦めるなっ！　動かせっ！」

　アルの悲痛な叫びが、九郎の心の中に染しみてくる。

「九郎！　今は戦え！　戦場で戦いを放ほう棄きしてどうする！」

　クラーケンとロードビヤーキーは、デモンベインに攻撃を加え続けている。その度たびに絶望的な反応がデモンベインから返ってきた。そんな中にあって、ふと九郎はエンネアが口にした言葉を思い出していた。

『もし……全部無む駄だだとしたら？』

『未来を知ることができたとして……。どんなに必死に戦っても誰だれも救えないし、救われない。そんなことが解わかっていたらどうする？　それでも九郎は戦える!?』

　今がまさに、それだった。

（このことを……このことを言っていたのか、エンネア!?）

　クラーケンとロードビヤーキーがデモンベインにトドメを刺さそうと迫ってくる。

「九郎ーっ！」

　アルの叫びを受けても、九郎の心は動かない。どうしようもない

ほど心は空くう虚きよだった。迫りくる二つの殺意に対しても、なんの感情も衝しよう動どうも起こらない。ただその殺意を、九郎はうっとうしく思った。そしてそれは、彼を一つの行動へと駆かり立てる。「こいつらを殺そう」と。

『だったら、力を貸してあげるよ。大十字九郎』

　ふと、九郎の意識に何者かがささやきかけてくる。それが何者かを確かく認にんする前に、その怪かい異いは起きた。手の甲こうに激しい痛みが走り抜ぬけたのと同時に、九郎の知らない術式が半ば強制的に紡つむがれる。膨ふくれあがった彼の殺意は実体と化し、デモンベインの前に顕現した。一つは紅ぐ蓮れんの炎ほのおをまとった獣けもの、もう一つは白く凍こごえる極ごつ寒かんの霧きりのようなものをまとった巨きよ人じんである。

「クトゥグアとイタクァ……」

　アルが呆ぼう然ぜんとつぶやく中、クトゥグァとイタクァは溶とけてデモンベインへと流れこんでいく。デモンベインは形をなした二つの殺意を手にした。ずしりと、両の腕うでに確かな重みが加わる。右手には自ク動ト式ウ拳グ銃ア、左手には回転式イタ拳銃クアを握にぎりしめたデモンベインは、自ク動ト式ウ拳グ銃アの銃じゆう口こうをクラーケンに、回転式イタ拳銃クアの銃口をロードビヤーキーへと向けた。

　そして次の瞬しゆん間かん、トリガーは引かれた。

+

「逃げられたか」

　アルはホッと溜ため息をついた。

　圧あつ倒とう的な戦力差であり、勝てる可能性など皆かい無むに等しかったが、奇き跡せき的にもデモンベインは勝利を収めることができた。もっとも勝ったとはいえ、被ひ害がいは甚じん大だいである。デモンベインは満まん身しん創そう痍いであり、立っていることさえ奇跡に近かった。モニターには無数のエラーが表示され、

まともに機能している部分さえなかった。勝者とは思えない、見るも無む惨ざんな有様だった。

　街が受けた被害も深刻である。アーカムシティの中心部で起きた戦せん闘とうは、そこに壊かい滅めつ的なダメージを与あたえていた。モニターは焦しよう土どしか映さない。鬼械神が三体で暴れ回ったのだから当然の結果だが、呆然とせずにはいられないアルである。その感情は以前のアルなら考えられないものだったが、今はそのようなことを悠ゆう長ちように考えている場合ではなかった。一番深刻なダメージを負っていたのが、他ならぬ彼女の主あるじだったからである。

「九郎……」

　アルは九郎に声をかけるが、彼の口は動きもしない。声が届いている様子もなかった。九郎の顔からは表情が消え失うせ、虚うつろな目はどこを見つめているのかさえ判らない。今の九郎からはなにも感じられない。怒いかりも悲かなしみもない。あるのは魂たましいの抜け殻がらだけだった。

　アルは沈ちん痛つうな面おも持もちで目を伏ふせた。

+

　玉座を前に、二人の男はかしずいていた。

　一人はカリグラ、もう一人はクラウディウスである。デモンベインの反はん撃げきに遭あった彼らは撤てつ退たいを余よ儀ぎなくされ、命からがら本ほん拠きょ地ちへと戻もどっていたのだ。

　そんな二人の有様に怒り心しん頭とうなのはアウグストゥスである。彼は玉座に座るマスターテリオンの代わりに怒り狂くるい、容よう赦しやのない罵ば声せいを浴びせかけていた。もっとも、肝かん心じんのマスターテリオンは相も変わらず気だるげである。彼は膝ひざにもたれかけたエセルドレーダの頭を犬でも愛めでるかのようになでながら、二人の報告をボンヤリと聞いていた。そんなマスターテリオンの姿には慣れているとはいえ、アウグストゥスの心中は穏おだやかではない。

「無様だな。カリグラ、クラウディウス……」

　吐はき捨すてる感じでアウグストゥスが告げると、さっそくクラウディウスが食ってかかる。

「ケッ！　テメェ、暴君が力を使い果たしてるなんてホザいてたよなぁ？　なのに、なんだよ、あの力はよぁ!?　そもそも、なんで暴君が奴やつに力を貸してんだ？」

「暴君は弱っていたのだろう。だから大十字九郎を利用したのだ。第一、おまえたちの行動が迅じん速そくであれば、暴君と大十字九郎が接せつ触しよくすることもなかったはず」

　二人の間に、一いつ触しよく即そく発はつの危あやうい気配が漂ただよう。それを制したのはマスターテリオンだった。

「──よせ。気が滅め入いる」

　たった一言でアウグストゥスは口をつぐみ、クラウディウスは冷や汗あせを流した。だが、このまま放置しておける問題ではない。アウグストゥスはマスターテリオンのプレッシャーを感じながらも、どうにか口を動かした。

「大導師。Ｃ計画において暴君は中ちゆう核かくをなす存在です。おめおめと逃にげられては……」

「逃げられたものは仕方がない。Ｃ計画は暴君なしで行う」

　マスターテリオンの発言に、アウグストゥス、カリグラ、クラウディウスの三人は息をのむ。

「む、無茶です！　Ｃ計画は暴君と彼奴の鬼械神があってこそ実現する計画ではありませんか！」

「暴君の役割は余が果たす。中ちゆう枢すうユニットには、ネームレス・ワンの代わりにリベル・レギスを使用する。それで問題はなかろう？」

「しかし……」

　なおもアウグストゥスは反論を試みようとしたが、それ以上は口にしなかった。マスターテリオンが結論を出した以上、それは絶対

だからである。

　とは言え、それでアウグストゥスが納なつ得とくしたかと言えばそうではなく、マスターテリオンに対する不信感がより強固なものへと変わっただけである。そして度たび重かさなる彼への疑ぎ惑わくは、アウグストゥスに一つの行動を取らせることになった。

+

　アウグストゥスたちが去った玉座は静せい寂じやくに満ちていた。

「少々露ろ骨こつすぎたかな？　さて、アウグストゥスはどう動くか……」

　マスターテリオンはエセルドレーダの頭をなでながら苦く笑しようする。

「マスター。そろそろ近いのですね？」

　マスターテリオンは緩かん慢まんな仕草で玉座から立ち上がると、天を仰あおいだ。

　松たい明まつの灯あかりで揺ゆらめく薄うす暗ぐらい天てん井じようには、特に目立ったところはない。だが、彼の目はそれを通とおり越こし、はるか上空にある天の星々を、銀河の流動を視みていた。

　そして世界が彼に伝えていた。

　──刻ときは満ちた、と。

+

　玉座をあとにしたアウグストゥスは、即そく座ざに行動に移って

いた。

　このままではＣ計画は破は綻たんし、それによって予想される被ひ害がいは、地球規模に及およぶ。支配する者が存在しない世界と化してしまっては意味がなかった。

　だからこそ、彼はアンチクロスを招集して問うていた。マスターテリオンがＣ計画の実行者たるに相応しいか否かを。

　そして、結論は導き出された。

+

　鬼械神が残した爪つめ痕あとは激しく、かつてアーカムシティでも有数の繁はん華か街がいだった場所は瓦が礫れきの山と化していた。いたるところで鎮ちん火かしきれない炎ほのおが燻くすぶり、闇やみの中で赤黒い血液のような灯りを灯している。辺りは死し臭しゆうに満ち、肉が焦こげるような嫌いやな臭においが鼻をつく。

　そんな瓦礫の山の頂に、拘こう束そく具ぐをつけた少女がたたずんでいる。その少女の体はページになってバラけると、風に乗って一人の少女の下へと向かっていく。エンネアである。彼女が掌てのひらを差し出すと、その上に一枚一枚、折り重なるようにしてページが集まり始める。それはやがて一冊の魔導書となった。鉄の掛かけ金がついたその書には、名は記されてはいない。魔導書【無名祭さい祀し書】である。

　唐とう突とつに、闇の中から艶えん笑しようがわき起こる。エンネアが声の方向へと目を向けると、暗闇の中からさらに濃こい闇が垂れこめ、人の形をなした。

「脱だつ獄ごくとは悪い娘むすめだなぁ？　しかも魔導書で偽にせ物ものを作って人を欺あざむくなんて」

　エンネアの前に姿を現したのはナイアだった。

「また君か。ずいぶんと久しぶりだね」

　エンネアはつまらなそうにつぶやく。

「そのわりには、つれないなぁ。暴君？　いや、今はエンネアだったかな!?　ところで、今回はどうして逃げ出したりしたんだい？」

　ナイアは含ふくみ笑いをしながら問うてくるが、エンネアは答えない。その代わり、常人ならショック死しても不思議ではないほどの殺意をこめてナイアをにらみつけた。だがナイアは、気にもとめず続ける。

「どうやら九郎君のことをいたく気に入ったらしいね。魔ま銃じゆうをあげちゃうくらいだし」

「だからなんだって言うんだよ、フェイスレス。いちいち俗ぞく世せに首をつっこんでくるなんて、神様たちも暇ひまなんだね」

「いやいや、僕なんて中間管理職の使いっぱしりだよ」

　ナイアは肩かたをすくめてみせると、ふと思い出したようにポンと手を叩たたいた。

「そうか。君は『ムーンチャイルド計画』の九番目だったね？　それとも九郎君の名にちなんでIXエンネアってつけたのかな？　くだらない。くだらないな。そんなのただの番号じゃないか。それより君には暴君っていう相応ふさわしい名があるだろう？　獣けものの首の一つにして獣そのもの！　もう一人のマスターテリオン！　そう。マスターテリオンは君の生まれ変わりなのだから！」

「黙だまれ！」

　エンネアが吠ほえるのと同時に、ナイアの顔は下した顎あごだけを残して消し飛んだ。だがナイアは意に介かいさず、残った下顎と舌を器用に使いながら言葉を紡つむぎ出す。

「では、ご機き嫌げんよう。最強のアンチクロス、最悪のアンチクロス、反逆のアンチクロス・ネロ」

　ナイアはそう言い残すと、暗闇の中へと姿を消していく。

　その光景をエンネア―ネロは無言で見つめていた。

第七章 七頭十角―逆さ十字の咎人（とがびと）達

ネロ

アーカムシティは異常な混乱をみせていた。陸海空、すべての交通機関が麻ま痺ひしたせいで街は陸の孤こ島とうと化し、外部からの情報が極きよく端たんに減っていた。それだけでも恐きよう慌こう状態になりかねなかったが、市内の情報すら満足に得られないことが混乱に拍はく車しやをかけた。と言うのも、鬼デウ械ス・神マキナが街で暴れたために主要な施し設せつが破は壊かいされ、新聞やテレビ、ネットなどのメディアが壊かい滅めつ状態にあったのである。破壊ロボットとは比ひ較かくにならないほどの脅きよう威いをもたらした鬼械神に対し、図太い神経でアーカムシティの繁はん栄えいを支えていた市民にも動どう揺ようと暗い影かげを落としていた。情報の少なさがあらぬ憶おく測そくを呼び、さらなる混乱を招くという悪あく循じゆん環かんが、市民から希望を奪うばい去ったのである。また先の戦せん闘とうでは市民に多数の死傷者が出たこともあり、より動揺は大きかった。

九郎とアルは事務所へと戻もどっていた。幸い、マンションは外がい壁へきに少し罅ひびが入った程度ですみ、倒とう壊かいを免まぬがれていたのである。だがアーカムシティ以上に九郎の心は壊こわれていた。瑠璃への報告をアルが肩かた代がわりしたほどであり、今も彼は心を空にしたまま窓の外を眺ながめるばかりである。その目は闇の中に点々と灯ともる炎ほのおを見つめてはいるが、その実、なにも映し出してはいない。崩くずれゆくビルと、瓦礫の中に埋うまっていくエンネアの姿が繰くり返し映し出されるだけである。

（俺は……無力だ）

+

アルは居い心ごこ地ちの悪さを感じずにはいられなかった。彼女の主あるじは虚うつろな表情で窓の外を見つめたまま身み動じろぎ

一つせず、まるで死し人びとである。アルが話しかけても返事はおろか反応すら示さず、体を揺ゆすっても揺さぶられるままであり、自発的になにかをしようという意思の力は欠片かけらもない。ただ彼に触ふれたとき、そこから深い悲しみと絶望、そして強い無力感が伝わってきた。

そんな九郎の姿を見るのは、アルにとって拷ごう問もんにも等しかった。それは彼とともに過ごした騒さわがしくも心地よい時間が、いかにかけがえのないものであったかをアルに知らしめ、その事実に気づいた彼女はひどくうろたえた。それがなにを意味しているのか、ハッキリと理解できたからである。

アルは心に芽生えた特別な感情に気づかぬふりをすると、九郎のことを想おもった。励はげましの言葉でもかければよかったのかもしれないが、やめていた。そのようなことに意味などなかったからだ。結局のところ、彼自身が乗り越こえなければならない試練なのである。とは言え、なにもしてやれないことへの苛いら立だちは隠かくしようもなかった。胸が締しめつけられ、心は針で突つき刺さされたかのような鋭するどい痛みを感じる。沈ちん黙もくがもたらす重苦しい空気は耐たえ難がたく、息苦しささえ覚えるほどだ。アルは胸を掻かきむしりたくなるほどの激しい衝しよう動どうを強ごう引いんに抑おさえこむと、目を伏ふせた。

アルがこのよう気持ちになったのは、悠ゆう久きゆうとも思えるほど長い人生の中でも初めてである。そもそも術者のプライベートなど彼女には関係なく、目的さえ滞とどこおりなく遂すい行こうできれば不満はなかった。術者を利用し、術者に利用される。それこそが正しい関係であり、九郎との関係はあまりにも特とく殊しゆすぎた。ましてや術者のことで心を痛めるなど、初めての経験である。だからアルは、自分の気持ちをどのように処理したらいいのか判わからなかった。異形の知識の集大成である彼女だったが、それを総動員しても胸の痛みを拭ぬぐい去れそうにない。

アルは呻うめくと、胸に手を添そえた。胸の痛みはいよいよ激しさを増し、彼女は苦痛に顔を歪ゆがめる。

（妾わらわは戦うことしか知らぬから……。人間ではないから、九郎の側そばには立てぬというのか）

手を伸のばせば触れられる距きよ離りにありながら、遠くに九郎を感じるアルだった。

+

玉座はブラックロッジの信徒たちで溢あふれていた。

そこは麻ま薬やくにも似た媚び薬やくの香かおりで満たされており、理性を失った無数の男女が交わり、互たがいの体を貪むさぼり合っている。それは動物としての本能そのものである。貪り合う男女の顔は獣のそれであり、舌をダラリとさせ、滴したたる涎よだれを拭おうともしないその姿に人間らしさはない。

そんな淫いん猥わいな光景を遠くから眺めている者がいた。ドクター・ウェストである。

「まったくもって、美的センスの欠片もないのである」

ウェストは腕うでを組むと、汚お物ぶつでも見るかのような目で信者たちを眺めていた。そんな彼の傍かたわらでは、両手で顔を覆おおいながらも指の隙すき間まから様子をうかがっているエルザがいた。彼女は頬ほおを染めながら、所在なさげに体をくねらせている。

「エルザも将来、ダーリンと……ロボ」

エルザはキラキラと輝かがやく目でつぶやいたかと思うと、照れ隠しでウェストの横っ面つらを殴なぐった。

「ぐふぅ」

ウェストは鼻血を撒まき散らし、もんどり打って倒たおれながらも、かろうじて立ち上がった。

（しかし突とつ然ぜん、なんの騒ぎであるか？）

ウェストは玉座にもたれかかっているマスターテリオンへと目を向けた。彼は気だるそうな表情で前まえ髪がみをいじりながら、見るともなしに信者たちを眺めている。その態度はいつもどおりだが、このような乱らん痴ち気き騒さわぎなど初めてである。また、いつも金魚の糞ふんのように付き従っているアウグストゥスの姿も

なく、他のアンチクロスの姿もない。なにか始まるのは間ま違ちがいなさそうだが、なにを始めるつもりなのかまでは判らなかった。

　ふと彼らから目を外したウェストは、闇やみの中にたたずむ黒い天使の姿に気がついた。

「サンダルフォン、貴様は参加しないのであるか？」

《くだらぬ。己オレには関係のないことだ》

　サンダルフォンは吐はき捨てた。

「貴様もであるか。我わが輩はいも、この下げ劣れつな戯たわむれは好かんのである」

《下劣なのは、おまえの存在自体だ》

　ウェストがサンダルフォンに食ってかかろうとしたときだ。突然、夢む幻げん心母が激しく揺れた。それは徐じよ々じよに激しさを増し、立っていられなくなったウェストは無様にも床ゆかに這はいつくばった。

「地じ震しんロボ？」

　エルザはウェストの首根っこをつかんで起き上がらせると、周囲を見み渡わたした。乱交に耽ふけっていた信者たちの間にも動どう揺ようが広がっている。彼らはざわつきながら、恐きよう怖ふで顔を引きつらせていた。

《ほう。そろそろか》

「それはどういう意味であるか？」

《解わからないのか、ウェスト？　『ブラックロッジ』の最終目標だというのに》

「ま、まさか、始まるのであるか？」

　驚きよう愕がくしたウェストが玉座へと目を向けると、マスターテリオンが緩かん慢まんな動作で立ち上がるところだった。彼の体は激げき震しんの中にあっても微み塵じんも揺るがず、動揺する信者たちの前に歩を進める。

「うろたえるな、皆みなの者。ついに刻ときが満ちたのだ」

　マスターテリオンが告げると、信者たちの動揺はピタリと止やんだ。

「Ｃ計画」

　信者の一人が興奮した様子で声を張り上げる。

「そのとおり。ついに我々の悲願、Ｃ計画の発動の刻がきたのだ！」

　マスターテリオンの声に、信者たちは「オオオオッ！」と歓かん声せいを上げる。

「敬けい虔けんなる信徒諸君。よくぞ耐たえに耐え抜ぬいた。もはや貴公等が耐える必要はない！　今こそ世界に知らしめよう！　闇黒を従えた我等の存在を！　今こそ世界に轟とどろかせよう！　煉れん獄ごくの獣けものたる我等の咆ほう哮こうを！　そう！　この夢幻心母で！　移動要よう塞さい・夢幻心母で」

　マスターテリオンの扇せん動どうにより、否いや応おうなく信者たちの気分は盛り上がっていく。

　そんな彼らの姿を、ウェストは冷ややかに見つめていた。

　偽ぎ善ぜんに満ちた世界を焼きつくし、血と欲望と背徳の楽園を降臨させる儀ぎ式しき。そう。偉い大だいなる獣と偉大なる〝Ｃ〟の御み名なの下もとで実行される悪どもの復ふく讐しゆう劇がＣ計画であり、ブラックロッジの最終目標だった。だが、それを前にしてもウェストの顔は浮うかない。元よりＣ計画に興味などなく、己の研究に全精力を注ぎこんできた彼である。このような怪あやしげな儀式など不快なだけだった。

「博士、どうかしたロボ？」

「……なんでもないのである」

　ウェストたちが見守る中、宴うたげは続けられていく。サンダルフォンは、すでにその姿を消していた。

+

　アーカムシティの外れにある十三番閉へい鎖さ区画は『焼野』と呼ばれ、致ち命めい的なまでの呪じゆ術じゆつ的な汚お染せんによって人が住めなくなった死の荒こう野やである。常人であれば足を踏ふみ入れただけで体が腐ふ敗はいし、魔ま術じゆつをかじった者でも凶きよう悪あくな怨おん念ねんが渦うず巻まくそこでは一いつ瞬しゆんにして気が触ふれてしまう死の世界である。それは魔ま力りよく炉ろの暴走による大だい惨さん事じだった。錬れん金きん術じゆつを用いて作られた魔力炉は膨ぼう大だいなエネルギーを産み出し、今も市民生活を支えてはいるのだが、その暴走で多くの人命が失われたのも事実である。

　そんな死の世界焼野を六人の魔ま術じゆつ師しが、それぞれの魔導書を手に取り囲んでいる。

『焼野』の北には魔導書【金枝篇へん】を持つアウグストゥス、北東には【妖よう蛆しゆの秘密】のティベリウス、南東には【水神クタアト】のカリグラ、南には【セラエノ断章】のクラウディウス、南西には【エイボンの書】のウェスパシアヌス、北西には【屍し食しよく教きよう典てん儀ぎ】のティトゥスが立ち、星の導きに従って強大な魔力を発する。

　魔術師たちを頂点に光の線が走っていく。一つは北から南東へ、南東から南西へ、南西から北へ移動して正三角形を形成。もう一つは南から北西、北西から北東、北東から南へと戻もどって逆三角形を形成していく。二つの三角形は重なり合い、一つの紋もん様ようを『焼野』に描えがき出した。六ろく芒ぼう星せいである。

　完成した六芒星は、まるで生命でも宿っているかのように拍はく動どうし、轟うごめいたかと思うと、目が眩くらむほどのおびただしい光を発した。それは夜を昼へと変えてしまうほどの強さでアーカムシティを照らし出す。

　その光の中、『焼野』を震しん源げんとした激しい地震が発生した。周囲の建物が倒とう壊かいしていく中、地面は隆りゆう起きし、やがてそこから巨きよ大だいな質量を持ったなにかが出現した。

+

惚ほうけるように窓の外を眺ながめていた九郎は、突とつ然ぜんの激しい揺ゆれで我に返った。その揺れは室内にある棚たなという棚を倒たおし、部屋を瞬またたく間にガラクタの山へと変へん貌ぼうさせた。

「なんだ？　なにが起こっておる!?」

あちらこちらから降ってくるガラクタを避よけながらアルが毒づく。そんな彼女の罵ば声せいを耳にしながら、九郎は外で起きている異変に目を奪うばわれていた。『焼野』から立ち上った光の柱が、天を貫つらぬいていたのだ。それは輝かがやきを増し、やがて外の世界を光で埋うめつくした。目の前でフラッシュでも焚たかれたかのような強きよう烈れつな光に視力を奪われながらも、九郎は手をかざしてその発生源へと注視する。

「あれは……なんだ？」

窓の外を覗のぞきこんだアルが光を指し示す。目を細めながら光を凝ぎよう視しすると、地表からせり上がってくる巨大な影かげが見えた。徐々に光は収まってゆき、やがてその正体が明らかとなる。それは巨大な黒い球体だった。それは街の上空に鎮ちん座ざすると、九郎の視界から夜空を奪い去る。

「なんだ、ありゃあ」

一見、月のような天体にも見えるが、よく見ると人工的な建造物だと判わかる。

「あの禍まが々まがしい妖よう気き……九郎っ！」

「マスターテリオン！」

心を折ってくるような威い圧あつ的な気配は、マスターテリオンのそれに間ま違ちがいなかった。

（クソッ！　いったい、なんだってんだ……）

想像すらかなわないようななにかが始まろうとしているのは確実である。言いようもない不安感が胸中に去来した途と端たん、窓ガラスに罅ひびが入り、破は砕さいした。それは速すみやかに室内全体へと波は及きゆうしていく。

「や、やべえ」

九郎が魔術師マギウスになって窓から外へと飛び出した瞬しゆん間かん、マンションは周辺の建物を巻きこみながら瓦が解かいしていく。地じ震しんは想像以上の被ひ害がいをもたらした。あちらこちらで建物が倒壊し、爆ばく発はつ、炎えん上じようしていく。地上では人々が逃にげ惑まどい、各所からサイレンの音が聞こえてくる。だが救護活動をしている間にも建物は次々に崩くずれ、被害は拡大していった。地上は阿あ鼻び叫きよう喚かん地じ獄ごくへと変わっていく。

九郎は地上から目を逸そらし、かつて住宅街があった方向へと目を向けた。ライカと子供たちのことが気になったのである。幸い、住宅街から火の手は見えなかったが、このような状じよう況きよう下かではなにが起きてもおかしくはなかった。九郎は教会へと向かって飛び立った。

+

九郎の想像どおり、住宅街の被害は少なかった。とは言え、市民の動どう揺ようは都心部と変わらない。

上空に浮うかび上がった球状の物体がもたらす脅きよう威いは、人々を恐きよう怖ふと狂きよう気きへと駆かり立てていた。九郎が教会の入り口へと降り立った途端、子供たちを連れたライカが飛び出してきた。

「ライカさん、無事だったか」

九郎は心底ホッとしたような表情を浮かべた。

「私たちは大だい丈じよう夫ぶ。でも……ここはもう、駄だ目めかもね」

ライカが危き惧ぐしていたのは教会である。その壁へき面めんには大きな亀き裂れつがいくつも入っており、いつ崩れてもおかしくはなかった。

「生きてさえおればどうとでもなろう」

「アルの言うとおりだ。とにかく、今は逃げよう！」

このような事態を想定してか、アーカムシティの地下にはシェルターが無数に完備されていた。

そこへ逃げこみさえすれば、ひとまずはなんとかなるだろうと九郎は考えた。その提案にライカもうなずき、行動に移ろうとしたそのときである。身の毛がよだつ、その声が聞こえてきたのは。

『アーカムシティの住民諸君に告げる──』

その声は聴ちよう覚かくを無視し、直接、脳内へと響ひびいてくる。

『余はブラックロッジを束ねる大導師・マスターテリオン。聖書の獣けものの名を冠かんする者である』

九郎は苦々しい表情で上空の天体をにらみつけた。

『諸君には世話になった。我々はこの街に潜ひそみ、この日のために営えい々えいと力を蓄たくわえ続けていた。この巨大な街は夢む幻げん心母のよき隠かくれ蓑みのであり、我々が記念すべきこの日を迎むかえられたのも、諸君の愚ぐ鈍どんさのおかげだ』

「勝手なことを言いおるわ」

アルが吐はき捨てる。

『諸君にささやかな礼をしたい。我等が悲願『Ｃ計画』。その栄えある生いけ贄にえに諸君を選ぼう。是ぜ非ひとも大いなるＣの降臨を、諸君の血と涙なみだで彩いろどっていただきたい』

それを境に、街のいたるところから爆ばく音おんと炎ほのおが上がり始めた。その夕ゆう闇やみのような明かりは夢幻心母を浮かび上がらせただけではない。別の脅きよう威いの姿をも照らし出していた。

「あれは……破は壊かいロボ」

　九郎は目を疑った。上空には何百体もの破壊ロボットが舞まっており、それらがアーカムシティへと向けて、一いつ斉せいにミサイルを撃うちこんでいたからである。

「いつの間に！」

　破壊ロボットが現れる気配は少しも感じなかった。突とつ然ぜん、そこに現れたような感じである。だが、破壊ロボットの大軍団に驚おどろいている場合ではなかった。目の前の空間がグニャリと歪ゆがんだかと思うと、そこをかき分けるようにして一体の破壊ロボットが姿を現したのである。破壊ロボットは躊ちゆう躇ちよなくライカと子供たちへ目がけて拳こぶしを振ふるった。

「空間転移！」

　アルが叫さけぶ。それを耳にしながら九郎はライカたちの下へと走ると、体ごとぶつかって彼女たちを突つき飛ばした。と同時に、破壊ロボットの巨きよ大だいな腕うでが頭上をかすめていく。

　九郎は右手に掌てのひらサイズの自ク動ト式ウ拳グ銃アを顕けん現げんさせると、それを破壊ロボットへと向かって発はつ砲ぽうする。銃じゆう弾だんは破壊ロボットの手足、そしてハッチを吹ふき飛ばした。

「誰だれも乗っておらぬぞ？」

　アルの言うとおり、コックピットは無人だったが、操そう縦じゆう桿かんだけは動き続けている。

「自動操縦？」

　だとすると破壊ロボットの目的は一つしかない。皆みな殺ごろしである。心のないロボットはプログラムどおりの行動しかできないからだ。マスターテリオンは破壊ロボットを使い、市民を残らず生いけ贄にえにするつもりなのだろう。そして早くも二体目が姿を現す。

「チッ！　ライカさん、ガキんちょどもを連れて逃げろ」

　九郎は左手に回転式イタ拳銃クアを出現させ、前方へと構えた。

「九郎ちゃんは？」

「俺は……」

　九郎は口ごもった。

（戦えるのか？　この俺に……）

　たった一人の少女さえ救えなかったという思いが、九郎から牙きばをもぎ取っていた。破壊ロボットの数、そして戦っても無む駄だかもしれないという気持ちが、彼から戦意を奪うばっていく。

「心配すんな……。だから、早く行ってくれっ！」

　九郎はライカたちのために自ク動ト式ウ拳グ銃アと回転式イタ拳銃クアで血路を開くと、指で道を指し示した。

「九郎ちゃん、無茶しないでね」

　心配げなライカに九郎はうなずき返すと、上空へと舞い上がった。

+

　瑠璃は覇道邸ていの地下数百メートルに位置する司令室で指揮を執とっていた。

　そこはブラックロッジとの決戦のために覇道鋼造が用意した秘密基地であり、アーカムシティの全情報が集められてくる前線基地である。彼女はそこでマスターテリオンの演説を聴ききき、そして破壊ロボットに対処するための指示に追われていた。すでに施し設せつ内、シェルター内に私設の軍隊を配備し、州政府への軍隊の要よう請せいも終えている。直すぐに到とう着ちやくする軍隊によって多少は形勢も変わるだろうが、破壊されつくしたアーカムシティを復興するには、途と方ほうもない時間と年月がかかるだろう。

　瑠璃は唇くちびるをかむと、背後に控ひかえるウィンフィールドへと目を向けた。

「大十字さんは？　デモンベインはなにをしているのです？」

+

　九郎は破壊ロボットに向かって銃を撃ち続けていた。だが魔ま銃じゆうとは言え、しょせんは銃である。何百体もの破壊ロボットを倒たおすなど物理的に無理がある。そのことを一番痛感していたのは九郎だ。

「なにをしておる？　なぜデモンベインを喚よばない!?」

　アルの非難は当然である。だが、九郎はどうしてもデモンベインを喚ぶ気にはならなかった。

　もちろん、デモンベインで戦うべきだとは思う。だが、そのたびに思い出してしまうのだ。エンネアのことを。目の前にいながら助けられなかった彼女のことを。デモンベインの圧あつ倒とう的な力をもってしても、結局は無む駄だなのではないかということを。喚び出そうとするたびに、際限のない恐きよう怖ふと無力感に襲おそわれてしまう。もはや自分ではどうすることもできない感情に、九郎は苦く悩のうしていた。

　そのとき、上空を何機もの戦せん闘とう機きが飛んでいくのが見えた。それは破壊ロボットとの戦闘を開始するが、あっという間に撃げき墜ついされ、鉄くずと化してしまう。

（軍隊でも駄だ目めなのか）

　当然の結果である。しかも最悪なことに、破は壊かいロボットなどブラックロッジにとって先兵でしかなかった。その後ろにはアンチクロスと、マスターテリオンが控えているのである。

「見たか、九郎。あのようなガラクタでは歯が立たぬ。デモンベインが必要なのだ」

「くっ！」

「汝なれが一秒、躊躇すれば、この街の誰かが一人死ぬ。甘えるの

も大たい概がいにせよ！」

　アルに叱しつ責せきされ、とうとう九郎は決意した。

（ちくしょう……。やるしかねえのか、やるしかっ！）

　九郎は拳を握にぎりしめると、天に向かって吠ほえた。

「デモンベインッ！」

+

　白の天使は夜空を舞まいながらビーム砲ほうを撃うち続けていた。

　メタトロンが一発、ビーム砲を撃つ度に、一体の破壊ロボットが鉄てつ屑くずと化していくが、あまりにも数が多い。倒しても倒してもきりがなく、それどころか増えているようにさえ見えた。それでもメタトロンは諦あきらめることなく倒し続ける。そして撃げき破は数が百に達しようとしたとき、目の前を黒い旋せん風ぷうが走り抜ぬけた。

《やはり現れたか、サンダルフォン》

　メタトロンは空中で制止すると、黒の天使と向き合った。

《愚ぐ問もんだな。この惨さん状じようを前に、おまえが黙だまっているわけがない。己オレが動くのは当然ではないか》

　サンダルフォンは殺意をむき出しにして身構えた。

《しかし、今さら正義を気取ってなんになる？　おまえはもっとえげつない代しろ物ものだ。そうとも。おまえは生きのびるためなら、なんだってするのだろう？》

《正義を騙かたったつもりはない》

《そうだ。そうだったな》

　サンダルフォンの闘とう志しは、いよいよ激しさを増していく。そのプレッシャーたるや凄すさまじく、周囲の建物が倒とう壊かいしていくほどである。

《己はおまえに感謝している。おまえが、おまえの裏切りが己を強くしたのだ！　そして、おまえを殺すことで己は完成される。さらなる強さを。至高の領域を侵おかす権利を手にできる！　己に殺されろ、メタトロン！　おまえは己の糧かてとなれ！》

《死人は……大人しく眠ねむるべきだったのだ。サンダルフォン》

　メタトロンは沈ちん痛つうな面おも持もちで告げると、両手にビームセイバーを出現させる。

　それをキッカケに、二人の天使は中空で激げき突とつした。

+

　デモンベインを召しよう喚かんした九郎だが、破壊ロボット相手に手こずっていた。圧倒的な数に押されていたわけではない。ミサイルを何発撃ちこまれようがデモンベインの装そう甲こうはビクともしなかったが、肝かん心じんの操縦者がピリッとしなかった。デモンベインは木偶でくの坊ぼうに近い有様で立ちつくしていた。

「この、うつけが！　真面まじ目めに戦わぬか！」

　アルが激げつ昂こうするが、九郎とて遊んでいるわけではない。それどころか大真面目にデモンベインを操あやつっているのだ。デモンベインが整備不良なのではない。九郎自身の問題だった。

（クソッ！　なんで動かねえ……）

　戦おうという気持ちはあった。だが、すぐに邪じゃ念ねんが彼の想おもいを挫くじくのだ。

　九郎の体は小刻みに震ふるえていた。言いようのない恐きよう怖ふが彼をがんじがらめにしている。それはマスターテリオンがもたらした恐怖とは違ちがう種類の怖こわさであり、自分自身の力を信

じることができないという、戦う者にとっては致ち命めい的な感情だった。それでも九郎は迷いを振ふり払はらうと、精神を集中させていく。両手の甲こうに紋もん様ようが浮うかび上がり、同時にデモンベインの両手が炎ほのおと冷気を帯び始める。

　だが自ク動ト式ウ拳グ銃アと回転式イタ拳銃クアが顕けん現げんしようとしたとき、九郎の脳のう裏りに一人の少女の姿が浮かび上がった。その少女は穏おだやかな笑えみを浮かべながら、瓦が礫れきの中へと姿を消していく。途と端たんに九郎の集中力は途と切ぎれ、両手に集まり始めた魔力が霧む散さんする。

「汝なれ、この期ごにおよんで、まだ……」

「すまねえ……」

　九郎はつぶやくと、その場で両りよう膝ひざをついた。

「解わかっちゃいるんだ。戦わなきゃいけないって。でも、駄だ目めなんだ。この手が、体が、震えやがる。どうしても戦えねえんだ……」

　アルは振り返ると、信じられないとでも言いたげな目で九郎を見つめてきた。

「戦うのが怖い、怖いんだ……。全部、無駄なんじゃないかって、どうしても思っちまう」

　コックピットにいるだけでも、悪夢の光景が幾いく度どとなく浮かんできた。九郎を責め立てるかのように、何度も何度も。そしてその都度、彼は底なしの恐怖と際限のない後こう悔かいを味わっていた。

「汝……」

　アルは悲しむような、哀あわれむような、複雑な表情をしていた。唇くちびるが意味ありげにピクリと動くが、そこから言葉は出てこない。

　破は壊かいロボットの攻こう撃げきは続いていた。絶え間ない爆ばく発はつ音おんと、コックピット内に伝わる振しん動どうは激しさを増すが、デモンベインはまるで揺ゆるがない。耐たえ忍しのぶかのように立ちつくし、主の命令を今や遅おそしと待っている。そ

の想いに応こたえられない自分が情けなくて、九郎は歯がみした。

　唐とう突とつに破壊ロボットの攻撃が止やんだ。

『どうした。なにを腑ふ抜ぬけている？』

　不意に上空からかけられたその声は氷のように冷たく、おぞましかった。見上げると、紅色をした鋼鉄の巨きよ人じんが降りてくるところだった。禍まが々まがしくも美しいその巨人はリベル・レギスであり、それに搭とう乗じようするのは怨おん敵てき・マスターテリオンである。

『そのようなことで余を討ち、リベル・レギスを墜おとせるとでも思うのか？　退たい屈くつさせてくれるな』

　マスターテリオンの声は挑ちよう発はつ的であり、九郎の心に火をつけるには十じゆう分ぶんだった。だが、その想いに反して体は動かない。デモンベインも沈ちん黙もくを守ったままである。

（ちくしょうっ！　なんで動かないっ！）

　もがき苦しむ九郎に対し、マスターテリオンはあからさまな溜ため息をついた。

『戦わぬのであれば、そこで眺ながめているがよい。夢む幻げん心母の真の姿を！　Ｃ計画の真の姿を！』

「真の姿だと？　彼奴きやつ、なにを考えておる」

　アルは前方のモニターをにらみつける。

『フングルイ　ムグルウナフ　クトゥルー　ルルイエ　ウガフナグル　フタグン』

　リベル・レギスから聞こえてきたのはマスターテリオンの声ではない。感情が欠落したかのような、酷ひどく冷たい少女の声音である。ナコト写本・エセルドレーダの声だ。

「この呪じゆ文もん、深きものどものところで……」

「海神への嘆たん願がんだ！　彼奴ら、今度はなにをするつもりだ!?」

ダゴンでさえ、あわや大だい惨さん事じだったのである。あのような脅きよう威いが現れるとなると、アーカムシティは終わりだった。だがマスターテリオンが現れた以上、それ以上の脅威が現れるのは確実であり、それを裏付ける記き憶おくが九郎にはあった。ウェスパシアヌスが口にした『実験』のことだ。

『そう。インスマウスでの実験は、このためにあったのだ。すなわち神の召しよう喚かんであり、神の具現化である。魔導書の力をもって、魔ま術じゆつ的物質で構成された器うつわを依より代しろに神を降臨させる儀ぎ！』

興奮してきたのか、マスターテリオンの口調に熱が帯びてくる。

「あのときは石像にダゴンの魂たましいを降臨させて具現化させようとした。だとしたら今度は……」

九郎は自分で口にして気がついた。それはアルも同じだったらしく、二人同時に天を見上げた。そこには巨きよ大だいな黒い球体が浮かんでいる。

『気がついたか。今度はダゴンのような小物ではないぞ？』

マスターテリオンはクックと喉のどを鳴らす。

『Ｃ計画。大いなる〝Ｃ〟。□□大いなるＣｔｈｕクトウｌｈｕルー！　今こ宵よい、神は降臨する！』

彼の話に、九郎、そしてアルが目をむいた。はるか昔、太平洋上にルルイエと呼ばれた巨大な石造都市を築き、地球に君臨していたとされる旧支配者がクトゥルーである。その後、ルルイエは海底に沈しずみ、クトゥルーはそこで永えい劫ごうの眠ねむりに就ついたとされている。

「クトゥルーの眠りを覚ますつもりか！　そのようなことをすれば、汝とてただではすまぬぞ！」

『それもまた一興』

マスターテリオンは底冷えのする声で言い放つと、楽しげに笑った。

リベル・レギスが右手を高らかと掲かかげ、エセルドレーダの声

が世界へと浸しん透とうしていく。

『嗚呼ああ、汝、死して横たわりながら夢見るものよ。汝の僕しもべが呼びかけるのを聞き給え』

　そしてエセルドレーダに応こたえるように、どこからともなく声が聞こえてくる。

　──嗚呼、強きよう壮そうなるクトゥルーよ、我が声を聞き給え。夢の主よ、我が声を聞き給え。

　──ルルイエの塔とうに封ふうじられしも、ダゴンが汝の縛いましめを破り、汝の王国は再び浮ふ上じようするであろう。

　──深きものどもは汝の秘密の御み名なを知り、ヒュドラは汝の埋まい葬そう所じよを知れり。

　──我に汝の印を与あたえ給え、汝がいずれ地上に現れる事を知りたいがため。

　──死が死するとき、汝のときは訪おとずれ、汝はもはや眠る事なし。

　──我に波は浪ろうを鎮しずめる力を与え給え。汝の呼び声を聞きたいがため。

「九郎っ！　まずい、まずすぎる！」

　リベル・レギスの機体が光を発する。その光は目が眩くらむほどの激しさであり、やがてそれはリベル・レギスが掲げた掌てのひらへと収束していく。

　声が一つに重なる。

　──ルルイエの館やかたにて死せるクトゥルー夢見るままに待ちいたり！

―されどクトゥルー甦よみがえり、その王国が地球を支配せん！

リベル・レギスの掌の中で極限にまで収束し、圧縮された高密度の光が天へと駆かけていく。

その太陽サンピ柱ラーのごとき神こう々ごうしい光の柱は、天上に浮うかぶ夢幻心母を撃うった。浮かび上がる何千、何万、何億、何兆という数の魔術文字。それは帯のように幾いく重えにも幾重にも折り重なりながら夢幻心母を包みこみ、コンピュータですら計算できないような複雑な術式を形成していく。だがそれは確実に一つの答えを導き出し、夢幻心母に驚きよう異いの変容をもたらした。無機質な材質で作られた人工の建築物に生命が宿りつつある。脈打つはずのない堅けん牢ろうな壁へき面めんに肉の芽が芽め吹ぶき、蔦つたのように這はっていく。それは春を待ちこがれた若草のように次々と芽を出し、夢幻心母を侵しん食しよくしていった。クトゥルーの神気が天から降り注がれる。

「……あ……あぁ……」

自分を見失いかねないほどの神気に当てられ、心に亀き裂れつが走っていく。かろうじて割れるのを防いではいたが、気を抜ぬけばバラバラに砕くだけ散ってしまいそうだった。

「こんな奴と……どうやって戦えってんだ！」

+

瑠璃は心をつなぎ止めるのに必死だった。

「あんな……あのようなものが……。わたくしは悪い夢でも見ているのでしょうか？」

胸中に広がっていく恐きよう怖ふ心しんは、少しずつ、しかし着実に瑠璃の心を狂くるわせていた。いっそ狂ってしまえればと思わずにはいられない。そんな彼女を支えていたのは、祖父・覇道鋼造の存在である。

（お爺じい様……貴方あなたは、これほどまでの絶望と戦っていたのですね）

　最後の砦とりでとも言うべき心の最深部にまで暗い闇やみは迫せまっていた。

　だがすべてを失ってもなお、最後の最後にすがれるものが瑠璃を絶望させずにいた。

「デモンベイン……大十字さんっ！」

　九郎に届けと言わんばかりに、瑠璃は力の限りに叫さけんでいた。

+

　神の肉は夢む幻げん心母内をも侵食し始めていた。無機物と有機物が融ゆう合ごうし、新たな物質を生み出していく。内部は触しよく手しゆのような物が蠢うごめいており、ウェストとエルザを肉の一部にしようと追いかけ回していた。ウェストは迫りくる神の肉を器用に避さけ、エルザは術式魔ま砲ほうを撃ちまくっていたが、きりがない。捕とらえられるのも時間の問題だった。

「こんなおぞましいものがＣ計画の正体なのであるか！」

　とても制せい御ぎよできるような相手ではなく、計画自体に無理があったのではないかと思わずにはいられない。クトゥルーはブラックロッジの信者であろうがなかろうが関係なく、このままでは生きとし生けるものすべてが死に絶えるのは避けられそうになかった。

+

　アーカムシティの上空で激げき突とつを繰くり返していた天使た

ちは、その瞬しゆん間かん、戦うのを止やめた。

《まさか……》

《これほどのものとは……》

　メタトロンは声を失い、サンダルフォンは絶句する。

　夢幻心母は変容を続けていた。表面は鱗うろこに覆おおわれ、樹木の根のような無数の触手が蠢いている。その姿は巨きよ大だいな蛸たこのようであり、多た頭とう龍りゆうのようでもある。

　天使たちはしばし呆ぼう然ぜんとクトゥルーを見上げたあと、再び互たがいの姿を捉とらえた。メタトロンは両手のビームセイバーを十字に構え、サンダルフォンもそれに応じる。二人は再びぶつかり合った。

+

　アーカムシティの上空、クトゥルーを見下ろすようにしてナイアは浮かんでいた。

「ご満まん悦えつだね、大導師殿どの」

　ナイアはさも愉ゆ快かいそうに笑うと、地上のリベル・レギスへと目を向けた。

「そろそろ終幕かな。愉たのしい宴うたげも、ひとまずは……ね。幾いく千せん、幾万回目の終幕。始まりの為ための終幕」

　狂きよう気きに彩いろどられたナイアの瞳ひとみが、デモンベインを捉える。

「さあさあさあ、どうしているのかな、九郎君？　君の準備はまだかな？」

　ナイアの顔が愉ゆ悦えつで歪ゆがんでいく。

「こんなにも大導師殿は君を待ち望み、待ち焦こがれているという

のに。見せておくれよ惨さん劇げきを。君たちは表ひよう裏り一体。この地球狂きよう想そう曲きよくを奏かなでる二つの音色。今こそ道化芝しば居いの閉幕を、道化芝居の閉幕を」

+

　とんでもない化け物と戦っていたのだと、今さらながら九郎は思い知らされていた。

　相手は神をも操あやつろうとする魔ま神じんである。人間である自分がどうこうできる相手ではなかったのだ。そしてその事実は、九郎からなけなしの気力さえ奪うばい去っていく。

　気がつくと、目の前にアルがいた。彼女は翡ひ翠すい色をした眼まなこに涙なみだをたたえたかと思うと、九郎の顔面に小さな拳こぶしを叩たたきこんだ。容よう赦しやのない一いち撃げきに目の奥で火花が散り、口の中に血の味が広がった。

「汝なれぇ！　それでも男かぁぁぁっ！」

　アルは仁に王おう立だちすると、鬼おにのような形相で九郎をにらみつけた。

「股またの下にぶら下げておるのは何かっ!?　飾かざりか、それはっ!?　今の自分を鏡に映してみよ！　情けなくはないのか!?　情けなくて怒いかりが湧わいてこないのか!?　そんな自分は殴なぐってしまえ！　殴って殴って殴りまくって、動けなくなるまで殴ってやれ！　否、いっそ殺してしまえっ！」

　アルはこれでもかというくらい、一気にまくし立てていく。

「汝は、あの娘むすめに告げたよな。『全部無む駄だだったとして、なにもしないでいられるか』と。その言葉は偽いつわりだったのか？」

　九郎は目を見開いた。

（……聞いていたのか）

　あのときの九郎の言葉に偽りはない。その気になれば未来ですら変えられると信じていた。だが、現実はこれである。気持ちだけでは少女は救えないし、ましてやマスターテリオンになど勝てるわけがない。嫌いやと言うほど現実を見せつけられ、希望という名の炎ほのおを吹ふき消されただけだった。

　肩かたを落とし、うなだれる九郎の胸むな倉ぐらをつかんだアルは、ムリヤリ彼の体を引き上げて自分と向き合わせた。見ると、目に溜たまった涙は今にも零こぼれ落ちそうだった。

「汝の強さを取り戻もどせ！　汝の誇ほこりを取り戻せ！　汝は戦えるはずだ！　汝の魂たましいはまだ絶望に染まりきってないはずだ！　今一度、剣けんを手に執とり、立ち上がろう！　あの邪じゃ悪あくを討うち滅ほろぼそう！」

　アルの切実な想おもいが、壊こわれかけた九郎の心を補完していく。

「それでも汝がまだ戦えぬというのなら……」

　アルは九郎に顔を寄せると、そっと唇くちびるを重ねた。

「―妾わらわが汝を強くする」

　唇を離はなすと、アルは力強く宣言した。

「一人で抱かかえこむな。苦痛も悲しみも後こう悔かいも、すべて我ら二人で分かち合おう。我等は戦友。我等は盟友。我等は比ひ翼よくの鳥。我等は連れん理りの枝。共に魔を断つ剣を執ろう。共に

闇あん黒こくを踏とう破はする路みちをいこう。大十字九郎、我が主よ。妾は汝を敬愛し、信しん仰こうする！」

　悩なやむ必要などなかったのだ。九郎の側そばには常にアルがいた。彼女がいるだけで、強くなれるような気がした。すると、悩み、苦しんでいたことが嘘うそのように氷解していく。

　九郎は目を伏ふせると、一度、大きく息をついてから立ち上がった。

「ったく……。かっこつけやがって」

　つぶやくと、九郎は意識を集中させていく。まるで嘘のように意識は澄すみ渡わたり、五感が一気に拡大していく。個が崩くずれ、世界に浸しん透とうしていくような感覚。ありとあらゆる世界の法則、そして理が高密度の情報として九郎の脳内に展開されていく。全身にパルスが走り、九郎とデモンベインはリンクしていく。その変化を察したのか、破は壊かいロボットが一いつ斉せいに顔を向けてきた。

「やってやろうじゃねえか！　アルッ！」

　九郎は吠ほえると、アルへと目配せをした。彼女は目元の涙を拭ぬぐって「おう」と叫さけぶと、自分のコックピットへと戻っていく。と同時に、何十、何百という破壊ロボットが襲おそいかかってきた。

　九郎の両手に紋もん様ようが浮うかび上がる。今度こそ自ク動ト式ウ拳グ銃アと回転式イタ拳銃クアはデモンベインの手中に顕けん現げんした。間かん髪ぱついれずに銃じゆう口こうを破壊ロボットへと向けると、銃じゆう弾だんを撃うちこんでいく。弾丸は破壊ロボットの装そう甲こうをいとも簡単に貫つらぬいていく。だが、あまりにも数が多い。負ける気はさらさらなかったが、うっとうしすぎた。九郎は剣けん指しで印を結ぶ。同じようにデモンベインも剣指を作り、中空に光の紋様を刻みこんでいく。デモンベインの動力部が無む尽じん蔵ぞうとも思えるエネルギーを汲くみ上げ始める。九郎の体が、デモンベインの機体が光に包まれていく。右の掌てのひらに組みこまれた必ひつ滅めつの威い力りよくを秘ひめた機関が覚かく醒せいする。

「光射す世界に、汝なんじら闇黒、棲すまう場所なし！」

　九郎は右手を振ふりかざすと、迫せまりくる破壊ロボットへと向けてそれを突つき出した。

「レムリア・インパクト！」

　九郎が吠えるのと同時に破壊ロボットは業ごう火かにのみこまれ、塵ちりすら残さず消えていった。

「マスターテリオン！」

　九郎は上空を見上げ、そこにたたずむ紅の巨きよ人じんへと向かって吠えた。

「降りてこい！　マスターテリオン！　これがおまえを討ち滅ぼす破は邪じやの力だっ！」

　九郎の声が、荒こう野やと化したアーカムシティに広がっていく。

　上空で制止していたリベル・レギスが、耳に障さわる嘲ちよう笑しようとともにゆっくりと降下を始める。それが舞まい降おりたのと同時だった。九郎はデモンベインを走らせると、一気にリベル・レギスとの距きよ離りを詰つめてレムリア・インパクトを撃ち放つ。だがそれと同時に、リベル・レギスも行動に移っていた。デモンベインと同じモーションで白く輝かがやく右の手刀を突き出してくる。

『ハイパーボリア・ゼロドライブ！』

　刀身のような鋭するどさで迫りくる手刀に危機感を覚えた九郎は、デモンベインを回かい避ひ行動に移らせる。その際にレムリア・インパクトの軌き道どうにズレが生じて空を切った。同様にリベル・レギスもデモンベインを捉とらえることはできなかったが、手刀から発せられる極低温の大気が装甲を焼いた。

『奇くしくもレムリア・インパクトと対極をなすのがリベル・レギスの奥おう義ぎだ。白く燃える極低温の刃やいばは、触ふれれば消しよう滅めつは必至だぞ？』

　デモンベインとリベル・レギスは向かい合い、にらみ合う。そして、どちらからともなく行動に移った。それぞれ必滅の一いち撃げきを撃ちこむべく、体勢を整える。デモンベインは右手を引き、リ

ベル・レギスは右手を前方へと構えた。その体勢で二体の鬼デウ械ス・神マキナは制止する。二体の鬼械神が放つ闘気は臨界点へと向かって高まっていく。放たれた闘気は空気を、そして大地を震ふるわせ、せめぎ合う二つの力が境界線で火花を散らした。そして二体の鬼械神は同時に駆かけ出した。

　互たがいの必ひつ殺さつ技わざが決まる直前だった。デモンベインとリベル・レギスを取り囲むかのように六体の巨きよ大だいロボットが降下してきた。その中の何体かは見覚えのある機体である。デモンベインとリベル・レギスは動きを止めた。

「ベルゼビュート、クラーケン、ロードビヤーキー……。ってことは、こいつら!?」

「間ま違ちがいない。鬼械神だ」

　アルの言葉に、九郎は危あやうく失神しかけた。六体の鬼械神の肩かたや頭頂部には、それぞれの術者が立っている。ベルゼビュートにはティベリウス、クラーケンにはカリグラ、ロードビヤーキーにはクラウディウス、ティトゥスは鎧よろい武む者しやのような機体に、ウェスパシアヌスは蜘蛛くもにも似た四本脚の円えん盤ばん型の機体に立っている。唯ゆいーいつ、金色をした機体の頭頂部に立つ褐かつ色しよくの肌はだの男は見たことがなかったが、状じよ

う況きようから考えても彼がアンチクロスであるのは間違いなかった。

「まずい。まずすぎる……。さすがに鬼械神を七体も相手にはできんぞ！」

　アルの切せつ迫ぱくした声がコックピット内に響ひびき渡わたる。

　とは言え、鬼械神に囲まれている状況では逃にげ出すことすらかなわなかった。

　リベル・レギスのハッチが開かれ、中からマスターテリオンが姿を現す。彼は不快感をあらわにすると、周囲に控ひかえる鬼械神へと目を向ける。

「アンチクロス。何故、持ち場を離はなれた」

　マスターテリオンが咎とがめると、金色の鬼械神に乗った男が応こたえる。

「私の判断でございます。やはりＣ計画完かん遂すいのためには、万ばん全ぜんを期しませんと」

　男は頭を下げると、デモンベインへと一いち瞥べつをくれた。

「でしゃばりすぎだ、アウグストゥス！　これは余と大十字九郎のかけがえもない遊びの一時だ。貴公が邪じゃ魔まをすることは許さぬ！」

　だがアウグストゥスは一歩も退ひく様子はなかった。

「下がらぬか、アウグストゥス！」

　マスターテリオンが一いつ喝かつした瞬しゅん間かんだった。

　九郎は目の前で起きた出来事に言葉を失った。それはアルも同じらしく、身を乗り出してモニターに食い入っている。ティトゥスが操あやつる鬼械神が、リベル・レギスを背後から袈け裟さ斬ぎりにしていたのである。肩かた口ぐちから入った大刀は腹部にまで達し、リベル・レギスから火花と黒こく煙えんが上がった。

「なんのつもりだ、ティトゥス!?」

　マスターテリオンは驚きよう愕がくの表情を浮うかべると、鎧武者へと目を向けた。

「大導師、まさか拙せつ者しやに忠誠でも期待していたのではあるまいな？　ならば愚おろかしいことですぞ。拙者は武士道から外れ、外げ道どうに堕おちた悪あつ鬼き。忠義など遥はるか昔に捨ててきた」

　ティトゥスの話を聞き終わる前に、リベル・レギスの右手は白く輝き始めていた。だが手刀が振るわれる前に、リベル・レギスの腕うでは『風』によって捕ほ縛ばくされていた。

「クラウディウス！」

　ロードビヤーキーの上では、クラウディウスがヘラヘラと笑っていた。

「おいおいおいおい、おとなしくしててくれや。大導師ちゃんよぉ」

　クラウディウスの嘲笑に、ティベリウスの嘲あざける声が重なる。

「悪いわネ、大導師様。もう、アナタは用なしよん☆」

「つまり、つまりですな。これは謀む反ほんということになりますな。いやはや、まさに世は弱肉強食。下げ克こく上じようの時代ですな。いやはや、まったくもって世せ知ち辛がらい」

　ウェスパシアヌスは豊かな顎あご髭ひげをなでつけながら苦く笑しようしている。

「貴公らっ！」

　顔色を変えるマスターテリオンに、クラーケンが襲おそいかかる。クラーケンは両りよう腕うでを伸のばすとリベル・レギスの両腕を押さえこみ、絞しぼり上げた。機体は軋きしみ、すでに開いている傷口が激しく爆はぜる。

「大導師。私は以前からＣ計画について疑問を抱いだいていたので

すよ。計画の規模と危険度に対し、貴方あなたは杜ず撰さんな対策しか講じてはいない。いや、対策と呼ぶのもおこがましい！」

　アウグストゥスはマスターテリオンを冷ややかな目で見下ろすと、さらに続ける。

「私は貴方の狂きよう気きなど見み抜ぬいていた。貴方は世界の支配になど興味がないのだ。違ちがいますか？　残念ながら我々は、もっと俗ぞくっぽい生き物なのです。世界を滅ほろぼされては困るのですよ」

　黒煙を上げるリベル・レギスのコックピットから、不安げな表情をしたエセルドレーダが飛び出してくる。彼女はマスターテリオンに寄り添そった。

「貴公等。その程度の実力で、余とリベル・レギスをどうにかできるとでも思っているのか？」

「強がっても無む駄だですよ。いかに貴方といえども、我ら全員を相手になどできますまい。しかも今の貴方は儀ぎ式しきで疲ひ弊へいし、鬼械神はその有様です」

　アウグストゥスは残ざん酷こくに告げると、それをキッカケに六体の鬼械神の魔ま力りよくが急激に高まり始める。それはすべてマスターテリオンとリベル・レギスへと向けられていた。

　鎧武者型の鬼械神が、突つき刺ささったままの大刀を振ふり下ろす。それによってリベル・レギスは分断され、さらにはクラーケンが四し肢しを引きちぎった。そこへトドメとばかりにロードビヤーキー、ベルゼビュート、そしてウェスパシアヌスが操る蜘蛛くも型の鬼械神が攻こう撃げきを加える。リベル・レギスはついに沈しずみ、マスターテリオンとエセルドレーダは爆ばく風ふうで宙へと投げ出される。

「ア、アウグストゥスゥゥゥゥゥッ！」

「では、さらばです。大導師」

　アウグストゥスが告げると、金色の鬼械神に備わった砲ほう口こうがキラリと光る。そこから放たれたのは高出力のビーム砲ほうであり、それはマスターテリオンとエセルドレーダを包みこんでいった。素す手でデモンベインと渡り合い、神をも召しよう喚かんし

た最強の魔ま神じんの、あまりにもあっけない最さい期ごである。

+

　九郎は光の中に消えゆくマスターテリオンの姿を、半ば呆ぼう然ぜんと見つめていた。

「マスターテリオンが……死んだ」

　その事実を、どのように受け止めればいいのか九郎には解わからなかった。だが、状況はまるで好転せず、それどころか最悪の事態を迎むかえようとしている。アウグストゥスはデモンベインへと目を向けた。その目には陰いん惨さんな笑えみが浮かんでいる。

「さてと。もう一匹ぴき、邪じや魔ま者ものがいるな」

　アウグストゥスは、あからさまな悪意をデモンベインへと向けてきた。

「まずい！　まずすぎるぞ、九郎！」

　アルの悲鳴を耳にしながら九郎は打開策を模も索さくするが、その時間すら与あたえられなかった。

「大十字九郎、あのときの礼をさせてもらうゾ」

　義手を振り上げながらカリグラは吠ほえると、クラーケンへと乗りこんだ。他のアンチクロスもそれぞれの鬼械神に乗りこみ、間合いを詰つめてくる。四方を塞ふさがれ、上空にはロードビヤーキーとウェスパシアヌスの蜘蛛型の鬼械神が待ち受けている。まさに八はつ方ぽう塞ふさがりの状じよう況きようだった。

　クラーケンのかぎ爪づめがデモンベインへと迫せまる。それをすんでのところでかわすが、その先には鎧よろい武む者しや型の鬼械神が両手に大刀を持って待ちかまえていた。

『鬼械神・皇おう餓がだ。嬲なぶるのは好かぬが──覚かく悟ご！』

　ティトゥスが告げるやいなや、デモンベインの左ひだり腕うでは斬きり落とされていた。皇餓の剣けんの動きはまるで見えず、斬られたことすら後で気づくほどである。九郎は舌打ちをしながらデモンベインを皇餓へと体当たりさせると、血路を開いて疾しつ駆くした。遁とん走そうするデモンベインに対し、ロードビヤーキーがライフルで狙ねらってくる。それは確実にデモンベインへと命中し、そのたびに装そう甲こうは剝はがれていく。だが意図的に急所を外しているらしく、デモンベインは運動性能を落とすだけだった。上空から蜘蛛とも円えん盤ばんとも取れる鬼械神が飛来してくる。

『鬼械神・サイクラノーシュだ。まあ、見納めになるとは思うがね。なに、冥めい土どの土産みやげみたいなものだよ。ではでは、あの世で大導師によろしく言ってくれたまえ』

　嘲あざけるようなウェスパシアヌスの声が聞こえたかと思うと、デモンベインは足あし下もとをすくわれて仰あお向むけに倒たおれた。見ると、デモンベインの両脚にクラーケンの手が絡からみついている。

『オーラオラ！　負け犬ちゃんにプレゼントだよーッと！』

　上空から銃じゆう弾だんが降ってくる。それはデモンベインの顔を剔えぐり、左腕を吹ふき飛ばし、両脚をもぎ取った。モニターが無数のエラーで満たされる。あちらこちらで火が噴ふき、火花が散った。

　九郎とアルはデモンベインを必死に操作するが、動かそうにも四肢を奪うばわれては地面を這はいずるだけだった。

　ライフルの掃そう射しやが終わったとき、デモンベインは六体の鬼械神に取り囲まれていた。

「ちくしょう……。ここまでか？　ここまでなのかよっ！」

　だが諦あきらめるわけには―終わるわけにはいかなかった。たとえ無駄だとしても、このまま死を待つわけにはいかない。九郎は最期の時を迎えるその瞬しゆん間かんまで、足あ掻がいて足掻いて足掻きまくって、無様な姿をさらしてでも道を切り開くつもりでいた。

「動けっ！　動け、デモンベインッ！　こんなところで終わっても

いいのかよっ！」

　九郎は叫さけびながら必死に操作するが、デモンベインの損傷は致ち命めい的てきであり、小爆ばく発はつを繰くり返しながら形を崩くずしていく。爆発はより深刻なものへと変わりつつあった。六体の鬼械神の魔力が高まっていく。その中の一体、アウグストゥスが操あやつる金色の鬼械神が一歩前へ進み出ると、デモンベインを見下ろした。

『それでは、さようならだ』

　金色の鬼械神の砲口が光を帯び始める。

「ちくしょうっ！　終われねえ……！　終われねえんだよっ！」

　コックピット内が光で覆おおわれていく中、九郎は絶ぜつ叫きようする。

　光が、絶望的な光の闇やみが迫っていた。

+

　明確な絶望が支配する中、アルは助かる道を模索していた。

　デモンベインの命は風前の灯ともし火びであり、周囲は最悪の魔ま術じゆつ師したちに取り囲まれている。勝てる見こみは万に一つもない。それでもなお九郎は気を吐はき、立ち向かおうとしていた。彼の気持ちに応こたえたいとは思うアルだが、同時に手て遅おくれであることも知っていた。

　光が迫ってくる。デモンベインを蹂じゆう躙りんし、陵りよう辱じよくし、粉ふん砕さいしていく闇の光が。

　そのとき、アルの中に培つちかわれた強い使命感が訴うつたえかけてきた。

　──逃にげろ、と。

九郎とデモンベインを見捨てさえすれば、助かる可能性はあった。動かぬ鬼械神にもはや用はなく、彼とともに逃げるよりは一人のほうが身軽だった。今は逃げて、次に備える。悠ゆう久きゆうの時を生きる彼女にとって、機会はいくらでもあった。術者を失ったとしても、また探し出せばよかったからだ。そう。今までと同じように……。

外道の力を操る強大な邪じや悪あくが出現するたびに、アルは鬼械神・アイオーンを駆かる魔術師を見つけ出し、それらを討うち滅ほろぼしてきた。それはアルの存在理由であり、意志でもあったが、彼女を書き記したアブドゥル・アルハザードの遺志だったのかもしれない。なんにせよ異形の神々に与くみする外げ道どうたちを、さらなる外道の知識を用いて討ち滅ぼすことはアルの意志には違ちがいなかった。

そんな彼女にとって術者とは、アイオーンを動かすための道具であり消しよう耗もう品ひんだった。もちろん邪悪と戦う彼らのことは尊敬していたし、彼らは例外なく真の戦士だった。だが彼らは戦いの中で傷つき、倒れていく。失ったものは補ほ充じゆうするだけであり、敬意を払はらってはいてもそのように扱あつかってきたことは事実だった。主あるじの屍しかばねを乗り越こえながらも、自分の目的を果たす。そのことに後こう悔かいはなかった。だから九郎と契けい約やくしたときも今までと同じだったし、いずれは踏ふみ越えていく通過点の一つにしかすぎなかった。あくまでも二人の関係は魔術師と魔導書にすぎなかったのである。だが九郎は今までの主とは違い、ひどくありふれた人間だった。そしてあろうことか彼はアルを魔導書としては見ず、人と見なしていた。仲間として、戦友として、そして家族として彼女を迎むかえ入れてくれた。それは未知の温ぬくもりであり、人の愛を知らない彼女の心を温もりで満たしていた。

（ああ、そうか）

今この瞬間、アルは失ったかつての主たちの死を悲しんでいた。こんなにも悲しいものを積み重ねて生きてきたのかと思わずにはいられなかった。

―逃げろ。

内なる声がアルを急せかす。だが、それには従えなかった。同じことを繰り返すのも、さらなる悲しみを重ねるのも、ましてや九郎

を見捨てて逃げ出す理り不ふ尽じんを許せるわけがなかった。

『それでは、さようならだ』

　アウグストゥスの冷れい笑しようがコックピットに響ひびいてくる。

（させるか。させてなるものかっ！）

　アルはコックピットから這い出すと、九郎の下へと駆け寄った。光がコックピット内を包みこんでいく。背後でハッチが吹き飛んだのが判わかる。すべてが無になろうとしていた。

（九郎。大十字九郎。我が主よ……）

　仰あおぐようにして九郎の顔を見つめる。想おもいが溢あふれるが、言葉が見つからない。口が動かない。

（妾わらわは……）

　背中が焼けるように熱かった。死が眼前に迫せまっている。

「妾は汝なれのことを――」

　そして、世界は白い闇の中へと沈しずんでいった。

エピローグ

天に問う―剣は折れたのか？

その瞬しゆん間かん、指令室内は静せい寂じやくに包まれた。

誰だれ一人ひとりとして口を開かず、目の前で起きた出来事を呆ぼう然ぜんと見つめている。

瑠璃は司令室のモニターでデモンベインの最さい期ごを目もく撃げきしていた。デモンベインは金色の鬼械神の一いち撃げきによって跡あと形かたもなく消え失うせていたのである。

瑠璃はうなだれると、その場で崩くずれ落ちた。

唯ゆい一いつの希望が消えていた。

デモンベインは破れ、それを操あやつる術者と魔ま導どう書しよもない。軍隊も破れていた。私設軍がいるにはいたが、デモンベインですら勝てなかった相手に勝てるわけがなかった。しかもブラックロッジの背後には『神』がついていた。神を相手に人間がどうこうできるわけがない。もはや人類に打つ手などなく、地上は地じ獄ごくと化すしかなかった。

瑠璃の意識は、急速に遠ざかっていった。

+

ウェストとエルザは研究室でデモンベインの最期を見届けていた。

九郎とデモンベインを生しよう涯がいのライバルと認にん識しきし、日々研究を重ねてきたというのに、まさかあのような形で獲物を奪うばわれてしまうとは想像すらかなわなかった。

それだけではない。マスターテリオンはアンチクロスの裏切りで

殺されていた。あの絶対的な支配者がいとも簡単に殺されてしまったことは質たちの悪い冗じよう談だんのようであり、アンチクロスがそのような暴挙に出ようなどとは思いもしなかったウェストである。

「アウグストゥスめ……」

　忠誠心など持ち合わせてはいなかったが、自分の獲物を横取りされたことに対する怒いかりと、アンチクロスの暴挙に対する怒りは隠かくしようもなかった。

「エルザ、行くのである！」

　白衣を翻ひるがえしながら、ウェストはエルザに告げた。

「どこに行くロボ？」

「決まっているのである。あの愚おろか者どもにガツンと言ってやるのであるっ！」

+

　白い閃せん光こうの中に消えていくデモンベインの姿を、メタトロンは呆然と見守っていた。仮面に隠れて表情をうかがい知ることはできないが、動どう揺ようは隠しようもない。

《……九郎……ゃ……》

　閃光が消えたあとには、深々と剔えぐれたクレーターのような地面しか残されてはいなかった。

《なんて……なんてことだっ！》

　メタトロンは感情をあらわにして叫さけんでいた。

　もはやサンダルフォンの相手をしている場合ではない。到とう底てい、間に合うわけもなかったが、すぐにでも九郎たちの下へと駆かけつける必要があった。だが、サンダルフォンがそれを許さな

い。

《どこへ行くつもりだ？》

　サンダルフォンの拳こぶしが、メタトロンの眼前へと迫せまる。

《いいかげんにしろっ！　そこを退けっ！》

　サンダルフォンの拳を受け止めたメタトロンは、即そく座ざにビームセイバーを現出させて斬きりつけた。

　まったく無む駄だのないその動きは、回かい避ひ行動に移っていたはずのサンダルフォンの脇わき腹ばらを捕とらえる。

　メタトロンはバランスを崩して堕おちていくサンダルフォンには目もくれず、かつてアーカムシティだった街の上空を翔かけていく。

+

　激しい衝しよう撃げきが九郎の全身を貫つらぬいていた。

　溺おぼれてしまうほどの暖かな微睡まどろみの中にあった九郎の意識は、それで一気に回復する。

　ハッとして目を開けると、そこは見覚えのある場所だった。デモンベインのコックピットである。ただ内部は溶とけたり崩れたりしており、ハッチは吹ふき飛んで外が丸見えだった。計器類は残らず壊こわれ、モニターにはノイズとエラーメッセージしか映し出してはいなかった。ひどい有様である。

「格納庫か……」

　なぜここにいるのかと、九郎は首をかしげた。

（あのとき……金ピカの鬼デウ械ス・神マキナにやられて……）

　だとすると、なぜ格納庫にいるのかという疑問が浮うかび上がってくる。

「空間転移ってやつか？」

　そのようなことができるとは聞いてなかったが、九死に一生を得たのは確かなようだ。九郎は溜め息をついた。

「こんな便利なことができんなら、最初から言いやがれっての。焦あせらせやがって……」

　九郎は笑いながら悪態をつくが、肝かん心じんのアルの姿が見えない。気配もなかった。

　彼女の姿を求めて体を起こそうとしたときだ。小さな体が覆おおい被かぶさっていることに気がついた。アルである。彼女は気を失っているらしく、身み動じろぎ一つしない。

「……アル、大だい丈じよう夫ぶか？」

　九郎はアルの体に手を回し、軽く揺ゆさぶった。だが、彼女はピクリともしない。背中に回した手が、ぬめるのを感じた。手を見ると、そこは真っ赤な液体で染まっている。

（……おい、よしてくれよ）

　心が凍こおっていく。

　アルの背中へと目を向けると、ドレスは破れ、鮮せん血けつで染まっていた。いや、そもそも背中など存在しない。彼女の背中は剔えぐれており、背骨すらハッキリと認にん識しきできるほどだった。

「おい……なんの冗談だよ」

　絶望が這はい寄ってくる。

　九郎はアルの体を揺さぶった。何度も何度も。乱暴なくらい、激しく揺さぶる。

「ふざけんなよ……おい。いくらなんでも、こんなの笑えねえよ……」

　九郎は強ごう引いんに笑えみを浮かべると、白い肌はだをより白くしたアルへと声をかける。

だが彼は理解していた。理解していたが、それを全力で否定し続ける。

「アル！　アルっ！　いいかげん、目を覚ましやがれっ！」

だが九郎の言葉は……彼の願いはアルには届かない。

なぜなら――。

アルの体が淡あわい光に包まれていく。その儚はかない光の中で、彼女の体は急速にその形を失っていった。

彼女の輪りん郭かくは崩くずれ、アルという個体が光の粒りゆう子しへと変化していく。

「お、おいっ！　待て、待ってくれっ!!」

九郎は崩ほう壊かいし続けるアルの体を抱だきしめるが、腕うでの隙すき間まから光の粒子が次々とこぼれていく。それを防ごうと、彼は必死に粒子を掻かき集あつめた。だがそれはつかみどころがなく、崩壊も止まらない。それでもなお、九郎は集め続けた。アルの欠片かけらを。

だが限界だった。アルの体は眩まばゆい光に包まれたかと思うと、九郎の腕の中で弾はじけた。

光の粒子がコックピット内に舞まう。それは魔導書のページとなり、花はな吹雪ふぶきのように宙を舞った。

九郎の頭上をひらひらと舞っていたページは、吸い寄せられるように彼の下へと集まっていく。

彼が手を差し出すと、それは一枚一枚、折り重なり、やがて古びた一冊の書となった。

そして、それが意味することとは――。

「うあああああああああああああああああああああああ！」

絶ぜつ叫きようと共に、九郎の心は砕くだけ散った。

〈「魔を断つ剣つるぎ」へ続く〉

あとがき

小説版「斬魔大聖デモンベイン」はいかがでしたか？

はじめてデモンベインに触ふれる人はもちろん、〝すでにパソコン版をプレイされた人にも楽しんでもらえるように〟というコンセプトで書き上げたのが本書です。

基本的な流れはゲームに沿いつつ、新たに付け加えた設定やらシーンなどを随ずい所しよにちりばめてありますので、そこらへんを楽しんでいただけたのであれば大成功ってことになるかな？

総ページ数が四百ページに迫せまるという「編集と営業泣かせの超ちよう大作！」「もってけドロボー」という、なんだかよく分からんけどとにかく豪ごう華かな文庫に仕上がりましたので、書店であとがきから確かく認にんされている皆みなさまは迷わずレジなどに持っていくのが吉きちかと思われます、はい。購こう入にゆうされた皆さま、ありがとうございました。次巻もよろしくです！

しかし、企き画かく段階では三百ページということでスタートしたはずなのに、ひっくり返るほどページ数が増えてしまいましたね。いやあ、すんませんです。全部、ゲーム……いえ、僕のせいです。実際、各所で泣いてる人がいたと思うんですけど、前例ができたということで次巻も遠えん慮りよなく書かせてもらおうと心に決めました。ははは。いやはや、開き直るとこんなにも清すが々すがしいものなんですね？（ゴメンナサイ。嘘うそです）

これだけのボリュームになっちゃったのは、ひとえに情報量の多さによるものですが、実は一章を書き終えた段階で百ページほどになっていたりもしました。手て探さぐり状態で書き始めたというのもありますが、徹てつ底てい的に書きこんだあとで不要な文を削けずっていくというやり方を採っているせいか、必然的に増えてしまった感じでしょうか？

けど、これだけ分量があるにもかかわらず、実はかなりカットしていたりするんです。泣く泣くカットしたシーンも多いんですよね。パソコン版をお持ちの方は、比ひ較かくされてみるのも一興か

と。

さて。ゲームを前提にした作品を小説化するというのは、これでなかなか大変な作業だったりするのですよ。ノベライズを書かれている物書きさんの大半が、きっと同じ類たぐいの苦しみを味わっているのではないかと思いますが……。特にデモンベインはビジュアル面にも力が入りまくっている作品なので、ある意味、物書き泣かせだったりするんですよね。

特にロボット。どんなに頑がん張ばっても一枚のＣＧにはかなわないので、ここはひとつ書かないことに決めました。まあ、なんて潔いさぎよいことでしょう。もちろん、ある程度の描びよう写しやは入れてありますが、ビジュアル面にかんしてはゲームに任せて、小説では人物にスポットライトをあてております。

ちなみに上巻では三章にウェストとエルザの過去を、次巻以降では彼や彼女のあれこれを挿そう入にゆうする予定なので、お楽しみに。

デモンベインの脚きやく本ほんを担当された鋼屋ジン氏とは、プロットの段階であれこれと相談に乗ってもらいました。いちいちメールや電話で打ち合わせをするまでもなく、社内でテキストをコピーして一つ上の階に行けばすむので驚おどろくほど打ち合わせは楽なのですよ（注：デジターボの上の階にニトロプラスがあります）。

おかげでイロイロと楽できて大助かりでした。鋼屋氏にはイチイチ面めん倒どうな奴やつだと思われていたと思いますけど、次巻もよろしくお願いします、ということで。

プレステ２版のデモンベイン、頑張ってくださいね。草くさ葉ばの陰かげで見守っております……。

さて、そろそろページに余よ裕ゆうがなくなってきました。

この本が出版されるころ、僕は泣きながら次巻を執しつ筆ぴつし

ている最中だと思います。

　次巻ではこの巻で書ききれなかった登場人物のサイドストーリーが多く入ってくる予定なので、原作とは少し違ちがったデモンベインになるかもしれませんね。

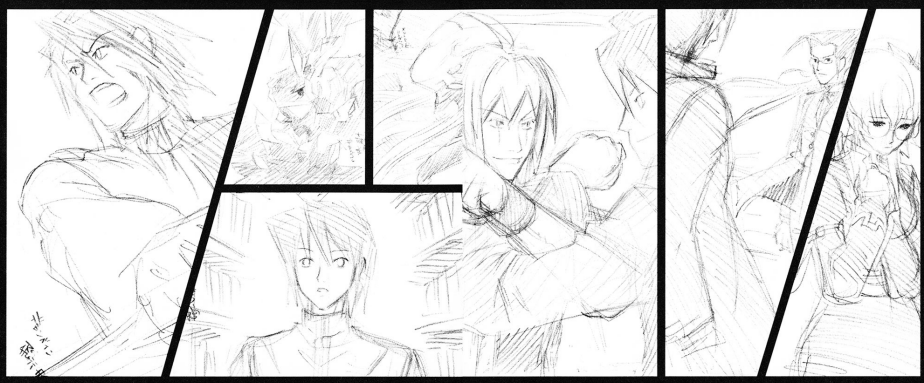
　好評なら外伝なんかも書かせてもらえるかもしれないので、ここは読者の皆さまのお力でひとつ（探たん偵ていとしての九郎が難事件を活かつ躍やくする話というのも面おも白しろいのではと……。デモンベインは出てきそうもないですが）。

　それでは次巻でお会いしましょう。

株式会社デジターボ　涼すず風かぜ　涼りよう

次巻予告

『斬魔大聖デモンベイン 魔を断つ剣』



剣は折れ、盟友(とも)は斃(たお)れた――。

鋼の神よ、再び大地を踏みしめん。

夢幻心母で勝ち名乗りを上げるアンチクロス。格納庫に大破して横たわるデモンベイン。コクピットの中では泣き叫ぶ九郎と空を舞う魔導書の欠片。そして明かされるメタトロンとサンダルフォンの因縁。隠された謎の一部がついに明かされる!

©Nitroplus,DIGITURBO,2003

カバー・口絵イラスト / Ｎｉ

本文イラスト / 洒乃渉

カバーデザイン / ｙｏｓｈｉｙｕｋｉ

デザイン / ｙｏｓｈｉｙｕｋｉ　タケウチ　ユタカ

(C) Nitroplus, DIGITURBO 2003

斬ざん魔ま大たい聖せいデモンベイン

無む垢くなる刃やいば

原作：鋼はがね屋やジン（Nitroplus）

著：涼すず風かぜ涼りよう（DIGITURBO）

平成25年12月1日　発行

(C) Nitroplus, DIGITURBO 2003

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

角川スニーカー文庫『斬魔大聖デモンベイン　無垢なる刃』

平成15年10月1日初版発行

平成18年7月10日10版発行

発行者　山下直久

発行所　株式会社ＫＡＤＯＫＡＷＡ

〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3

03-3238-8745（営業）

編集　角川書店

〒102-8078　東京都千代田区富士見1-8-19

03-3238-8694（編集部）

http://www.kadokawa.co.jp/

BOOK☆WALKER